DS
881
.5
S35A2
1934
V. 1

C[illegible]
EAST ASIA[illegible]
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/shzanzensh01saku

23

增訂

象山全集

卷一

8357

LIBRARY
APR 30 1909
UNIVERSITY OF TORONTO
DS
881
.5
S35A2
1934
V. 1

序
凡例
碑文
佐久間氏略系
象山先生年譜
象山先生小傳

省諐録
象山淨稿
礮卦
象山先生文稿
四書經注旁釋（大學）

增訂象山全集序

象山全集修正增補成る。時を費すこと三歳、博く捜り深く討ね、前版の誤あるを訂し、疑あるを解き、又新に蒐集する所極めて多し。是に於てか全集の名首めて完きを得たりと謂つべし。

象山先生の人と爲りは、遺稿を通じて詳なり。先生は實に世界的偉人にして、新日本の先覺者たり。余後進、先生の遺編を繙き、每に感ずる所あり。卽ち先生は西洋文明に心醉するが如くにして、而も瘖瘂の間も祖國國體觀念を把持して忽せにせざるのみならず、卻て東洋道德を以て五洲を救はんとするの概ありき。

明治維新の創業に當り、英俊傑物競ひ起りしも、皆西洋文物に眩惑し、我が建國の精神、善美なる傳統等顧みるに遑あらずして、百

般の制度文物、只一意彼れに摸倣するあるのみ。其の結果、今日國を擧げて其の弊竇に桎梏せられて脱出する能はず、嘆ずべき哉。若し地下の先生をして之を見せしめば、果して何とか云はん。惜むべき哉先生中道に斃れ、只新文明の先覺者たるの名を垂るるのみにして明治文明の完成に參畫し能はざりしを。先生逝いて七十年、國家の現狀今日の如き時に當り、信濃敎育會は象山全集の改訂を企て、苦心經理今や其の功を終へ、之を先生の靈前に供へ、先生の志を新にするを得たるは、以て先生の靈を慰むる所以にして、亦世道人心に補益する所多大なるを信ずるものなり。

象山先生嘗て力士雷電の碑に辭を系けて曰く、信山崇峻　信水清駛　神氣所鍾　迺生瓌偉と。此の語移して以て先生に致すべ

きか。嗚呼偉なる哉。

本書成るに當り、聊か所感を記して序とす。尚ほ本書の編纂は、松代藩士三井圓二郎專ら其の任に當る。茲に附記して其の勞を多とする所なり。

昭和九年三月

信濃教育會長　佐藤寅太郎

序

象山佐久間先生、一たび逝いて五十年、先見の明は、世と與に光を添へ、偉人の名は、年と共に高きを加ふ。是に於てか、斷簡零墨も幾多の家寶と爲り、片言隻語も後昆の典刑と仰がるるに至る。嗚呼、亦盛なる哉。然れども、先生の世に傳へらるる所、單に盛名赫灼の餘光にして、其の之を致せる所以の苦心慘憺たる實迹に至りては、蓋之を先生の遺稿に求めざるべからず。惜むらくは、先生の遺稿、年を閲するに伴ひて、或は散逸し、或は湮滅して、之を獲るに難く、また、空しく二三故舊の祕庫に藏せられて、汎く世に布くに至らざる、是吾人の最も遺憾とするところなり。

本會の此の慨を懷くや、深く且切なるものあり。夙に先生の遺文

を天下に公にして、長へに先生の實迹を後世に傳へんと欲し、拮据勵精、博く搜り、深く討ね、數年を閲して、漸く「象山全集」の編纂を畢り、今茲先生五十年祭の忌辰に際りて、之を刊行するに至れり。其の輯むる所、省諐錄以下、上書、文稿、詩歌、書簡に至る迄、凡そ二十篇、二千七百頁。先生が衷心國を思ふの赤誠は、全卷に溢れ、一世を率ゐんとする抱負は、歴然として字句の間に躍る。其の文稿や、高邁の識、卓拔の議、諤諤の論、また憚るところなく、其の詩歌や、鬱勃の情を寄托して、慷慨淋漓、若し夫れ平日の書簡に至りては、趣味横溢、理路井然、寔にこれ近代の範、一讀先生の風丰を彷彿せしむるに足る。

顧ふに、先生は、世に謂ふ所の經學者、道學者、はた洋學者の匹儔に

あらず、單に之を學者と見るも、其の智、古今東西に亙りて、發明創見の說に富めること、當時の儒流と著しく撰を異にせり。況んや、其の卓見博識、夙に五世界の大勢を曉りて、開國の止むべからざる所以を說き、確乎不拔の自信、國を擧げて其の歸嚮するところを知らしめんとする先覺の明と、人格の崇高とに至りては、正にこれ百代の師表たり。先生の偉大なる所以、蓋しここに存す。先生甞て詩あり、曰く、「東洋道德西洋藝。匡廓相依完圈模」と。又自から稿を輯め、之に敍して曰く、「以て知己を後世に俟たん」と。今や、我が國歐米諸邦と相伍し、學藝文物、長短相補ふの時、「象山全集」の刊行、豈徒爾ならんや。吾人が、先生身後の知己として、在天の靈に對ふる所以、蓋し之に過ぐるものあらざるなり。

大正二年九月

信濃教育會

凡例

一前版は、大正二年十月の象山先生五十年祭を期し、程を急ぎて出版せるが爲に、原稿の査閲、印刷の校正等に於て、遺憾の點多多あるを免れざりき。よりて今回これに訂正を加へ、且つ更に新材料を蒐集して之を增補したり。

一今回增補せるは、四書經注旁釋（大學之部）と、新に蒐集したる詩文、和歌、書簡とにて、就中書簡の數は頗る多きに達せり。又此の他に、象山先生小傳、及門錄、象山先生史料雜纂、各種索引とを加へたり。（及門錄以下は之を第五卷の末に附したり。）

一漢文漢詩は、此れを讀み易からしめんがために返り點を附したり。

一同題の詩文も、揮毫の時期により字句一定ならざるものあり。前版には、單に其の中の一を揭げたりしが、今回は之を改め、揮毫の時代を考へ、其の時期の判然せるものは後年のものを採り、然らざるものに至りては、一方を欄外に注し又は旁注することとせり。

一書簡及上書は、年代を按じて之を排列せり。又詩文、和歌にも、成るべく其の作年を注記したり。然れども、其の中推定の誤れるものなきを保し難し。後人の更に研究是正せられんことを望む所なり。

一本書原稿中、省諐錄、礮學圖編、象山先生詩鈔、女訓は、刊本ありてそれに據り、迅發擊銃圖說、礮卦は、先生の版下本ありてそれに據れり。

一今回增補したる四書經注旁釋（大學之部）は、京都帝國大學圖書館に祕藏せる先生の自筆本にて、特に乞ひて寫眞版としたるものなり。

一詩文、書簡、和歌の一部は實物につき之を謄寫し、其の他は悉く寫本に據りたるものなり。

一文章、書簡等に用ひられたる闕字は此れを廢したり。

一書簡及び假名交り文に於て、外國語の他は原本一切濁音の假名を用ひず。然るに今之を改めたるは、讀み易からんことを主としたるによるなり。省諐錄中の和歌に振假名したるが如きも、此の趣意に外ならず。

一先生の著書、本書收むるところの外に、增訂荷蘭語彙、琴錄、文公短牘、邵康節先生文集、春秋辭命準繩、春秋古篆書補正、洪範今解、度學津梁、雨災雜記等あり。然れども、春秋古篆書補正以下の書は、逸して傳はらざるが如く、其の他も、種種の都合により此れを割愛したり。

昭和九年三月

贈正四位佐久間象山先生碑（長野縣埴科郡松代町象山山巓に在り）

元帥陸軍大將正二位大勳位功二級侯爵　山縣有朋題額

勅選議員正四位勳三等文學博士　重野安繹撰

予視於百餘年來儒流。得先見之士二人焉。一爲仙臺林子平。一則松代佐久間象山。子平以寛政癸丑歿。當其時。天下乂安。四海無虞。士大夫率狃宴安。而子平獨論邊防。慷慨著書。以此獲罪。禁錮終身。象山後子平四十餘年。夙憂外事。策時務。而迍邅轗軻。終斃於奇禍。二子洞觀時勢。其言皆有驗乎後。所謂先天下之憂而憂者。君子韙其志識。而歎其不遇。而象山之事。最可悲矣。初天保中英人致我漂流民。乞互市。幕府拒而不納。俄修海防。令諸藩爲之備。象山深於儒學。兼通海外兵制。乃獻言當路。指陳大勢。幕府未之信也。迨嘉永癸丑。米艦果入浦賀。幕吏始服其先見之明。米艦遂要求通商貿易。期以明年。幕府下議諸藩。問和戰利害。象山又獻時務十策。言皆天下大計。而幕府不能用也。安

政甲寅。米艦再來。申前約。促開港。幕府擬以伊豆下田。而米艦繫在橫濱。象山聞之曰。下田僻遠。且有天城日金之險。緩急難應。不若直以橫濱之爲愈也。其洞見利害如此。當是時。四方志士。爭倡鎖國攘夷。陰擁朝紳。而迫幕府。象山注意大局。其所主。在立自強不敗之地。以擴開國進取之計。長州志士吉田松陰。深服其言。欲航海外。以探事情。象山賦詩送之。事露下獄。象山連坐。尋各幽於其藩。象山已廢。而時事益非。憂世之念。不能自禁。竊託人。進說朝紳。會 朝廷勅諸藩上意見。象山受藩命。草上書案。滔滔數萬言。聳動天下耳目。其名隱然重乎朝野。元治甲子春。大將軍家茂公在京師。辟象山。人或危之。象山曰。國事方急。微軀何足惜。是志士效力之秋也。四月至京師。屢進謀議。周旋朝廷幕府之間。而其所說。非開國貿易。則公武合體。頗爲時人所忌。遂殞命兇手。實是年七月十一日也。年五十四。葬京師妙心寺。往時鄂羅之擾北疆。外事初動。而衆人未知其可憂。子平乃大聲疾呼。以警醒之。迨英米出歿東海。外患既迫。上下

洶洶不知策所出。象山講之方略。爲之措置。如燭照而數計。竟定他日之國是。蓋二子學該識明。通達內外。故先天下之憂而憂。而命運不至。不得後天下之樂而樂。可勝慨夫。象山卒之後四年。王室中興。海宇一變。遂致今日之盛。推其所淵源。二子之功。寧可沒哉。於是　朝廷旌褒。竝有贈位典。死者而有知。可以瞑矣。象山名啓。字子明。信濃埴科郡人。世仕松代侯眞田氏。以其生象山麓。故自號象山云。屬鄕人謀建碑山巓。徵文於予。方今兒女。猶識象山。何待敍述。乃特表其大節。係以銘。銘曰。

東洋道德　西洋藝術　精粗弗遺　表裏兼該　因澤民物

以報國恩　卓哉斯語　百世可師　爰揭爰示　以代銘辭

象山之巓　有屹豐碑

明治三十五年在壬寅七月正五位日下部東作書

田鶴年鐫

象山佐久間先生遺澤の碑（長野縣下高井郡穂波村に在り）

信濃の國高井郡佐野村はもと松代領なり此地よもに山めぐりそがうち平に天のかたちまどかなりゆへに艸木茂りここによねつくるによろし其民おのづからすなをにして古の風を存せり象山佐久間翁藩に在せし時いたく此地をめでやがて仕ばやと思はれけむ詩に詠じ文を賦して其志をよせられけらしまた郡治の弊せる民の苦を察ししばしば其主に申いたく攻ただされし事共あり是等のこといまはむかしこ成りにしを此民誠ある心から猶其惠をたたへてやまず終に石にゑりて其澤を永く世に傳へむとはかり予が一言を乞ふ予も亦其まごころに愛

で拙を忘れその需に應ずるになむ

明治十二のとし初秋海舟勝安芳誌

佐久間象山先生肖像

先生の寫眞を根據とし、門人たりし久保成氏の意見を求め、中村不折氏の揮毫せる油畫なり。大正二年七月成る。縱二尺、横一尺五寸。信濃教育會所藏。

感應公肖像

松代藩主眞田幸貫公の肖像なり。三村晴山の原圖、川上冬崖の臨摹によりて成りたるものなり。原本は、縱四尺二寸五分、橫一尺六寸七分の絹本にして、眞田伯爵家所藏。

雄飛

感應公の筆なり。原本は、縦四尺五寸、横一尺八寸の紙本にして、松代町矢澤頼道氏所藏。

雄飛

櫻賦

揮毫の歳次判然せざれども、賦は萬延元年五十歳の作なれば、晩年の筆なることと知るべし。此の賦と望岳賦とは、最も先生得意の作にて、世に象山の二賦と稱せらる。櫻賦は、曾て天覽の榮を蒙りたるより、一層著聞するに至れり。全文文稿に出づ。原本は縱五尺八寸三分、横三尺二寸二分の紙本にて、眞田伯爵家所藏。

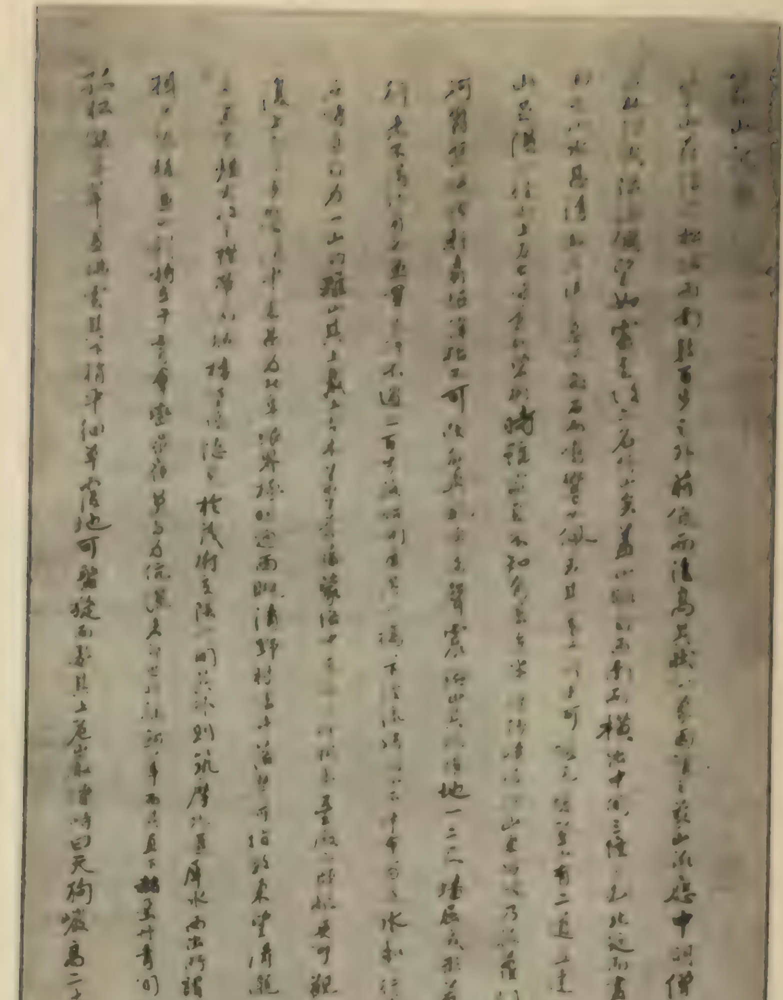
櫻賦

有　皇國之名華鍾九陽之靈和醇淑樹之者尊軒櫻花之亦加棄如之生於自然煌妍茂而無雙冠羣　亦而特秀亘終古而
不凋老經節漢津於　皇朝命開耶之稱著國名忘兆於　紫殿手植於浅院既乃惠風徐動沖氣漸清慶州始綵百鳥和
鳴於是紅色錦裳綵英吐光色婵娟豐豐醇靄飛丹霞之晴鮮散白日之景灼灼鮮鮮落晨露飲和采於夕陽遠而望之
燦如紅雲出岫漸近而睇之恰如珠琳綴枝燦乎暉之燦乎綺之爛若帶雨翠煙翻風響月綢繆綽綽標緲繽紛錦綉旌旗八陸離
紛紛葵蕤既的皪之冰淨清紫之其如雪嵐翠松柏之蔥青觀峰巒之徽碧吐朱閣於遠寺香隔翠樓於高林沿水流而蔚
映終古而有不固千載而為之難仿而瞻譚於是和宋公子佳麗季女瓌姿綽態嫻都妖冶倚羅裙而抃步驕驕於東野憾春光
之不良惜芳菲之易隨折纖枝以相授亦殘花之寫香述宗堂田樹懸文詞賓尊之瀏醅盤登肴饌殊饋殿興酌為樂深而嘉
樹生錦萬金帶拂羽觴以奮遊思以陶然馳妙辭而競新頌餘霞之散綺該雲月之飛輪又有天涯遊子深閨少婦盛和氣之悒憶
於故陸之跂思之恨悽期之屬議黃鸝之翔飛與粉蝶之宴舞陟彼國以徘徊憑華陰而搔首望所思而不見悵長嘯而
嘆慕者乎懷慨之志士偃蹇之豪俊蟠乎野而大息哀　皇業之不振臨與開而彷徨欽上將之烈駿亦高德之刊餘頌遺言而暗進淫態
詠之離承之惻乎主蓋之華藥之感時知物候之流運對落英之續紛謂盛衰之自奮其以都鄙等畢老少智蠢愚觀新華者莫不自愛而色悅
神樂之觀其芳林地於此則有寧樂故都嵯峨嵐山醍醐白河小倉大原与夫武之金井總之墨川此皆都人雅士游士之所遊觀逑乎動殊衛
涌之物之類亡名勝之風雅之後嘆而醫植夫何該樹之奇植派景響於藐漢地之難於日域擅壯觀於神向資豐撲之粹偉
庭皇之姿婉之儀之獨異以而莫先歎諸類而未嘗窒挑束之算乃作賦曰
貞樹之服有神明之受命特立經而不流兮堂叢無數豈不可喜兮寄寵自持章天地兮落性不衒嘉實聚兮　帝宮神寓兮
非可之漢林之物之儕　天地間其無人自芬芳兮

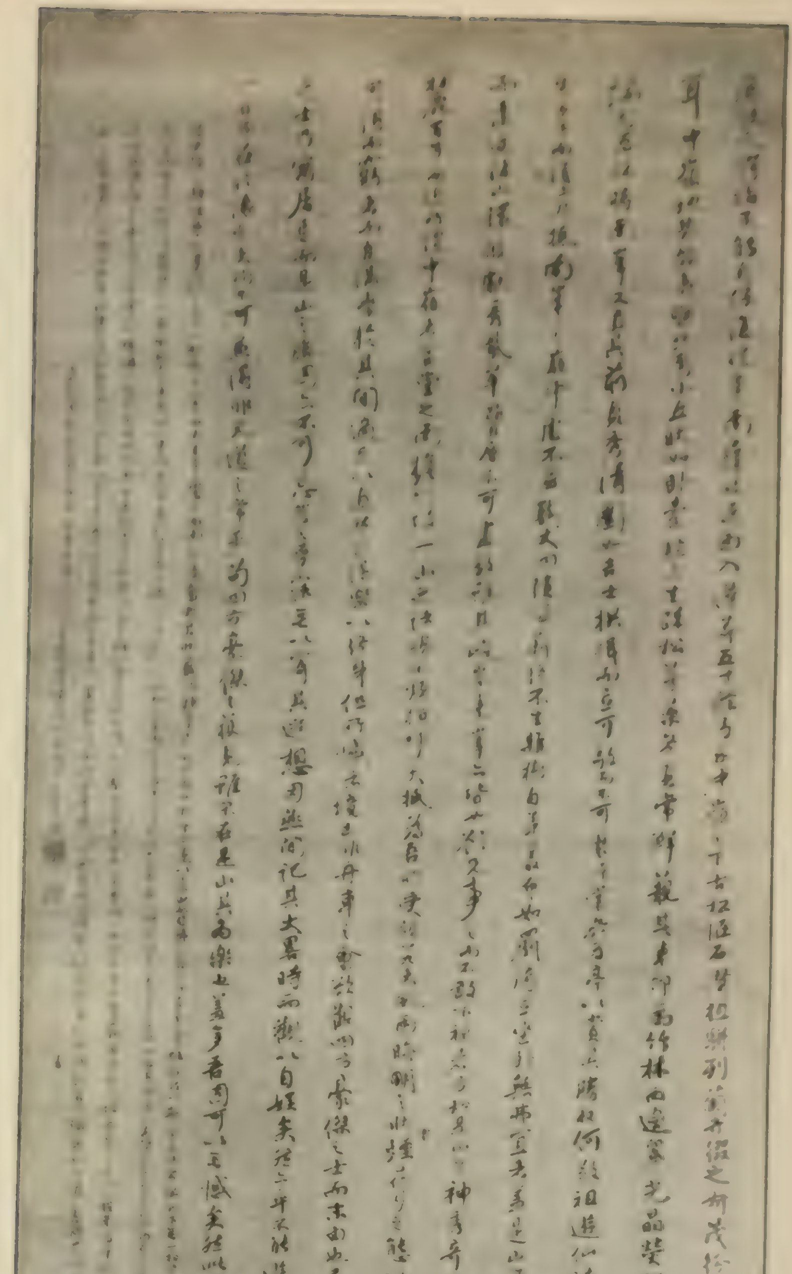
蒙山平啓子剛手錄

象山記並說

安政二年四十五歲の筆蹟と推定す。嘉永甲寅とあるは、蟄居中を憚りて殊更に其の以前の干支を用ひたるものなれば、據る可らず。文は天保十年二十九歲の作なり。全文淨稿に出づ。原本は、縱五尺八寸三分、橫二尺三寸五分の紙本對幅にて、大正天皇東宮にて御座せし時、台覽の榮を賜はりたるものなり。東京市宮本仲氏(松代町出身)所藏。



同
續
き



礮　卦

先生著述中の一大奇書と稱せらるる礮卦版下本の第一頁なり。嘉永五年十月成る。松代町長谷川五作氏所藏。

傚卦

象山平啓 字子明 又大星 著

夫易廣矣大矣以言乎遠則不禦以言乎邇則靜而正以言乎天地之閒則備矣故達人物横四海亙古今而無有乎不準無有乎或遠者也故未有卦畫之前所有之物其象固存乎易已有卦畫之後所有之物其象亦存乎易見易而制器卦固未始

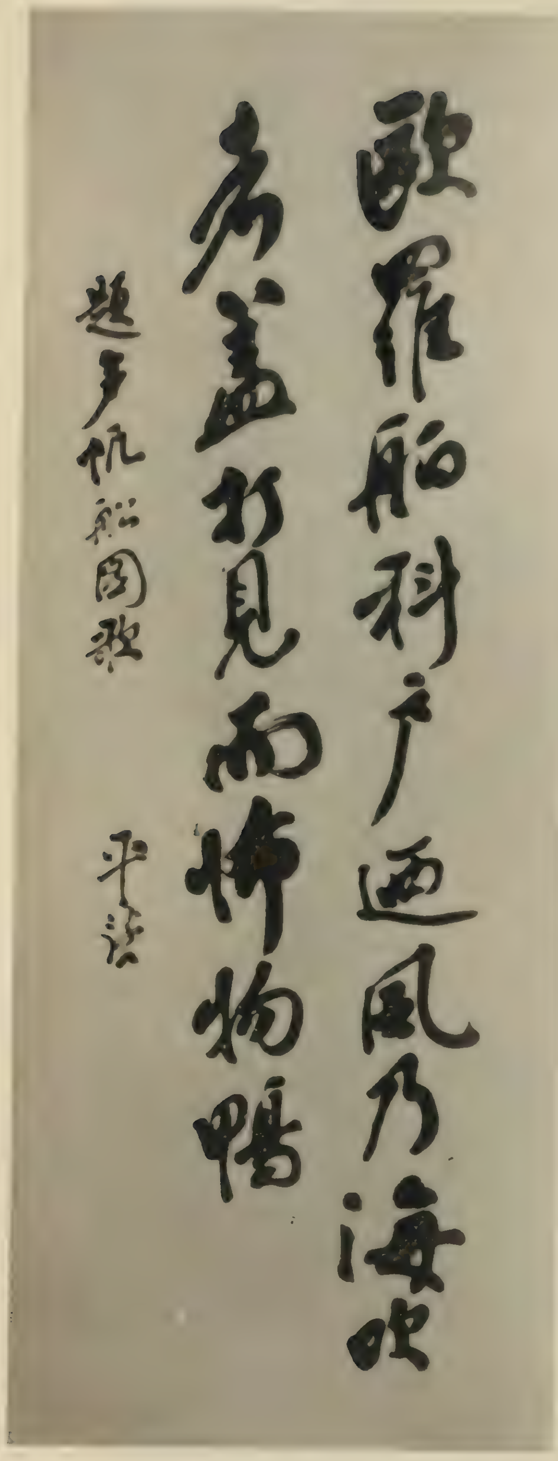
余年二十以後。乃知有繫一國。三十以後。乃知有繫天下。四十以後。乃知有繫五世界。

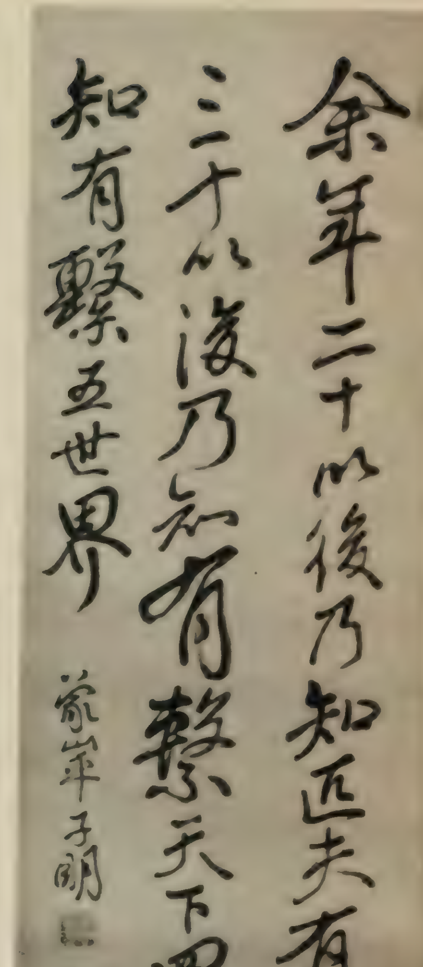
象遠樓時代の筆にして、省諐錄中の語なり。原本は、縱四尺、横一尺三寸の絖本にして、松代町堀内きそ氏所藏。

歐羅船。科戸迺風乃。海吹者。蓋打見而。怖物鴨。

題多帆船圖歌　平啓

御使者屋時代の筆なるべし。原本は、縱三尺七寸五分、横一尺四寸五分の紙本にして、東京市宮下幹氏(松代町出身)所藏。




余年二十以後乃知匹夫有繫一國
三十以後乃知有繫天下四十以後乃
知有繫五世界
象山平子明

佐久間氏略系

○佐久間平大夫 村上浪人 ―與左衛門 眞田氏ニ仕フ 二百石 ―三左衛門 ―彦七 宮下氏ヨリ養子 ―三五郎 若死 斷絕
―女

○佐久間安政 飯山城主 ―女

岩間市兵衛清重 長沼ニ仕フ ―女
―岩間與作清繼 長沼ニ仕フ
―岩間治郎左衛門清村 長沼ニ仕フ ―○岩間一學國品 眞田氏ニ仕フ百石 佐久間三左衛門ト改ム ―幾彌 林氏ヨリ養子 ―岩之進 夭 斷絕

○佐久間三左衛門國品 前稱岩間一學 岩之進死後特ニ再ビ召出サレ五人扶持ヲ給セラル ―彦兵衛國正 村上氏ヨリ養子、實ハ三左衛門ノ甥ノ子五兩五人扶持トナル ―一學國善 長谷川氏ヨリ養子 ―修理 百石トナル
―あやめ 夭
―恭太郎 夭
―恪二郎
―惇三郎 夭

（右略系は象山全集編纂の際左の五書を參考して編したるものなり）

參照

一、佐久間氏略譜

象山稿（天保五年の作なるべし）

佐久間氏之先。高望王之後也。王桓武帝皇子葛原親王之孫。實高見王之子也。寛平元年八月始賜平姓。尋任上總介。王生良文。爲鎮守府將軍。良文生爲通。從五位下長門守。處於相模國三浦莊。由是爲三浦氏。爲通生爲次。稱平太郎。勇武絶倫。名振關東。從源義家伐清原武衡。有功。爲次生義次。爲相模介。稱三浦介。義次生義明。稱大介。爲人剛毅。守信義。治承末。源頼朝挪起兵。傳檄關東。義明謂族子曰。兵衛佐君。我累代之主室也。今奉院宣擧義兵。不可不與竭力也。乃帥衆赴頼朝之軍。未至。聞頼朝敗死。引而歸。據衣笠城。鄕畠山氏之兵。城陷。終戰亡。時年八十九。義明生義春。稱多多良五郎。義春生家村。稱太郎。知安房國佐久間莊。於是爲佐久間氏。無子。因以從兄和田左衛門尉義盛之孫新兵衛朝盛。爲嗣。朝盛生家盛。稱與六。家盛生爲盛。稱兵衛尉。爲盛生朝村。稱與六。朝村生常朝。稱兵衛尉。常朝生爲明。稱與六。爲明生宗朝。稱兵衛尉。宗朝

生朝明稱與六朝明生朝次稱與六朝次生安盛。稱兵衛尉。安盛生盛通。稱與六。盛通生朝次稱久六朝次生盛次稱久右衛門。後更久六。爲尾州犬山城主。從織田信長。於美濃之役屢有功。江州箕作城之役。先登蒙賞。蚤卒。盛次娶柴田勝家姉。有長子曰盛政玄蕃允。次曰安政稱久右衛門。次曰勝政。稱三左衛門尉。從舅氏襲柴田氏。次曰勝之皆以勇武聞天下。勝之始爲勝家之義子。稱源六。後佐佐內藏介。以女妻之。因襲佐佐氏。及從豐臣秀吉。復爲佐久間氏。叙從五位下大膳亮。爲信濃國長沼城主。領一萬三千石。娶秋元佐渡守女。生勝高。慶長中。勝之歸于大朝。爲相伴衆。寬永甲戌歲。爲駿府警衛。是年冬卒於府中。勝高嗣。補藏人。娶松平因幡守姉。生勝豐。稱權之助。勝高卒。勝豐嗣。從五位下備中守。後爲安房守。娶本多美作守女。有子曰大膳。夭。因以秋月佐渡守種信之第四子勝親。爲嗣。勝豐卒。勝親嗣。元祿中。有故國除。先是。當勝之招士之時。有宮崎新兵衛者。驍勇而才能過人。嘗仕武田信玄。受俸三十貫。與鄰境之主有仇。斬之亡伏匿。更姓稱曰岩間市兵衛清重。終歸於勝之。勝之以其兄備中守安政之女。女之。祿四百石。擢爲大老。無男。因女妻鶴田清右衛門之子與作清繼。以爲嗣。清繼有勇名。大阪之役有功。矢城越中守證之。獎賜二百石。因使長子清政。爲清重之嗣。自受

新賜襄氏如故。萬治二年夏清繼卒。次子清村嗣。稱次郎左衞門。元祿中佐久間氏絶。藩臣離散。清村守節。不欲再仕。卒于江都。清村次子曰三左衞門國品。享保初。仕眞田信弘公。受俸百石。國品不任懷舊之思。遂從曾祖母。爲佐久間氏。及老無男。乞林覺左衞門子幾彌。以爲嗣。以女女之。無何幾彌沒。子岩之進嗣。夭。家絶。府廷憫國品多年之勤。一旦而滅。別以五口米賜國品。國品因請其姉之出。村上彦九郎之男。彦兵衞國正。以爲嗣。國正加受俸金五兩。無子。以長谷川千助之次子一學國善。爲嗣。

二、松代藩略系圖

竹内鄉左衞門軌定著（享保年間の作なるべし）

- ○佐久間平大夫（村上義淸家牢人 佐久間靱負男）
  - 同與左衞門（馬役）
    - 同　三左衞門
      - 女子（奥村新左衞門妻）
      - 彦七 ― 同三五郎
      - 女子（岩間治郎左衞門妻）― 佐久間三左衞門
      - 同　駒之助
    - 女子（大胡善大夫妻 酒井雅樂樣御家中）
    - 同　善八（眞田又八郎樣御供切腹）
    - 同　與左衞門（馬役）― 與左衞門
    - 同　定右衞門（普請奉行）― 同　小大夫（養子富永治左衞門子）― 同　定右衞門（養子恩田治左衞門子）

- 同　市郎左衛門　大熊清左衛門養子　喧嘩
- 同　小市
- 同　監彌　十河加兵衛養子
- 同　左内
- 女子　市川彌兵衛妻

三、松代家中系譜

落合保考撰大日方直貞補　享保初年頃の作なるべし

沼田衆
○佐久間與左衛門　一中公初テ出ル駁馬器用成ニ依テ段々修行シテ馬役トナリ後ニハ八州無雙ノ上手也江戸ノ愛宕ノキザハシヲ乗上タリト云フ

- 三左衛門 ― 彦七　若死　宮下伊右衛門弟養子 ― 三五郎　若死大日方助大夫子鹿之助養子ニ申立若輩者養子ナラズ断絶
- 市郎左衛門　大熊清左衛門養子トナル　鶴田庄左衛門ト云分シテ打果ス江戸ニテ
- 源大夫　後與左衛門　馬役 ― 源大夫　若死無子矢野小平太次男ヲ申立跡目ニ無覚束不藝故断絶ス
- 貞右衛門 ― 小大夫　宮永治郎左衛門弟 ― 衛守　側頭取 ― 衛守　取次 ― 三之丞　御側役始近習 ― 三之介　御小姓
- 左内　小姓若死無子断絶
- 小市　小姓若死無子断絶
- 見彌　十河斎兵衛養子

四、本藩廢古諸家略系

著者不明

佐久間與左衛門
- 佐久間善八　百石　始與左衛門　有故沼田ニテ自害
- 佐久間三左衛門　二百石　始元右衛門
  - 佐久間彦七　實ハ宮下伊右衛門弟平大夫
- 佐久間與左衛門　百俵五人扶持
  - 佐久間源大夫　壯死矢野小平太二男養子　中立未熟ノ儀ニツキ斷絶
- 佐久間左内　五兩三人扶持御小姓病死潰レヤシキ佐久間彦大夫同居
- 佐久間新二郎
  - 佐久間駒之助　實同苗三左衛門子七兩三人扶持法名破顔運刀
    右駒之助御小姓元祿三年七月廿六日切腹被仰付介錯齋藤仁兵衛
- 佐久間三五郎　三五郎病死ノ處太田助大夫子鹿之助中立家滅ヤシキ殿町石川吉右衛門又樋口淺右衛門又青木勘之進又燕野左門今ノ

五、松代藩監察日記

享保十三戊申年八月九日の條

岩間一學

母方之名字佐久間と相改め名三左衛門と改度旨願之通被仰付

佐久間象山先生年譜

文學博士　飯島忠夫　校訂
三井圓二郎　編纂

〇幕府國譯局を設け蕃書和解方を命ず
〇稻村三伯（ハルマ和解の作者）歿す

文化八辛未年（二四七一）　一歲

〇二月（出生日は口碑に十一日と傳ふ）信濃國埴科郡松代町字浦町（現今有樂町の文字を用ふ）に生る通稱は修理（初め啓之助）名は啓、又大星（幼名國忠）字は子明（初め子迪）象山と號す蟄居中書衞には其の年代と對手とにより變化あるも概して星、大星、明、吳灣又は吳安などと稱し或は子恪二郎の名を借りたり松代藩士にして祿百石（初め五兩五人扶持）を食み職郡中橫目付、督學に至り後幕府に徵されて京都に出で海陸御備向掛り手付雇（四十人扶持）となる

〇修理と脩理とは混用せり

〇吳灣、吳安は蟄居中松代御安町に寓居せしを以て其の町名の音を假借したるものなり大星、星、明は名の啓より聯想して選びたるも

のなり

○滄浪、觀水、淸虛、懷貞、養性齋又稀に曲水、負郭、北阜、左翼、信狂、等の別號を用ひたり

○名の字は啓なれども國歌には衡樹の字を用ひたること多し

○象山の號を用ひたるは天保七年春以來の如し

○字は天保八年までは子迪、九年以後は子迪、子明を混用し嘉永三年以後專ら子明を用ひたるが如し

○大星は嘉永四年六月平大星子明と望岳賦に署して八田氏に與へたるを初見とするが如し

○父通稱は一學、名は國善、字は之祥、一字を淡水といひ神溪と號す同藩士長谷川千助の次男にして佐久間彥兵衞の爲に養はる妻相澤氏を娶りたれども故ありて之を去る（天明元年結婚寛政七年離別）天保三年七十七歲にして歿す祿五兩五人扶持を食み職側右筆兼表右筆組頭に至る（象山文淨稿神溪佐久間府君年譜に詳なり）

○母（名はまん）埴科郡東寺尾村荒井某の女文化二年父一學の妾となる（後年藩主幸貫佐久間邸に臨みたる時謁をとりたるより以後正妻の資格となれりといふ）文久元年八十七歳にて歿す象山の生れしは實に父五十六歳母三十七歳の時なり

○姉三人あり内二人は相澤氏の出にして早く亡す一人（名はけい）は同母、文化五年に生れ文政九年同藩醫北山林翁に嫁し一女（名はりう和田年之助に嫁す）二男（安世、藤三郎）を生む天保七年寡婦となり明治三年歿す

○子、男三人女一人ありしも次男恪二郎の他は皆夭せり恪二郎は十七歳の時父に随って上京父横死の爲め知行竝びに屋敷を沒收せられ各地に流浪せしが明治三年赦されて新たに家祿七十石を給せられ六年司法省に出仕し後愛媛縣判事となりしが十年二月二十六日任所に歿す年三十

文化九壬申年（二四七二）　二歳

○松平定信退隱して樂翁と稱す

○高田屋嘉兵衛魯船に捕へらる

○魯船嘉兵衛を返す
○蒲生君平歿す
○大槻磐水歿す

文化十癸酉年（二四七三）　三歳

○六十四卦の名を諳んじ（瞰卦敍）又人の背にありて某寺門前の禁字を覺え書きし事ありといふ

案ずるに此の寺は惠明寺ならんか前阪に大林寺とせしは「禁葷酒」と刻める禁牌石の同寺に存せしが故なり然れども其の寺の位置が浦町より相當の距離に在ると禁の字の字畫の複雜なるとにより首肯し難き點ありよりて更に考ふるに禁牌石に刻せる文字は各字齊しく禁字と稱すべく必ずしも特に禁の字のみと限るべきにあらず然れば象山は幼時其の家より餘り遠からずして當時輪奐の美ありて境地の幽邃なりし惠明寺に常時伴はれ門前に在る「不許葷酒入山門」に何時となく視入りて不の字を覺え書きたるを傳へたるにはあらざるか此の事も亦臆斷たるに過ぎざれ共較自然なるを以て記して以て後考を待つ

文化十一甲戌年（二四七四）　四歳

○坪井信道より贈れる丙午送別の詩に『三歳作字已稱奇』の句あり

文化十二乙亥年（二四七五）　五歳

○父大數の法を敎へ萬萬正を載といふに至つて止む象山足れりとせず重ねて問うて曰く然らば萬萬載は如何と父神溪咲つて此れを奇とす（文稿雜文）

文化十三丙子年（二四七六）　六歳

○始めて學に就く(與須田澹山書)

○藩儒林罩山の門に入れりといふ說もあれど確ならず恐らくは家庭に於て句讀を受けたるなるべし

○イギリス船琉球に來りて互市を乞ふ
○和蘭商館長ドーフ蘭蘭和辭典ハルマ成る

文化十四丁丑年(二四七七) **七歲**

○英船浦賀に來る
○伊能忠敬歿す

文政元戊寅年(二四七八) **八歲**

○英船浦賀に來りて互市を乞ふ

文政二己卯年(二四七九) **九歲**

○八九歲の時戶外に遊び天然石の硯を拾得す父一學以て他年大名を成すの祥となす(天石硯銘并序)

○水戸藩士大日本史を朝廷に獻ず

文政三庚辰年(二四八〇) **十歲**

文政四辛巳年(二四八一) **十一歲**

文政五壬午年(二四八二) **十二歲**

○英船浦賀に來る
○四月三日長野美波留歿す(四八)

文政六癸未年(二四八三) **十三歲**

○勝安芳生る

○八月二十日藩主眞田幸專致仕し幸貫嗣ぐ貫は松平定信の第二子なり初め伊豆守と稱し後信濃守と改む

○鎌原貫忠(桐山)藩政に參す

○英船常陸に來る又薩摩の寶島に寇す

○六月幸貫始めて入國す北澤源次兵衛(蘭溪)爾津左盛等を用ひて學制を立て社倉を創め儉約を行ふ象山の父一學亦拔擢を蒙る松代藩文武の政是よりして大に振ふ

○七月十三日　　　　　　　　　　　　佐久間一學

其方先年殿樣御劍術中上共上及老年候ても不絶門弟共へ稽古等も致し遣奇特之事思召候依之格段の御趣意を以一生之内玄米三人御扶持別段被下置之(藩記)

文政七年甲申年(二四八四)　　　　十四歳

○二月老公幸專(大曉公)五十誕辰の賀詩(詩稿)を上つる作は前年の冬にかかる

恭奉壽老君侯臺下五十初度應教

邸第琅玕知幾年。　清陰翳鬱玉堂前。
今春五十長生始。　貞節此君何羨仙。

佐久間國忠誠恐頓首拜上

○八月九日　　　　　　　　　　佐久間一學

側右筆表右筆組頭兼帶申付之

御用部屋書役、御座敷見廻役、御用部屋小僧役、表坊主役、右兼帶御役にて

可被致支配候
御側御右筆は御膳番の次、表御右筆組頭は御日付次席と可被相心得候
（藩日記）

○此の年頃より文事に志す（天保八年五月學政意見書）

文政八乙酉年（二四八五）　十五歳

○二月幕府攘夷令を發す

○山寺源大夫近習役となり佐久間仙之助（庸左衛門）小姓役となる

○二月二十六日　佐久間一學
同　啓之助
其方妾腹の男子啓之助嫡子仕度旨願之通被仰付之（藩日記）

○四月十五日始めて藩主幸貫（感應公）に謁す（藩日記）

○易を讀み其の辭象を玩んで夜を徹することあり（讀宋氏風論喜而作の詩）

文政九丙戌年（二四八六）　十六歳

○賴山陽の日本外史成る

○藩老鎌原桐山の門に入り經義文章を學ぶこれより癸巳遊學の年まで常に其の門に出入せり（天保元年臈月念八日桐山に呈する書）

○町田源左衛門に就き算數を學ぶといふ（北澤正誠著佐久間象山先生年譜による以下『北年』と書するもの皆）

（同じ）

○三月十四日姉けい藩醫北山林翁に嫁す（藩日記）

○頼山陽其の著日本外史を松平樂翁に呈す

文政十丁亥年（二四八七）　十七歳

○父一學督する所の千曲川築堤乙酉の歳に始まり此の歳功成る藩主衣を賜ひてこれを賞し又自ら『磊々落々』の四字を書してこれを賜ふ（磊々落々跋）『庶民築堤城西邉』の詩は父の歿後此の堤を望み先考を追慕して作れるものにて此の時の作とせるは誤れり（詩稿「望不崩堤追慕先考」）

○始めて招かれて藩老恩田頼母の邸に至るこれより締交甚だ深し（恩田柳泉像贊）

○七月十七日幸專江戸の邸に卒す（五七）法號大曉院殿八月十三日松代に歸葬す

文政十一戊子年（二四八八）　十八歳

○十月十三日

御側御右筆　佐久間一學

同　啓之助

一學老衰往々御奉公難相勤付願之通御役御赦免隱居悴啓之助へ只今迄拜領之御切米金五兩玄米五人御扶持被下置家督無相違被仰付之

老年迄出精相勤候付銀壹枚被下置之（藩日記）

○五月松平樂翁卒す(七二)
○六月近藤守重歿す(五九)
○正月北澤瀬次兵衛復仕す

○八月四日吉田松陰生る
○正月十一日恩田頼母家老職となる
○七月菅沼九兵衛目付より側役に轉ず
○九月山寺源大夫

○十一月二十五日
木村縫殿右衛門組へ御番入(藩日記)

佐久間啓之助

文政十二己丑年(二四八九) **十九歳**

○元旦百韻詩を賦すといふ(北年)
○五月宮下主鈴を伴ひ石川山に遊ぶ七絶四首あり(詩稿)

天保元庚寅年(二四九〇) **二十歳**

○正月讀管子の詩あり(詩稿)
○閏三月藩内能樂盛んに行はれ隨ひて文武兩道の衰退するを慨し亂舞論を草して之を貶す(閏三月二十二日山寺宛手簡に據る此書翰蠧害多きを以て書簡の部に載錄せず)
○五月友人藤田五美歿す誄を作つて之を哭す(文稿)
○六月鎌原桐山江戸に赴く序を作つて之を送る(文稿)
○七月側役兼世子側役菅沼九兵衛江都に赴く序を作つて之を送る(文稿)
○八月二十一日書を鎌原桐山に贈り桐山の與へたる作文上の注意に關し異見を陳ず(二十歳文稿呈鎌原先生)

學校普請用掛となる

○九月廿九日岡野石城歿す（八六）

○九月十五日學業勉勵の廉により藩ゟ銀三枚を賞賜せらる（二十歳文稿呈桐山先生）

○同二十九日祭岡野先生文（文稿）を作る（父一學、師桐山、何れも岡野石城に學ぶ）

○十月僧活文を常田（ときだ）に訪ひ鳳山禪師文稿序及岩鼻記（文稿）を作る活文は松代の人嘗て長崎に學び又支那に遊び支那音に通じ且つ琴を善くす神川村龍洞院の住持なりしが老して文政七年岩門（いはかど）村（今の神科村の内）に居り後上田城南常田村（今の上田市内）に移る象山は岩門時代よりこれに從つて支那音及び琴を學び數年間頻頻往來せり

○冬藩力石村の農某に命じて庶民の爲に領内各地に心學の講話をなさしむ象山之を不可とし藩老恩田頼母に書を呈して此れを止めんことを陳ず（呈恩田頼母書）

○十二月二十八日一年内の作文百首に滿つ乃ち書を師桐山に呈して謝意を述ぶ（呈鎌原先生書）

○全集文稿中に收めたる二十歳文稿と稱するは此の百首中のものなり

○九月廿五日北澤瀞矢兵衛歿す（一八〇）

○九月賴山陽歿す

天保二辛卯年（二四九一）　二十一歳

○三月二十三日　御番士 佐久間啓之助

御近習役被仰付之　詰中若殿樣之方御用專可相勤候

○五月十三日　佐久間啓之助

御近習役御免被仰付之（藩日記）

これは專ら學業を修めんために退職を乞ひて許されたるなりといふ

○冬師鎌原桐山の印を刻す（桐山印譜）

天保三壬辰年（二四九二）　二十二歳

○四月二十一日　佐久間一學

去月二十八日劍術一覽之節其方門弟名面書不敬の儀有之付認直候樣悴啓之助へ及差圖候之處我意申張及違背候右は其方も同意之由不埒之至思召候依之嚴重之御咎可被仰付候處先非存付恐入候趣相聞其上老衰に及候旁格段之以御宥恕愼被仰付之

無役 佐久間啓之助

其方常々恐愼薄氣隨之行有之趣相聞如何敷事候其上去月廿八日劍術一覽の節父一學門弟名面書不敬之儀有之認直候樣及差圖候處我意申張及違背候段不埒之至思召候依之嚴重之御咎可被仰付候處先非存付恐入差控相伺候付厚以思召閉門被仰付之

無役 佐久間啓之助

（○）八月十七日

父一學大病之處此節必死之症に相聞候に付容易難被成下御赦免義候へ共格段之御情を以閉門御免被仰付之

啓之助父 佐久間一學

父大病付閉門被成下御免候向後萬端厚心懸可申旨被仰付之

愼御免被仰付之

佐久間啓之助親類共

佐久間啓之助儀父一學大病之處此節必死之症に相聞候付容易難被成下御赦免義候得共格段之以御情閉門御免向後萬端厚心懸可申旨被仰付候親類共申談急度心底相改御奉公大切に相勤候樣厚教示可有之候

（落日記）

○八月二十日深更父一學歿す年七十七（神溪佐久間父君年譜）法號蒼龍院淡水日映居士（過去帳）松代蓮乘寺（日蓮宗）に葬る象山喪に居り禮を盡し四鄰感動せりと云ふ

○一月山寺源大夫江戸に上りて長野豊山を聘す

天保四癸巳年（二四九三）少年時代、一齋塾時代　二十三歳

○夏毛奇齢の春秋占筮書を讀み其の補正すべきの點あるを認め自ら得る所の者を蒐錄して一卷とし名づけて春秋占筮書補正と云ふ（春秋占筮書補正序に據る今は逸して傳はらず）

○秋長野豊山松代に來り孟子を講ず象山文を作つて其の吾我の辨を駁す（呈長野豊山君書）豊山留ること百餘日にして去る（豊山の松代を去れるは專ら象山の論駁に因すと傳ふるは當らざるが如し）

○十月綿貫新兵衛の需めにより其の息の緣談に關し筮占を行ふ（十月望同人宛手簡）

○十一月下旬許可を得て江戸に遊學し林家の門に入り學頭佐藤一齋に

學ぶ蓋し松代藩文學を以て遊學の許可を得し者の嚆矢とす（桐山の送序）

○學資は矢澤監物より借用し又藩主の手許より特に密々補給せらる（五年五月一日矢澤監物宛手簡）

○「題一齋先生遺墨」の文に曰く『余少時師事一齋先生。灑掃門墻兩歲。頗承愛育。嘗問作文之訣。余於言下釋然。……但先生主張王學。不好窮理。余則專承當程朱之規。以窮天地萬物之理。爲斯學起手。……』と

○又天保八年に於ける象山が學政意見書には自己の經歷を述べて『近來まで程朱の正學に不志罷在候』といへりされば象山が程朱學を標榜せるは江戶遊學の時を以て其の初となすべきに似たり

天保五甲午年（二四九四）一齋塾時代　二十四歲

○元旦師一齋に次韻し讀易設言の詩を賦す（詩稿）

○五月一齋言志後錄草稿を象山に示し意見を言はしむ象山逐條批評を加へ錄して之を呈す（五月二十日一齋宛手簡）されども其の一二の他は皆原文のままにて刪削に附せらる此の月竹庵文公壽序（浄稿）を作る又一日矢澤監物

○德川齊昭蝦夷を開拓し邊に備へんことを建言す

○冬梁川星巖神田お玉ケ池に卜居し玉池吟社を起す

○天文方足立左內のロシヤ辭書翻譯成る

○十二月幸貫の嫡孫幸教生る

に贈れる書に『此節は日夜專ら文章に精力を盡し……』とあり

○八月林權宇熱海に遊ぶ象山序を作つてこれを送る(文稿)

○秋より麾下の士仁木三居に就き琴を學び歸藩の年に及ぶ星巖の紹介によるなり(仁木三居先生碑文)又始めて藤田東湖と交りを締す(十月十九日山寺宛手簡)

○十一月神溪先生年譜(淨稿)を作る佐久間氏略譜(略系)も此の時の作なるべし

○此の年故園の友人宮本櫟齋、今井寒泉、宮尾溫卿等歿す祭宮尾溫卿文あり(淨稿)

天保六乙未年(二四九五)一齋塾時代　二十五歲

○新年作『自歎天涯遊學身。東風再負故園春。元知馬鄭非通士。爭奈由求亦具臣。經國志存從歲歲。益民術就念何辰。不才如舊年空長。深愧窓梅秀色新。』(詩稿)

○正月遊梅墅記(文稿)あり

○九月東里澄(一齋同門の先輩、長門長府の人)象山の需によりて漁樵問對(邵康節著)を書す

○十二月二十二日

無役　佐久間啓之助

○水戸齊昭砲臺を助川に築く
○正月松代藩歌學の師木島菅麿江戸に歿す
○二月十二日鎌原桐山家老を辭し尋で三月二十八日隱居す
○三月二十九日立田楳齋歿す(七〇)
○四月十日藩儒林單山歿(七一)
○十二月九日眞田圖書家老兼世子(幸良)傅となる
○十二月十日山寺源大夫世子傅となる

其方儀御在所御城に於て月並講釋助被仰付候林丈左衞門(單山)へ申談可被相勤候依之來正月十五日此表出立同十九日可有歸著候(藩日記江戸)

○十二月十九日一齋より桐山へ宛てたる書簡に『佐久間事毎度出精文詞も上達に御座候但其爲人從來六ヶ敷候へ共夫なり穩にも可相成候……來春は一先歸國可然と存候……』とあり

天保七丙申年(二四九六)一齋塾時代、浦町時代　二十六歲

○正月歸藩これより毎月二回城內に經を講じ旁ら自宅に於て講書並びに武藝の師範をなす

○歸藩に際し仁木三岳琴の祕譜を授け友人渡邊崋山墨竹を畫きて餞す題して曰く丙申正月二十日滄浪佐久間盟兄欲發索畫官事鞅掌撥冗作之心遽體留所謂五乖因萃時也兄恕之社弟登頓首と又本田伯楙は送序を與へて專ら朱學を張るべきを論じ象山を勵ます

○此の月晦專精寺(東福寺村にあり住持空山は親しき詩友)を訪ひ詩を書す

○三月滄浪漁者の名を以て玉堂琴譜を改訂す

（此の歳眞田幸貫十二支像を鑄る）

○四月鎌原桐山・山寺常山（源大夫）と交々循環して詩の贈答をなす名づけて鼎餗異味（久名品詩一韻）といふ（詩稿）

○此の時の桐山の詩中『於戲象山子。滿腔盡芬芳。』の句あり當時象山の號ありしを知るべし此の月上田に活文を訪ふ途上偶作『山遠煙村標緲』あり（詩稿）活文の庵室に於て始めて林大輝に會し終に其の家に宿す此れより締交頗る密なり『竹庵訪老釋』の詩あり（詩稿）

○五月雜說（初題雲說）を作る（淨稿）

○九月九日桐山に隨ひ東條山に遊び重陽登高記を作る（淨稿）此の月藩主幸貫書する所の『磊々落々』に跋す（淨稿）

○此の歳饑饉民大に艱むこれより先き賑給の法を策して上言せしが未だ行はれず十一月復び前言を繰返し又藩の用達八田嘉右衞門に勸めて貲を獻せしむ是に於て藩其の言を用ひ大に貧民を賑はす領內爲に飢餓の民を出さず（八田發非翁壽序）

○十二月廿八日　　　　　佐久間啓之助

月次經書講釋被仰付置候處打續出精罷出太儀思召候依之銀一枚被下置之（藩日記）

天保八丁酉年（二四九七）浦町時代　二十七歲

○四月本多伯楙に書を與へて陽明學の弊の恐るべく學統の正しくせざる可らざる所以を論じ相與に斯道に盡さんことを述ぶ（淨稿）又聖像贊（仲尼之道……）を作る（文稿）

○此の月下旬傅山寺源大夫世子幸良に隨ひ江戶に移る象山餞するに直の卦及び五絕「往我作直卦」（詩稿）を以てす又山寺の述懷の詩に次韻して之を送る

○五月學政意見書を藩老に呈す要は新に就學の規則を定め藩の子弟をして悉く學に就かしめ嚴に程朱の正學に則らしめんといふにあり又學制なき現狀にては敎學の效尠ければ寧ろ己の現職を免じ暫く江戶に於て尙ほ修業の功を積み然る後再び藩の爲に盡したきの意を副へて情願す

○二月大鹽平八郎亂を起す
○四月將軍家齊職を退き家慶將軍となる
○四月下旬世子傅山寺源大夫定府となる

○八月上田藩沐大輝、加藤彦五郎（號天山字士成）松代に來りて象山を訪ひ彦五郎は其弟勵次の教育を象山に託せんことを乞ふ

○仲秋更科山に遊び月を觀る翌朝歸途雨に逢ひ七絶二首を得『昨夜山樓弄月光』「倦策歸來路未央」（詩稿）

○九月江戸再遊學許可の內意を得たるを以て十一月朔改めて出府修業の願書を差出す然るに許可の指令遲滯せるを以て十二月二日更に情願をなす

○五月佐藤一齋を江戸の松代藩邸に聘して月次講釋を始む

天保九戊戌年（二四九八）浦町時代　二十八歲

○三月長崎興福寺の僧末山松代に來り（時に惠明寺に開基良寂の百五十年忌法要あり大導師を仙臺の大念寺に請ず大念寺の住持來ることを得ず適々末山大念寺に在りて長崎に歸らんとせる折なりしかば代りて其の法要に列せんため松代に來る）般若寺に宿す象山これと唱和す當時末山に就いて賦の作法を問へりと傳ふるは事實に非ず（四月六日山寺源大夫宛書簡）。

○閏四月藩の內用を帶び越後に遊ぶ新潟、水原、新發田に至り轉じて彌彥、柏崎、今町を經五月末日松代に歸る北遊亂稿（詩稿）あり

（）此の時新潟町奉行小林誠齋（象山門下二虎の一小林虎三郎の父）象山を觀謂へらく當今我が兒を託すべきもの天下此の人あるのみと乞うて異日の諾を受く（求志洞遺稿）

（）六月廿八日山寺に返書し一齋の江戸藩邸に於ける月次講釋の不徹底なるを評して曰く『彼翁の得所は餘姚にて程朱の說には不甚深依之天下を易んと欲する所は餘姚の學也而して藩邸にては朱義のみにて講義候事所謂以所賤事親也是僕の不滿なる所以に御座候御序も御座候はゞ啓之助は僞樣申候と畯翁へ御質被下度候』と

○九月二日　　無役　佐久間啓之助

其方劍術槍術腰廻り師範一段之事思召候段被成下御意之御酒被下（藩日記）

○十一月五日　　無役　佐久間啓之助

學問修行願出出府付月次講釋御免被成下候是迄出精罷出相勤候付銀一枚被下置之（藩日記）（月次講釋の後任には宮下主鈴申渡さる）

○十一月十一日　　佐久間啓之助

○支那鴉片の變此の年に始まり壬寅に終る
○渡邊崋山高野長英獄に下さる
○九月仁木三岳歿す（七〇）
○十一月星巖居をお玉ケ池に卜して象山と相鄰す

○正月長谷川鐵吉（深美）世子幸良の近習となり江戸に出づ

修理と改名願之通被仰付（藩日記）
○此の月琴録十篇三冊を撰す（宮本信濃教育會に藏す）その序に象山平啓子明書とあるは子明の初見なるが如し
○冬易を讀まんには朱子の本義よりすべきを斷じ七絶を作る（詩稿）又張仲純の易象圖說中の九宮圖は未だ盡さざるものありとし就て之を補ふ（早一齋先生書）又門弟藤岡伊織の爲に勉齋說を作りて與ふ
○此の歲伊豫奥山存中象山の廬を訪ひ朱王の學を論ず（北年）

天保十己亥年（二四九九）浦町時代、玉池時代　二十九歲

○正月赤澤氏の爲に石龜歌を作り醉翁八十誕辰の賀をなす（詩稿）
○春澁谷秀軒の爲に東坡の畫像に贊す（文稿）
○二月十二日再び江戸に遊學す故舊子弟百餘人これを城外に送る上田に到り師活文の草庵に翌十三日は林大輝の家に十四日は加藤天山方に宿し此の地の諸友と會談し十五日上田を發し十九日江戸に入る東遊紀行あり（詩鈔）此の行詩友東福寺村專精寺空山別を惜みて上田まで行

○菅沼九兵衞職奉行を罷む

を送る
○鎌原桐山其の他の送序あり
○六月朔神田お玉ヶ池に卜居す象山書院といふ五柳ありよりて又五柳精舎と稱す生徒を集めて教授し傍ら一齋の門に出入す又普く天下の名士と交はり名聲漸く著る
○夏矢澤監物男子を擧ぐ祝するに闘玉一顆を以てし賀詩幷序を作つて贈る文稿○晩夏卜居五吟あり邵子を慕ふの句見ゆ詩稿
○八月山口菅山と鬼神を論ず往復六篇十月に至る要するに象山は靈魂を有とし菅山は無と斷じたるものなり淨稿○此の月觀魚記を作る淨稿
○九月文公短牘を編す其の意諸生をして誦讀せしめ書札の範を取らしめんとするにあり長野岡川五郎氏藏○此の月十六日琴の師仁木三岳歿す象山其の墓銘を撰す淨稿
○九月十九日綿貫新兵衞に贈れる書簡に「此度出都以來も正學再興の爲め所を不嫌聞人と不相尋ね見候所都下廣しと雖も屈服可致人も今

○蘭書及譯書取締令出づ
○鈴木春山「西洋兵制」を著す
○二月二十九日詩友專精寺空山歿す
○四月二十二日山寺源大夫世子傳を罷め町奉行となる
○六月二十一日望月主水家老となる

以見當不中……」とあり
○此の歳風雨時を得五穀よくみのる十一月會々雈鶴千曲川に來り止まるここ三日朝野抃賀す象山雈鶴應瑞賦を作りて藩主に上つる 淨稿
○此の歳象山記を作る（文意と旁證）

天保十一庚子年（二五〇〇）玉池時代　三十歳

○春發行の江戸名家一覽に象山の名載錄せらる戲に三絶を作る（春原鎌桐山宛手簡）
○三月八田養井翁壽序を作る 淨稿
○九月邵康節先生文集を編す（東京立田革氏藏す）
○冬星巖詩集序を撰し 淨稿 特に同藩士金兒雪庵に乞ひ代書せしむ（十一月二十一日綿貫新兵衞宛竝に天保十二年閏正月五日八田嘉右衞門宛手簡）
○冬杉本生名字序、跋朱子答王近思書を作る 淨稿
○十一月二十日綿貫新兵衞の『老母の孝養を如何にするか』との問に答へたる書簡に『形の如く五十里外隔居仕最早兩年にも及び候故朝暮

雨暘風雲月露につき候ても慕はしく且心元なくも存候へば此表へ引取も致し度候所……』とあり

○冬澁谷秀軒の長女貰受の内談略ぼ調ふ立田玄迪・竹内八十五郎の勸めによる（十一月二十日山寺宛手簡）

○女訓は此の年の作なるべし（天保十一年十二月九日竹村金吾宛手簡）

天保十二辛丑年（二五〇一）玉池時代　三十一歳

○正月感春賦（朱先生賦とも云ふ）を作る（閏正月十九日山寺宛並に同七日宮下主鈴宛手簡）

○澁谷家との縁談矢澤監物の死去により頓挫す（閏正月十九日山寺宛手簡）

○閏正月山水畫を作り鎌原桐山に呈す

○三月星巖東遊せんとす象山大沼枕山と共に之を送つて行德に到る

○春書加藤生卷、琴記、詠史百絕序を作る（淨稿）

○夏望岳賦（淨稿）成る萬延元年作の櫻賦と對して象山の二賦と稱せらる

○望岳賦の作年前版には卅一歳とある書簡（文久二年十二月朔御側頭宛）を特例とし三十歳とある書簡（文久二年松田某宛）に據り天保十一年作としたれども

○前將軍家齊薨ず

○水野越前守幕政改革に着手す

○齊昭七十二門の巨熕を鑄る

○佐藤一齋幕府の儒員となる

○五月九日高島秋帆德丸ヶ原に洋式大砲を演ず江川太郎左衞門下曾根金三郎等其の門人となる

○十月十一日渡邊崋山自刄す

○正月十日藩老矢澤監物歿す

○四月朔竹村金吾

郡奉行兼馬奉行となる
○八月廿八日圖書師三村晴山來り自ら稿後の功を賞せらる
○八月十一日吹上馬場に於て世子奉良乘馬上覽を受く

猶ほ考ふるに此の松田宛手簡中に在る『其頃より防海の事に致心配』の語より察すれば御て之を天保十二年とする方較〻事實に合ふべく考へらるるにより更に此の年に移したるなり

○五月九日　　　　　　無役　佐　久　間　修　理

四書音訓相正上木可被仰付御含付右御用被仰付之

文武館に於て右御用被仰付

右相勤候中定府被仰付之（藩日記江戸）

○これ藩特に象山を優遇し江戸滯在の名義を與へたるなりといふ

○四書經注旁釋大學之部は京都帝國大學に藏し本全集に收めたり論孟中庸の部は所在明ならざれ共察するに四書全般に亙りて著されたるものなるべし

○此の月象山書院學約を定む（文稿）

○六月十三日藩主眞田幸貫老中となる此の夏大旱民皆以て憂となす此の日適〻大降雨あり象山喜んで一詩を作る『嘉澤滛浸浹四隅。旱禾秀發

○七月文政八年の攘夷令を撤すこれ幸貫の發議に本づけりといふ

○相總沿海の防備を厳にし羽田奉行を置き下田奉行を復す

○箕作阮甫の和蘭文典（ガランマチカ、セインタキス）飜刻成る

民亦蘇。正是吾公登閣日。先看祥兆滿寰區。』（詩稿）

○九月二日　無役　佐久間修理

學問所頭取申付之　席之儀御取次次席と可被相心得候（藩日記江戸）

○此の月松代學問所に功課簿を頒ち學習者に毎日其の學習事項を記入し空疎に流れざらしむ（功課簿序）

○十月幸貫に上書し武事偏勝に陷らざらんことを述ぶ（上書）

天保十三壬寅年（二五〇二）玉池時代　三十二歳

○夏永思賦（淨稿）成る（文意）

○四月十一日　佐久間修理

御咎人御預人有之節親類之外面談仕間敷儀は勿論之事候處去月十五日池田鵜殿方へ見廻に罷越候段相聞候付月番内意申聞候處其後も恐愼無之尚又見廻罷越候段相聞重々不埓之事思召候依之嚴重被仰出方も有之處此度は以御情愼被仰付之

○池田鵜殿は勤直の士にて江戸勤番中同僚等が時折出入する花柳

界などには一切謝絶して同席せざるを患直させられ屡〻嘲弄を蒙りたるより鬱憤禁せず三月九日當番の夜關係者二人を斬殺し一人に重傷を負はせ取調中親類預けさなり居りしを象山は士道の上より大いに同情し禁を犯して見舞ひたるなり

○五月十一日

佐久間修理

愼御免被仰付之（藩日記江戸）

○六月藩の學制の依然さして確立せざるに付焦心に堪へざるの意を藩老に申送る（六月十五日恩田頼母宛手簡）此の月塾生蟻川某歸鄉す象山序を作つて送る（淨稿）

○九月七日砲術師範江川太郎左衛門に入門し翌十四年二月六日免許を受く（江川門人錄）後麾下の士下曾禰金三郎に就き高島の傳書數冊を寫し又田原藩士村上貞平に交はり益を受く（弘化二年六月二十七日八田宛手簡）

○江川坦庵は此の年八月二十日砲術師範の聽許を幕府に申請し九月許可を得たり象山の入門は其の第一日にして實に列藩士負笈

の權輿なり世に象山が坦庵より破門せられしが如く傳ふるは事實ならず此の頃松代藩士金兒忠兵衛（伯温）中俣一平、片井京助等凡そ四十人亦幸貫の命によりて江川の門に入る

○秋藩主幸貫海防掛となる象山に諭して務めて當今の急務を講じ顧問に供せしむ（天保十三年十月九日加藤氷谷宛手簡）

○十月海防八策を建て幸貫に條陳す（十月九日加藤氷谷宛手簡）又世子幸良の爲に有斐亭記を作る（淨稿）

○十一月二十四日更に海防策を詳論して幸貫に上書す（上書）

○十二月二十八日　學問所頭取　佐久間修理

其方內願之通御役御免被仰付之（藩日記江戸）

○此の歳妾菊を納る（天保十四年五月十四日母宛手簡）菊は淺草藏前札差和泉屋九兵衛の女（十六歳）なりと云ふ（菊の子高木濟庵の妻りき子談）

天保十四癸卯年（二五〇三）玉池時代　三十三歳

○正月十八日江戸を發し韭山に赴き滯留四十日二月二十九日江戸に還

○四月將軍日光廟に參拜す世子幸

良退す
○閏九月老中水野忠邦罷め阿部正弘老中となる十五日眞田幸貫勝手掛となる
○天文臺譯海上砲術全書成る
○三月藩の職制を改め職奉行（裁許）郡奉行（組役）を合せて具に郡奉行として定員四人と定む
○三月廿日山寺源大夫郡奉行となる
○十一月佐久間脩左衞門武具奉行となり鐵砲掛を命ぜらる松代最初の砲術家なり
○十二月六日幸貫病を以て勝手掛を辭す

る其の間又幸貫の内命により伊豆の沿岸を視察す（三月五日山寺宛手簡）

○四月十一日母疾ありと聞き急遽松代に歸り十三日家門に入る到れば母疾已に癒えたり母子相歡喜す五月九日松代を發し同夜上田に一泊十二日玉池の寓に入る『我久客江門』の詩あり（詩鈔）（四月十四日山寺宛手簡五月十五日八田嘉右衞門宛手簡）

○此れより以後母は御安町北山家に同居す（五月十四日母宛手簡）

○姿菊は象山の歸郷中に宿元へ退去す（同前手簡）

○六月羽倉簡堂官事を以て大坂に赴く象山序を作つてこれを送る（文稿）

○秋海國兵談を繙きこれに跋す（文稿）

○十月七日

郡中横目役申付之（藩日記江戸）

佐久間修理

○冬測量器械を製せんとす（十二月藩老宛手簡）

○十二月二十日

存旨有之是迄之宛行舊祿百石相直遣之（藩日記）

御郡中御横目

佐久間修理

○五月十三日眞田幸貫病を以て老中を辭す
○六月水野忠邦再び老中となる
○七月オランダ使節外交につき忠告す
○二月十二日世子幸良卒す大雲公と謚す
○八月九日長谷川深美代官となる

○十二月二日風邪を押して江戸を發し七日松代に著し廿二日又松代を發し廿六日江戸に入る此の時西洋學によりて藩利を興すの議を建て有司の同意を得其の再び江戸に入るは主として之が準備の爲なり（十二月廿八日江川太郎左衞門宛及び同月藩老宛書簡）

○『經濟本夙尙。自惜不肯輕。感時謀報國。奮衣出茅衡。拯弊豈無術。及物只有誠。蕃山是何人。廁走稱其名。』これ當時の感懷なり

弘化元甲辰年（二五〇四）玉池時代　三十四歲

○六月廿一日より蘭學者黑川良庵を同居せしめカステレーンの書中にある土性を說く部分の口授を受く之を象山が蘭書研究の最初となす（七月七日山寺宛幷びに弘化二年六月廿七日八田宛手簡）

○象山初め良庵と洋漢學の交換をなししが後幸貫別人を選んで漢籍を良庵に授けしめ象山をして蘭學に專らなるを得しめたるよし良庵の談話に見えたり當時象山は良庵の有爲の人物なるを察し此れを藩に薦め藩も其の說を納れて十五人扶持にて抱へんさ

せしが間もなく加州に仕ふるに決して果さゞりき

○『淡土輿歐羅』詩鈔『壯年貴苦學』詩稿の詩あり象山の見識を窺ふに足る

○七月の頃和蘭百科全書ショメールによりて硝子製造を試む（七月廿八日塚田源吾宛手簡）ショメールの硝子製造篇は文化七年の翻譯あり

○九月阿片始末に跋す（文稿）

○十月初旬内用を以て松代に歸る（弘化二年六月廿七日八田宛手簡）十六日郡中横目役として沓野村（下高井郡にあり松代領）に出張三ヶ村地方の民情を視察し奥御林の踏査、坪根新堰の見分を遂げ同月晦日松代に歸れり此の行一汁一菜嚴に酒を禁じ痛く吏風を刷新し以後此れを例となせり（沓野村黑岩氏文書佐野村文書）

○十一月十三日

御郡中御横目　佐久間修理

佐野、湯田中、沓野三ヶ村利用掛被仰付之（藩日記）

○此の月興利祛弊目安書を作り藩老に呈出す

○十一月下旬松代を發し十二月三日著府（十二月八日山寺宛手簡）九日より又良庵につきて始めて和蘭文典を學び翌年二月中旬に至りて卒業す（弘化二年三月廿五

日山寺宛手簡）

○此の年藩費にて購入の洋書ショメール十六冊代四十両（眞田伯爵家に現存）ボイス十冊代十五両カステレーン三冊代三両測量用三針土圭一基代十二両二分なり（弘化二年正月九日小山田宛手簡）

弘化二乙巳年（一八四五）玉池時代　三十五歳

○正月新砲臺を浦賀に築く

○二月水野忠邦罷め阿部正弘代る

○五月廿八日活文寂す（七一）

○八月廿八日綿貫新兵郡中横目役となる

○十二月九日藩老眞田圖書退職

○此の年金兒忠兵衛業成りて江川の塾より歸る

○正月書を藩老に贈り天下に率先して洋籍（特に兵書火術書を喫緊とす）を購入し頼りて國利を興し世變に應ずるの策を建つべく而も其の爲に投ずる費用は決して吝むべからざることを力説す

○三月是より先黑川良庵の去るや續いて深川邊（坪井信道）までも麴町邊（誰なるか明ならず）までも通ひては不審を質し專ら蘭書の研究に刻苦す當時主として繙讀せしは百科全書ショメールとチールケの兵書にて特に兵書に力を用ふ（五月十八日竹村金吾宛手簡）

○三月廿五日山寺源大夫宛手簡中鳥居耀藏の獄に關し述べて曰く『小弟には上の御在職中に既に此の獄を興し候て奸邪を退け朝廷をも致

一洗上の御功績をも顯し申度彼此手掛をも拵へ候所にて御存知の仕合にて其の地勝手等被仰付其の事容しく相成候ひしが此の度如此にて愉快に存候事に御座候』云云

○五月藩の海防出役人數武器書上に付意見を上書す

○五月二十日女菖蒲(あやめ)生る(あやと呼ぶ)妾蝶(十六歳)の出なり(女菖蒲壙記)蝶は芝久保町田中安兵衞の女なり天保十四年菊解雇の後納れしが如し(天保十四年五月十四日母宛手簡、松代町戸籍簿、安政元年藩より江戸町奉行所へ差出調書)

○夏大いに旱す六月恩田頼母に答へて救荒準備として杏野山中其の他薄地に馬鈴薯栽培を進言す(六月六日恩田頼母宛手簡)

○六月カルテンの砲術書を得て之を閲し江川の傳ふる所の言ふに足らざるを悟る(六月廿七日山寺宛手簡)

○此の月星巖京都に歸らんとす象山哀しんで楚聲を歌ひ(文稿)又序を作つて行を送る(浄稿)

○七月英船長崎に來りしと聞き應接擬答書を草す(嘉永六年九月八日山寺宛手簡)

○仁孝天皇崩ず
○二月孝明天皇踐祚
○英佛船連りに琉球に來る
○米艦浦賀に來る
○佛艦長崎に來る
○此の年藩砲學局を開き正月十一日佐久間庸左衞門鐵砲奉行兼となる
○五月金兒忠兵衞高島流砲術指南屆出閏五月より稽古開始

○八月是より先歩砲兵の蘭書を有せしも未だ騎兵書を獲ざりしが是の月遂に騎兵書三卷を獲たり（八月廿九日山寺宛手簡）

○十一月二十日菖蒲夭す壙記を作る（淨稿）遺骸を松代蓮乘寺に葬る法名梅香妙雪童女（過去帳）

○此の年象山屢〻歸藩を迫らるれども歸らず專ら時世に適切なる西洋智識の蓄積に懸命す

弘化三丙午年（二五〇六）玉池時代、御使者屋時代　三十六歲

○正月泰西海戰鬪竝に泰西陸戰鬪に跋す（淨稿）

○春川路聖謨奈良奉行となり將に發せんとす象山特に寛卦を作り之を贈る（文稿）

○五月磐溪詩鈔に序す（文稿）此の月始めて菊地溪琴に會す月末種豚を松代に贈る

○閏五月松代に歸る此の行先年一度暇を與へし妾菊をも再び抱へ入れて隨ふ（嘉永二年三月八日雨宮左京宛手簡）浦町舊宅頽破して住居にたへざるを以て請

○七月廿九日幸貫江戸を發し日光沼田を經地藏峠を越えて八月八日松代に還る

ふ所あり藩の用地御使者屋（他藩よりの使者を宿泊せしめし建物）を借りて此れに入る（御使者屋に入りしは八月廿九日なるが如し）

○閏月十日坪井信道華山の畫幅を餞し并せて送別の詩あり

○六月藩五十斤砲を鑄るの議あり象山其の不可を論じペウセルを引き小砲の御て利あるを說けり（弘化三年六月竹村宛手簡）

○六月廿三日桐山より一齋に贈りし手簡に象山に關し「兎角故態の剛愎は除兼候樣子氣の毒に存候」と申送りしに對し一齋より『此人亦良醫藥物之一、決非可棄』との返辭あり

○七月廿三日內用を帶びて別所温泉に遊び廿六日同地を發し更級郡六ケ鄉を經て廿七日歸宅す『題安樂寺壁』あり（淨稿）（七月廿五日八田嘉助宛手簡）

○七月上旬男恭太郎生る妾蝶の出なり（八月九日八田嘉右衞門宛及安政五年四月廿八日柳左衞門宛手簡）

○九月五日男恭太郎夭す蓮乘寺に葬る法名賢龍法進童子（過去帳）

○九月十八日沓野村に出役二十九日まで滯在す（沓野村名主日記）

○十一月豐藤熟之の乞により其の著止戈類纂に跋す（淨稿）又佐野村をして

○三月二日坂木村の歌人瀧澤公庵歿す（七五）
○三月廿四日信濃地大に震ひ壓死するもの多し且岩倉山崩壊犀川塡塞すること十有九日四月十三日決潰川中島に汎濫す損害莫大にこれより藩の財政紊る
○十月十三日山寺源大夫鐵砲奉行助被仰付

補津左盛時代以來の新田に關する負債の償卻方を解決せしむ（佐野村文書）
○此の歳蘭書造物疏（バタビヤ人著）及析術開端（英人ヘンリー原著蘭譯）二書を得て沈潛玩味しこれより分析の學に志す（洋鑄合壁跋）
○十二月十五日藩主幸貫の藩老小山田壹岐に與へし書簡に『食事と申處へ又舍人出申候修理いろ／＼あれをかしくもあり又舍人石見など大困りにて候』とあり

弘化四丁未年（二五〇七）御使者屋時代　三十七歳

○四月藩老河原舍人の囑により地震山崩れの爲閉塞せる犀川の成行如何に付筮占し豫斷適中、舍人をして『修理の判斷能く當れり』と言はしむ（蟲倉日記）又近く犀川の汎濫横流すべきを豫想し川中島地方の民に豫め米穀を高燥の地に移しおくべく警告せん事を主張す（四月八日山寺宛手簡）
○六月八日幸貫より川路聖謨に答へたる手簡に『佐久間修理も何分可惜者に候處種々の義有之蘭學之弊も交り申候何卒無滯召遣度と心配申候が如何か日本遊歷之願ひ出申候これも尤之事も有

○十二月二日會見出兵衞并山へ出勤を命ぜらる

之候へども修行心事のかた居合ひ申候はゞ國家有人(原ノママ)と可相成や
にて遊歴も可然やなど考居申候若し右樣とも相成候はゞ其地な
どへも罷出申事も可有之か才智と申非常の人物に候處可惜明德
晦くそれ故に衆人と擣合皆敵となり一團の和氣と申場は遠く有
之候」とあり

○八月中旬過下手三ヶ村に出張し佐野村笠嶽の麓を巡視して歸る歸後
ロイマチス病に艱む(祭韜野山文、八月廿八日山寺宛手簡)

○八月廿五日藩より長袴一具を賞賜せらる大地震の砌度度出役殊に格
別の見込申立云云の廉によるなり(藩日記)

○十月羽倉簡堂其の著書三律撫要を添へ遠く書を象山に寄す

○十二月廿五日

御郡中御横目　佐久間修理

御役御免被仰付之(藩日記)

○此の年顔眞卿の爭坐位帖を獲て始めて之を學びこれより毎日數百字
を書し遂に其の堂に入る古來和漢を通じて顔行に習熟せし者此の如

きは他に比類なしと云ふ（嘉永元年正月十日爭坐位帖跋及安政五年十一月跋自書）

嘉永元戊申年（二五〇八）御使者屋時代　三十八歳

○元旦試筆『我有靈刀不可試。試時解斫奸邪頭。匣中重襲不曾出。紫氣猶能衝斗牛』詩稿 新年作『罷休不受當時責。嘯月眠花得便宜。況復太平開歲首。金樽倒盡在茲時』詩稿

○前年より本年に亙り藩命により十二拇人砲三斤野戰地砲十三拇天砲を鑄る地砲は蘭人ペウセルに據り人砲天砲はブランドトの書により推算工夫せるものなりこれより屢〻松代の西郊道島（だうじま）に於て之を試む（弘化四年十月廿二日川路聖謨宛手簡及萬延元年大銃改造意見書）

○正月顏魯公爭坐位帖跋數篇を作る（正月十日八田愼藏宛手簡）又和田正誼字敍を作る文稿

○三月春雨賦淨稿を書したるものあり作年未詳

○三月杳野村の上林、桑山などの薄地に試に藥用人參を播種せしむ發生よろし（韜野日記）

○米船蝦夷に漂著
○佛船琉球に來る
○十一月坪井信道歿（五四）

○五月村上英俊に勸めて佛書を讀ましむ英俊感奮始めて佛文典を閲し遂に我が國佛蘭西學の泰斗となる

○六月九日沓野村に出役七月七日歸る此の行たる甲辰視察の及ばざりし處を究めん爲にて深山に起臥して境界を察し鑛石を探り其の他企畫する所多し沓野日記あり

○八月十日沓野の民集りて藩地に到り代官所に訴ふる所あらんとす象山の施設につき意志の疏通せざる事ありしに因るなり象山往きて之を鎭す

○九月十八日頃再び出役入山村に四泊廿三日沓野村より歸る（輜野村名主日記）此の時手習師匠孝右衛門に同人より子弟に諭さしむべく慶安御觸書を示して同人をして傳寫せしめたるもの現に同家に保存せらる

○此の月王羲之の樂毅論を臨す（松代町八田彦次郎氏藏）

○十一月十一日次男恪二郎生る（墓銘）妾菊の出なり（嘉永二年四月十九日雨宮左京宛及安政五年四月廿八日柳左衛門宛手簡）

○十一月十五日ドーフのハルマを藩藏版とすることにつき有司に說く所あり（同日竹村金吾宛手簡）

○十二月『書賴子成邊防諸策後』を草し山陽の器局の小なるを憾み須らく眼界を世界に擴め意を領海に注ぐ可きを述ぶ（淨稿）同二十日羽倉簡堂に復書す書中『雨災雜記稍成條理。因欲其卒業乃馳呈求敎。然資性不敏。加之公私多故。未能脫稿…………』の句あり去歲十月の信に復するなり

○此の年より子弟に大砲打方敎授を始む（五月十三日川路宛手簡）又國產廿草相場下落し金融梗塞の狀あるを察し自ら資を投じ八田家の名義を以て試みに之を海路大阪に搬出す成績頗る見るべきものあり此れより人之に傚ふものあり（嘉永二年五月十三日川路宛手簡）

○英米船迭りに來る

嘉永二己酉年（二五〇九）御使者屋時代　三十九歲

○正月跋熊澤蕃山眞蹟、跋李太白詩、跋三岳先生墨蘭、恭跋台德廟賜祖先安政札、跋背刀、跋背旗、書太古遺音後、書吁戒卷後（以上淨稿）を作る

○二月藩主に答へてハルマを藩業にて開版せんことを陳ず（上書）遂に行は

れず

○二月美濃小原鐵心星巖を介して兵制を問ふ象山計畫之に答ふ

○三月下旬藥用人參、茶種蒔付指導監督の爲さ雪渡りの時期を利用し祥慶山（象山發見の銀亞鉛礦所在地に命名）への直路發見の目的にて轄野村に出張す（三月廿九日竹村金吾宛手簡）

○五月更に藩主に上書して自らハルマを出版せんとするの志を述べ資金貸與を乞ふ（上書）

○此の月廿六日松代南郊海善寺馬場に於て三斤野戰銃の射撃を試む（五月廿八日中俣一平宛手簡）

○六月廿一日沓野村へ出役廿四日同村を發し同夜は上州入山村に宿泊廿五日暮方祥草山（同祥慶山）に著翌朝より前年來試掘中の各坑を巡檢し廿九日歸途に就く途中大雨の爲草津に逗留七月二日轄野村に著し四日夜松代に還る越えて八月九日藩より事業中止を命ぜらる（七月藩老宛手簡に據る此の手簡蠹損甚しく本文の事實を推讀し得るのみにて手簡の部に掲ぐる能はざるを惜む）

○七月藩よりハルマ出版資金千二百兩の貸與を得（藩老恩田頼母宛證書）

○八月増訂荷蘭語彙序を草す 淨稿

○九月師鎌原桐山の本朝銓家智囊に序す 淨稿

○十月山極高明退筆銘を作る 文稿

○此の月上旬丙午歸藩後始めて（祭中村平當文）出府し（十月二日認八田宛病床心得）深川藩邸に寓し（嘉永五年津田轉より庄内侯への返簡）ハルマを本とし且つ數種の辭書を參酌し増訂和蘭語彙の編纂に著手し其の第一卷を淨書し出版伺書を幕府天文方に差出す（増訂和蘭語彙A部一巻勝伯爵家に藏す）此の間又力を盡して砲術兵學に關する蘭書の斬新なるものを購ふ千八百十五年荷蘭刊行の歩兵調練書亦其の中に在り象山兵を練る一に其の式に依り西洋眞傳と稱す

○此の時肥前侯より痘種を得十二月藩に歸り直に恪二郎に試み又知人の幼兒に施す次いで領内一統にこれを施すの意見を獻せしが行はれず

○六月蘭人長崎に來り英米二國が通商を乞ふ旨あるを告ぐ

○八月二十五日吉田松陰九州に遊ぶ

○九月蘭書濫りに飜譯すべからずとの令あり

○十月高野長英自殺す（四七）

○二月松代城南花水澤に天砲を演じ記演天砲を作る 淨稿

○三月深川藩邸に在り二十一日老中阿部正弘に上書し增訂荷蘭語彙出版許可遲延の事につき陳情す 上書

○四月增訂荷蘭語彙出版不許可の報を得三日怏怏として江戸を去り鎌倉に遊び轉じて八王子、荒崎、城島、劍崎、大浦、千代崎、觀音崎、猿島等諸家の砲臺を視察し其の實用に足らざるを慨し十二日邊防意見を書して幕府に上らんとせしが藩主幸貫其の忌諱に觸れんことを恐れ命じて此れを止めしむ「洋船那知無賊計。突來倏去不勝煩。邦人未念黠驢戒。高築砲臺護海門」の詩あり 詩稿

○增訂荷蘭語彙出版の不許可となるや象山更に皇國同文鑑荷蘭部の名を以て出願する所あらんとし之を藩の有司に謀りしが亦成らず

○四月廿七日側繪師三村晴山に書を贈りて增訂和蘭語彙出版頓挫の事を告げ事爰に至りては已むを得ざるが故に證書の如く世祿を返上し暫く藩を離れ獨立して世に立たん事を希望するの意を陳ず蓋し晴山

を通じて藩主に訴へんとするなり晴山苦慮五月十四日に至り密にこれを藩主に申す

○六月江戸に於て松代藩砲術一覧の擧あり象山亦藩中の門弟を率ゐて此れに列す一覧の事了りて直ちに歸藩す男恪二郎病氣の爲なり（五月廿九日付役宛竝に九月十一日川路宛手簡）

○六月晦宮下圭鈴に『春陵説太極』の詩を贈る、詩中『宜會東西言、以作一家書』の句あり象山の大抱負を窺ふべし（宮下幹氏藏幅）

○此の詩は『讀宋氏宇宙記』十首中の一なり其の詩の庚戌中に示されたるは怪むべきが如くなれ共按ずるに十首を發表せしは其の書を購ひ得し壬子の年なれ共書物は當時已に借覽を得たれば此の詩は此の時已に出來たるものなるべし嘉永二年七月小山田壹岐に差出したる報告書斷片中にも「此事ソンムルと申書にも見え候此書は三宅老侯御祕しにて此節私借覽罷在候……」とあり

○夏壬寅の上書の稿に追記を施す蓋し砲に關する當時の見識の未熟な

りし點を訂せるなり（上實上書附記）

○七月朔再び出府五日深川藩邸に著す諸藩士の就いて砲術を問ふもの多く又塾生の寄宿するものあり（七月十日母宛手簡）

○此の月旗下の士勝麟太郎及中津藩を首とする諸藩士七十餘名入門す（七月廿六日母宛手簡竝に及門錄）

○八月三日浦賀勤番砲術師範下曾根金三郎の囑に應じ其の門下に熕砲使用法を授けん爲浦賀に赴く（是より先き七月廿九日夜舟を靈巖洲に艤す風に阻まること三日）同行數名金澤に憩ひ總宜樓題名あり後又三星亭に遊び心越禪師金澤八勝詩卷に跋す（淨稿）象山浦賀に在りて大砲照準螺を製す吾が邦此の機を作る初めなりといふ十七日浦賀を出發同日著府す此の月門弟柏木義武辭して郷に歸らんとす乃ち序を作つて贈り免許の卷に代ふ（淨稿）（九月廿一日山寺宛手簡）

○十月中津侯の爲に十二朋（ボンド）獨野戰砲圖を作り題文あり（文稿）

○冬松前藩より十八ポンド長カノン十二ポンド短カノン鑄造の依賴を受く

○島津齊彬封を襲ぎ大いに西洋の技藝を興し三村晴山を介して幸貫と交る
○正月十一日村上英俊定府となる
○五月十一日眞田志摩鎌原伊野右衛門家老となる
○十月十一日長谷川深美郡奉行となる
○十月十九日恩田賴母家老を免ぜらる
○十一月八日菅沼九兵衛寺社奉行郡奉行となる

○十一月三男惇三郎生る(北年)妾蝶の出なり(安政五年四月廿八日柳左衛門宛)
○十二月十八日門弟の特志者數名を隨へて江戸を發し二十三日松代に歸る中途病を得遂に臥床す病間雜感數首あり或は世間の固陋なるを慨し或は遠略の志を述ぶ(雜感六首の注)

嘉永四辛亥年(二五一一)御使者屋時代、木挽町時代　　四十一歳

○正月廿六日　　無役　佐久間修理
其方於江府砲術門人等多勢出來付江府住居仕度趣容易難被成下候へ共以別儀内願之通江府住居被仰付之(藩日記)
○此の恩命は藩主幸貫の宏量深慮と三村晴山、山寺源大夫、竹村金吾等の周旋盡力とによるなり
○二月十七、十八の兩日五十斤石衝天砲(ステインモルチール)二十九ドイムモルチールともいふ金兒忠兵衛の監造する所を生萱村に演ず江戸より隨ひ來れる門弟等皆參加す演砲雜記あり(文稿)二十六日再演す砲彈幕府の直轄地に墜落せりとて中之條代官と紛議を生ず(二月廿七日藩老宛手簡)

○三月藩主幸貫に上書し玉落の件に付陳情す藩の有司徒に事の紛糾せんことを惧れ象山の意に反し十七日中之條より彈を受取り十九日今後生萱村に於て演砲の節は豫め圖面を添へ通知すべきを約し局を結べり象山乃ち二十二日三たび生萱村に大砲を演ず此の地方杏樹滿村時方に開花の期其の間の演砲眞に奇觀たり『春野乘晴演大砲』鈔詩の詩あり（此の時用ひたる五十斤石衡天砲は當時浦賀平根山砲臺に据うる所の一座の外は唯り松代藩の此の砲ありしのみと云ふ）

○四月上旬家を攜へて江戸に到り深川藩邸に寓す（六月十八日山寺宛竝に五年三月十八日竹村宛手簡）此の頃吉田大次郎始めて來り謁し談漢蘭學藝の事に及び象山『春陵説太極』の詩を書して與へ反覆開示す（吉田松陰の辛亥五月廿七日玉木文之進宛手簡同乙卯追和平象山先生感懷作幷引）

○五月八日　　無役　佐久間修理

佐野湯田中沓野三ケ村利用掛御免被仰付之。

佐野湯田中沓野三ケ村利用掛長々相勤太儀之事思召候依之御小袖一被下置之（藩日記江戸）

○此の月廿八日木挽町五丁目に卜居し砲術竝に經書を敎授す（六月十八日竹村宛手簡）狩野家給所の南向側にて戸川彈正の住居跡を買取りたるものなり地主は旗本諏訪庄助の弟にて浦上四九三郎といふ此の交渉初め庄助異存ありしも藩主幸貫特に直書を庄助に與へ又三村晴山（幸貫より晴山に與へし內書）にも內命して斡旋せしめなどして纏りたるなり）象山の名聲天下に高し此の歲小林虎三郎吉田大次郎七月等入門す（及門錄）

○十月廿三日吉田松陰玉木文之進に贈れる書簡に「眞田侯藩中佐久間修理と申人頗る豪傑卓異の人に御座候元來一齋門人にて經學は艮齋よりも優れる由古賀謹一郎いへり艮齋も數々是を稱す今は砲術家に成り候處其入塾生砲術の爲めに入り候ものにても必ず經學をさせ經學の爲めに入り候ものにても必ず砲術をさせ候樣の仕懸けに御座候西洋學も大分出來候由會日ありて原書の講釋いたし申候一遍やらきき申候」とあり

○九月浦賀に遊ぶ彌利堅棋譜を作る（淨稿）此の月川路聖謨大阪町奉行となり任に赴く序を作つて送る（淨稿）

○十月十五日礮學圖編稿を脫し翌年十二月刻成る（序文竝に五年十二月十八日山寺宛手簡）

〇五月大森海岸に大砲演習場を設く
〇八月オランダ加比丹ふたたび忠告す
〇二月二十六日鎌原桐山歿す（七九）
〇四月七日儉約令を發し財政整理に著手す又藩

〇十一月上旬上總姉崎に於て中津藩より依頼せられし新鑄の大砲試發をなす友人大槻磐溪詩を賦して曰く「車如流水砲如龍十二斤彈新葛ヵ濃呼做將軍果然是猛威摧盡萬人鋒」と然るに砲身に故障ありて更に改鑄することゝなり中津藩との間には何等紛議を生ぜざりしも此れが爲に松前藩よりの依頼にて著手中の鑄砲は破談せらるゝに至る（五年三月十八日竹村宛手簡並に十二月幸貫への上書）

〇十二月藩主幸貫に上書し大砲鑄造の件に關し松前藩主へ情實を報せられんことを乞ふ（上書）又門弟金子忠兵衛を破門す

嘉永五壬子年（二五一二）木挽町時代　四十二歳

〇元旦試筆に曰く「硝礦驅邪太的端。庭前爆竹覺枯寒。吾家兼有老櫨法。不用染皇御鬼丸」

〇正月藩より借用中の佛蘭辭書を返納す此れは曩に村上英俊の爲に自ら借用して轉貸しおけるものなり（正月廿三日中俣一平宛手簡）

〇閏二月佐賀侯の囑により十二ポンド新式野戰砲架、海岸砲架雛形各一

地に學校の經營始まる
○四月三十日郡奉行長谷川深美世子側役を兼ぬ
○五月六日藩主幸貫致仕し孫幸教嗣ぐ
○十月廿二日山寺源大夫退役となる
○十一月二日恩田頼母逼塞を命ぜらる

座を製す（閏二月廿九日山寺宛手簡）
○此の頃ソンメルの宇宙記を購ひ耽讀し詩十首詩鈔を作る又翌月跋を作り天下の奇書五十五金致て貴とせざる旨を述ぶ淨稿（ソンメルは此迄幕府の天文方及薩藩に藏せるのみなりしと云ふ（閏二月廿九日山寺宛並に三月十八日竹村宛手簡））
○夏石門頌跋、跋漢孔文禮碑、褒斜道石刻釋文及題記を作る淨稿
○五月廿八日六月一日の兩日藩の二十拇天砲同人砲を借用し大森海岸にて演砲す
○六月三日（後室眞月院夫人の此の年十月三日小山田壹岐に與へたる秘簡による但公事に關する命日は十七日なり）眞田幸貫江戸に卒す（行年六十二）二十九日松代長國寺に歸葬す象山命ぜられて墓誌銘を撰書す淨稿此の文後の雷電碑と共に名文と稱せらる書體は石門頌と孔廟禮器碑とを兼ねたる漢隷なり（十一月七日伊木三郎右衛門宛手簡）
○此の月十四日三男惇三郎夭す蓮乘寺に葬る法號捨權歸本童子（過去帳）
○八月門弟下總の人齋藤利和辭して鄉に歸らんとす象山序を作つて送り慫慂するに新に騎兵を興さんことを以てす淨稿

○九月妾菊解雇（十一月廿七日山寺宛手簡）

○十月俺理を以て易象に擬し皦卦一篇を著す實に東西の言を會して一家の言を成さんと言へる抱負の一端と見るべきものなり十九日上木伺を昌平黌に出す十一月再び書を上りて其の許可を促し萬一差支あらば門人のみへ傳書として印刷配布することを許されんことを附願す（皦卦後敍に五年十一月の伺書）上書

□十一月二十三日　　佐久間修理

其方儀勝麟太郎樣御妹緣組仕度旨願之通被仰付之（藩日記江戸）

○此の月藩主幸敎先公手澤の遺硯を象山に賜ふ象山感泣して之が記を作る（浮稿）

○十二月十五日妻順子を娶る順子は門弟旗下の士勝麟太郎安芳の妹なり（十一月廿七日恩田、伊木、山寺宛手簡）

○冬川路聖謨海防掛となる乃ち三年四月の擬上書（幕府に奉らんとしたる邊防意見書にして藩主幸貫に沮止せられしもの）を出して之を示し注意を促す聖謨見て愕然たりしが遂

に信せず明年米艦渡來の事起るに及び始めて其の先見に服せり（安政四年七月廿二日三村晴山宛手簡）

○此の歳幕府蘭人スチールチース著す所の陸砲書を購ふと聞き請うて之を讀み其の法に據り新に六斤地砲十二挺人砲を鑄翌六年春之を大森に演ず邦人の新式輕砲を鑄る此に始まる（萬延元年武具奉行を通じて差出せる意見書）

嘉永六癸丑年（二五一三）木挽町時代　四十三歳

○正月奥平公權の爲に格堂說を作る（淨稿）

○二月礮學圖編製本成り先づ一部を藩公に獻ず（二月十五日側納戸役宛手簡）又『未見礮臺環海渟幾載鯨鯢橫遠海』（詩鈔）『戎霧蠻雲黯海天』（詩稿）の詩あり

○三月三日蘭亭の會に因みて羽倉簡堂方に會飲す詩幷引あり（詩鈔）

○四月十五日

無役　佐久間修理

去年中感應院樣御誌文相撰其上認方骨折太儀之事思召候依之銀二枚被下置之（藩日記江戸）

○此の月呂平賛より『佐久間修理筆記致候品上木之義は無用可仕候且

○六月三日彼理浦賀に來る九日國書提出十二日退去

○六月七日毛利細川以下十藩に内海警衞を命ず

○六月廿二日將軍家慶薨じ家定嗣ぐ

○七月魯艦長崎に來る

○七月品川に砲臺を築く江川太郎左衞門之を督す

○八月高島秋帆赦さる

○九月大船製造の禁を解き西洋砲術を習はしむ

○二月西丸造營手傳を命ぜらる
○五月御城失火本丸の住居向烏有に歸す藩邸多事なり
○八月十七日幸貫の後室卒す
○十月八日眞田志摩家老を免ぜらる
○十一月四日山寺源大夫郡奉行側役頭取となる
○十一月廿五日鎌原伊野右衞門家老を免ぜらる
○仝日長谷川深美退役の上愼を命ぜられ十二月廿九日愼を免ぜらる
○十二月一日恩田頼母家老となる
○十二月八日山寺源大夫軍議役となる
○十二月十一日赤澤助之進家老となる
○十二月廿一日幸教結婚
○冬佐久間庸午衞門蔽む

又同人義砲術發明之説等門人共へ授與致候爲著撰致候はば傳書の體裁も可有之義に付向後右樣體裁之著述は差止候樣可仕候事」とて礮卦出版願御下せらる仍て再び門人限り傳書として印刷配布することを寛容せられんことを乞ふ（四月十六日上書）

○六月三日米艦四隻駛せて浦賀に入る象山四日拂曉藩邸に建議し直に米艦視察の命を受けて浦賀に出發六日夜歸府す浦賀日記あり是より藩邸にありて武備を整へ九日藩の軍議役を命ぜられ御殿山警衞志願の事に奔走し（此の日象山自ら使者として阿部邸牧野邸に到る）併せて藩地より出兵せしむる事を計畫す之が爲に寢ねざること前後七晝夜なりといふ然るに十二日米艦は退去し十八日藩地より家老鎌原伊野右衞門、郡奉行長谷川深美著府し象山の行動は藩力を顧みざる輕擧なりと論じ藩主及び江戸家老望月主水を動かし象山を黜く象山服せずして屢〻抗告す

○六月廿四日　　　　佐久間修理

臨時出役軍議役御免被仰付之

大銃打方の義在府御近習役御番士の内其方門弟に無之者は入門候様申渡教授之義申渡置候所右御用稽古之義は不用と可被相心得候

○七月五日　　　　　佐久間修理

其方内願之通江戸住居被仰付置候處御在所へ罷歸候樣被仰付候用意果敢取早速可有出立候（藩日記江戸）

○此の時『君恩洪大叵爲量』『白石清泉入夢頻』『虚名早已誤侯公』の詩あり（詩鈔）

○吉田松陰の八月十五日家兄に贈れる書に『佐久間修理聲名籍甚に御座候て其本藩より被嫉（編者曰く此の事藩政上の異論より來りたるものなり）御國へ被返候命下り候處水府公、阿部公、其他有志の人々河路左衛門尉、羽倉外記、水府の義黨等深く是を惜み今此人なくば何人か西洋砲銃の事に任じ可申哉國家の武備も爲是缺闕するとの論にて遂に阿部公より眞田公へ相談の上江戸へ留ることに相成候此を以て天下の公論御察知奉願候』とあり

○夏薩藩象山に謀りて八十斤老檣地礮を鑄んとす乃ち圖を作り跋を附

して贈る（熟銅八十斤老儒地球全國跋）

○秋川路聖謨を經て急務十條を阿部正弘に上書す雜說（安政四年七月廿二日三村晴山宛手簡）

○九月門弟吉田寅次郎決する處あり長崎に赴かんとす象山の用聞の說に感奮せるなり象山『之子有靈骨』詩鈔の詩を作つて送別とす

□九月十五日松陰家兄に贈る書簡に「佐久間象山は當今の豪傑都下一人に御座候朱に交れば赤しの說未知其何因慷慨氣節有學問有識見（藤盛鹽谷羽倉等皆知國體者辨大義者象山尤其人物なり）』とあり

○九月廿四日深夜一場（いちば）茂右衛門を伴ひ桑名侯（定永、幸貫の兄）の邸に赴き藩政につき訴ふる所あり當時幸貫の後室卒去以來江戸藩邸は黨派的策謀行はれ頗る混亂せしも尋で藩主の命により藩老小山田壹岐出府し其の裁斷を以て一時の風波は鎮靜せりされどもこれより此の對立關係は最後まで遂に解けず

○十月品川の臺場は海岸砲臺の式に當らざるを察し藩主より幕府に伺書を出さしめんとし案を具して上つる行はれず

○十一月五日
學校督學申付之　　無役　佐久間修理

○十一月十三日
海防御人數臨時出役軍議役被仰渡之　　學校督學　佐久間修理

○十二月廿三日　　學校督學　佐久間修理
其方感應院様御在世中蒙御内命西洋學厚心掛研究砲術等迄弘致指南候段御同院様御趣意にも相叶候事旁御大慶思召候依之御熨斗目一被下置之（藩日記江戸）

○正月彼理再び來る令見所を横濱と定む松代小倉二藩警衛す

○三月三日米國と和親條約締結せらる

○三月廿七日吉田松陰下田に赴きて米艦に投じ海外渡航をなさんとす事成らず

安政元甲寅年（二五一四）木挽町時代、聚遠樓時代（蟄居第一年目）四十四歳

○初春作

『黠虜今應離故國。江門亦已度春風。設施未見回天力。物望誰當命世雄。時昔戯譚憑呆堞。方今急務在元戎。微臣別有伐謀策。安得風船下聖東（シントン）。』（詩鈔）

○二月七日松代藩横濱警衛の爲め出兵す象山之が軍議役として出張三月十四日總人數引揚ぐ

○九月魯水師提督プウチャチン大坂に來り十月十九日下田に入る
○十月廿四日松陰野山獄に下る
○十一月四日下田大海嘯あり魯船大破す
□六月廿九日藩主幸稻初入部
○十一月十五日松代藩品川第六砲臺警衛を命ぜらる

○横濱滯在中下田開港の議ほゞ決すと聞き寧ろ横濱を開くを可なりとし二月廿一日堀織部正を訪ひて其の意を縷陳し尙ほ水戸烈公に賴りて幕議を動かさんと欲し同夜又藤田東湖を訪ひ之を切論す東湖其の熱誠に感じて是を諾す而も當時に於ては其の說行はれず門弟小林虎三郎亦象山の勸によりて其の意見を藩主長岡侯に上書し之により罪を獲て國に還る（三月）象山詩を作つてこれを送る『久知天道易推移』（詩鈔）

□春長州侯の依賴にて十五拇ランゲホウウィッツルを深川に鑄る（四月廿七日山寺、三村宛手簡）

□四月三日か川路聖謨に手簡を贈り品川砲臺に關し意見を陳ず（安政元年十二月廿日津田宛手簡）

○四月五日

佐久間修理

井戸對馬守様より御尋之筋有之明日五時御呼出付罷出可申候尤右御達之次第も有之に付御尋中親類へ御預被仰付之

○四月六日

佐久間修理親類

佐久間修理義井戸對馬守樣にて御吟味中揚屋入被仰渡候其段相心得同人家内之者可被申聞候（藩日記江戸）

○八日佐久間修理家内之者南部坂御屋敷へ引移候之旨此節柄別而御締向嚴重相心得取計候樣同所御目付へ申渡候

○同十五日佐久間修理留守宅家財等取始末相濟候由に付塾生共儀も南部坂御屋敷へ引拂候樣親類共へ申渡候（藩日記江戸）

○獄中より發したる書簡に四月廿七日友人山寺源大夫、三村晴山連名宛のもの、五月廿六日朔北山安世宛のもの、及び月日宛名不明のものあり

○九月十八日

眞田信濃守家來　佐久間修理

其方儀和漢兵學西洋學砲術等師範致し罷在近年西洋之風教國力等漸漸盛大に相成加之蒸氣を以走り候迅速之舶出來之趣先年書籍之上にて發明致し自ら西洋も鄰候道理にて殊に異國船屢渡來致し候に付萬一本邦を覬覦致し近海へ軍艦を進め候儀も可有之と業體へ對し實用の場合專ら御爲を存じ海岸防禦者勿論必勝之籌策を考日夜苦心摧肺

肝候處戰者彼を知り己を知さ申内當今之形勢は彼を知に止り候義さ
研究致し候折柄門人吉田寅次郎義も其方同樣海防策等之義を平常痛
心致し外國へ渡り間諜細作を用ひ度旨議論致し元來同志之申分にて
其器に當り候者に候得共異國へ渡り候儀重き御國禁に付官許は有之
間敷自然漂流の體に致し成手段を以て西洋へ渡り事情を探索致し候
はば歸國之功も可相立旨申聞其後同人儀九州筋遊歷さして發足致し
候由にて暇乞に罷越右は渡洋之企さ同人胸中を察し其意を含み送別
之詩作を送り候得共右手段は不被行立歸候後當春亞墨利加船浦賀へ
渡來致し主人信濃守儀横濱表應接所警衛被仰付候に付其方儀も軍議
役さして同所へ出張致し候砌猥に異船へ近寄間敷旨別段被仰出も有
之候所水夫に紛れ異船へ可近付さ吉村一郎へ相賴み或は吉田寅次郎
儀重之助倶々に宿陣へ尋參り異船へ可乘込さ通辯の爲めに投じ候漢
文之書翰草稿を差出し候迚添削致し遣し殊に寅次郎儀異船へ寄候策
を索め候節是又吉村一郎へ賴みの文通認遣し終に寅次郎外一人儀下

田表へ相廻り同所において上陸の異人へ右書翰を投じ置夜中竊に異船へ乘込外國同伴相賴候得共不致承引被差戻候次第に至り候段專ら御國の御爲めを存量仕成候旨を申立候得共元來同志にて重き御國禁を犯し候段不屆に付眞田信濃守家來へ引渡於在所蟄居申付

○佐久間修理御引渡に付轉（津田轉、藩の留守居役）御請調印仕其節外腰掛に控居候途中警固人御徒目付御徒士下目付足輕等御門內爲繰込夫より御門前にて修理儀兼て用意の錠前付駕籠に爲乘御役方陽之助（岡野陽之助、藩の目付役、象山の門弟）守衞途中無滯召連夕七半時過引取

○津田轉儀は御用向有之付居殘り兼て當四月中揚り屋入被仰渡候節御引揚相成居候修理大小幷鼻紙入御渡付受取能歸差出候付大小は御目付鼻紙入は親類へ引渡

○佐久間修理今日町御奉行所より御引渡付御供休息所被差置候間支配手附之者折〻見廻候樣可申渡候

○右同人へ一汁一菜香のもの附御賄被下之

冷氣之節に御座候へ共益ゝ御壯健被成有御座奉賀候然者此方佐久間先生には去十八日町御奉行所に於て在所へ罷出被仰付明廿五日書立にて在所表へ御歸に相成候此段申上候以上

九月廿四日

二白内寄は白山邊にて被懸御目候樣子に御座候以上

北山安世

山田權之助

松平伊賀守樣

御上屋敷

門倉傳次郎樣

櫻井純藏樣

◎佐久間修理今日御町奉行所より御引渡に付御供休息所に差置御徒目付御徒士等にて晝夜相守候へ共尚親類共にも一人づつ申合晝夜能出候樣親類依田甚兵衞へ被仰渡

◎九月廿二日佐久間修理大小當四月中より一切手入無之付拭置度旨内々依田甚兵衞より申立付相渡之（藩日記江戸）

◎九月廿四日門弟門倉、櫻井へ宛て象山の江戸退去を通知せる文あり察するに門弟中親しき者へは一樣に通知を發せるものか　頭注

○象山獄に在る半歳其の間密に書を山寺、三村の兩友に寄せて救援を求め又他方當今の急務を上書せんとせしも許されず更に密書を獄外に發し其の意見を要路に致さんことを求む（四月廿七日山寺三村宛、月日不明同年某に贈る手簡、文久二年九月上書稿）獄中得る所の詩歌文章は蟄居後此の年冬輯めて一巻となし名づけて省諐録といふ

（一）四月十九日吉田松陰の白井小助に與ふる書中に『扨佐久間翁鄰

牢にあり時々聲音は聞え候へども話も出來不申可嘆僕一身不足言翁は一時の人傑空しく囚繫に陥ること是亦僕が至らざる處其罪不知所謝也』とあり

○十一月二十七日松陰の家兄に贈る書の一節に『又序に申度事御座候象山對吏未練を申たる樣申ものあり是聞違なり弟と澁生が口供には國禁は百も承知の前也古人所謂事成歸王事敗獨身坐耳と申心得にて事成らば上は皇朝の御爲下は藩主の爲にもなるべくもし事敗れ候へば私共首を刎らるるとも不苦覺悟の上なりと始終申立候故甚立派にて吏も舌を卷き國に報ずる志さもあるべしと感心いたし候又象山は不然吏云其方十年來厚く爲國家外寇を患へ遂に此度の事に及び候段其志は感心なる事也乍去重き國禁を犯す段は恐入候か象山云御國禁は犯不申昨年寅等再遊の砌にも風に放たれ候て彼地へ渡る段可然と申候此段は乍恐私深く

苦心仕候儀御察奉願候十年來間諜細作の急務たる事は心附候得共重き御國禁を存候故門人などへもおくびにも出したる事なし然る所昨年土佐の漂民萬二郎被召出候故私存候には間諜の事も追て官許可有之候得共廟堂も御多事にて未だ其儀に及玉はず併漂民を永く禁錮するの一事は先御舊例を改められたる姿なり然れば志士外國へ出候も漂流とさへ名が付き候へば官にも其ものを御宥寛被成候道有之因て風に放たれ候樣と申たる事に御座候竊に廟堂上を奉察候に古法古例に付無據も難被及御沙汰事有之故何とか術を設け海外へ出で功をなしかへり可立御役候へば法外の意に行はれ候樣に苦心仕候儀に御座候且昨年來の變神州三千年來の大變故官にも亦格外の御處置可有之奉存候故寅等が所行可然と申候儀に御座候全く御國禁に背き候心底毛頭無御座候對州大怒日萬二郎事に付て外國漂流のもの禁錮の法弛みたる

など申は下として上を臆度する段甚不屆也是は上樣如何なる御深慮被爲在候事に哉此方共も不奉存事也術を設け海外に出で漂流など名を託し可申心底矢張國禁を犯すなり且非常の大變とても法例は法例なり云々此論往復甚激なり遂に象山申すにはかかる非常の節にも法は法例は例と被仰儀に御座候へば一も二も無之私國禁を犯す事明なりと寅每對吏云寅等兩人自分のからだなり成は功、敗は罪、將身試法不復求全候修理は人のからだ也故に何とぞ成敗共に全かれと千萬苦心仕候儀に御座候何卒所過に因て情合の異なる所御深察を奉祈候と申候俗吏暗時務云々の詩爲是也然れども象山案定る日作詩云案成千歲無遺憾不辱君家與我名其志も亦可見夫を未練と申は僻事なり象山對吏の開奉行を諭し幕府の陋禁を弛べさせんとの志なり其言慷慨過激なること多し夫故幕吏等も惡み未練の程申たるに可有之候象山遂亦不以爲罪

故其語曰若無罪下獄爲辱不義而富且貴亦在所榮歟」とあり

□九月廿五日江戶を發し松代に護送せらる家族一同及塾生山田兵衛等同行す十月三日松代に著す途中母疫邪に犯され象山亦風邪にかかる母は頗る重患なりしも十一月中旬に至りて癒ゆ（十一月四日竝に十一日勝宛手簡）

□十一月四日午前松代にも地震あり此の時象山姉北山氏の家に寓し無事なり五日聚遠樓に移る（樓は松代御安町にあり藩老望月主水の別墅にして地境幽邃眺望絕佳なり象山扁して聚遠樓と稱す）（十一月五日八田宛同十九日村上宛手簡）

□十二月寄に藩老恩田頼母に書を贈りて去年十月の獻策（品川臺場のことにつき）本年四月川路聖謨に贈りて海中臺場の事を論せし書稿、昨年秋の急務十條、本年の獄中擬上書を附せ示し藩の品川臺場警衛を陸地警衛と交替願出の策を勸め又藩留守居津田轉にも此の事に盡力せんことを勸む

□小原鐵心（大垣藩老）象山の歸藩するを聞きその獄中の作に次韻しこれを寄せて曰く「畢竟忠言似不平。惜曾翦燭夜談兵。開港相地議三失。

邊警見機誇兩明。詎係幽囚能忍寃。生還鄕土亦恩榮。必然期是十年後。
相會都門繼舊盟」

安政二乙卯年(二五一五)聚遠樓時代(蟄居第二年目)　四十五歳

○正月杜鵑の啼くを聽き『谷口黃鸝未放聲』の詩あり詩鈔

○三月去歲十二月廿三日の詔書を讀み喜んで自ら禁せず『一跌歸休深鎖門』『朝家預備未嚴森』の詩を作る詩鈔又玉煙堂顏帖に跋す淨稿

○夏方干魯墨を得て山水の畫を作る又湯子遺書跋、所臨醉翁亭記跋を作る

○五月是より先き佐藤一齋乞はれて鎌原桐山遺迹碑文を撰す成るに及び象山批正を加ふる所あり一齋聞いて悉く之を容れ特に自己の手控をも訂正す(五月九日一齋より山寺宛手簡並に十六日象山より山寺宛手簡)

○六月佐野村大幟を書す蟄居を憚りて揮毫の歲次を嘉永癸丑とす

○七月海防臆測、善導傳、及石川丈山書に跋す淨稿

○正月十六日江川坦庵歿す(五五)
○三月三日去年十二月の勅命により梵鐘を以て大砲を鑄しむ
○六月オランダ汽船鐵砲を獻ず
○七月勝麟太郎等海軍傳習生となり長崎に往く
○十月堀田正睦再び老中となる
○十二月松陰野山獄を出で家に幽せらる

○二月十二日甥北山安世表番醫となる
○四月廿九日松代文武學校假開校式擧行

○八月是より先き吉田松陰遙に幽囚錄を送り閱を乞ふ象山乃ち評を加へ換金生詩を添へて返送す（松陰先生遺著幽囚錄）又大幅の畫を作り『罪譴亦渥恩』の詩を題す（詩鈔）

○九月文稿を整頓して象山淨稿と名づく敍に曰く『士不幸中道而廢、可以舉其心事、自之於天下後世者、唯文章已、於是竊有惜文之念焉……』と

○九月十四日佐久間修理不愼之儀公邊より御沙汰有之候に付尙以來取締方嚴重相心得候樣親類共へ申渡候其段相心得候樣被仰渡候（藩日記）

□九月六日阿部伊勢守より藩主に次の申渡あり『佐久間修理事先達引渡相成候以來愼居候へ共尋參候者へは面會も致し軍學砲術教授に及入魂之向へは書翰往復等も致し候其方家來共より差留候由に相聞候へ共尙此上他人面會書翰往復等致し候ては修理爲筋にも不宜候間堅く差止當節之所は別て能〻相愼居候樣可被致事』

○十月二日江戸大震藤田東湖壓死す長詩二首を作つて之を哭す　詩鈔

○屏居以來デッケルの兵書を精讀す（安政三年三月廿二日勝宛手簡）又秋より詳證術（數學）は萬學の基本なりとてウヰスキユンデを研究す（八月十五日勝宛手簡）

安政三丙辰年（二五一六）聚遠樓時代（蟄居第三年目）　四十六歲

○春長歌『日の本のやまとの國は』及び『信濃路はひなにはあれど』を作る（正月廿七日及二月廿二日山田宛手簡）

○三月二十二日勝麟太郎より航海中九死に一生を得たりとの報を得謹愼の例を破り密に長牘を送る

此の月『櫻花三月滿皇州』の詩あり　詩鈔

○七月十日勝に簡しジャワに留學せんとする意志あるを賛し筆を極めて其の決行を勸む

○此の月幕府旗下並に諸藩に令して銃陣を演習せしめ又老中の檢閱を行ふ當時象山の門派十一段込方を用ふ然るに蘭人より傳習を受けて

○二月蕃書調所を九段坂に創む箕作阮甫杉田成卿等教授たり

○江戸の兵備を西洋銃に改む

○七月松陰蟄居中家學を授くるの許可を得松下村塾を開く

○十九日米使ハリス下田に來る

○十月二宮尊德歿（七〇）

○四月十六日菅沼九兵衛寺社奉行を罷め宛行沒收の上蟄居を命ぜらる

○九月十一日佐久間庸左衞門歿（四四）

○十二月廿八日片井京助新銃を發明して之を獻じ賞を受く

新に長崎より歸れるもの八段込方を用ひ議合はず監察土岐丹波守八段に從はしむ門人島津文三郎(中津人)蟻川賢之助等確實なる根據なきを以て從はず竊に書を象山に寄せて之を質す象山八段込方は陸軍の式にあらざるを察し書を作つて之を辨じ兼て一律を賦して答ふ『三歲屏居在古城(詩鈔)當時其の說行はれざりしが後果して象山の說の如し

○十一月牛痘種法のことわりを草す(雜說)

○十二月唐宋八家法帖の魯公筆法十二意に跋す(文稿)

○此の年甥北山安世放縱酷だしく象山苦慮し百方之を誡むれども悛めず遂に義絶す(五月廿三日關口紋右衞門宛手簡其の他)

○此の年軍容の事、節度の事を草す(雜說)(眞田家取調書)

安政四丁巳年(二五一七)聚遠樓時代(蟄居第四年目)　四十七歲

○正月題孔夫子畫像、跋先考所扁聚星二字(正月十八日山寺宛手簡)(文稿)示諸友(文稿)門弟子に示す(雜說)を作る

○三月アメリカ總領事ハリス交易を促す
○六月老中阿部正弘卒す

○十月廿一日米使登城將軍に謁見

○十二月幕府林大學頭津田半三郎をして外交を奏上し勅裁を乞はしむ

○四月廿五日小山田釆女家老となる

○五月廿三日馬場彌三郎側役頭取となる

○二月宇宙記跋、書常陸帶後を作る（文稿）

○三月古事記傳に跋し其の名物訓詁の引徵賅備を稱贊し其の大意は怪妄迂謬なりと斷ず（文稿）

○五月望遠鏡中望月歌を作る（詩鈔）（安政四年五月廿一日仝閏五月五日の一山寺宛手簡）

○閏五月廿一日山寺宛手簡に日尾荊山の訓點復古及び一齋改點に關する見解を述べ且つ象山一家の讀方あることを云云す

○六月老中阿部正弘卒す象山傳聞して曰く『當時の御爲奉痛惜て可然や又は左までにも及ばず可然や』と（六月廿八日山寺宛手簡）

○六月十九日附日下部伊三次より山寺源大夫宛手簡に象山につき記して曰く『象山隱君も定て御安健と奉察候自然御序に宜敷奉願候暫く御養心御著述等御座候て可然と被存候也』と山寺此の書を象山に轉示す（六月廿八日山寺宛）

○六月末山寺より浪華砲臺略圖を示され其の杜撰を知りて慷慨に堪へ

す七月廿二日書を三村晴山に贈り其の斡旋によりて事前に之を沮止せんことを求む

○八月廿二日勝に贈りたる書に海軍局創設につき批評し魯士二國の外人雇聘を引例して之に倣ふべきことを説く

○十月將軍の米使引見を聞き今猶ほ此の國より人を出して萬國の形勢事情を探知するの策定らざるを嘆じ慷慨禁ぜず『忽傳虜使入都城』の作あり（詩鈔 十月廿七日村上誠之丞宛手簡）

○十一月亡友林大輝の像に贊す（文稿）

○十二月三日山寺常山の外交に關する質問十七ヶ條に答へ長翰を贈る

○『外國のうがみは入れてわが國のうがみはやらずいかにせんさか』の國風『幾年禁錮鬢如絲』『先知未用取人計』『四歲撿幽局』『屏居省諐此遲留』の詩は此の年の作なり（詩鈔及詩稿）

○冬書經の洪範に注を施し洪範今解と名づけ之を萬言の上書に擬しト

○正月幕府堀田正睦川路聖謨岩瀬修理を京都に遣し外交につき勅裁を乞はしむ二月五日著京し四月五日退京す
○四月井伊直弼大老となる
○六月米露英佛の軍艦踵ぎ到る
○七月將軍家定薨じ家茂嗣ぐ
○八月朝廷密勅を水戸に賜ふ
○九月井伊直弼間部詮勝を上京せしめ頻に志士を捕ふ江戸にても亦この事あり
○九月梁川星巖歿す（七〇）
○此の年米蘭露英佛と條約を結ぶ

策の官を立てて國家の大事を決定せしむるの要を辨ず又春秋辭命準繩を著し外交に辭命の重んずべきを述べ以て時務に裨補あらしめんとす（十二月三日及十一日山寺宛手簡）

安政五戊午年（二五一八（聚遠樓時代（蟄居第五年目）　四十八歳

○正月十五日依田源之丞の名を以て幕府に封事を上る事の許否を藩老に伺ふ許されず（上書）

○春三村晴山に書を贈り其の周旋に依り自己の意見を要路に通ぜられんことを求む（仝年春晴山より象山に贈れる返簡）察するに此の意見は幕府に上らんとせしものと同じきものなるが如し

○春二回門弟馬場常之助を京師に派し書を梁川星巖に送りて時事を陳じ往復數篇に及ぶ書中廣く人を選んで外國へ出し其の長ずる所を學ばせ其の形勢を探らせ又外國の名士を招いて本邦にあらざる藝術の師とし盛に諸學科を興し城制を變じ遊民を禁じ刑罰を省き器械學を

○三月九日長谷川深美病氣の爲め隱居す
○十一月廿二日鎌原伊野右衞門隱居の上愼を命せらる
○十二月廿二日小山田壱岐家老退職愼を命せらる
○同日鎌原伊野右衞門愼を免せらる廿三日内勤を命せられ翌日復び愼を仰付らる

啓にし工作場を開き大艦を多くし航海商法を復せん、人を用ふるに門地に據らず其の材能を主とすべし、又皇城は西洋の築城法により備を堅くし新に親兵を設けん等の策に及び堀田侯をして此等當今の急務を實行し以て勅許を經ずして條約に調印せる不調法の罪を贖はしむべく然らずして一概に其の責任を追求して遂に處決せしむるが如きは差向き邦家の損失なるを述ぶ其の書遂に九條關白の台覽に入る（梁川星巖との往復手簡）當時馬場の在京中粟田青蓮院宮へも伺候し宮より武田相模を以て「眞田の家に修理なるものあり皇國の爲に防海の義に付格別苦心能在趣被聞召朝廷に於ても御力に被思召候一人に有之」との御沙汰あり象山之を承り感激『澤の邊に立てるあしたづ如何なれば雲井のよそに聲きこゆらむ』と詠ず（文久二年十月十一日白井宛手簡）

○四月これより先堀田閣老條約の勅許を乞ひ許されず象山これを聞き憂慮措く能はず乃ち勅許なきの理由を以て禍を轉じて福とすべき米

使應接の折衝案を書し堀田閣老の歸府して未だ米使と會見せざる前に藩主より幕府に上らしめ以て閣老の參考に資せんとす藩老望月主水等皆これを然りとし目付役齋藤友衞をして之を江戶に攜へしむ然れども障碍ありて其の事遂に行はれず單に藩主幸敎の口上書を添へ此れを川路左衞門尉、岩瀨肥後守の內覽に供したり（四月十五日望月宛手簡七月十九日星巖宛手簡）

○此の月望月主水異船渡來多艱の時節指揮行屆きたる廉により加增せられたるを以て象山の勞を多なりとし賞賜俸米の內一人扶持を終身贈らんとの意を通せしが象山は公事の爲に私報を受くべからずとなし固辭して受けず（四月廿三日望月との往復手簡）

○七月人造磁玦を造る所謂地震計なるものなり（七月朔山寺宛手簡）

○此の月二十日山寺常山と絕交す事四月の上書の件に關す（七月横田宛手簡其の他）

○八月電池を作り之を試む（八月廿二日村上宛手簡）

○五月二十五日松陰の檻輿を發し七月江戸の獄に下る
○八月川路聖謨慎を命ぜらる
○八月廿四日佐藤一齋歿す（八八）
○十月廿七日松陰刑に死す
○二月廿九日小山田壹岐家老となる
○三月廿六日眞田志摩閉居の上蟄居を命ぜらる
○六月廿二日望月主水家老退職慎

○九月十六日三村晴山歿す五十九長歌を作りて之を哭す（十月八日高田宛手簡）

○十月迅發撃銃圖說成る乃ちこれを大老井伊掃部頭に獻せしが翌年六月蟄居人の著述獻上不相成とて御下せらる（文久二年九月十日白井の名を以て上書の許否伺書）

○十一月自書『頭上山洩雲二』の五絕に跋す 文稿

○十二月紀公遺墨跋を作る 文稿

安政六己未年（一八五九）聚遠樓時代（蟄居第六年目） 四十九歲

○新年作『雪西尼巖嶺。春到海津城。畫船卜吉夢。短管學鶯聲。屠蘇朝共醉。鼓笛夜同鳴。寧識五幾外。海隅觸駭鯨。』詩鈔

○四月廿五日吉田松陰長門の獄に在り書を裁して門弟高杉晉作を象山に紹介し且つ教を乞ふ所あり書末『幕府諸侯何處可恃。神州恢復何處下手。丈夫死所何處最當。』の語あり（此の書簡久保來復氏所藏）晉作其の書を攜へ翌年九月松代に來る

○六月顏魯公爭坐帖跋、楊孟文石門頌跋、題漢碑後を作る 文稿

を命せらる

○正月十二日幕府使節を咸臨丸に乘らしめて米國に派す勝麟太郎船長たり

○三月三日櫻田の變あり

○五月五日勝等横須賀に歸著

○八月十五日水戸齊昭薨ず（六一）

○二月二日恩田頼母家老を罷む

○七月男恪二郎文武修行の爲には外出苦しからざる旨藩の重役より達せらる（七月廿一日村上誠之丞宛手簡）

○秋攀雲閣帖に跋す（文稿）

○冬ファンデルビュルクの窮理書を精讀す（九月四日村上宛及十一月三日勝宛手簡）

○十一月頼母子講無盡を發起す通財義會趣意書（書簡の部）あり十二月廿日山口屋甚右衛門方にて初會を催す（一口廿兩掛十四口總金二百八十兩）（十二月十五日八田宛手簡）

○此の年鑄砲の良書スチールルチースの陸砲書を得（萬延元年武具奉行より文聰公に上る書）

萬延元庚申年（二五二〇）聚遠樓時代（蟄居第七年目）　五十歲

○元旦作『ふねよせし四方のえみしもけふこそはわが日の本の春をいははめ』

○新年作『四海無波久太平。遠蕃土物賀新正。後人應紀今時盛。漢武周宣未足名。』（詩鈔）

○正月藩の武具奉行より大砲改鑄、同鑄立、火藥製造等に關する意見書を

○二月十五日望月歸一郎家老となる。

○二月廿六日御側頭取長谷川三郎兵衛御本行兼御頭取となる御役倉藤友衛郡奉行兼頭役となる

○七月廿八日矢澤將監家老となる

○十二月廿九日鎌原伊野右衛門隱居の上蟄居を命ぜらる。

藩主幸教に呈する所なり（上書）

○閏三月櫻賦並に觀櫻賦成る（閏三月十七日恩田頼母宛手簡）

○歳晩詩『孤忠不報承嚴譴。歸臥家山已七年。世事渾如北流水。朝昏流下不肯旋。』

○九月廿一日高杉晉作松陰の書を攜へて松代に來る廿二日夜象山を訪ひ會談翌朝に達す（高杉晉作試擊行日譜）

『萬延元年十一月十九日高杉より久坂宛手簡に『僕事遊歷無恙歸國仕候間御安意可被下候陳ば作間加藤有隣横井平四郎皆得對面議論仕候作間にては夜四ッ時過ゟ曉六ッ時迄豪談仕候貴兄事も作間門人ゟ承居候由御座候對面する道は至て易く御座候淹留之義六ヶ敷かと存居候乍然對面も手づるも往かねば至て六ヶ敷候來春必御尋被成候得ば轉書爲致候僕は信州松代にて周旋して呉れる人有之大きに仕合申候……』』

○五月水戸浪士高輪の英國公使館を襲ひ二人を傷く
○八月外國公使館を品川御殿山に置く
○十二月和宮將軍に降嫁す
○此の月竹内保徳等英船に搭じて歐洲に發す

○四月廿九日眞田志摩長谷川深美蟄居を命ぜらる
○此の月普請奉行磯田小藤太退役の上愼申付らる
○長谷川深美皇道述義を著す
○九月十八日望月主水隱居し歸一郎嗣ぐ
○十月十日藩品川砲臺守衛を免ぜられ更に神奈川横濱邊警衛を命ぜらる

文久元辛酉年（二五二一）聚遠樓時代（蟄居第八年目） 五十一歳

○正月『邊海荐開港。中原未改途。』の律詩あり（詩鈔）
○春『古鏃』斗引、（詩鈔）鏃斗考、（正月）跋三神鏡、（二月）跋米帖、跋林緯乾墨蹟（三月）の作あり（以上文稿）米帖跋によりて象山が嘗て米書をば學ばざりしを知るべし
○五月題項易庵畫冊、跋停雲館帖、跋陳老蓮九歌圖、跋停雲館摹勒子昂帖、跋顏魯公三表稿帖を作る（文稿）
○六月雷電碑を撰す（六月六日關爲右衛門宛手簡）（文稿）文中十年前の作の如く記せるは蟄居中を憚りたるに因るなり 此の文感應公墓誌銘と共に名文と稱せらる
○此の月十七日勝宛書簡に外人の取扱に關し『中庸の九經にも柔遠人と申こと候柔を以て服し候故に柔すと申候剛を以て服し候と申事は御武備御全備の上と雖も有御座まじき義況や今に於てをや』の語あり

○正月老中安藤信睦坂下門に傷けらる

○四月伏見寺田屋に於て薩藩激派の志士等島津久光の命によりて同藩士に斬らる

○五月島津久光勅使大原重徳を護して江戸に下る

○六月關白九條尚忠罷め近衛忠煕代る

○八月島津久光の從士生麥に於て英人を斬る

○同月京都に政變あり公武合體派

○七月九日並に十日聚遠樓の附近に落雷あり（七月十一日八田宛手簡）記落雷の文あり

○八月七日朝母荒井氏歿す享年八十七法號圓滿院妙姓大姉葬儀を松代蓮乘寺に行ひ遺骸を西條村般若寺に葬る（般若寺は黄檗宗にて蓮乘寺とは別宗なれ共蓮乘寺墓地は泉源淺く且つ佐久間家の墓地は極めて狹隘にして孝子の情此に忍びず特に理想的の地たる親戚長谷川家に緣故深き般若寺を選定せるなり然れども此の寺今は御廢に歸したり）喪に居り喪禮私說を著す九月成る

文久二壬戌年（二五二二）聚遠樓時代（蟄居第九年目）　五十二歲

○五月跋漢碑、品題家藏漢碑敍、跋顏魯公家廟碑あり（以上文稿）品題家藏漢碑敍は書道に關する一家の見識を觀る可し

○六月懷素帖跋及び書柳泉歌集後を作る（以上文稿）

○九月一日夫人勝氏虎列刺病にかかる象山親ら看護投藥し十日間にして治癒す虎狼病治驗一則あり（文稿）

○此の月十日時事を痛論して幕府に上らんとし稿成り門弟白井平左衛門をして上書の許否を藩に伺はしむ

退けらる
○閏八月松平容保京都守護職となる
○閏八月廿二日勅して參勤交代をゆるめ諸侯の妻子を國に就かしむ
○九月オランダへ留學の爲め榎本等長崎を發す
○十一月勅使三條實美姉小路公知江戸に下り攘夷決定の勅命を傳ふ
○十二月高杉等御殿山英館を燒く

○六月二十七日恩田賴母歿す
○十二月十四日長谷川三郎兵衛郡奉行專任となり齋藤友衛側役頭取となる

○十月藩主より上書草稿内覽の命あり乃ち別に藩政に關する一書を裁して併せてこれを藩主に上つる

○十一月下旬京信あり櫻賦天覽に入りしを傳ふ象山感喜五絕及び長句を作る詩鈔（十二月六日村上宛手簡）

○十二月六日江戸の義弟村上誠之丞に書を送りて時事を論じ村上の名を以てこれを幕府に建白せんことを勸む又同廿四日藩主の内問に對へたる書にも同樣の趣旨を述ぶ此の意見は翌翌年京都に於ける象山の運動方針と觀るべきものなり

○此の月十一日有志者を會して自己の赦免促進運動を起さんことを提議す

○此の月精細なる獨逸版の世界地圖を得蘭獨辭書によりて此れを閲し世界各國の大勢を察知す（十二月廿八日村上宛手簡）

○此の月幕府より攘夷の事につき諸藩の意見を徵するを以て藩老より

象山に内問あり象山乃ち攘夷の不可國力培養の急務なる所以を書して之を呈す此の意見は藩主の意見として幕府に進達せらる（十二月内問により文聰公に呈したる意見書及文久三年正月十日自處書）

○下旬長土二藩各〻使を遣して象山を招く（十二月廿八日村上寛手簡）

□長藩は山形半藏（宍戸璣）久坂玄瑞を土藩は衣斐小平、原四郎を遣し殊に土藩は其の藩主より松代侯にあてたる手書を攜へしめたりこれより先長土二藩主象山が國家有用の材を抱いて空しく伏蟄の厄にあるは天下の至計にあらずとしこれが赦免方を幕府に運動し（此の事當春風（錢太郎）の覺書による）是に至りて赦免次第これを自藩に招かんと豫め内諾を求めん爲に來れるなり此の時長使は桂小五郎より象山宛の書面と縞縮緬の禮物とを攜へたり

○十二月大晦日松代にて山縣、久坂兩名より長藩來島、麻田に送れる書狀に當時の狀況を認めて『此度水府へ廻り直樣松城へ罷越候

處最早容堂公より御書翰を以て象山翁御招被爲在候段御乞合さして御使者罷越居申候小生共公書持參も仕らぬ位に付公然役人共へ論もならず當人へ公意丈けは達置申候内輪の舊弊一洗仕らずてはならぬ事のよしに付追〻翁も此本藩に入用も可有之他に參る事は六ケ敷樣子に候攘夷之儀は小生共考之處とは合不申候得共何分兵制城堡砲艦の事より實に此大老先生無之ては不相叶いかにも殘念之至也此後當分の處は有志の士を撰此藩に遣し此翁に隨從して學問致させ度ものに有之候佐々木男也共妙ならむと奉存候御親□などにも妙論有之可申何分寸楮の盡す所に無之に付何も上京と存候……桂より御贈の島縮緬慥に落手翁殊の外感喜之事に有之候後刻より發足先是而已』とあり

○翌年伊藤博文、井上馨等が其の思想一變して率先洋行するに至りしも久坂等より象山の持論を傳承して開悟せしものなりといふ

（防長史談會に於ける井上侯懷舊談）

○三年正月長州藩士來藩につき松代藩調役の報告書によれば『半藏義去十二月廿三日歟此の表へ參候由同廿八日玄瑞並に土州鄕士中岡光二一同參候由……』とあり又明治十五年眞田家にて取調べ其の筋に差出せる高野眞遜履歷中に『壬戌の冬長州藩士久坂玄瑞山縣半藏及土州の有志中岡愼太郎松代に來り佐久間象山を聘せんとす』とあれば此の時中岡の同行せる事を察せらるれども中岡は所謂有志にして正式の使命を帶びたるには非ざるが如く又象山自筆の左記紙片の存するにより久阪等の出發後翌三年早早福原乙之進の來訪せるをも推察せらるれども他には記錄の徵すべきものなし

福原乙之進

右信州松代に罷越山縣半藏久坂玄瑞一同佐久間修理へ相尋半

藏玄瑞申談三人之内兩人は直樣京都へ罷登一人は江戸へ罷歸
候樣被仰付候事
十二月二十七日
右黄紙に認む彼御國にて御入用紙と申紙の由

○十二月廿九日　學校督學　佐久間修理
先達而不屆有之蟄居申付置候處京都より被仰出厚御趣意も有之付此の度御免可申渡旨板倉周防守樣御差圖の旨町奉行淺野備前守樣より御達有之候其の段可被相心得候（藩日記）

○此の年長州の小倉健作（楫取元彦の弟）來つて象山を訪ふ（百瀬甚右衛門宛手簡）

○義之の十七帖を觀て頗る會する所あり之に跋す（文稿）

文久三癸亥年（二五二三）聚遠樓時代　五十三歳

○正月關白近衛忠熙罷め鷹司輔熙代り十二月又二條齊敬代る

○正月二日藩主幸教に謁見し藩政改革に關する意見を述べ三日城中に於て藩老等に對し其の無能を詰り五日更に登城して兵制改革を論ず

○二月上旬長井雅樂開國公武合體を謀りし故を以て藩より自殺を命ぜらる
○二月將軍家茂上洛す
○三月英艦橫濱に來り生麥事件につきて強硬談判を行ふ
○四月廿一日松代藩士兵を率ゐて松代を發し橫濱を警衛す
○五月十日を攘夷の期日と定め期に到り長州馬關に外艦を砲擊す
○六月將軍大阪より海路江戶に歸る
○七月英艦薩摩を砲擊す
○八月十八日公武合體派勢力を復し七卿長州に走る
○十月御親兵を解散す
○十一月幕府鎖港の使節を外國に發す

○三月十三日永田町留守居城川賢

（正月十日上書）

○十日自薦めて學政及兵政に當らんとするの書を藩主に上つる

○此の月四日藩土州侯の乞を謝絶するに決し象山をして其の返簡を稿せしめしが俄に變じて八日出發用意の内命となり更に有志者の引留運動となり遂に又沙汰止みとなれり

○正月十五日藩主より象山に與へし書下文あり『其方此度國政向に付中立候趣赤心之程熟覽に及候然る處尙深慮候處も有之に付中立の趣取用に難相成最も右一條にては不及再目通其段可相心得候以上』

○正月十九日藩老赤澤助之進より切紙を以て次の通達あり『此程申立之出府の上板倉周防守樣へ罷出申上候義御聞濟に付其段可被相心得候以上　正月十九日』と但し此は表面の取計にて内實は『修理より如何なる申出ありとも絕對に採用せざる樣に』と豫

之助鐵砲奉行武具奉行を兼ぬ
○三月十九日使役金兒忠兵衞武具奉行を兼ぬ
○三月十九日眞田志摩鎌原伊野右衞門蟄居を免ぜられ志摩は四月七日伊野右衞門は五月三日何れも召出され家老となる
○四月高野廣馬藩命を受け藤岡伊織小幡保之丞と共に京都に入り諸藩の形勢を視察して還る
○六月松代藩より御親兵六人を出す
○九月十三日高野廣馬備者兼侍講となる
○十月十五日山寺源大夫退役の上閉門を命ぜらる

め板倉家へ諒解を求め置きたるものなり

○正月中旬藩政と自己の立場とに關して板倉周防守に上らんとする陳情書を草せしが有志者の勸告に任せ其の儘にして止む（二月朔有志宛手簡）（上書）

○春來騎馬にて頻頻郊外に出づ馬上雜興の詩頗る多し二月十二日馬を沓野村に驅り地獄谷に遊び一泊して歸り又佐野村に遊び寒澤の山林に入り大筒臺木を檢分して藩へ獻納せしめし事あり

○三月十三日藩主男子なきを以て世嗣の設定に關し有志と連名の建白書あり（上書）

○同月廿一日藩主幸教江戸に發せんとす象山一書を呈し是迄の建白意見を採用せられんことを促す（上書）

○六月門人久保三郎（後成と改む）親軍に徵され京都に赴く象山文を作つてこれに贈る（贈久保平市文稿）

○七月正誼館恩田君遺像贊、書柳泉恩田君肖像後（文稿）を作る

○七月廿六日傳奏飛鳥井大納言より『信濃守家來佐久間修理義御用之儀も被爲在候に付御所表より被爲召候ても御請可申上哉否』と在京中の藩留守居役に内問あり八月十三日象山に內達せらる象山感激出發準備を整へて再命を待つ題伯顏像詩鈔の詩を作り以て自ら任ず已にして朝廷十八日の政變あり九月下旬に至り『最早御用筋無之に付被爲召間敷』との沙汰ありて中止となる

○此の時の徵命に關し門弟北澤正誠は其の編する所の象山先生行狀明治十三年北澤正誠編京都帝國大學藏中に述べて曰く『元治元年冬余西遊して廣島に至り其の藩士田中軍太郎に逢ふ軍太郎は慷慨氣節の士なり余に語つて曰く嘗て九州に遊び久留米を過ぎ牧某に逢ふ牧某曰く北國に伏龍あり象山佐久間氏と云ふ余が兄和泉之を朝に薦むと正誠又嘗て大和塔峯に登り竹林坊棘樹上人に逢ふ上人浮屠に隱ると雖憂國の士なり嘗て京師に上り公武合體の說を唱へ縉紳

家に出入す平岡圓四郎刺客に遭ふの後白刃身に迫ること數回去つて塔峯に隱る先生を朝に薦むる者は此の人なりと孰れか是なるを知らず錄して後考を俟つ」と

○九月七日藩主より飛鳥井家へ差出せる書面に「此度家來佐久間修理と申者不奉存寄御用の儀も御座候に付從御所可被爲召哉之蒙御沙汰誠に以當家之面目無此上難有仕合奉存候然處右之者學術才略は御座候得共積年召仕相試候所其爲人不安心之次第も御座候に付是迄重用も不仕差置候義に御座候且又遮て申上候は如何に御座候へ共此上彌蒙御召候樣罷成候節に至自然も家來之儘にて御用等被仰付候御樣子柄にも御座候得ば同人取扱方萬端に付外家來共一統之氣向に相拘り候次第も御座候やと心痛罷在候之間奉恐入候得共可罷成御義に御座候はば差上切に仕度前以て奉願候云云」とあり(眞田家文書)當時の藩情を察すべきなり

〇正月將軍上洛參内す
〇二月松平容保を軍事總裁とし松平春嶽を京都守護職とす
〇 月一橋慶喜禁

〇十月十日夫人順子に歸寧せしむ十五日赤坂邸に著す是より先正月一日上州家の招きに應すべく決せし時此の意ありしも其の事の中止と共に見合せ居り是に至りて決行せるなり（正月六日齋藤宛手簡）

〇十一月玉川一學に書を託し小林虎三郎に謝意を致すこれより先八月徵召の沙汰あるや象山子恪二郎の敎育を虎三郎に囑し其の諾を得て未だ遣さず已にして沙汰止となりしを以てなり

〇秋來蘭書につき西洋馭馬の術を練習す（當時調教を加へし馬は須坂丸山氏の所有にて翌年正月下旬迄象山の許に在り江月と名づく）

元治元甲子年（二五二四）聚遠樓時代、上洛時代　五十四歲

〇石黑忠悳男の象山を訪問せしは此の年春のことなり

〇二月四日　　無役　佐久間修理

其方不應思召義有之候に付逼塞被仰付之（藩日記）

〇門弟矢島源左衛門同小次郎の事に連坐せるなりといふ

裡守衛總督攝海防禦指揮となる
○四月廿日朝廷幕府に勅して横濱鎖港を促す
○四月廿四日七社に奉幣して攘夷の成功を祈る
○四月廿九日家茂參内して皇室推尊の十八條及供御料貢の事を奏す
○五月七日將軍下阪し繼いで海路江戸に還る
○六月五日一橋會津の兵池田屋に尊攘派の浪士を殺す
○六月廿五日中山忠能等連署して横濱鎖港を幕府に督促せられんことを請ふ
○六月廿七日長州浪士等嵯峨天龍寺に入る松平容保禁門を鎖して警備す
○二月六日藩老望月歸一郎退職
○三月本年七月より九月まで松代藩に禁裏南門の

○三月七日　　無役　佐久間修理

以別儀逼塞御免被仰付之。

御用之品も有之候間早々上京可申付旨從公儀御達有之候付上京被仰付候早速可有出立候

上京被仰付候付駕籠一挺馬一疋道中往來竝在京中上下仕切御賄被下置之。京著之節酒井雅樂頭樣水野和泉守樣有馬遠江守樣御旅宿へ可致御屆事。御呈書等出立之節可相渡候。供連之義若黨貳人槍具足櫃分持合羽籠草履取と可被相心得候（藩日記）

○出發に際し馬は藩より借らんとせしも叶はず竹村金吾の周旋により新に栗毛一頭を購入す馬具は洋裝を用ふ（四月十一日齋藤宛、五月四日竹村宛手簡）

○三月十七日夕七ッ時松代出發木曾路より大垣を經由し小原鐵心に面し久闊を敍し廿九日京都に著し六角通東洞院西入越前屋に宿す途中『此行好時節』の詩あり（詩鈔）

守衛を命ぜらる

○四月朔長谷川深美蟄居を免ぜられ藩の周旋方として京地に入り其の形勢を視察す

○六月十四日藩上本敎兵を率ゐて松代を發し二十八日京都に入る眞田志摩高野廣馬之に隨ふ

○六月二十九日松代藩別に又大參日の警備を命ぜらる言を請けて之を辭す

○四月三日

海陸御備向掛手附御雇被仰付御雇中御扶持方二十人御手當金十五兩

被下之

眞田信濃守家來 佐久間修理

象山此の命に接して心平ならず此等の小事は他人に命ずるも可なりと謂へり然るに數日を經て其の驥足を伸すの時始めて至れり

○四月十日始めて山階宮に謁し時務を言上し御庭前にて洋式の馭馬を台覽に供すこれより謁を得ること前後四回

○四月十二日一橋慶喜に謁し大に時務を論じ幕府從來の政策を難ず已にして慶喜登城の時刻となり論旨を盡す能はずして退く

○四月十四日一橋慶喜に上書す十二日の足らざる所を補ふなり此の日堤町に轉居す家は鴨川東岸丸田町橋向ふに在りて故星巖の居に近し

○四月十六日藩の知人に書を贈り此の際天下の爲に一策を獻じ若し用ひられざる時は直に退京するの意を述ぶ

佐久間修理

○四月十六日

右御用之品も有之候間當分在京可罷在候尤御雇中御手當之儀は四十人扶持に被成下最初被下候御手當二十人扶持竝金十五兩は上り候間其段可申渡旨和泉守殿被仰渡候依之申達　子四月

○右に添へたる川勝丹波守の翦紙『別紙申渡書壹通御達申候右に付拙者方へ御請さして御越に不及候且又御禮勤之義ハ御目付衆にて心得罷在候間何方へも御出に不及候此段申進候以上四月十六日』

○四月廿二日再び一橋慶喜に謁す

○四月廿三日山階宮に謁し始めて開港の說を陳ず

○四月廿七日杉浦兵庫頭に面會す其の節朝廷一二の大臣を說破すべき內命を受く

○此の月京師警衛の策を述べたる上書あり

○五月朔始めて將軍に謁す
○五月三日始めて中川宮に謁すこれより謁を得ること前後三回
○五月十六日木屋町三條上るへ轉居す鴨川に臨める二階建にて間數多く眺望絶佳煙雨樓と命名す象山最後の居宅なり
○六月十八日山階宮に謁し天下治平の策を獻ず
○六月二十日付山階宮より中川宮に送られたる書に『佐久間修理參り此節の國體に付尤神妙の事共申出候へ共中々私共の短才では何共難申候間貴王へ參上申上候樣申置候定めし參上可及言上候間可然御勘考希入候佐久間の一策御用に相成候はば一先世上も治り候哉と被存候』(孝明天皇紀)とあり
○六月廿五日昨日長藩兵士河内平潟より丹波路を經て嵯峨天龍寺へ入るとの風說あるを以て騎して往き實情を探索す
○六月廿七日夜馳せて大津に赴き此の日同地に著せる藩主幸教に獻策

する所ありしが藩論尊攘に決せるを以て行はれず又彦根藩の衞士と談ずる所あらんとせしが要領を得ず翌未明空しく歸京す

○六月廿九日仙臺藩醫羽生致矯（元甲日錄の筆者）來訪、談主上遷坐の事に及ぶ（孝明天皇紀引用元甲日錄）

○蓋し象山の此の見皆尊皇愛國の至誠より出でたるものにて一は我が邦都城の制備はらず一朝事ある時皇城の守り難きを憂へたると、一は攘夷論者を宮闕に近づかしむるは國家を危地に陷いる所以なるを信じたるとにより此等の見地よりして比較的安全なる地に主上の遷幸を仰ぎ奉らんとしたるものなり

○七月朔始めて二條關白に謁し時事を陳ず

○七月四日佛光寺に於て藩主幸敎に謁す

○七月六日再び二條關白に謁し大に時事を論ず

○七月七日羽生致矯來訪し刺客警戒の事を勸む象山恬然たり（元甲日錄）

○七月十日列藩有志の名を以て高辻錦小路等四五の公卿邸に投文あり主として六月廿七日夜の象山の行動に就き會津藩竝に象山を彈劾せるものなり

○七月十一日山階宮に伺候し歸途夕刻三條木屋町に於て害に遭ふ十三日京都花園妙心寺内大法院に葬る法號清光院仁啓守心居士

○刺客に關しては『訂正補修忠正公勤王事蹟』に次の如き記事あり『長州の方では何んでも幕府が鳳輦を彦根に移すさうであるが是は佐久間修理が計畫したのであるとの評判があつたから彼奴を斬り殺して了へといふ論が壯士の間に起つたそれで佐久間が西洋馬具の馬に乗つて木屋町の三條上る所を通行する時松浦虎太郎・河上彦齋（彦は玄の誤肥後の人）といふ二人の浪士が行つて斬り殺しました長谷川鐵之助（助は進の誤越後の人）の日記を見ると長谷川と大樂源太郎が佐久間を殺さうといふ志を起して久坂に相談をした處が久坂が言ふにはお前達は別に用ゐる所があるからソンナ事の役目はせ

なくても宜しい誰れか外の壯士に命ずるからと言つたといふことが書いてあります其内に今の松浦と河上とが行つて殺したものと見えます』又川上玄齋建碑事務所發行『河上玄齋』中に引用の松山守善記によれば『佐久間象山は幕府の密旨を受け慶喜、山階中川兩宮を始め二條嵯峨の諸公卿に向つて開國論と公武合體說を勸誘し朝廷の討幕計畫をも阻止したりとの聞えがあつたので先生川上は之をきき大に憤り長藩の久坂義助と謀り因州の前田伊右衞門を誘ひ白晝木屋町に於て暗殺し直に斬奸狀を祇園社前に榜示した』と

○四月十八日島津久光退京す發するに臨み其の臣高崎兵部正風をして細上布紙布縮各、壹端を象山に贈らしめし事同日白井宛の書簡に見えたり又北澤正誠著年譜によれば久光の將に國に就かんとするや兵部をして象山に說かしめて曰く卽今攘夷の說輦下に滿つ先生獨り之を奈何せんや若かず身を脫して藩に歸り時の來る

を待たんにはと先生肯せず云云

○大法院は藩祖眞田信之由緒の寺（信之の孫女長姫千種大納言の簾中となり信之卒去の際遺金一萬兩を遺らる長姫此の金の中二千兩を寄進し大法院を建立す）にて後幸貫にいたり特に歸依し院祿五十石を寄進せしことあり

○七月十四日　亡佐久間修理親類

佐久間修理此度被致切害候始末重々不應思召候に付御知行竝屋敷地共被召上之（藩日記）

明治三庚午年（二五三〇）　歿後七年

○二月廿二日　亡佐久間修理親類

山田兵衛罷出る

佐久間恪二郎去寅七月中尋之筋有之付御預申付置候處重御預中致脱走候條御藩法を不憚不屆至極之事候依之嚴重申付方有之處從朝廷被仰出之次第有之付出格之御寛典を以尋之義御流し脱走之罪被免候事

○二月廿三日　缺佐久間恪二郎

名代　和田芳太郎
同道　山田兵衛

亡父修理先年於京地被殺害家斷絶に及び候處先祖より數代奉仕之内には武藝出精之者も有之其上修理文武厚心懸殊に西洋砲術傳習未だ世間に稀なる時に當り獨り奮つて原書に就き研究し門弟共へ親切に致教授候より往々御用立候者共有之に至る其功勞不少々依之出格之寛典を以家名相建元高之内七拾石其適宜籾五拾貳俵壹斗貳升五合差遣給人中付候事（藩日記）

明治廿二己丑年（二五四九）　**歿後廿六年**

○二月十一日正四位を贈らる
○此の贈位は特に思召より出でたるものなりと云ふ（信濃教育會長佐藤寅太郎氏談）

昭和六辛未年（二五九一）　**歿後六十八年**

○五月十六日象山神社の創立内務大臣より許可せらる
○社格は縣社、社殿は出身地たる松代町に建設工事中なり

佐久間象山先生小傳

飯島忠夫

象山佐久間先生、姓は平氏、名は啓、字は子明、通稱は修理、象山は其の號なり。文化八年二月を以て、信濃國埴科郡松代城下なる浦町（今は有樂町と書す）の邸に生る。父を國善と曰ふ。通稱は一學、神溪と號す。母は荒井氏、名はまん。先生は其の長子なり。曾祖父名は國品、もと岩間氏、信濃長沼藩主佐久間氏の家臣なりしが、長沼沒落の後、享保年間始めて松代藩主眞田信弘に仕へ、母家の苗字なる佐久間氏に改めて、平士に列し、初は祿百石を食みしが、祖父國正の時、故ありて五兩五人扶持となり、先生の中年に至りて、更に舊祿百石に復せり。

父國善豪傑の資あり、初め徂徠の學を修め、後に朱子の學に入り、易に精しく、劍術に達し、經世實用を以て其の志と爲せり。先生幼にして俊敏、人に屈するを屑とせず。六歳にして始めて學に就き、十四歳にして詩文を作ることに志し、十五

歳にして既に思を易學に潛む。時の藩主眞田幸貫は白河藩主松平定信の第二子にして、文政六年入りて眞田幸專の後を嗣ぎ、英明絶倫、能く乃父の衣鉢を傳へ、文武を奬勵して士風を刷新し、躬ら勤儉を以て臣下を率ゐ、藩政の施設盡く其の面目を改めたり。文政八年、先生年十五歳にして、始めて藩主に謁す。國老鎌原貫忠、桐山と號し、博學にして漢文を善くし、著書多し。先生、十六歳の時、始めて桐山の門に入り、經書を學び、漢文を作り、又町田源左衞門に就きて和算を學ぶ。文政十一年十月國善隱居し、先生其の後を承く。

天保元年、先生年二十、此の一年の間に作る所の漢文百篇に達せり。藩主學業勉勵を賞して銀三枚を賜ふ。此の年十月、先生活文禪師を上田城外の居に訪ひ、之に就きて支那音及び琴を學ぶ。後屢〻馬に騎して之を訪ふ。活文はもと松代の人にして、嘗て長崎に遊學し、支那人と相交れり。冬、藩、更級郡力石村の農夫某を聘して、領内各地に心學の講話を行はしむ。先生國老恩田貫實に書を呈し、心學が多く佛教の旨を交へて儒學の眞意を誤るを論じ、之を止めんことを請ふ。先生が藩政に容喙せるは之を以て其の始と爲すべきか。後年其の著省諐錄の

中に、「余年二十以後乃知匹夫有繫一國」と言へるは、蓋し此等の事を指せるならん。先生初名は國忠、此の頃よりして啓と改めたるが如し。

天保二年三月、世子幸良の近習役として江戸の藩邸に勤務すべきことを命せらる。先生其の力を學業に專らにせんが爲に、之を固辭して許さる。三年三月、藩に於て諸士の劍術を檢閲するの事あり。父國善が提出せる門弟名簿、違式の點ありて改寫を命せられしに、先生固執して命を奉せず。先生之によりて閉門を命せられ、國善も亦謹愼を命せらる。八月國善病篤し。故を以て謹愼閉門皆赦さる。同月二十日國善歿す。年七十七。先生喪に居りて禮を盡し、四隣感動せりといふ。翌四年夏、易を讀むこと數十日、清人毛奇齡の春秋占筮書に本づきて一書を著し、名づけて春秋占筮書補正と曰ふ。此の書今亡佚せりと雖も、其の自序の文尚存す。之によりて此の頃に於ける先生の學問が未だ程朱を宗とするものにあらざるを察するに足れり。秋、長野豐山松代に聘せられ、國老河原綱德の宅に於て、孟子を講ず。先生其の浩然之氣の章に於ける「吾」「我」二字の區別を說くを傳聞して慊らず、長篇の漢文を草して之を論駁す。豐山留ること百餘日

にして松代を去れり。豐山は夙に天下に其の名を知られし老儒なり。しかも先生が雄偉の氣魄と、其の學問に於ける自信とは、既に此の老儒を眼中に置かざりしなり。先生が世俗に伍して武士の常務に其の終身を捧ぐるを屑とせず、專ら學業を大成して天下に雄飛せんとするの志は、確乎として此の間に樹立せられたりしを想ふべし。

天保四年十一月、藩に請うて江戸に遊學す。松代藩士が文學研究の爲に遊學を許されたるは先生より始まれり。先生江戸に至りて、林家の門に入り、學頭佐藤一齋に就きて學び、專ら力を作文に傾注す。一齋は王陽明の學を好み、先生は朱子の學に傾く、朱子は天地萬物の理を窮むるを目的とし、王陽明は自己の心中に固有する良知を發揮するを目的とす。先生の學は初め必ずしも朱子に從はず、其の朱子學を標榜せるは江戸遊學以後に始まると雖も、其の幼時より易を好み、天地萬物の理を窮むるを喜びたりしは、自ら朱子學に傾くべき素地を爲せりといふべし。是の故に先生は、經學に關しては一齋に從ふことを肯せざりしなり。先生が後年に及びて作れる「題一齋先生遺墨」の一篇は、よく先生の主張を

明にせるものなり。

余少時師事一齋先生。遲補門墻兩歳。頗承愛育。嘗聞作文之訣。余於言下釋然。自是如平地得路。了無凝滯。雖未足以追蹤於古作者。而陳意記事。受用有餘。實先生之賜也。但先生主張王學。不好窮理。余則專承當程朱之規。以窮天地萬物之理。爲斯學起手。漢人所未窮知。則以歐羅巴之說補之。是則所以不能與先生不異者也。因觀先生之書偶然及之。

此の文中「漢人所未窮知。則以歐羅巴之說補之。」とあるは、先生が後年洋學を始めたりし時の態度を明にせるものにして、一齋の塾に在りし時の事にはあらずと雖も、之によりても、先生の朱子學に從へる動機が自然界の理法の研究を重んずるにありしを察するを得べし。しかも先生が、此の留學中に於て、渡邊崋山と親交ありしに徵すれば、洋學に對する理解も殆ど既に此の間に成立したりしなるべし。

天保五年、梁川星巖京都より江戸に來りて神田阿玉ヶ池に卜居し、玉池吟社を起す。先生始めて星巖と交り、其の紹介によりて、麾下の士仁木三岳に就き、琴を

學ぶ。先生江戸に在ること二年にして、六年十二月、藩より御城附月並講釋助を命ぜられ、七年正月、歸藩す。先生が象山と號したるは此の歸藩の後なるが如し。先生の邸に近き所に丘陵あり。竹山と名づく。其の麓に明僧木庵の開基せる黄檗宗の寺あり。象山惠明寺と稱す。先生此の寺の山號に因りて直に山の名とし、取りて以て己が號となせり。これより以前には、初に養性齋と號し、次で滄浪と改め、其の間また清虚觀道士、觀水道者とも稱し、又象山の號に竝べては懷貞亭長とも稱したり。

先生歸藩の年天下の大饑饉に會し、米價暴騰して人民大に艱む。先生賑救の策を建言し、更に藩の用達八田嘉右衛門に勸めて、藩命を受けて賑恤を行はしむ。其の一日給する所二千餘人に及び、窮民歡呼せり。翌天保八年二月、大鹽平八郎窮民賑恤の事に因りて亂を大阪に起す。平八郎は陽明學者の巨擘なり。先生是に於て大に感ずる所あり。四月、一齋塾に在りし時の同門の先輩にして共に朱子學を奉じたりし山城淀藩の儒臣本多伯楙に書を與へて、大鹽が亂は畢竟自己の心のみを重しとして天地萬物の窮理を輕んずる陽明學の弊害に外ならざ

るを痛論し、天下の學術を正して程朱の學に統一せしめざるべからざるを主張せり。五月、學政意見書を藩主に上り、大に學政を振興して程朱の正學に本づきて藩の子弟を敎育し、有爲の人材を養成すべきを論ぜしが、用ひられず。

天保九年閏四月、藩の内用を帶びて越後の各地を歴遊し、五月末日松代に歸る。先生學政振興の容易に行はれず、且つ天下の學術を正さんとするには一藩の中に跼蹐すべきにあらざるを以て、前年以來屢〻再び江戸に遊學せんことを請ひ、終に此の年十一月に至りて其の許可を得、月次講釋を免ぜらる。十一月十一日、通稱啓之助を改めて修理とす。又此の頃に於て字子迪を改めて子明となししが、後數年間はなほ兩者を混用せり。此の月、琴録十篇三冊を撰す。先生は前に活文、三層を師として琴を學び、今又此の著書あり。先生が琴に關する趣味と造詣とは頗る大なるものありしが如し。

天保十年先生年二十九、宿志始めて達し、二月十二日、再び江戸遊學の途に上る。上田に滯在すること三日、活文を訪ひ、又諸友と正學復興を談ず。十九日江戸に著す。此の時に作られたる東遊紀行と題する長篇の詩は以て先生が正學復興

の抱負を窺ふに足るべし。先生江戸に抵り、神田の阿玉ヶ池に塾を開きて生徒に教授し、名づけて象山書院といふ。傍に五柳樹あるによつて又五柳精舍と稱す。其の居は梁川星巖と相隣す。先生程朱の正學を復興するを以て獨り自ら任じ、眼中殆ど江戸の儒者無し。象山書院學約の中に曰く、

凡在此中者。以聖賢之學爲志。除去世俗浮華之習。讀書務以小學爲先。次四書。次五經。以及周程張邵朱諸子之書。務在循序致精。毋得鹵莽躐等。非理無益之書。不許妄看。

立志卑陋。以聖賢之事爲不可爲。舍其良心。甘自暴自棄。唯以工文詞博記誦爲能。存心欺妄。不知爲己之學。好爲大言。互相標榜。修飾外貌。專務虛名。營營一生。枉爲小人者。世間比比有之。諸生可以自訟。

と。蓋し先生は詩文に巧なるを貴ばず、博覽を重んぜず、只管程朱の學によりて道德を磨礪するを以て主となす。又特に邵康節の學を貴び、天地萬物の理を窮むるには、先づ此の學より入るべしとなし、邵康節先生文集を編纂し、自ら序を作る。其の中に曰く、

余未見味於物理而周於人倫日用者也。

と。其の周張程朱の四子に加ふるに、邵子を以てしたるは之が爲なり。邵子の學は易に本づき、朱子の易學は邵子の説を傳ふ。而して當時の學者特に邵子を説く者なし。之によりて先生の學風が當時の儒流間に一種の異彩を放てるものなるを知るべし。此の年闇齋學派の老儒若狹の小濱藩の人山口菅山と靈魂の有無に關する論爭を爲す。先生は之を有りとし、菅山は之を無しとす。論文前後三篇あり。蓋し先生自ら持すること極めて高く、從來の程朱の學に更に一新生面を開きて、天下の學風を一變せんことを期せしなり。先生が「三十以後。乃知有繫天下。」といへるは、正に之を指せり。

天保十二年(一に曰く十一年)夏、富士山を望むの賦を作り、望岳賦と題し、竊に其の抱負を寓す。一齋之を評して、古今人の望岳の諸作中、最も富贍にして力量ある者となせり。此の年、藩より四書の音訓を正して出版することを命ぜられ、其の開定府を命ぜらる。定府とは江戸に永住して藩邸に勤務することなり。六月十二日、藩主眞田幸貫幕府の老中となる。九月、先生藩邸の學問所頭取を命ぜ

らる。先生が藩命によりて著せる書を四書經註旁釋といふ。今は僅に大學の部を存するのみ、他は佚して傳はらず。十月、幕府の新政が、武事の奬勵に傾きて、文學を疎外するを慨し、藩主に上書し、文武偏廢すべからざるを論ず。

松代藩主眞田幸貫が徳川齊昭の推擧によりて大老水野忠邦の下に老中となり、幕政の一新に盡力せし時は、恰も東洋の形勢の一轉せんとする重大時機に會せり。何ぞや、所謂鴉片戰爭是なり。天保十一年、支那が鴉片の輸入禁止の事によりて英國と戰端を開きし以來、支那は頻に利を失ひ、英國の軍艦は終に揚子江を溯りて、南京を陷れんとするに至れり。これ東洋の大國支那が歐洲諸國に脅かされたる初にして、此の戰爭は天保十三年に至りて終を告げ、其の結果は香港の割讓となり、上海、廈門、福州、寧波の開港となり、東洋に於ける英國の勢力は茲に始めて鞏固なる基礎を樹立するに至れるなり。されば我日本も亦新に大なる脅威を感ぜざる能はず。幸貫は恰もかかる時勢に際して特に海防事務を管するの任に當り、乃ち先生を擢んでて顧問となし、旨を諭して、歐洲諸國の事情を研究し、之に本づきて外國防禦の策を講ぜしむ。鴉片戰爭は東洋の形勢を一轉

せしむると共に、また先生の生涯に於ける一大轉囘の機會を爲せり。然も幸貫が老中として海防事務を管することなかりしならば、先生の一生の事業も亦果して如何なる形を取りしや知るべからず。先生が後年に於て我が師は眞田幸貫公なりと言へるは正に此の間の消息を示すものなり。先生が三十以後天下を以て己が任となすの抱負は此の際に至りて益其の大を加へたるを想ふべし。

時に伊豆韮山の代官江川英龍（坦庵）幕府の命によりて江戸に來り、高島流の砲術を傳ふ。十三年九月七日、先生其の門に入りて學ぶ。次で同藩の士金兒伯溫等四十人もまた藩命によりて其の門に入れり。十一月、海防八策を詳論して藩主に上る。八策とは即ち次に記すがごとし。

其一、諸國海岸要害之所、嚴重に砲臺を築き、平常大砲を備へ置き、緩急の事に應じ候樣仕度候事。

其二、阿蘭陀交易に銅を被差遣候事、暫く御停止に相成、右の銅を以て、西洋製に倣ひ、數百千門の大砲を鑄立、諸方に御分配有之度候事。

其三、西洋の製に倣ひ、堅固の大船を作り、江戸御廻米に難破船無之樣仕度候

事。

其四、海運御取締の義、御人選を以被仰付、異國人と通商は勿論、海上萬端の奸猾、嚴敷御糾し有御座度候事。

其五、洋製に倣ひ、船艦を造り、專ら水軍の驅引を習はせ申度候事。

其六、邊鄙の浦々里々に至り候迄、學校を興し、敎化を盛に仕、愚夫愚婦迄も、忠孝節義を辨へ候樣仕度候事。

其七、御賞罰彌明に、御威恩益顯れ、民心愈固結仕候樣仕度候事。

其八、貢士の法起し申度候事。

就中、尤も急務とする所は、大砲を鑄造すること、軍艦を造り海軍を習ふことゝの二事に在るを痛論せり。　此の如き時代に於て、此の如き建言を爲せるは、天下廣しと雖も、實に先生を以て其の嚆矢と爲さゞるべからず。　先生此の頃上田藩の友人加藤氷谷に送りたる書に、

談兵も講學家の一端にて、本より儒術中の事に御座候。　迚も入りて相となり出でて將となるの規模無之候ては、正學も畢竟無用に屬し申候。

と言へり。先生は、時務を論じ兵法を談ずる事を以て、其の積年主張せる正學と矛盾するものにあらざるを辨明せるなり。先生の事を爲すや、必ず其の理由を辨す。西洋の事情を研究するは、先生に取りて、決して朱子學と相容れざるものにはあらざりしなり。十二月二十八日、先生學問所頭取を辭し、翌十四年正月韮山に赴き、江川英龍に就きて西洋砲術を學び、二月に至り免許を得て江戸に歸る。又韮山滯在中藩主の内命によりて伊豆の沿岸を視察せり。四月母の病篤しと聞き、急遽松代に赴く。母已に頽齡六十九歳なりしも、先生到りし時、幸にして癒えたり。先生滯在一月にして再び江戸に歸る。

此の年十月七日、郡中横目役を命ぜられ、十二月二十日、舊祿百石に復せらる。然も先生藩に歸るを好まず、洋學を興して藩國の物產を開發するの必要を論じ、尙之が爲に自ら江戸に留りて研究する所あらんとし、是に於て、十二月松代に赴き、當路者の承諾を得て、直ちに復た江戸に歸る。翌弘化元年春、藩に請ひて和蘭の百科全書ショメール十六冊を購入す。代金四十兩なり。ショメールの中、天文、博物、物理、化學、生理、醫學、食物、工藝等に關する部分は文化八年以來天保弘化の

頃までに亙つて幕府の飜譯局に於て連續して飜譯せられ、厚生新編と名づけられたるものなり。此の年五月十三日眞田幸貫老中を辭す。六月二十一日、蘭學者坪井信道の塾生たりし黑川良庵を招きて自宅に寓居せしめ、漢學と蘭學との交換敎授を始む。良庵は加賀金澤の人にして、蘭學に精通せり。此の日より口授を受けたるは、カステレーンの著書中にて土壤の性質を說ける部分なり。此の頃の先生の詩に曰く、

壯歲貴苦學。博涉宜無常。旁執西洋書。日日課數章。太易本無體。至神豈有方。新舊互相發。斯理生輝光。心解眞決河。沛然誰禦防。惜無宋明賢。與共此學場。

漢土與歐羅。於我俱殊域。皇國崇神敎。取善自補翊。彼美固可參。其瑕何須匿。王道無偏黨。平平歸有極。咄哉陋儒子。無乃懷大惑。

これ蓋し後年先生が佐藤一齋の遺墨に題したる文の中に、「漢人所未窮知。則以歐羅巴之說補之。」と言へるものと、其の意相同じ。先生が學問の規模の廣大なるや、宇宙間の眞理を說くものをば、支那と西洋とに論なく、盡く採りて之を我が國に用ふべしと爲して憚らず。先生が如何に天地萬物の眞理を窮むるに熱心なり

しかを見るべし。先生の議論よりすれば、西洋の科學も亦朱子學と矛盾するものにはあらざりしなり。先生が幼時より俊敏にして學を好み、人に屈するを屑とせざりし氣質は、終に先生をして洋學に進ましむるに至れり。此の年秋冬の交、先生松代に赴き、郡中横目役として下高井郡沓野村に出張し、其の傍、沓野山中の調査を行ひて興利に關する意見書を呈し、十一月十三日に至り、佐野、湯田中、沓野三村利用掛を命ぜられ、十二月三日復た江戸に歸る。

十二月九日より復た黑川良庵に就きて和蘭の文法書を學ぶ。これより刻苦精勵すること六十餘日、弘化二年二月中旬に至りて文法書兩卷の業を卒ふ。先生年正に三十五歳なり。此の月良庵歸鄉せしを以て、それより專ら坪井信道、杉田成卿に就きて質疑す。三月チールケの兵學の書を得て之を讀み、六月またカルテンの砲術の書天保十四年に成れる杉田成卿等の譯ありて、海上砲術全書と稱す。安政元年越前大野藩より出版せらる。を得て之を讀む。是によりて江川坦庵等が從來傳ふる所の甚だ淺薄なるを感じ、更に幕臣下曾根金三郎、三河の田原藩士村上貞平等に就きて砲術を問ひしが滿足を得ず、益〻原書に就きて研究す

るの必要を痛感したり。此の頃又硝子の製作に沒頭し、藩地より礦石を取寄せて之を試みたり。先生が西洋醫術を研究したるもまた此の間に始まりしが如し。夏梁川星巖江戸を去りて京都に歸るを以て、序を作りて之を送る。序中に記する所によれば、星巖の去りたるは、一朝外國と事起りて、敵艦房相の海上を扼さば、東海の海運杜絕して、江戸の住民忽ち饑餓に陷らんことを恐れたるなりといふ。亦以て時代の風氣を察すべし。

此の年先生屢〻歸藩を迫らるれども應ぜず、努めて洋書を涉獵し、翌年閏五月に至りて漸く歸る。浦町の舊宅住居に勝へざるの故を以て請ふ所あり、藩が他藩の使者の爲に備へたる旅舍、「御使者屋」と稱するものを借りて之に居る。先生養豚の利を察し、此の時江戸より數頭を携へ歸りて之を飼ふ。又人參、甘草等の栽培を奬勵し、石灰を燒き、硝石を製し、葡萄酒を釀造す。

此の年正月、藩、砲學局を開き、佐久間國達を鐵砲奉行に任ず。國達は田原藩士村上貞平に砲術を學べる人なり。金兒伯溫(忠兵衞)は天保十三年韮山に赴きて江川に學びし藩士中の傑出者にして、此の年閏五月より高島流砲術の門戸を張

り、同藩の士に教ふ。　翌四年三月二十四日、信濃の地大に震ひ、松代藩領内の災害甚大にして、これより藩の財政頗る紊る。　六月藩五十斤砲を鑄るの議あり。　先生其の不可を論じ、ペウセルの言を引きて、山地に用ふるには小砲の卻つて有利なるを建言す。　是よりして先生頻に江川流を駁し、金兒と論爭す。　十月山寺信龍(源大夫、常山と號す)鐵砲奉行助となる。　信龍は先生に長ずること三歲、學を好み、文を善くし、吏才に長じ、素より先生と親交あり。　十二月、先生郡中横目役を免ぜらる。　先生此の年始めて顏眞卿の筆蹟を學び、晩年に至るまで之を究め、造詣すること頗る大なり。

翌嘉永元年、先生前年の末より藩命を奉じ、ペウセルの書に據り、且つブランドトの書を參考して、三斤地砲(レンドカノン)一門、十二拇(ドイム)人砲(ヒウイツスル)二門、十三拇天砲(モルチール)三門を鑄て、松代の西郊道島に於て屢〻之を試射す。　これ邦人が洋式に照して砲を鑄るの初なり。先生此の時より始めて砲術を子弟に教授す。

五月、同藩の士、村上英俊に勸めて、佛文を讀ましむ。　是より先、英俊蘭學に從事すること久しかりしが、此の年始めて化學に志し、先生を介して川本幸民が藏す

るところのベルセリッツス化學書を借らんとす。先生曰く、余近日吾が公に請ひて佛文化學書數種を購へり、子盍ぞ之を讀まざると。英俊感奮し、佛蘭對譯辭書を用ひて、刻苦して之を讀む。これ邦人が佛文を讀むの初なり。先生が後進を奬勵すること概ね此の如し。英俊終に我が國佛蘭西學の泰斗となれり。

弘化元年以來、先生佐野、湯田中、沓野三村利用掛となり、屢〻其の地に赴き、西洋の學術を應用して之を開發せんとす。此の年六月九日、また沓野に赴き、岩菅山に登り、魚野川の上流に於て銀亞鉛等の諸礦石を發見す。七月七日、松代に歸り、開礦のことを建言す。八月十日、鑛山採掘の事其の他に關する誤解によりて、沓野の民蜂起す。先生往きて之を鎭す。然るに開礦のこともまた行はれず。

此の年十一月、先生藩の有司に說くに、蘭人ドーフが長崎の通詞と協力して和譯せるハルマの辭書を增補訂正して、之を增訂和蘭語彙と名づけ、藩の藏版となして廣く之を頒布し、從來寫本を以て行はれたる不便を救ひ、且つ之によりて洋學の進步に貢獻せんことを以てす。翌二年二月、更に國老に其の意を陳せしが、採用せられず。五月、松代城南開善寺馬場に於て三斤人砲（ホウイツスル）を演ず。此の時先生

が砲術の門弟たりしもの十四人あり。皆同藩の士なり。此の月、先生更に藩主に上言し、自ら增訂和蘭語彙を出版することとして之に要する資金を貸與せられんことを歎願す。七月、許可を得、百石の知行を抵當として、藩財一千二百兩を借り、十月、更に江戸に赴き、數多の辭書を購入して、增訂に從事し、其の第一卷を淨寫して、之を幕府に提出し、出版の許可を請ふ。此の間、又力を盡して砲術兵學戰法築城等に關する蘭書を購ふ。中に千八百十五年の步兵調練書あり。先生其の式に依り、之を西洋眞傳と稱し、藩の子弟に教授す。此の時先生深川の藩邸に於て試みに砲臺を築く。此の時よりして諸藩の士往往來り學ぶものあり。紀伊田邊藩の柏木義武は其の著しきものなり。十二月、又歸藩す。此の年、牛痘を種うるの術始めて傳來す。先生鍋島侯より得たる痘種を携へ歸り、其の術を知人の間に施す。信州に於て種痘を行へるは、蓋し先生を以て嚆矢となすべし。

嘉永三年、先生四十歲。二月、松代城南花水澤に於て、天砲(モルチール)を演じ、三月、又江戸に出で、老中阿部正弘に上書し、早く辭書出版の許可を得んことを請ふ。然るに、四月に至り、出版終に許可せられず。前年以來、幕府に於ては、蘭學抑壓の政策を行

ひたれば、此の結果を招けることは、蓋し免れ難き運命なりしならん。先生天下の爲に早く西洋の學術を普及せしめんとし、自ら刻苦して蘭學を修めてより、玆に七年となれり。而して事屢〻其の志と違ひ、懊惱禁ずる能はず。不許可の命ありしより、同月三日、江戸を去りて鎌倉に遊び、沿道の砲臺を視察して、其の實用に適せざるを慨し、十二日、邊防意見を書して、幕府に上らんとせしが、藩主其の忌諱に觸れんことを恐れて、命じて之を止めしむ。四月二十七日、側繪師三村養實(晴山と號す)を介して、竊に衷情を藩主に訴へ、辭書出版費を借るが爲に抵當とした る領地を提供して、藩士の籍を離脫し、砲術等によりて其の身を立て、若し諸侯より招聘せらるることあらば、自由に之に應ずるの許諾を得んとす。蓋し此の時、先生天下の士を以て自ら任じ、一藩の中に跼蹐するを屑とせず、事に激して往往其の慷慨の氣を露はすなり。幸貫、先生の才を憐みて、深く之を咎めず、又其の請を許さずして、暫く藩士としての勤務に服することなく、江戸に居住して砲學の門戸を張ることを默認す。後年幸貫の歿せし時、先生の記したる文(先公手澤太宰府都府樓瓦硯記)の中に、

先公嘗謂三村養實曰、修理雖多疵瑕、亦英雄也、臣聞之、感激流涕、以謂其多疵瑕者臣之實也、而英雄之稱、臣何敢當、然以先公之明、而目以英雄、其爲光榮、果如何哉、固亦知千百其身、尚不足以報其萬一也、

と言へるは、恐らくは此の時の事に關するならん。 先生が畢生の事業は實に賢君孝貫の知遇に本づけるものと謂ふべきなり。

先生和蘭語彙出版の頓挫に遭ひて、六月一たび歸藩し、七月五日、復た江戸に出でて、西洋眞傳砲學の門戸を張る。 幕臣勝安芳、伊豫大洲藩士武田斐三郎、會津藩士山本覺馬、其の他諸藩の士陸續として其の門に入る。 八月三日、舊師下曾根金三郎の囑に應じ、其の門下に熕砲使用法を授けんが爲に、門人數人を伴ひて浦賀に赴く。 是より先、六月歸藩の際、友人宮下圭鈴に書して贈りたる詩に曰く、

春陵（周惇頤のこと）說太極。五材誤其圖。發源（朱熹のこと）對屈問。暗中手相摸。西儒尚實測。早已破虛誣。茫茫覆載間。萬理轉煥乎。我亦同此地。何爲僻一隅。宜會東西言。以作一家書。學弊入骨髓。聞見養空疎。世間少人傑。誰從余所如。

と。これ卽ち先生がゾンメルの宇宙記を讀みて作れる十首中の一なり。 先生

が東西兩洋の學理を綜合して一家の學說を建設せんとするの志は、蓋し此の頃に於て定められたるなり。先生此の年正に四十歲、先生が「四十以後乃知レ有レ繫二五世界一」と言へるは、玆に始まるを知るべきなり。冬十二月、先生松代に還る。此の時雜感六首あり、亦先生當年の抱負の在る所を知るべし。

海水環回祥氣浮。龍蟠虎踞帝王州。何時慴二服西人志一。貢二獻象駝一交二馬牛一。

自レ非二心服一難レ防レ奸。英吉佛朗原傲頑。苦憶漢家王佐相。當年籌策盡二征蠻一。

東邊拓レ地三千里。曾效二荷蘭(オランダ)一設二學科一。吾邦空說英雄跡。百歲無三人似二伯多(ペートル)一。

火輪截レ浪疾二飛鷹一。彼土近來多二異能一。此去浹旬到二龍動一。古人今起應レ疑レ冰。

生來曾慕萬夫雄。慷慨時時氣吐レ虹。吾手非レ無二一尺箠一。奈何爲レ國答二羌戎一。

聖賢有レ作順二風氣一。不三敢後レ天存二結繩一。底事世間村學究。東方日出尚燃レ燈。

嘉永四年正月、先生が砲學の名聲漸く天下に高きを以て、藩主特に江戶住居の許可を與ふ。二月より三月に亙りて、五十斤石衝天砲(ボンテン・ステーン・モルチール)を屢〻松代城西の生萱村に演す。他藩の門人の從ひ來るもの數人あり。當時、此の種の大砲は、松代藩の他には、浦賀の平根山砲臺に一門ありしのみ。先生の得意想ふべきなり。四月上

句、母を伴ひて江戸に移る。五月、三村利用掛を免せらる。此の月木挽町五丁目に卜居す。此の年長岡藩士小林虎三郎、長州藩士吉田寅次郎(松陰)等入門す。先生の門生を敎ふるや、必ず經學と砲術とを兼修せしむ。松陰の言によれば、先生は松陰に對して論語を熟讀すべきことを勸めたりといふ。先生が東西の言を會して一家の書を成さんとするの志は此の敎授法の上にも顯れたり。先生の言に、「東洋道德西洋藝術。精粗不遺。表裏兼該。因以澤民物。報國恩。」とあるは即ち是なり。先生が東西の學術を兼修するは單に之を竝立せしめんとするものにあらず、蓋し少年の時より深く造詣せる易の理論と後に修めたる西洋の科學の理論とを融合して、之を一に歸せしめんとするにあり。東洋道德とは即ち主として易經を指し、西洋藝術とは即ち科學を指せり。當時東西の學術に對して此の如き卓拔なる識見を有せるものは先生を措きて他に其の人有るを見ず。此の頃よりして先生始めて大星の別名を用ふ。此の年十月に至り、砲學の理論を易の睽卦に融合して、礮卦一篇を著す。先生が東西の言を會するの志は玆に始めて其の緒を開けり。

是より先、六月、藩主眞田幸貫病歿す。年六十二。先生命を受けて、墓誌銘を撰す。十二月、勝安芳の妹順子を娶る。

此の年夏和蘭國王よりの密告書幕府に達す。曰く、明年米國必ず軍艦を率ゐ來りて開港を請ふべく、之に應ぜずんば必ず戰爭を免れざるべしと。九月、川路聖謨幕府の海防掛となる。先生之と親交あること久し。乃ち二年四月の邊防意見を出して之に示す。聖謨之を讀みて愕然たりしが、未だ甚しくは之を信ぜす。翌年米艦來航の事あるに及び、始めて其の先見に服せりといふ。先生前年以來諸藩の依囑を受けて大砲を鑄、又砲架を製す。十二月、其の著礮學圖編の刻成る。此の年又スチールチースの陸上砲術書を讀み、之によりて六斤地砲（ポンドカノン）十二拇人砲（ドイムホウイッスル）を鑄、六年春之を大森に演ず。邦人の山砲を鑄るは此に始まれり。

先生の礮卦を著すや、幕府の昌平黌に提出して刊行の許可を得んとせしが、許されず。先生の新學は蓋し偏狹なる儒者の忌む所となりしなり。先生が門人小林虎三郎の歸郷に際して之に與へたる文は、此の頃に於ける先生の鬱勃たる不平を寓せるものなるべし。

宇宙間實理無二。斯理所在。天地不能異此。鬼神不能異此。百世聖人不能異此。近年西洋所發明許多學術。要皆實理。祇足以資吾聖學。而世之儒者。皆凡夫庸人。不知窮理。視爲別物。不曾不好。動比之寇讐。宜乎彼之所知。莫之知。彼之所能。莫之能。蒙蔽深固。永守孩童之見。此輩惟可哀愍。不足以爲商較。大丈夫當集大塊所有之學以立大塊所無之言。小林炳文從予游。而說吾言者也。於其歸省。書以贈之。

先生が他學を以て江戸に鳴りしより、未だ二年ならざるに、藩の當路者の交迭あり、眞田貫道、長谷川昭道等新に政に任じ、藩政の方針亦改まりて、興利の事業を停止し、嚴重なる儉約令を布くに會し、次ぎて先生に對して特に眷顧を垂れたる藩主幸貫病歿し、嫡孫幸教封を襲ぎしも、年尚少にして世情に疎く、先生と藩との間漸く疎隔を生ず。嘉永六年五月、藩城火を失し、藩益多事なり。此の月先生詩を作りて曰く、

火輪横恣轉江流。非是君臣愒日秋。忠義要張神國武。功名欲伐虜人謀。東圻起堵曾陳策。南島除船盍有猷。兵事未閑巧之久。何人速解蹙眉憂。

と。先生屢伐謀の語を用ふ。これ孫子が「上兵伐謀」と言へるに本づく。伐謀と

は敵の謀とする所を取りて我が謀とし敵をして我が隙に乘ずること能はざらしむるものにして、先生は西人の謀が科學の應用にあるを認め、我が國もまた早く科學を用ひて國力を强盛ならしむべしと主張するなり。既にして六月三日に及び、米國水師提督ペルリ、軍艦四艘を率ゐて浦賀に來る。幕府の狼狽其の極に達す。先生報を聞き、四日拂曉、直に藩邸に至りて藩主に建議し、視察の命を受けて浦賀に赴き、六日夜、江戶に歸還し、是より藩邸に在りて武備を整へ、九日、藩の軍議役となり、御殿山警備志願の事に奔走し、併せて藩地より出兵せしむるの事を盡す。此の日、ペルリ浦賀に於て國書を提出し、明年の再來を約して、十二日退去せり。十八日、藩地の當路者鎌原貫唯、長谷川昭道等江戶に來り、先生の擧を以て徒に藩を騷擾せしめたるものとなし、終に藩主に上言し、先生の軍議役を免じ、七月五日、江戶住居の許可を取消し、直に藩地に歸らしむ。

米艦の來りしより、德川齊昭、新に幕政に參し、閣老阿部正弘、勘定奉行川路聖謨等と志を合せて、海防の充實に努む。先生が此の時勢に當つて故山に退かんとするは、幕府の惜む所なり。阿部閣老乃ち藩主に交涉して、先生を江戶に留まら

しむ。　先生是に於て川路聖謨を介して阿部閣老に上書し、急務十條を陳ず。　其の一は、人を外國に派遣して軍艦を購ひ、倂せて形勢を探知せしむること、其の二は、新に江戸城下の東方に砲臺二個所を築き、且つ相房二州の砲臺を改正すること、其の三は、志氣の精鋭にして筋骨の強壯なる者を選び、大砲隊を編成すること、其の四は、慶安年間所定の軍制を改正すること、其の五は、新に砲政を定め、廣く硝田を開くこと、其の六は、將材を選ぶべきこと、其の七は、其の短を捨てて其の長を用ひ、其の名に循はずして其の實を講ずること、其の八は、紀綱を正し、志氣を振ふこと、其の九は、大小銃を演習して年中間斷なからしむること、其の十は、諸藩海防の兵士を編成するに聯事の法を以てすべきこと、是なり。　しかも其の言用ひられず。　九月、露艦長崎に來る。　先生、益外國の事情を探索するの急務を痛感し、竊に門人吉田松陰に勸め、漂流に託して外國に赴かしむ。　松陰慨然として志を決す。　先生之を察し、詩を作りて其の行を送る。

之子有靈骨。久厭蹩躠羣。振レ衣萬里道。心事未レ語レ人。雖二則未一レ語レ人。忖度或有レ因。送レ行出二郭門一。孤鶴橫二秋旻一。環海何茫茫。五洲自成レ鄰。周流究二形勢一。一見超二百聞一。智者貴レ投

機。歸來須及辰。不立非常功。身後誰能賓。

松陰長崎に赴けば、露艦既に去りて、其の志を果すを得ざりき。

此の時に當り、藩中兩黨を生じて漸く相軋る。而して先生も亦此の事に關與す。十月、藩に當路者の交迭あり。恩田貫實、山寺常山等復た政に任ず。十一月先生藩の學校督學となる。先生が藩に於ける多年の鬱屈是に至りて始めて伸ぶ。

翌安政元年先生年四十四、これを先生の一生に於ける最も重大なる時期となす。此の年正月十五日、ペルリ再び軍艦を率ゐて來り、横濱に泊す。松代小倉の二藩、横濱警衛の命を蒙る。先生藩の軍議役となり、國老望月貫恕と共に、藩兵を督して横濱に赴く。三月三日、米國との間に和親條約締結せられ、次で此の月下旬に及びて、米艦退去するを以て復び江戸に歸れり。

先生の横濱に在るや、幕府の外國に對する態度の卑屈なるを慨歎す。既にして下田開港の議略ぼ決すと聞きて、以爲へらく、下田は僻遠にして、且つ天城日金の險あるを以て、一旦緩急あるに當りては、直に之に應じ難し、寧ろ横濱を開くの

上策なるに如かずと、乃ち二月二十一日、直に江戸に馳せて、之を幕府の當路者に說き、又水戸侯を動かさんとして、其の夜藤田東湖を訪ふ。東湖は先生が最初の遊學の時に既に友誼を結びし人にして、また先生の說を贊成したれども、事既に決するの後なるを以て、如何ともすべからず。門人小林虎三郎もまた先生の指示を受けて、其の藩主長岡侯に上書せしが、卻つて之によりて罪を得て國に歸れり。

米艦の横濱を去りて下田に泊するに當り、三月二十七日の夜、吉田松陰前年よりの渡航の志を遂げんとして、竊に米艦に投ぜんとせしが、ペルリ其の國禁を破るの舉なるを以て應せず、之を幕吏に付す。松陰が此の時米人に贈りたる漢文の書簡は先生の添刪を經たるものなりしを以て、先生も亦之によりて罪を得て、四月六日、江戸傳馬町の獄に繫がる。先生が憂國の至情逆る所、二人の高弟と共に、卻つて此の蹉跌を見るに至れり。歎ずるに勝ふべけんや。

先生獄に在ること半歲、外國の事情を探索するが國家の急務なる所以を論辯して、容易に其の罪に服せず、其の間に成る所の詩歌文章は後(此の年冬)之を輯め

て一卷となし、名づけて省諐錄といふ。先生が人物と識見と純情とを觀るべきもの、此の書を以て第一とす。九月十八日判決あり、藩地に蟄居することを命ぜらる。松陰、先生と倶に傳馬町の獄に繫がれ、此の日亦同樣の處分を受く。先生直に松代に護送せられ、十月三日歸著す。次ぎて母氏も亦歸り、重病に臥すこと一月にして漸く癒ゆ。母氏此の時年正に八十、先生の心痛果して如何ばかりなりしならん。

先生の松代に歸るや、故宅既に荒廢するを以て、國老望月貫恕の別墅を借りて之に住し、自ら之に扁して聚遠樓と曰ふ。樓は城南の御安町に在り。境幽にして庭廣く、四時の眺望倶に佳なり。先生之を樂しみ、纔に其の悶を遣る。然も慷慨の氣憂國の念は未だ嘗て少しも挫けざるなり。十一月、藩に品川第六砲臺警衞の命下る。此の砲臺は嘉永六年に於て江川英龍の築けるものなり。先生の宿論は其の築造法を以て海岸防禦の法式に叶はざるものとなせり。仍て藩老恩田貫實に書を送りて、本年四月川路聖謨に提出したる品川砲臺に關する意見書、前年秋、川路の手を經て阿部閣老に提出したる急務十事、及び本年獄中より上

書せんとしたる腹稿を添へ、品川第六砲臺の警衛を陸地の警衛に交換せんことを請ふの策を勸む。貫實終に之を用ひざりき。

安政二年は先生蟄居の第二年なり。春、去年十二月二十三日に下されたる海内寺院の梵鐘佛具を鎔して大砲を鑄るべしとの詔勅を拜し、先生が海防八策の一の始めて採用せられたるを悦び、感激禁せず、左の詩を作る。

一跌歸休深鎖門。不那憂國寸心存。但欣天詔在今日。有契當年狂妄言。

朝家預備未嚴森。孤憤空嗟歲月侵。若使先公久其位。不須今日勞宸襟。

八月、吉田松陰遂に其の著幽囚錄を送りて閱を乞ふ。これ先生と別れし時の約を履みて江戸獄中にて作る所の文章を輯錄したるものなり。乃ち評語を加へて之を返す。此の頃又、西洋數學の研究に從事す。其の理由は砲學兵術皆數學に根基するを以てなり。先生は數學を呼ぶに詳證術なる語を用ひたり。省諐錄の中に、

詳證術。萬學之基本也。泰西發明此術。兵略亦大進。夐然與往時別。所謂下學而上達也。孫子兵法。度量數稱勝。亦其術也。然漢與我。有孫子以來。莫不誦習而講說。而

其兵法依然如舊不得與泰西比肩是無他坐於無下學之功也今眞欲修飭武備非先興此學科不可

と言へるによつても、先生が如何に數學を重要視して之が研究に沒頭せしかを推察すべし。九月、從來作る所の文章を整頓して、之を象山淨稿と名づく。此の月、藩よりして、他人に面會し又は他人と書簡の往復を爲すことを嚴禁せらる。これ阿部閣老の命ありしによりてなり。十月二日、江戸に大地震あり、藤田東湖も亦厄に遭ふ。先生之を聞き、悲しみて詩を作る。此の詩の中に、

吾聞人天無相遠合應之理不可卻天垂災祥豈徒然經傳所存太鑿鑿

とあり。先生が西洋の科學を信ずる傍に、猶支那古來の災祥の理を說けるは、甚だ興味あることなりとす。

三年春、先生長歌を作る。先生は歌を井上文雄に學び、巧妙の境地に達せり。此の時の長歌は能く先生鬱屈の懷を察すべきものなり。

しなのぢは、ひなにはあれど、うらくはし、やまにものにも、はるされば、はなさきをゝり、秋づけば、もみぢにほへり。そをめでて、のゆき山ゆき、あまつ日の、く

ろろもしらず、あそぶなる、ひともさはなり。しかれども、さすらふるみは、はるの野の、はなもかざさず、あき山の、もみぢをもみず、たらちねの、ははのかふこの、まゆごもり、こもりてながく、としぞへにける。

かへしうた

君がため、たちはしりせむ、すべをなみ、あたらよはひの、おいらくをしも。

ひらき

先生は作歌の場合に、啓、ひらき、衡樹等と署名せり。何れも皆同音を以て讀むべきものなり。

此の年七月、米國總領事ハリス國書を齎し、和親貿易の條約を締結せんが爲に、全權使節として下田に來る。偶〻英佛二國と支那との間に戰爭再び開かれ、支那の敗北の風評頻りに傳へらる。ハリス之を奇貨として幕府に迫り、堀田閣老をして外國使節優遇の方式を定めしむ。翌四年十月に至り、ハリス江戸に出でて將軍に謁見し、又閣老に面して開國の止むべからざるを說く。是に於てハリスが提出したる條約の草案に本づき、熟議を重ねて、十二月二十五日協定を了し、一

方には諸侯に此の事を傳へ、一方には林煒等を京都に遣して勅許を請はしむ。

先生ハリスが將軍に謁見せるを聞き、慨然として一詩を賦す。

忽傳虜使入都城。幽憤無那雙涙生。長策蓬萊久埋沒、異言朝市尙縱橫。小童十歲統戎教。新學三年操海兵。虎狼野心非一日。將迎愼莫示吾情。

嗚呼先生の長策空しく埋沒せられて、外國に人を派することもなく、外國より敎師を雇ひて海軍を練習することもなく、沿海の砲臺は皆違式にして實用に適するものなく、外國の使臣をして徒に驕慢ならしむるを聞きては、先生の悲憤誠に自ら勝ふる能はざる所ありしならん。　十二月、先生外交上の辭令の參考に供せんが爲に、春秋左氏傳中の之に關するものを拔萃し、分類して、春秋辭命準繩を著し、次で書經の洪範に、國家の大疑あるときは之を卜筮に問ふことあるに本づき、洪範今解を著して、現在を救ふには、人力のみに賴らず、卜筮を用ひて神意を問ひ、之に從つて事を決すべきを論ず。　此の頃山寺常山に贈りたる書簡に、

某近來つく／＼存じ候に、此御時節兎ても人力のよく濟す所に無之、いづれにも其助を鬼神に求め候の外無之、鬼神に求め候には卜筮の外無之、依て本

邦神世よりの習はしに從ひ、洪範の教を以て、道を知るの人を擇び、（巫覡賣卜者流は皆大道を知るに足らず）卜筮の人を建立し、大疑謀には必ず此人を參し、其議を聽かれ候樣に相成候はゞ、必ず大神益有之べく存じ、云々。

とあり。中に「道を知るの人を擇び」とあるは豈に先生竊に自ら任ずる所あるにあらざるを得んや。

林煒京都に上りて勅許を請ひしが、許されず。是に於て翌安政五年正月、朝廷更に堀田閣老及び川路聖謨を召す。先生憂國の情益〻禁せず、一に皇室の稜威に賴りて開國を行はざるべからざるを痛感し、遂に山寺常山に謀り、門生馬場常之助を京都に遣し、書を梁川星巖に贈りて、當今の急務を論じ、之によりて九條關白以下の縉紳を動かす所あらんとす。其の大意は「先づ朝廷より幕府に對して其の恣に條約を議了したる罪を譴責せられ、其の上にて特旨によつて其の罪を赦され、更に朝廷より斷然開國の國是を提示せられ、幕府をして專心其の事に當らしめ、早く外國の智識を吸收して國力を充實すべし」といふに在り。星巖之を諾し、池內大學を介して先生の書を九條關白に呈す。しかも堀田閣老等亦容易に

勅許を得ること能はず。三月馬場京都より還る。星巖之に託して、詳に京都の事情を報ず。先生乃ち再び馬場を遣して書を星巖に贈り、天下の事玆に至りては誠に止むべからず、仍て姑く開港の議を停め、洋式の築城法によりて先づ皇居の守備を嚴重にし、又縉紳をして砲術を練習せしめ、皇居に御親兵を置き、以て皇室の稜威を盛にし、然る後に徐に開港すべきことを陳ぶ。蓋し先生の意見の存する所は、大義名分を正して、皇室を以て眞に政令の出づる所とし、幕府以下の諸侯をして皆皇室を奉戴して、擧國一致、國力の充實を謀らしめんとするにあり。先生が後年に於ける京都の活動は實に端を此の年に發したりと謂ふべし。

三月二十六日、勅命幕府に下りて、條約締結を禁ぜらる。是に於て幕府は進退兩難に陷れり。先生乃ち藩老望月貫恕に獻策して、藩主の名を以て米使との交涉方法を幕府に建議せしむ。交涉方法とは、外國が通商を請へるは、天地の公理に出づるにあらずして、其の國の私利を謀るにあることを、英國が支那を侵略せる實例によりて論辯し、彼をして語塞らしめ、其の上にて更に我が國より使節を米國に遣して、本國政府と直接に交涉して、眞に天地の公理に本づく交際を開く

べしと申込ましめ、以て其の切迫せる事情を緩和せしむるなり。時に藩主幸教江戸に在り。貫忍急使を江戸に遣して其の指令を請ふ。藩主乃ち之を先生自身の上書として、川路聖謨、岩瀨忠震に紹介せしむ。其の實は先生の名を山寺常山の名に代へたり。是れ蟄居中の先生が再び罪を幕府に得んことを慮れるが爲なりといふ。しかも先生の言終に用ひられず、且つ此の事によりて先生は常山を快しとせず、終に之に對して絕交するに至れり。

旣にして六月に及び、大老井伊直弼勅許を經ずして恣に條約の調印を了す。此の條約により、下田を改めて橫濱を開港場となす。これ先生が往年の意見の始めて行はれたるなり。是に於て幕府の違勅を咎むるの聲騷然として天下に普く、幕府の威信殆ど地に墜ち、攘夷論は討幕論と結合して益〻其の氣勢を颺ぐるに至れり。井伊大老は極力之が彈壓に務め、志士等之によりて多く縛に就く。吉田松陰も亦其の中にあり。所謂安政戊午の大獄是なり。七月、人造磁玦を作り、之を地震の豫知に用ひんとす。八月、電池を作り、之を地雷火の點火に試む。九月、三村晴山歿す。長歌を作りて之を哭す。十月、迅發擊銃圖說を作る。これ

新工夫の元込銃にして、藩士片井京助の考案せるものに更に改良を加へたるものなり。蓋し我が國に於ける元込銃の始なり。是に於て、これを幕府に獻せしが、翌六年六月に至り蟄居人の獻上物なるの故を以て御下せらる。

安政六年四月、吉田松陰、長門の獄中より書を裁し、門人高杉晉作をして、先生を訪ひて之に贈らしむ。中に「如先生者。當今俊傑也。(中略)幕府諸侯何處可恃。神州恢復何處下手。丈夫死處何處最當。右三項。示此生以微言。僕之至願也。僕今生無益。死無所。進退維谷。幸進之道焉」の語あり。蓋し先生の偉大なるを知れるものは松陰に過ぎたるはなし。松陰嘗て詩を作りて曰く、

象山高突兀。雲翳可仰難。何時天風起。快望狻猊蟠。

と。其の如何に先生に推服せるかを想ふべし。晉作をして特に此の書を齎さしめし所以も亦知るべきなり。幾もなくして松陰江戸に護送せられ、十月斬らる。而して晉作が此の書を先生に傳達して、其の敎を受けたるは、翌萬延元年九月二十二日のことなり。松陰の死するや、其の絶命詞、傳へて信州に至る。先生之を讀み痛哭して曰く、松陰は事業に急なり、我嘗て之を用ひて偉功を成さしめ

んとせしが、今は過去のことゝなれり、惜いかなと。嗚呼先生も亦能く松陰を知れるものと謂ふべし。

萬延元年正月、松代藩領防備の方法を講じ、山砲數十門を鑄て、之を四邊の要地に備へんとし、大砲を改鑄するの意見を具して、武具奉行の名を以て藩主に建議す。藩主之を納る。三月、井伊大老櫻田門外にて害に遭ふ。閏三月、先生櫻賦を作る。これ先生が尊皇愛國の衷情を披瀝し、人に知られざる深山の櫻花に自らを喩へたるものなり。蓋し時に感ずるの言なり。

翌文久元年八月七日、母荒井氏病歿す。年八十七。先生悲哀自ら勝ふる能はず、喪に居るの間、喪禮私說を著す。

文久二年、虎列剌病大に流行し、九月に至り、夫人勝氏亦此の病に罹る。先生親ら藥法を考へ、電氣治療を施し、看護到らざるなく、一箇月にして癒えたり。十一月、往年先生が作る所の櫻賦、先に便を得て京都へ送り置きしもの、正親町三條實愛の手を經て天覽に入れりとの報、京都より來る。先生欣喜止む能はず、詩を作りて其の懷を述ぶ。

此の年十月、勅使江戸に下り、攘夷を決行し、且つ諸藩より御親兵を徴せらるるの勅命を傳ふ。是に於て、幕府又諸藩に通牒して、廣く攘夷に關する意見を徴す。藩主乃ち先生に命じて意見を提出せしむ。先生攘夷の不可なる所以を論じて、十二月二十四日之を藩主に呈す。此の意見は終に藩主の意見として幕府に進達せられたり。書中に曰く、

抑五世界の學術智巧次第に開け、各國の勢力所作此形勢に相成候も、實に天運のしからしむる所、皇國獨り此天運を奈何せらるべき。且御鎖國の御手段も充分の御國力と御伎倆無御座候ては不被爲叶、又學術智巧は互に切磋して相長じ候もの故に、始終御鎖國にては、御國力御伎倆共竟に外國に劣らせられ、終に御鎖國も遂げさせられざるに至り可申、是本邦當今の御形勢に馴致候を以ても明に知らるべき儀に御座候。夫よりは外蕃(先生は此頃よりして外國を呼ぶに蠻夷戎狄の稱を以てすべからざるを主張し、蠻の字を改めて蕃とせり)と禮義を以て御交通、其間に公武御合體被爲在、御共々御勵精被遊、古代神聖の、おのれを舍て人に從ひ、人に取つて善を爲すの御盛德被

爲渡、萬國の長ずる筋を被爲集、外國にて追々日本領をも被爲開、御國力の御强盛も萬國の上に出で、銃砲の御修繕彈藥の御術業も萬國の上に出で、軍艦の數も萬國の上に出で、將材異能の士の衆多なるも萬國の上に出で、兵卒の鍊熟も萬國の上に出で、城製の堅固なることも萬國の上に出で候樣被爲至候はゞ、兼ては闔閭の禍心を致包藏候國々も、自然と奉懾畏、御抗拒を待たず跡を絕ち可申、又御德化を奉慕候上よりは、貢獻を修めて奉臣服候も可有御座候。是其本に反るの說に御座候。尙書にも、力を同じうするは德を度り、德を同じうするは義を量るとも有之、古司馬法にも、物を見て與に侔しうする、是を兩之といふとも有之候。其國力敵國と侔しきに至らずして兵を構へ候ては、其德其義いか樣彼に超過候とも、其志を得候儀は決して難出來、是乃ち天下の正理實理明理公理に御座候。

と。誠に正正堂堂たる議論と謂ふべきなり。

此の年七月、德川慶喜、將軍家茂の輔佐役となり、松平慶永政事總裁に補せられ、大に幕政を改革し、又朝旨を奉じて、安政五年以來國事に奔走して刑罰に遭へる

ものを赦免す。先生の蟄居は其の事安政五年以前に係るが爲か、猶ほ赦されず。しかも幕府の海防策は、先生の蟄居中に於て、漸く先生の主張を實現するの運に向へり。十一月長門藩主毛利敬親幕府に上書して先生の赦免を請ひ、土佐藩主山内豐信(容堂)もまた熱心に運動する所あり、遂に十二月二十九日に至り、蟄居赦免の報を傳達せらる。安政元年九月蟄居を命ぜられてより正に九年、先生始めて復た天日を仰ぐを得たり。此の時、土佐藩より先生を招聘するの使者として、衣斐小平、原四郎の二人松代に來り、其の藩主の直書を松代藩主に呈して請ふ所あり。同時に、長州藩の使者として、久坂玄瑞、山縣半藏(後の宍戸璣)の二人亦先生の廬を訪ひ、懇に招聘の内意を傳ふ。先生は自藩の弊政を一洗するを急務とするが爲に、兩藩の招聘に應ずるの意なし。十二月晦日、久坂、山縣が長藩の來島、麻田に贈れる手簡に、

此度水府へ廻り、直樣松城へ罷越候處、最早容堂公より御書翰を以て象山翁御招被爲在候段、御乞合として御使者罷越申候。小生共公書持參も仕らぬ位に付、公然役人共へ論もならず、當人へ公意丈けは達置申候。内輪の舊弊

一洗仕らずてはならぬ事のよしに付、追々翁も此本藩に入用も可有之、他に參る事は六ヶ敷様子に候。攘夷の儀は小生共考之處とは合不申候得共、何分兵制城堡砲艦の事より、實に此大老先生無之ては不相叶、いかにも殘念の至也。此後當分の處は有志の士を撰み、此藩に遣し、此翁に隨從して、學問致させ度ものに有之候。

とあるは、よく當時の消息と、先生が如何に天下に重んぜられたるかとを知るべきものなり。先生は此の時左の詩を書して久坂等に與へたりといふ。

神州皇極崇民德古今同。借問權謀雜何如信義隆。深修辭命待。莫恤梯航通。切願明王道遠傳蕩蕩風。

度德未量力大勳何所成。同謀及卜筮。夬履戒堅貞。請用名言正。莫令變亂生。不過汎收長作物乃兵經。

これ恰も攘夷に關する此の年十二月二十四日の意見書と同一趣意を述べたるものにして、其の文字も亦同一のもの多し。久坂等の書簡に「攘夷の儀は小生共考の處とは合不申候」とあるは、先生の開國と久坂等の攘夷と其の意見一致せざ

るを言ふなり。先生此の時久坂等に說くに洋行のことを以てす、翌年伊藤博文、井上馨等が歐羅巴に赴きたるは、久坂が此の事を傳へたるによりて決意したるなりといふ、

文久三年正月元日、先生特別の謁見を藩主幸教に請ひ、翌二日藩主に面して建言する所あり。翌三日及び五日更に登城して、藩老列座の席に於て、藩政改革の急務を論ず。藩主初め土州侯の請を拒絕せんとし、先生をして返書を起草せしめしが、八日に至り更に先生に對し、土州侯の依賴に應ずべきにより、早速江戶に赴くべしとの命下る。門人等の中連署して先生を藩に留むることを請ふものあり、十日、先生又藩主に上書して、詳に兵制學制の改革を論じ、自ら進んで其の任に當らんことを請ふ、然も其の言用ひられず。而して先生が藩を去るの事も亦止む。三月二十一日、藩主兵を率ゐて松代を發し、橫濱の警衛に當る。四月、眞田貫道再び出でて政事に任ず。

前年攘夷決行の勅命下るや、幕府奏請して曰く、「攘夷の擧は輕忽に手を下すべきにあらず、冀くは入朝して勅裁を請はん」と、朝廷之を許さる。三年正月、德川

慶喜、松平慶永上京し、二月將軍家茂上京す。時に攘夷を主張する過激の浪士等京都に橫行す。四月、遂に天皇御親征の事に決し、家茂、慶喜參內して勅を奉じ、五月十日を以て攘夷の期と定めらる。期到るや、長門藩は馬關に於て外國の船艦を砲擊す。次で又英國の軍艦、鹿兒島を砲擊するの事あり。六月、同藩の門人久保成、御親兵となりて京都に赴く。先生左の文章を記して之に贈る。蓋し之を以て京都に充滿せる過激の徒を戒めんとするなり。

忠義。人所固有也。故雖農商走卒。未嘗無尊君愛國之心。何況學士大夫乎。然忠義之降。激爲氣節。氣節之弊。流爲忿戾陵犯。夫氣節之風。雖或出矯勵。猶近於正。故爲可嘉。至於忿戾陵犯。則顚倒名實。隳壞公義。其害政敗化也亦甚矣。不可不戒。文久癸亥六月。門人同藩久保平甫。充親軍。役於京師。因其求言。遂書以贈。松城佐久間啓書。

既にして長州藩主の建議に本づき、天皇大和に行幸し、神武天皇の陵に謁して親征の議を決したまはんとす。京都守護職會津藩主松平容保、專ら親征の不可なるを說き、薩藩亦之に和す。是に於て朝議遂に一變し、中川宮朝彥親王入朝して

奏上する所ありよりて親征を止めたまひ、長藩の人々を京都より退去せしめて、其の宿衛を止め、會津、薩摩等の諸藩に命じて、九門を分守せしむ。三條實美等の七卿長州に走る。時に八月十八日なり。是より先、七月二十六日、筑後の人眞木和泉の推擧により、先生を朝廷に徴さるるの內命、在京の松代藩留守居役に下り、八月十三日始めて先生に傳達せらる。先生大に悅びて命に應ぜんとす。然るに十八日の政變ありしを以て徴命も亦止む。此の年秋、原書につきて西洋馭馬の術を練習す。詩あり、曰く、

騰騰快馬洋裝輕。信馬離城不計程。背日林間革轡輭。遂風堤上鐵蹄鳴。

元治元年正月、將軍家茂、諸侯を率ゐて入朝し、攘夷鎖港の容易に行ふべからざるを奏す。天皇之を聽さる。又中川、山階の二親王及び關白二條齊敬に命じて朝政を補けしめたまふ。三月七日、幕府より先生に對して徴命あり、早速上京すべしとのことなり。三月十七日、先生松代を出發す。從者十五人、騎馬洋鞍を用ふ。同月二十九日、京都に到著す。四月三日、「海陸御備向掛手附御雇被仰付雇中御扶持方二十人御手當金十五兩被下之」との辭令ありて、攝津の海岸に砲臺を築

造するの事に當らしむ。先生此の微官を得て、心平ならず、直に築造の任務を辭す。十日、山階宮の召により參殿し、時務を言上し、且つ命により、御庭上にて洋鞍の馬に乘る。此の後慶、諭を賜はり、西洋の事情を述ぶ。先生が安政五年梁川星巖に書を贈りてより以來、積年の忠誠の志、皇室をして開國の止むべからず、攘夷の行ふべからざるを悟らせ奉らんとすること、茲に始めて其の端を開くを得たり。其の喜、實に想ふべし。十二日、德川慶喜に謁し、其の問によりて、詳に天下の大計を陳述す。十六日、二十人扶持金十五兩を改めて四十人扶持させらる。五月朔日、將軍家茂に謁し、三日、中川宮に謁す。宮は安政五年先生が梁川星巖に書を贈りし以來、既に善く先生の志を知りたまへり。後慶、諭を賜はり、詳に世界の形勢を說き當今の大計を述べて、其の信任を得、「一昨年汝若し京都に在りしならば、天下は今日の如き困難に陷らざりしならん」との仰を蒙りたり。前年八月の政變以來攘夷を倡ふるの士等所在に事を構へ、京都の物情漸く騷然たり。既にして六月五日、浪士等が皇居に放火して一大政變を起さんとするの隱謀發覺し、其の夜新選組の隊長近藤勇等、三條小橋の旅館池田屋を包圍して、浪士等を捕縛

す。是より後、先生、會津藩士山本覺馬、廣澤安任及び幕吏小林祐三等と相往來す。

六月十八日、先生山階宮に謁し、天下治平の策を獻ず。よりて山階宮より中川宮に此の事を傳へられ、二十一日中川宮の召によりて參殿す。七月朔日、又中川宮の命によりて二條關白に謁し、時事に關する意見を開陳す。先生が山階宮に天下治平の策を言上せし日、鄕里にある家人に贈りたる書簡に曰く、

此方の宅へ切り込み申すべきの、外へ出候せつ手むかひ候はんのと申事は、諸方書付けにも致し、はり札など致し候よしに度々承り候へども、此方何とも存じ申さず、いつも馬にて出で候節は、西洋鞍にて候。(中略)色々手むかひ申すべき樣申候も、此方の申條を是迄より別に致し、無法の軍にても手始め致候樣改めさせ度仕事と見え候へども、此方の論は感應院樣(註、眞田幸貫の追號)御さかんの頃より、三十年近く、一すぢをまもり居候事にて、今始り候事にてはなく候。日本國中の御爲を末長くはかり候見込故に、其見込を改め候樣の事には成り申さず、三十年も其事に骨を折り、九年の御とがめを受け候ても其せつを替へ申さず、おそれ乍ら天皇樣の御爲をも、公方樣の御爲をも、

深く存じ候上の事にて、其事は、志のあるものは大てい皆知る所に候故、色々申候ものも有之候ても、天道と申もの有之候へば、先は此方へ手むかひ致候事はあるまじくと安心致し居候。もし〳〵此方の身にわざはひにても受け候事有之候はゞ、日本はもはや大らんと存じ申すべく候。甚ぶんに過ぎ候事を申樣に候へども、當節の議論、日本國中の命脈は、此方に有之と存候。この御國と存亡を共に致し候れうけん故に、人々いろ〳〵申候ても、さらにおそれ候事はなく、心中いつもやすらかに存候。是はこれ迄のしゆげふの功と存じ申すべく候。

先生は天下の事を以て自己の責任と爲し、一身を賭して其の治平策を獻じたるなり。

前年七卿の長州に下りしより、天下攘夷の志士多く長州に聚る。池田屋の變報傳はりてより、其の激昂益〻甚しく六月二十四日に至り、長州藩士等遂に大擧して入京し、大に爲す所あらんとす。眞木和泉、久坂玄瑞等其の指揮に當る。形勢頗る不穩なり。是より先、松代藩主眞田幸敎、七月より九月まで皇居の御警衞に

當ることを命ぜられ、四月長谷川昭道等を上京せしめて形勢を探らしめ、六月十四日藩老眞田貫道等を率ゐて途に上り、六月二十七日の夜大津に來著す。先生馳せて之に赴き、藩主に說いて曰く、

長州の藩士等數千人、其君の寃罪を訴ふるを名とし、京都守護職を殺さんと欲し、兵器を携へて禁闕に迫らんとするの聞えあり。是誠に一大事なり。倩ゝ京都の形勢を察するに、防禦の利决してあるべからす。君今日此驛に來られたるは實に天幸と謂ふべし。須らく此處に駕を止められ、玉座を非伊掃部頭が彥根城に移されんことを建白ありて、琵琶湖御渡船の警衛を勤めらるべし。(此の文眞田貫道著一誠齋紀實より引用す。)

と。藩主先生の言を用ひず。先生又大津に在る彥根の藩士に會見して、琵琶湖渡船の手筈を定めんとせしが、要領を得ず。翌未明に至りて空しく歸る。二日の後、先生大阪に滯在せる勝安芳に書を贈りて曰く、

天下の陋見を破て、專ら彼の所長を學び、其所長を集めて國本を牢くし候國是の定まり候樣に至らず候ては成り申すまじくと存じ候へども、いつ左樣

に成り可申哉。定て御傳聞も可有御座、近日長人の上り候にて、都下も戒嚴大混雜に御座候。御政事兩途に出候樣にては、何分治りの付きかね候事と存じ候故、其本源之所に一策有之、乍不及盡力罷在候內、長人上京の事捗らず出來り、不都合の事に御座候。乍然只今とても拙籌の外はあるまじくと存候。只管心力を盡し候義に御座候。此事書中に認かね候。いづれ其內拜眉にて萬々可申上候。

と。

又先生が此の頃に於て作成せる勅諭の草案あり。其の中に曰く、

上略嘉永癸丑、幕府、亞國の請ふ所を拒む事能はず、恣に先代奏聞を經て定むる所の國法を改め、かれと好みを通ずるに至て、事果てて後に奏聞す。是朕の竊に痛憤する所なり。(中略)然るに今大樹世を嗣ぐに及で、深く從前の過失を悔い、能く朕が意を奉遵し、姦吏を祛け、忠讜を用ひ、弊を改め、害を除き、まさに天下の兵備を修繕して、武官の職掌を盡さんとす。これ朕が積年の痛憤を舒べて、更に依賴の眷念を敦くするに足れり。(中略)今彼我の勢を詳にせず、猥りに兵を構ふるが如きは、滿淸近く殷鑒あり、戒めざるべけんや。

宜猛省奮抜して、學術技藝、國力兵備、總て外蕃の上に駕出すべきの本を務むべし。但一二の藩に在て、利を舍て義を取り、戰爭を開て天下の人心を一にし、大艦巨砲は且戰ひ且備ふべしといふ議を主張し、浪士の徒これに附和するもの多く、所在に黨を集め、羣を成すを聞けり。專ら心を戰爭に決して、本邦の正氣を鼓舞せんことを欲するは、烈士の志取るべきに似たり。抑亦兵は國の大事死生存亡の係る所といはずや。其算なくして猥にこれを動さば、宗社生靈をいづれの地に置かんとかする。朕竊に疑ひ思召す所なり。故に今これを菁簾に命じ、天つ神の御心を問ひ奉り、然る後事に從はんとす。嗣てまさに其得る所のうらかたを擧て商議裁度し、是を建定せしむべし。其間、爾列侯以下浪士の輩に至る迄、能く朕が意を體認し、謹飭に鎭靖して、輕忽の擧あるべからず。黨與を集めて一方に據るべからず。若此詔に遵はざるものあらば、卽ち亂逆の徒なり。刑憲の存する所、朕決して赦さず。速に幕府及び列藩に勅し、誅滅して後にやまん。普く遐邇に布告し、咸く聞知せしむること斯の如し。

さ。先生が山階宮に獻じたる天下治平の策の如何なるものなりしかは、此等の文書によりて略推測することを得べきなり。思ふに先生の主張は、固より開國進取にあり。而して先生の時務策は詔勅の渙發によりて嚴に無謀の攘夷を戒め、之によりて過激の徒を屛息せしめんとするにあり。彥根行幸の企畫は京都が騷亂の巷さならんことを恐れ、主上を一時安全の地に移し奉らんとせしものに外ならず。然りと雖、彥根行幸の策は終に志士等の期する所と相容れず。先生の運動が志士等の知る所となるや、七月十一日、山階宮へ參殿の歸途、三條木屋町に於て、先生終に其の害に遭ふ。時に年五十四。京都花園妙心寺內大法院に葬る。嗚呼、先生が鬱勃たる尊皇愛國の志、時局の艱難に遭遇して、將に伸びんとしてしかも伸びず、空しく兇刃に斃る。最も悲しむべきなり。先生の死を隔つること僅に六日にして、蛤御門の變あり、會津、薩摩の兵士等善く防ぎ、志士等戰敗れて、眞木和泉、久坂玄瑞等皆死す。是より後四年、時勢は急轉して、將軍德川慶喜大政を奉還し、世は明治の維新となり、先生が身命を賭して主張せる宿論は茲に實現して、天皇の御親政の下に、開國進取の國是は儼然さして確立し、以て我が國

空前の盛運を現出せり。

顧みれば、天保十三年鴉片戰爭の時に當りて、先生が藩主眞田幸貫の旨を承けて海防の策を講じ、八策を立てて藩主に建議してより、明治維新に至るまで、正に二十六年を經たり。鴉片戰爭は、一方に於ては支那衰頹の原因となり、他方に於ては我が國興隆の契機と爲れり。其の間に立ちて、先生が毅然として開國進取を主張し、終始一貫、身命を擲つて國論を指導したるは、誠に偉なりと謂ふべく、我が國の今日あるにつきては、先生の功績最も赫赫たりと爲すも、決して過言にあらざるべし。抑、近世に於ける日本の興隆は、世界歴史の局面を轉回すべき顯著なる事實にして、此の轉回の運動が先生によつて開始せられたるは、永遠に忘却すべからざる所なりとす。

明治二十二年、憲法の發布せらるるに當り、特旨を以て藤田東湖、吉田松陰と相竝びて正四位を贈らる。先生亦以て瞑すべし。先生の配勝氏子なし。妾の出に三男一女あり、二男一女皆夭す。第二子を恪（初名恪二郎）と曰ふ。父に從ひて京都に上り、維新の後愛媛縣松山裁判所判事に任せられ、明治十年歿す。年三十。

省諐錄

安政元年門弟吉田松陰の事に坐し江戸の獄に下されたりし時、獄中にて腹稿し出獄の後筆錄せるものにて、先生の人格識見を窺ふに最も重要なるものなり。明治四年木版に付し始めて世に行はる。本書原稿は此れに據れり。

省諐錄

象山平大星（又名啓）子明氏

嘉永甲寅夏四月。大星以事下獄。在繫七月。省愆之餘。弗無所述。然獄中禁筆研。不能存藁。故久而多忘。既出而錄其所臆記。藏諸巾笥。以貽子孫。如其擧以示衆。則吾豈敢。

所行之道。可以自安。所得之事。可以自樂。罪之有無。在我而已。由外至者。豈足憂戚。若以忠信受謗爲辱。則不義而富且貴。亦在其所榮耶。

有人於此。憂君父之疾病。而求之藥。幸而得之。且知其必有效也。則不問其品之貴賤。名之美惡。必請之於君父矣。君父惡其名而不許。則多方謀之。竊有進之乎。抑亦坐而俟其啓手足歟。臣子至誠惻怛之情。固不可坐視其病患。則雖知後逢其怒。亦豈得不竊進之哉。

人所不及知。而我獨知之。人所不及能、而我獨能之、是亦荷天之寵也。荷天之寵如此。而惟爲一身計、不爲天下計、則其負天也。豈不亦大乎。

自古懷忠被罪者。何限、吾無怨焉。但猶可及爲之時。而不爲、將使病弊至於不可復救、是則可悲已。

縱予今日死。天下後世。當有公論、予又何悔何恨。

身雖在囹圄。心無愧怍。自覺方寸虛明。不異平日。人心之靈。與天地上下同流。夷狄患難。累他不得。亦可驗也。惟北闈年滿八十。飮食坐臥。非予不安。自予逮繫。音問不通。動靜不知。其憂慮苦悶。當如何哉。一念及之。尤難爲情。然亦以理排遣。不至累心。

吾不履此境、無此省覺、經一跌長一知。果非虛語。

振拔特立可也。激昂忿戾。不可也。

心戒走作。

心曰存。曰操。亦是時時提撕。以理勝之之謂。

吾雖久從事格物。內而家庭。外而鄉黨親朋。異時停調處置。頗以爲當者。徐而省之。往往有太過不及。不滿人意。皆是工夫未熟。人情世故。未得通徹故也。可不策勵哉。

格物之於天地造化。卻易。於人情世故。卻難。吾人須不可狃其所易而倦其所難。

行身規矩。則不可不嚴。此治己之方也。治己。即所以治人。待人規矩。則不可過嚴。此安人之道也。安人。即所以自安。

凡讀書須熟誦。不然。無甚受用。予來此中。書卷不得攜。與端居書室。左右廚子。所欲檢查。輒隨手抽繹。全然不同。日日默念。而因以爲藥石。爲針砭者。不過平素所精讀暗記者。少時專務博涉。多讀群書。率皆若存若亡。今欲記起而卒不能。雖多亦奚以爲。他日幸得放還。當以諗後生。且以自警也。

予自來此。勉勵克治。鍛錬身心。未嘗虛度時日。古人云。儻閒居貴不空過日月。彼錮我者。皆成我也。旨哉。

予雖門葉衰薄。亦生長飽暖之中。未經牢錬寒苦之境。常恐一旦國家緩急。起居飲食。多所不勝。然去夏彌利堅船突至。江都戒嚴。予爲藩邸經理軍務。不得睡者。七晝夜。精神倍奮。今歲得罪下獄。飯麤食。嚙鹽。與重囚爲伍。數旬。恬然安之。精神活潑。身亦健康。此二事少自試驗。得益不細。亦可謂天之賜矣。

外邪襲人。多在睡眠之時。故中夜就寢。不得熟眠。爲令速寤。常當係意在醒。若支體有所不安。或以手摩之。或隨意轉側。務令血氣無所停滯。若咽喉不滑。或運舌嚥津。或深息閉氣。少焉放之。如是行之。外邪亦使不得。

內定心志。外運血氣。晝節飲食。夜少睡眠。修養妙訣。果無多子。

甲寅關西地震。勢賀之間。更甚。城垣衙署。驛亭民屋。傾塌無算。樹木倒植。井水乾涸。人民壓死。殆不知其數。丁未信州地大震。予在鄉里。親閱其變。慘毒之劇。

張泓所著滇南新語。關西地震在六月十四日。兩畿中尋之在二十四五日間。予秋放還後。久筆此錄。至十一月四日東海道地又大震。豆城郭。壞廬舍。死傷無數。因竊書寄於江都所親。書以此錄大意。謂都下恐亦不免。

所不忍言。信中變後。地下每作雷聲。時亦搖撼。經久不止。後七年有小田原之變。又一年今復有關西之變。嘗記清人雜書所載。云其地常動。至數年後。有大震。萬家樂土。忽變蘆叢。然則地震固有連數年者矣。古來漢儒。以地震爲蠻夷侵陵之兆。占候之說。洋學所不取。雖然天人合應之理。不可謂必無之。丁未以來。地震之變。以時事驗之。漢儒之言。似不可誣。今夷虜之志。未知其所極。則震之相連。而尙有劇甚者。亦不能無慮焉。

君子有五樂。而富貴不與焉。一門知禮義。骨肉無釁隙。一樂也。取予不苟。廉潔自養。內不愧於妻孥。外不怍於衆民。二樂也。講明聖學。心識大道。隨時安義。處險如夷。三樂也。生乎西人啓理窟之後。而知古聖賢所未嘗識之理。四樂也。東洋道德。西洋藝術。精粗不遺。表裏兼該。因以澤民物。報國恩。五樂也。抗孔聖浮雲之志。養鄒叟浩然之氣。寵辱不驚。俛仰不怍。究天地之際。觀古今之變。玩萬物之理。稽人身之紀。雖在困極。樂亦有在焉。饑而食。渴而飮。坐而

思。倦而睡。適然自得。又不知身在圜牆之中矣。

敏一字。是爲學之法。而爲治之要。亦莫若焉。天下可學可爲之務。如此其廣。如彼其大。故學與治。皆不可以不敏。彼終身于學。而空疎無用。終身于官。而因仍無功者。坐其勤力不敏。十常八九。

孔子之聖。猶且發憤忘食。敏以求之。何況吾輩。

日晷一移。千載無再來之今。形神既離。萬古無再生之我。學藝事業。豈可悠悠。

射有禮射武射之別。然其初也。專爲防禦而設。防禦之事。蓋男子立身第一義也。故其生。桑弧蓬矢。以射天地四方。然後敢用穀。亦示第一義也。自銃礮與。弓矢長兵。皆失其爲利。男子生乎今之世。不知銃礮。其可乎。於其初生。亦宜以礮換弧矢。發於上下四方。以志於其所有事也。

予久留意於海防。其所發明。自謂前人有未及者。然卒由此取禍。亦非常之原。常人異焉耳。

偉之平素有所戒備。明年十月二日夜。江都果有大震。火又從之。其餘烈比之前之數災超過數倍矣。而予舊所親交多得保全。雖是天意亦不無小益於予言。乙卯冬記。

昔相如有省悟時則吾志之行必矣。

凡學問必以積累非一朝一夕之所能通曉海防利害亦是一大學問自非講究有素者未易遽得其要領人雖提耳告之而不解蓋亦由此。

不令外夷開易侮之心是防禦之至要也。邊海防堵皆不得其法所陳銃器皆不中其式所接官吏皆凡夫庸人胸無甲兵如此而欲無開夷人侮心寧可得乎。

有敵國外患而託本根未固形勢未成。進無果決之勇。退持遷延之計者。其所欲縻敵適足以啓敵而自縻。其所欲緩寇。適足以資寇而自緩。其所欲從容補綴而全其捍禦之備者。亦將徒爲文具而國家之勢。愈至於不可支矣。而古來當局者曾不深省誤家國天下。如出一塗可勝歎哉。

今之當將帥之任者非公侯貴人。卽膏粱氏族。平日以飲酒歌舞爲娛。不知兵謀師律爲何事一旦有國家之急誰能爲軍士之所服。而遏敵人之衝突是

今之深忠也。故予嘗欲倣西洋武備之大略、於天下兵籍外結故家世族忠勇剛毅。一可當十者、以爲義會。一以保國護民爲志。其初入會。校試稽攷。果不憚艱苦、方始聽入焉。推有韜略謀猷統馭之才者。爲之長。遇警急之日。則鳩集成師。以待官之指揮。庶乎攘寇植勳、或居於在兵籍者之上也。

欲戰必勝、不守必固、不可。欲守必固、不陣必定、不可。魏侯問陣必定之道。吳子曰。君能使賢者居上。不肖者處下。則陣已定矣。今天下諸國。賢者未必居上。不肖者未必處下。然則陣未定也。陣未定、而其守必固。戰必勝者、未之有也。有志之主。倘其知所警省哉。

教練不精。賞罰不明。又無能用之者。縱有億萬之衆、其於戰守、所謂伏鷄乳犬、如其貍與虎何哉。

同力度德。同德量義。雖稱文王之美。亦不過云大國畏其力。小國懷其德。無其力而能保其國者。自古至今。吾未之見也。誰謂王者不尙力耶。

不知彼不知己每戰必敗固也然知彼知己在今時未可言戰悉善彼之所善而不喪己之所能然後始可以言戰。

詳證術萬學之基本也泰西發明此術兵略亦大進。夐然與往時別所謂下學而上達也孫子兵法度量數稱勝。亦其術也然漢與我。有孫子以來莫不誦習而講說而其兵法依然如舊不得與泰西比肩。是無他坐於無下學之功也今眞欲修飭武備非先興此學科不可。

士大夫必有過人之膽量。方能奪戎狄之氣。而伸本國之威。如郭汾陽之單騎見虜是矣必有過人之學問才辯而能屈戎狄之辭。而存本國之體。如富文忠之御獻納二字是矣。今天朝縉紳。數與夷使接者。果有汾陽之膽量乎。果有文忠之學問才辯乎。吾竊危之。

人不見其可畏則必慢易之一啓其慢易之心又何以能治之也。故君子必臨之以莊。正其衣冠尊其瞻視。出辭氣斯遠鄙倍。皆所以爲莊之方也。今士大

夫往往有舉措輕佻言辭鄙猥以自喜者。其意蓋謂不如是難以通人情而服人。嗟乎通人情而服人者。自有其道在焉。今不以其道而露此醜態。吾恐其欲服人者。適足以導其慢易也。

人譽己。於己何加。若因譽而自怠。則反損。人毀己。於己何損。若因毀而自強。則反益。

有人之過。有事之過。事之過。未可以觀人。人之過。可以觀人。

今之所謂儒者。果何爲者耶。本朝神聖造國之道。堯舜三代帝王之治。兼明而默識之乎。禮樂刑政。典章制度。以至兵法師律械器之利。講論而皆得其要乎。土境之形勢。海陸道路之險夷。外蕃之情狀。防戍之利害。城堡堵堞控援之略。推算重力幾何詳證之術。並究而悉之乎。吾未之知也。然則今之所謂儒者。果何爲者耶。

讀書講學。徒爲空言。不及當世之務。與淸談廢事。一間耳。

有之無所補無之無所損乃無用之學也有用之學譬如夏時之葛冬時之裘脫無爲之者則生民之用闕矣

帝王之政藏財於民有餘而取不足而與故不凍餒百姓而上獨富足亦不飽逸百姓而國獨貧窶故曰百姓足君孰與不足百姓不足君孰與足此天下古今不易之道也

本邦金貨米粟號爲富饒然疆域不大故以邦內所生之財享邦內所爲之用無甚有餘乃若海防之事則起于外者也置防堵數百所造大艦數百艘鑄巨礮數千門其費亦浩矣而皆非永存之物每一二十年必待修繕改造況外之有應接給資之用內之有餉糧購買之費凡如此之類將安取其給哉夫劣濟困窮之家多得賓客屢設宴饗則其資財空乏卒至於不可復繼也必矣今之時事何以異乎是然則其所以經理之者何術有志於經世者所宜先審計

本版本臨賈に作る今臨買に改む

予礮卦之著。不但有益於武學生徒兼有裨於國家武備往日官阻其鐫版吾不知其何意。

先公登相臺嗣管防海事。時英夷寇清國。聲勢相逮。予感慨時事上書陳策實天保壬寅十一月也。後觀清魏源聖武記。亦感慨時事之所著。而其書之序。又作於是歲之七月。則先予上書。僅四月矣。而其所論。往往有不約而同者。嗚乎。予與魏。各生異域不相識姓名感時著言。同在是歲而其所見。亦有闇合者。一何奇也。眞可謂海外同志矣。但魏云。自上世以來。中國有海防。而無海戰。遂以堅壁淸野。杜絶岸奸。爲防海家法。予則欲盛講礮艦之術。而爲邀擊之計。驅逐防截。以制賊死命於外海。是爲異耳。

馭夷俗者。莫如先知夷情。知夷情者。莫如先通夷語。故通夷語者。不惟爲知彼之楷梯。亦是馭彼之先務也。予竊深念。頃年諸蕃託事。屢寄舶於相房閒。其情固爲難測。因有纂輯皇國同文鑑若干卷。以通歐羅諸國語之志。而荷蘭

久爲互市之國、邦人亦多知讀其國書、故欲先刊荷蘭部、先是官有命。凡刊行書籍必經官否詳、適嘉永己酉冬、來江都、呈稿本以請。遷延彌年。卒不得允、其在江都日。始獲魏氏之書、而讀之、亦欲內地設學。專譯夷書夷史、瞭悉敵情以補於駕馭、是又其見之與予相符者、第不識彼國今日能用其言否耳。

海防之要在礮與艦、而礮最居首。魏氏海國圖識中、輯銃礮之說。類皆粗漏無稽、如兒童戲嬉之爲、凡事不自爲之、而能得其要領者無之。以魏之才識、而是之不察、當今之世、身無礮學、貽此謬妄。反誤後生。吾爲魏深惜之。

去夏墨虜、以兵艦四隻護送其國書。抵浦賀澳。其擧動詞氣。殊極悖慢。辱國體不細、聞者莫不切齒。時某人鎭浦賀。屏氣負屈。遂無能爲。虜退後。自抽小刀。寸斷其所遺虜主畫像、以洩怒。昔宋曹瑋謫官陝西。聞趙元昊爲人。乃使善畫者圖其貌、觀之知其英物必爲邊患。欲預講邊備、蒐閱人才。後果如其言。

然則觀其肖影亦可以見其能否而責吾豫備矣某人知慮不及此毀而滅之可惜已嗚乎均夷人也。均畫像也或無而求之或有而毀之其知之深淺謀之長短一何遠哉

今春墨虜之來。官設使坐於橫濱以爲應接之所命松城小倉二藩發兵以護衞之且令聽約束於接待官吏初吾公之受命也。以爲眞備虜之不虞也。乃發野戰礮二門。牛角天礮三門。銃卒百名。刀槍士五十名。以國老望月貫恕將之予參其軍議謂接待官吏知兵。令吾與小倉一橫一直以陣銃手可以逞威若其不知兵。使相對而陣則銃不可用。惟短兵利之。與虜相接咫尺變起倉卒彼雖精銃技我以利兵乘之。一雖可斫斷數頭乃別備長卷二十把以從。吾兵至金川官吏使人謂曰。大礮必寘前驛莫引入橫濱地望月對曰吾藩奉命護衞應接之場。大礮所以備變。寘之隔地變發非時。難以應卒。敢辭。官吏曰。今玆應接。萬萬可保其無變。不幸將有變。卽時發官丁搬運礮器

決不令貴藩有缺乏。今以大礮入横濱。夷人或憚其守衛之嚴。請移於他地。官之累也。望月不得已從之。退曰。官命使聽約束者。幾是乎。及相護衛之地。官吏曰。東起于海濱。西行二百歩。折而北行又如之。是其所也。予聞之驚駭。詳其地。南距應接便坐不下二百歩。有民屋樹林在其間。初在江戸。竊意官吏雖不請兵。自有國體。且得二藩兵。當衛圍繞便坐。以嚴警禦。不圖其區處之陋至斯也。因建議曰。大礮則官吏停之。今所有者。小銃而已。小銃逞力。非百歩内不可。且銃卒不踰百名。執短兵者。不過五十名。距夷虜集會之所。遠陣於二百歩之外。又散守三四百歩之間田。不惟無益於警禦。適足以導虜之侮慢。去歳浦賀應接。護衛無法。夷虜嗤之。邦人恥之。而不少省悟。今又爲此兒戲。官吏不肖。固不足道。本藩武功盛名。爲此輩壞隳。豈可忍邪。乃與望月謀。使人謂之曰。如公等所區處。是非以我兵備於夷虜。爲夷虜禁呵邦民耳。禁呵邦民者。固不可煩士大夫。亦無用於兵器。毎遥路。出健兒一二名。執

靑竹杖誰何之足矣。但江戸所受之命。則不可以廢應接之日。吾藩當別出士卒。整陣於山間。以備於非時之變耳。此不敗公等之事。又不墜吾職。豈不亦兩得乎。官吏復曰。言皆當理。然官發兩藩人士之事。吾輩既告之夷人。若不出其人。設陣於隱僻之地。夷人必疑吾有異志。應接不諧。是亦官之累也。必曲從吾言。如其布陣收散離合。唯意所命。吾輩不敢掣肘。予與望月。雖憤惱不樂。亦無可奈何。當日作一哨。置之田畝間。以塞其責。嗚呼。耗損國用。勤勞士卒。盡思慮計畫。而同爲兒戲。可付浩歎也已。

二月廿日夜。聞下田議略定。翌朝早起。詣望月曰。下田。本邦要地。其形勢可比全世界之喜望峯。夷虜儻之。屯駐以爲巢穴。其害不可言。且大城在江戸。而人口衆多。米穀布帛。皆資海運。不幸有警。海路格塞。江戸首受其禍。伊豆之爲州。天城之險。隔絕其中。而下田在其南端。一旦變起。陸路出兵。礮隊爲嶮所沮。不可以行。海路則我無堅艦。他日縱得造作。虜有海陸之形勝。而我反

費之、主客易位、攻守殊勢、非計也。夫善制事者、常令其利在我、其害在彼。今不得已而假敵人地、宜爲他日計。擇海陸得進兵之處、竊覽横濱之地勢、甚褊之、且使虜舶常在此、去江戸甚邇。則人人嘗膽坐薪之念、自不能已。警衛守禦之方、亦自不得不嚴。又親觀彼之所長、可以速進我之智巧。是其所以爲多利。如退下田、則人心必弛。守衛必懈矣。而虜船迅速、難以繋縻。在横濱與在下田、其爲江戸腹心之患、則閒不能以髮。故吾謂不如以横濱假之之爲愈也。是天下之大計也。君總士卒在玆。不可以默。上書乞公有獻策可也。

望月曰。然。然吾上書不如子之上言。乃命予還江戸。告之於公。有沮者。不果。公許予自爲之。於是竊有所建白。又使門人長岡小林虎上書其主侯。開陳大計。又使之見阿部閣老所親幸。爲論其利害。欲得因時規諫。有所挽回。竝皆不行。小林生以此獲主侯之譴。遂辭歸國。

養子借一二友生。爲鎌倉之遊。遂泛海。過荒岬。抵城島。泊三崎。歷松輪。宿宮田。

次浦賀。上猿嶼觀於金澤。出本牧而還都。其往來所由。視設防堵備海寇無慮十餘所。而錯置皆不得法。無一可當防截之選者。至此不覺仰天浩歎。擗胸流涕者。久之。夫江都。天下之咽喉也。富津洲嘴。雖稱曰天險。海口猶闊。非有戰艦水軍。固難以遏敵人使攘竊伺。今是之不務。設爲癡堵呆堞。高揭之於海表。此示我無謀於海外也。頃年東西諸蕃。寄舶遊偵。豈不開輕我之心哉。吏員庸流。固不足讁。其金鞍華韉。綾衣肉食。自謂高出等類者。不知天下之大計。糜國財用。以爲此無益之務。抑何歟。有如虜舶馳突。將何以折衝禦侮。因欲上疏論海防利病。冀以裨時政之萬一。具草請之先公。先公不許。遂止。是嘉永庚戌之首夏也。後四年。果墨夷之事起。登時先公尼予上書者。蓋懼觸忤抵罪也。其蓋覆之仁。亦大矣。今日使先公在世。知予拘囚。則其爲憂勞。又當何如。

川路司農。自大阪市尹轉任。與聞防海事。予舊有厚交。因出擬上書舊稿示之。

極言近都防堵修築無法。不適實用。司農亦未甚信之。及墨夷事興。無一不如予嘗所論。於是始深納予言。一日謂予曰。子欲有所言。吾能達之於閣老。予曰。僕所欲言者。爲君傾倒幾盡。君能言之。君能行之。天下之福也。僕但求天下之福耳。上書釣名。非其本心也。及論選人材。購船於海外之策。司農有沮色。予曰。是當今先務之急。而君猶牽掣故常不能發言。他尚何望。僕當上書以道之。乃條疏急務十事。因司農上之阿部閣老。不報。至吉田生獄起。亦不少蒙明察。故常之不易變。時勢之不可明。如此。不知天下之大計。將何日而能立也。

江戶海口。不可無礮臺。予亦嘗數數言之。夫海口之防戰。利在礮臺。其形勢所缺。不可不實。此以補焉。然其得力之處。全在別備礮艘。相機策應。故能得其要。海中唯置一二區而足。不必多築之。荷蘭諳厄兒之策。可據也。如今所爲。陸續相連。是陸軍爲壘以自屏之法。非海口以待洋寇之術也。蓋陸戰攻中

寓守。守中寓攻。方其守也、以壘自屛。方其攻也。出壘以衝。其守與攻。竝係壘中之人。故其人衆。固不能不多其壘。雖多其壘。亦不相障礙、如海口之戰則不然。礮臺之兵。不操礮艘、礮艘之兵。不在礮臺、故礮臺不貴多。而礮艘不厭多也。蓋礮臺多則兵分。兵分則用士衆。而左者不能拯右。右者不能救左。不幸賊船出于中間、左右之臺、相爲障礙、不能用礮。惡在其爲利也、且礮艘置之。進剿無術。如賊連船於相房間、以絕我海運、何以卻之。當是時、縱令內港有百礮臺、亦屬無用。雖欲無不戰而屈。不可得也、若乃多備礮艘、訓練以時。閑戰策應。無所不可、足以讋服洋賊、而制其死命、又何苦而海中以此許多之礮臺爲哉。多事之際。其經費亦甚可惜矣。某地縣令某氏。小有才幹、素無學問、見西洋陸戰壘圖、而不知其解。杜撰牽合。以成守海口策、當道亦不深究之。以爲是而施行。予深識其非、屢言之川路司農、司農稍信然予言、然而遂弗能救。是亦可慨也。

千羊之皮。不如一狐之腋。而千金之裘。又非一狐之皮。今欲爲千金之裘。徵之

居羊之家而可乎。

苟得其心。五州之人。皆可得而使也。厚而利之。導而舍之。敵間之來間我者。亦

爲我用矣。何況我民。

予年二十以後。乃知匹夫有繫一國。三十以後。乃知有繫天下。四十以後。乃知

有繫五世界。

凡五十七條

附録上

省諐賦

罣人既得志。以下田箱館二澳。爲貿易之所。歳四月。予得罪下獄。始予潜心防海十數年。思出位。言踰分。當止而不止。宜乎其卒至于此。雖然憂國之心。遭艱益深。省諐之餘。思念前古當今將來之事。乃爲賦曰。

余蹈世之險阸兮。欵跦盭以離尤。意忼慨而激昂兮。心絓結而增愁。何衆人之嘻嘻兮。獨出涕而嗟若。世恬然而康娛兮。亦疾首而蹙額。非病狂而喪心兮。悄煩毒之相憑。微至仁與大知兮。孰云察吾之中情。始余學而閎志兮。知同力之以度德。弗經校而曲揆兮。何謀猷之能淑。値蠻狄之切憂兮。將隱潜以效忠。得吾黨之狂士兮。欣蘭臭之無壅。臨岐路而申命兮。謂回旋必有酬。壯者固果于事爲兮。犯時制之不休。忽拘縶而幽阻兮。對鄙訊之紛拏。竭忠悃而遻罰兮。豈天命之謂何。雖辭連而在縶兮。瑩余心其如冰。所循私而違道兮。指天日以爲

木版本爲に作る今羣に改む。

正依往聖以節中兮。招百神而日聽。署山川使在列兮。戒周孔以爲證。昔聖皇之樂靈兮。臨西鄰而不甚。既哭女之綺巧兮。豈維鳩夫典籍後后承而祇敬兮。匪至變而熙怡。非王道之無偏兮。胡瞻文明之而今。彼洋儒之深潛兮。啓造物之蘊閟。何黨人之險昧兮。紛交疾而妒忌。蔀棠阼之明聰兮。不服長而求師。禍機迫而靡寤兮。猶護疾而諱醫。輸世守之至重兮。滯損益之及時。詟吾岷之閒敵兮。顧導賊而給資。思國其莫我忠兮。卒忘身之匪任。懣憤歎而壹志兮。嘖煩言而不厭。多操術而無私兮。羌衆工之所讎也。憂國蹇而計身沓兮。又羣眙之所繇也。惟天靈之發曚兮。俟百聖而不惑。苟宗社之有裨兮。雖顚隕其焉惻。重曰。西伯幽囚。宣尼拘止。菅相貞良。擯海隅止。窮達之運。聖愚同止。定心廣志。何所惆止。民生秉彝。欽醇德止。千齡萬世。罔窮極止。往者不可援。願勿追止。徠者可繼。吾將有期止。

讀孟子

醫之治病也。其過于實者。泄之瀉之。其虛者而補之。要在濟夭死以保其康寧耳矣。聖賢救世之言。亦猶是也。當孟子之時。天下以攻伐爲務。民苦於塗炭。故曰。我善爲陣。我善爲戰。大罪也。又曰。善戰者服上刑。又曰。我能爲君約與國。戰必克。今之所謂良臣。古之所謂民賊也。皆救世之言也。今也海外諸蕃。其智巧技能。與往時殊。若耆老之與童孺不同科也。其兵威之所加。駸駸乎隔海之國。而莫之能遏也。而我邦儒者。誤讀孟子。不審天下之形勢。不察萬國之情狀。兵力萎薾。而不知奮也。械器濫惡。而不知精也。外蕃改銃礮。變兵法。而我不肯講矣。造火輪。革城制。而我不肯效矣。曰。何以礮艦技巧爲哉。亦有仁義而已矣。是猶治病虛者。而不知所以補之。幾何其不殺人也。去歲以來。彌利堅之事與。彼加我屢以無禮。而我不能動手。至于忍國大恥。假地以紓禍。夫誰使之然耶。吾恐世之儒者。終亦不能逃其罪也。

又

本版本挺に作る今梃に改む

本版本漁漁に作る今訑訑に改む

孟子曰、得道者多助、失道者寡助、寡助之至、親戚畔之。多助之至、天下順之。以天下之所順、攻親戚之所畔。故有不戰、戰必勝矣。是固也。雖然、我果得道而多助與、彼果失道而寡助與、我果爲天下之所順與。彼果爲親戚之所畔與。是未可知也。則其戰必勝。豈可期乎。信能行王政、則鄰國之民。仰之若父母矣。率其子弟攻其父母、自生民以來。未有能濟者也。是固也。雖然。鄰國之民。仰我果若父母與、視其君果若仇讎與。是未可知也。則其無能濟。豈可保乎。施仁政於民、省刑罰薄稅斂、深耕易耨。壯者以暇日修其孝悌忠信、入以事其父兄、出以事其長上、可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵矣。是固也。雖然。我之民果樂於效死與、彼之民果樂歸於我與。是未可知也。則其制梃以傳勝。豈可許乎。故凡有敵國外患者、不知彼。不知己。不知時勢。惡可乎。乃孟子。則不但以其道、且知其時勢而言之也。然當時諸侯。猶以爲迂闊。而孟子實未嘗迂闊也。今我新得一大敵國禍、且不測、而讀孟子者。拘執文辭。不察時勢。訑訑卻以夷禦夷之計。欲制

艇以撻彼之大艦巨礮。是則迂闊之甚者也。甲寅之春。華聖東又發八大兵艦。來近江都下。錨內港。甚無狀。門人長門吉田某。奇士也。奮然欲私索虜之情實。以立事功。不遂。官捕之。余亦逮錄下獄。自訟之餘。時誦孟子。不能無感焉。因遂著諸言。

跋孟子舜發畎畝章

鐵之將爲劍也。入鑪承鞴。坐碓受鎚。塗灰汙泥。淬于寒水。斂于越砥。其爲鐵亦苦矣。玉之未成器也。錐破其璞。鑿治其瑕。彫之。琢之。磨之。礱之。其爲玉亦艱矣。然使鐵與玉。樂安佚。憚煩燠。不甘受其艱苦。則安得成就其器。而爲君子之佩哉。惟人亦然。久挾其術志則不行。素有所能。言則不聽。運籌進策。莫然其謀。竭誠致悃。莫察其忠。有萑小之慍。有逐斥之譴。有纍囚之辱。窮困拂鬱。激動勞苦。而後增成其材。予自得罪下獄。日誦孟子此章。以自力焉。曰天其有意於用我與。不然。此物奚宜至哉。斯道遼遠緜邈。未能必信。雖然。天意固未可知也。則吾

之處困厄豈可不奮發而激勵乎。甲寅閏七月二十八日

夢有得魯公爭坐帖者。與予共之。適甚。因爲跋其尾。覺而記之。

此帖有無限姿態。無限精神。譬如太牢滋味。愈嚼而愈無窮。假令出他人之蹟。愛玩摸臨。足爲樂事。況於魯公精忠貫天地。大節與日月爭光者乎。使吾人居圜牆之中。而忘纍囚之艱者。非此帖也歟。

兵要

漢土兵家之書。莫高於孫子。而其爲書。空言無事實者過半矣。未可以治兵也。何以言之。曰。善戰者。先爲不可勝。以待敵之可勝。其不可勝。何以致之。善守者。藏於九地之下。善攻者。動於九天之上。其藏於地下。動於天上。何以得之。善戰者。先立於不敗之地。而不失敵之敗。其立於不敗之地。何以能之。如此之類。吾未覩其有事實也。而世徒眩其文。不求其實。萬口一致。稱爲兵法。而不疑。吾甚怪之。趙括讀父書傳。縱談兵事。以天下莫能當。而卒喪趙軍。其亦有以也耶。至

閱漢書藝文志。吳孫子兵法。有圖九卷。乃知其事實。蓋有在焉。而今亡矣。可勝惜哉。然兵之性革也。明理察事。因時而革。亦猶天道之於曆也。故曆而不革。不足爲曆。兵而不革。不足爲兵。至歐邏巴諸國發揮火礮。以爲元戎。務於攻伐吞并。兵制大革。設令孫子圖傳于世。亦惟存古法耳。何補於今之事實哉。故當今之時。求得兵之事實。莫若學洋兵。洋兵之法。其科有五。一曰將略。二曰陣法。三曰器學。四曰守國。五曰軍用。將略者。其言類如孫吳司馬所道。陣法者。有步騎礮之別。有步騎礮之合。而戰術存焉。器學者。以操教爲主。而械器之制。與其得失之辨。莫不備焉。守國者。築城壘。鑿溝池。善保其民之術也。軍用者。糧食硝彈兵甲戰具之屬。是也。凡此五者。莫不有事實。而操教尤爲當務之急。令勇者不能獨進。怯者不能獨退。非操教不能也。其形如決積水。其勢如轉圓石。非操教不能也。擊其首而尾至。擊其尾而首至。擊其中而首尾俱至。非操教不能也。故曰。有制之兵。無能之將。不可以敗。無制之兵。有能之將。不可以勝。故良將之於

操教也、盡心焉耳矣、蓋不以操教而易言之以能濟其事者、自古及今。未之有也、趙括之敗、可以鑒矣、

孫子說二則

孫子火攻以火佐攻、今則以火攻守。是古今之變也。古者以油薪之火佐攻。故行火有因、有時日內外之應。晝夜之風。皆在所詳。今用大小神器之火、以爲攻守。故不由因、不擇時日、不論內外、不問風之有無、皆可用之。而震擊之威。焚燒之慘。非古者油薪之可比也。我攻守用火。敵攻守用火。火火之變、不可勝窮。非天下之至明、其孰能參於此。惟理勢可坐譚也。選練不可空論也。此尤主將之所宜慮、修讀孫子者、其亦知之哉。

間之於軍、猶瞽之相、聾之史乎。瞽而無相。則前有水火而不知。聾而無史。則後有車馬而不省、軍而無間。則敵之所以謀吾陷吾者。吾皆茫然。甚則敵國之形勢、敵主之仁暴、敵將之能否。敵衆之強弱。敵兵之利鈍。竝不得其實。所謂廟算

者。無所由立。尙何和戰守禦之可言哉。故經考索情。雖曰兵之先著。非初有間諜而得其實。則亦無以施其計也。孫子之書。首列始計。而以用間終焉。蓋貞下起元之意也。故軍國之務。莫先於間。事莫重於間。情莫親於間。故曰。微乎微乎。無所不用間也。而世有大敵在前。而不知用間。屬有勝間之任。而視之如艸芥者。可痛哭也已。

右賦雜文共八首

詩

獄中寫懷二首

久憂邊事歎天遠。忽墜此中悲海深。欲爲皇朝存至計。敢因吾利勞知音。鷄鳴不已晦冥夜。鶴韻應通蓊鬱陰。寄語吾門同志士。莫將榮辱負初心。

不思城下作盟恥。卻見忠貞抱忌疑。伯昳（ペートル）議彊長崎澳。聖東（シントン）假地下田湄。異時輕敵已非策。今日伐謀知是誰。幽憤滿胸無所泄。獄中瀝血寫茲詩。

君恩

君恩如天地。國恩如江海。外患今非一。奮身思有濟。勉勵十餘年。何問明與晦。在卑欲爲池。在高欲爲轡。奈何肉食人。頹然若傀儡。苟安愒歲月。般樂敖且怠。當初恃不來。不知恃有待。復不伐其謀。卒然爲所詒。假地缺金甌。屈膝甘無禮。反卻知彼計。束縛直自累。杏余何爲者。致忠忽遭逮。幽囚在犴獄。甘心待其罪。松柏有本性。歲寒節不改。忠義許君國。百折何須悔。用閒在得人。全勝在知彼。是非不可磨。公論期千載。

敝笱五章有箋

敝笱在海。魚則唯唯。狄人戲謔。笑言有啞。

比也。笱以竹爲器。以取魚者也。唯唯出入不制也。啞笑貌。笱當在河。而今在海。況其敝壞者。安得能取魚哉。宜乎其魚之唯唯然。而出入無忌憚也。以比禦侮失策。而致狄人之陵蔑也。

曾欲御冬。亟歸旨蓄。莫顧我勞。反比予于毒。

比也。御當。歸貽。旨美。蓄聚也。曾蓄聚美菜以爲餽貽不一再者。蓋欲使以禦冬月之空乏也。以比安不忘危。治不忘亂。方泰寧之時而深思遠慮。以數數然及邊防戎備之事也。

其霾其霾。曀曀有霾。永言念國。不瑕有害。

木版本求言に作る今永言に改む。

比也。其者冀其將然之辭。陰而風曰曀。雨土曰霾。瑕何也。冀其開霾而卒不開霾。且陰陰冷風雨土蒙霾。以比衰替之世。欲有奮發改革而狃習因循。流弊愈深。近患又生也。

幽室陰陰。不日不月。言思君子。如饑如渴。

嗟爾君子。靡知臧否。懷私之故。有似充耳。

竝賦也。靡不也。充耳塞耳也。謂耳聾之人。

泄泄八章

我艦未牢。我壁未矗。將者泄泄。蠻方孔棘。
艦之未牢。猶可治之。壁之未矗。猶可爲之。將者泄泄。云如之何。
積薪如陵。火發于下。載笑載言。晏然以處。
匪風飄揚。匪瀾澎湃。念彼神京。寤歎有懷。
憂思如燬。其誰知之。悲憤如噎。其誰思之。
人不我諒。請勿復敢思。人不我信。請勿復敢悲。
雖欲無思。與君爲體。雖欲無悲。與國爲系。
夏夜之短。耿耿如年。摽擗不寐。泣涕漣漣。

儆卦

予嘗演儆卦。儆卦卽睽卦也。爾來竊省予所遭遇。無一非睽者。亦云奇矣。圖事揆策。而莫用其謀。睽也。竭忠盡力。而反招罪戾。睽也。言辭確寔。而不免疑猜。睽也。貲財橫散。而家道困迫。睽也。雖然。物窮則變。變則通。居以正

道固無終睽之理。且天地睽而其事同也。男女睽而其志通也。萬物睽而其事類也。處睽之世。合睽之用。亦在自強之耳。

少小窮易理。中年研礮火。融會著礮卦。推演訓蒙著。礮卦本是睽。乖戾諸情寡。邇來我所爲。排亂躓而跋。憂國竭忠精。反自求飛禍。一與卦象應。或天其試我。志因勞苦堅。行以勇決果。前修皆如玆。猛省砭頑惰。

故園

拘縶十旬心不平。秋風忽動故園情。牆陰但見狐鳥影。櫳隙空望日月明。繞屋林泉何改色。傍門松菊不忘榮。水淸石秀曾遊地。野鶴溪猿有舊盟。

秋思

幽室日如年。迴風揚塵埃。時節値秋晏。愁來不可排。名都何鬱鬱。飛閣臨通街。日夕絃歌起。音響隨風來。曲調苦且怨。沈吟激餘哀。理曲知爲誰。無迺蕩子妻。身貞反見棄。歡愛何時諧。盛年不再至。華容日益衰。意合忘情異。感同難自持。

掩耳請勿聽。重聽不勝悲。

秋風

秋風淅淅霜眇眇。木葉辭條蘭蕙槁。日景不至廣室冥。虛櫳危檐飛塵杳。潛無鱗分畢無翰。兀兀中處將安還。

木版本蘭蕙稿に作る今槁に改む。

點虜

點虜先聲已得志。旌帆來去更縱橫。久歎天下無豪傑。誰道胸中有甲兵。終古禁人偵彼實。連年許敵探吾情。謀猷顚倒今如此。不識何時見掃平。

漫述

雨風月如晦。頑犬吠成羣。是亦尋常事。利害何足云。

謗者任汝謗。嗤者任汝嗤。天公本知我。不覓他人知。

右古今詩共十二首

附錄下

獄中聞子規歌二首

遠知許知爾。奈久寶土騰宜數。妣等那良婆。波播乃美己等耳。許登都天麻思乎。

保登等藝須。那乃畱與古呂波。佐美多禮迺。布良禰杼曾低爾。都由楚許保流畱。

無題歌二首

伎乃布氣布。阿春登宇都路婦。與能比等乃。許己呂爾仁多流。安治佐爲迺破奈。

阿布具倍吉。萬都乃美佐遠波。由紀志母能。波牙思岐與二曾。彌畱陪駕里氣畱。

憂思世事歌五首

木版本須衣に作る今須惠に改む。

安禮波都流不破能勢伎也乃伊太比斜志萬伐羅那例婆耶。阿米乃毛流良牟。

爲之加賀問。能夜末遁須惠乃可利陀耳毛。美知乃志流倍能。阿里登意破受耶。

豫能奈可乃。安伎乃之問之加。武散志能也。於保叡乃美等耳。幾里多知和多流。

起利藝里須。都圖利左世等破。布陀氣杼母。與乃都豆例遠婆。伊加賀斜數倍岐。

故登之安禮婆。久爾毛問飛等母。夜末多日流。曾保都爾爾太里。宇例波之乃與耶。

七夕歌二首

比許保志遁。都麻等布己呂耳。那里奴禮杼。伊毛爾阿不倍起。數倍能志良奈

久。
多奈波太乃。保思萬都雷與波。和岐天末多。布流佐等比等迺。和連遠麻都羅武。

八月十五夜歌一首

都伎餘餘之。與與志等米氐牟。美奈良禰杼。佐須賀許與比能。多知末太例都都。

九月十三夜歌二首

和備比等能。都伎美氐曾弊武。毛乃於毛飛乎。曾陛盡登久母迺。祖良爾位流良牟。
鬪起爾陀耳。志米利加知那雷。和我所涅乃。阿米二波伊登杼。怒禮末佐里鷄李。

送謫三宅島人歌二首

倭他乃波良己與由久布禰迺。可地與利母。許許路能加地耳。己己呂西與岐美。

伊豆能宇美於伎乃許志摩仁。余閭那微乃。加敝流遠幾美我。由久閉登母可難。

感情歌百首

士之不獲於國。猶如男女之不相得。故屈宋以來。騷人詩客。皆託詞焉。予爲皇國策邊防十數年。不翅不得施其效。遂由是獲罪下理。拳拳之忠。不得閔察。久幽圜牆之中。不知所告愬。豈能恝然於衷哉。國風百篇。聊寄情懷。詞無足觀。意或可取。然難示俗人。惟可爲知者閲之爾已。

許己呂美爾。伊佐也余婆波。夜末比胡乃。古多弊多耳世婆。故惠破怨志麻慈。

以爾志弊能。師豆迺遠太麻伎。伊登奈賀久。於乇非美多禮氐。古比倭多閭可

那

和我於毛比。乎伎乃思多破能。曾與等太尓。伊布比等安良婆。宇禮之可羅末之

和我許布留。比等乃古許路波。美豆難例也。以久可受加氣杼。阿登毛等麻良須。

信濃治邇。阿佐末乃多氣乃安斜麻之耶。毛由留希夫利能。多由流登岐那之。

伎美我多米。都彌志和加奈曾。禰阿之久毛。曾乃破波余鷄牟。免世也和我勢古。

阿良伊曾爾。毛能須所努例天。岐美我多米。比呂悲之加比遠。伎美免散受等也。

於路可斜乎。美爾志利都追母。奈都牟思之。末等布尓仁太流。和禮曾波可那伎。

本版本惠俗に作る今衣俗に改む

美知乃久能曾等奈留衣俗能所能遠古具。布年與里登富久。毛乃遠古蘇於母幣。

本版本斜波具に作る今斜和具に改む

志能比阿麻里。安賣理加不爾乃。余留波可李。曾涅爾美奈等能。斜和具胡呂可奈

於保宇彌乎。太耶須久和多流。由氣布爾洒。破夜久毛幾美耳。阿不餘志母加那。

倭我古比波。淤伎都志保可是。麻保爾宇氣氐。由久婦年難例夜。登末里思良連須。

本版本惠賊に作る今衣賊に改む又遠幾奈を於幾奈に改む。

衣賊志麻也。知之萬乃曾等耳。布爾宇希天。伎美之由流佐婆。於幾奈都里天武。

波留破流等。左加流伊都志麻。由氣布年爾。知加余類伎美乎。彌奴我倭比志散。

難波叡乃。美之可岐阿思迺。與能奈可爾。禰布加幾古悲能。破天乃之良奈久。

於毛飛都追。宇太多禰耳年氐。美之由貴乃。美波天奴波可李。雲岐毛能破奈之。

伎美我氐尼。和我久呂可彌波。布例禰杼母。於毛比仁意等杼。氣豆利和悲努累。

於毛布古登。太禮爾加都解牟。末須珂賀美。可夏奈良傳伎久。比等毛那岐與波。

布久可勢波。岐美我阿多利爾。可余弊杼母。古等都解也郎武。須倍曾志羅連努。

美知乃彌波。保杼毛破留加耳。遍多太例杼。許故呂波伎美爾。余利仁之毛迺乎。

和多都美乃。志保能夜保弊迺。曾古布可久。於毛比蘇米天之。故登波和須禮

本版本古保流に作る今古不流に改む

受。

等思都岐遠幣耳氣留古登能。可比也阿流。宇波乃曾良奈留。比等古不流美

波。

加比迺安流。宇良波伊豆古所。宇等破末迺。有得久波比等遠。於毛波散里之

可。

倭我古悲破。春美可麻耳志目。阿羅那久爾。奈杼加那解伎乃。可數乎都牟良

武。

登之古呂能。太要努於母比乎。古等二餘世氏。可幾奈良之天武。比等毛伎加

久耳。

都禮豆列爾。可岐奈須胡等能。年母古路仁。武可之能非登所。古比之可里氣

類。

都伎爾比耳。追毛流於母非乃。可勢那良婆。伎美我古許呂爾。布幾毛伊良末

之。
意所奈禮之。阿麻乃都利布年。古登等波牟。美流馬加累倍岐。可多也伊豆故
曾。
宇紀布之能。志夏散末佐列婆。奈與太氣廼。比等乃與左弊曾。可奈之加里希
類。
和多都美爾。安良努和我美乃。奈曾毛駕久。悲等能故古路爾。阿禮氐美由覽
武。
可受可受爾。許古呂乎胡免之。古登乃破遠。都游波加理多爾。安波禮東八美
余。
美波伎美耳。須天羅禮奴等目。登己等波二。古許路破岐彌我。加解登那里南
牟。
伎美遠於毛布。許己呂牟之呂爾。阿良婆姑蘇。阿多奈流比等能。底爾母末加

本版本雨爲鄉に作る今道比鄉に改む。

例米。
岐仁加幣之乇呂許之比等洒志良多末母破耶久波伊之能。奈遠於比志登
加
伎與氣例杼。久牟飛登乇那久美玖佐於布西以多爲乃美豆曾。和我太具比
奈類。
宇岐故等能。阿累登伎耳佐久波奈那禮婆。與耳有乃破難洒。奈遠也於布良
舞。
雲能破奈乃。宇伎豫等志禮杼。思加理等天。伎美之以麻世婆。曾牟可例那久
二。
於乇比阿磨里志能不等須例杼。保登等藝須。奈玖爾乎追比爾。比等耳思禮
都都。
伊都登天母波連努於乇悲爾。佐美多禮乃。布里波氐努良武。和我美可那之

門。
阿良遠多乎。須起加弊之都追。末太散樂仁。奈波之呂美豆遠。曾良爾太能末
牟。
佐奈幣等李。宇惠武登志米之。遠也末多乃。可希比乃美豆能。毛里天久夜之
伎。
能斜波倍乃。可是爾奈加留流。保多類比能。由伎加多志羅奴。古比母須流可
難。
和禮保之等。以布比等毛加那。有梅乃美能。登岐之須藝奈婆。淤知也都起末
之。
保登等藝須。都禮奈久可遠婆。等米受登母。於能例等爾保弊。也杼能多知波
難。
由久須惠遠。比等母志能陪等。太知波那乃。加乎里遠都伎爾。知宜利於加南

牟。

太知波難乃。加遠奈都可志美能知乃與爾。伊麻遠毛志能布。比等也安留倍岐。

阿波例等母。於毛必於許世餘。佐良怒多耳。安岐波散比之起乎伎乃宇半可是。

波藝我半難。阿起乃能可勢爾。宇知美多禮。於久志羅都由毛。思豆許己呂奈之。

遠美那倍志。阿伎等知藝里氏。幾美古受波。志保彌也波天武。破南乃比登等岐。

麻都余比能。安波連母布可伎。都幾可夏乎。與曾爾弊太都流。蘇羅乃與古君毛。

佐起久散迺。美都波乃登能母。志豆我夜毛。都伎二八和久留。許古路阿良盡

乎。
都伎美婆登。知宜利志比等迺。奈可良受波。古余非毛散古曾。阿破禮等於母
半免。
阿岐能余乃。乎布可幾都起乎。那加牟禮婆。蘇胡波可登南久。毛能素加奈之
伎。
伎彌耳古比。安岐乃與比等理。和禮乎例婆。毛能和弭志良爾。幾里藝理數奈
久。
登伎倭可受。起里多知古牟流。阿岐能曾良。加理母波可是爾。加氣所和豆良
布。
鴐利陀爾母。散波耳太能牟乃。奈遠於遍婆。安起乃由不陪波。於登都連天久
琉。
比登里乎留。阿伎可是斜武岐。由布久禮爾。古呂毛加里可禰。都幾爾奈久南

李。
古惠加例受阿岐乃余那豫難。余多陀奈九。武思母和我碁等。毛乃耶駕奈之
伎。
佐乎思可能。木美治爾曾與久。太都多夜末。多知爲毛之良耳。麻等布古能許
呂。
武散之能乃久佐波迺伊呂所。加波理由久。伊可爾布伎努流。阿岐乃可是可
毛。
於保加多能。夜麻迺許能波乃。都由志毛耳。以路加波留倍伎。和我許己呂可
波。
萬都遠美余都由爾志具禮二。素米努例杼。伊豆連廼阿幾仁。毛美治也波須
留。
美豆迺宇閇爾。有伎天奈賀流留。毛美地與里。波可那岐毛迺波。和我美那里

氣李。

木美治波八。可幣良奴美豆耳。宇加比氐毛。爾之岐登非等波。免豆留倍羅奈里。

和我美古曾。爾久可良米登母。倭我夜杼乃。波波蘇迺毛美治。阿波禮等盤美余。

倭我素低遠。伊可爾勢予登天。安伎乃阿米迺。幾能布毛希婦母。不里都豆久良無。

知宜利於伎底。伎美起末散受波。久禮奈爲二。爾保布木美治婆。知李也須藝奈牟。

登伎須宜天。可良受波多能美。奈可留陪之。阿岐波安良志乃。思解九耶波阿良努。

爾遠於毛美。可是耳麻加須流。宇伎布禰波。伊豆例迺有良仁。與羅武登春良

本版本於乎字美に作る今一寫本に據り世乎字美と改む

牟。

世乎宇美能。奈彌尼太多與布須天遠不年。余流陪奈伎彌曾。和弭之加里氣累。

宇氣加多伎。許乃底可之波能。不多於毛乃。比等迺古登乃波。許己呂志天起希。

可賀美那須。伊氣乃思美豆能。曾古萬底毛。彌由留波加李能。許己呂等遠志例。

比等能己登。奈都能迺志夏久。那利由加婆。由伎加婦美知乃。多要也之努陪伎。

奈都久佐迺。可李蘇免耳夜半。武須弭於岐之。波加那也可是爾。宇知美陀例都追。

宇治迦波乃。奈賀禮迺美豆乎。武須弭都都。太乃彌之可比毛。阿良奴余能奈

可。
駕勢波也美。志良奈未佐和久。阿萬乃加波。王多之和豆良不。迦斜左藝能波之。
新羅那美能。多知奈婆太知爾。奈登利迦波。那伎奈南良年婆。遠之氣久母難之。
余迺宇伎母。比登能都良岐毛。於母保要受。和我美爾於比之。都彌波奈二素母。
武可之餘里。加多利毛都藝都。麻米爾之底。宇登萬禮奴流磐。和例比等里可波。
伊登波禮天。與遠閉怒流美盤。阿伎可勢乃。君母布起半羅不。曾良二耶安酉良牟。
加里底布牟。奈都能乃久左乎。與所耳美之。以麻波和我美爾。於母比登利怒

留。
伎美耳和例奈耳波乃宇良二。須免婆可波阿多之比登爾毛。宇喜米美天氣
利。
宇登末之伎夜麻可都佐倍耳。多爾美豆乃於等志米良流留。和禮曾波可難
伎。
佐陀免奈九阿左耳由布陪爾。久母等奈里阿米等那李努留。余耳己曾安里
氣禮。
伎乃布麻涅比等能宇閉登曾。奈希幾許之以末波和我美等奈利二氣類可
難。
以等世馬氐和弭之起登伎波。余之能夜末倭氣天伊利希牟。比登乃美於毛
保由。
餘能奈可乃那美迺佐和藝爾。伎美能可地。多叡難婆和我美。伊豆知與良南

木版本字良美氏に作る今一寫本に據り字良美氏に改む。

牟。

加羅須多二。由布倍波毛里爾。可閉流奈里。和我彌與畱陪起。駕多也以豆許曾。

飛等可太耳。於毛比登里那婆。於保余杼乃。宇良美氐阿末能。美登夜奈畱陪伎。

伊加爾世牟。安須加乃嘉波迺。布知等勢乃。和多良努散伎耳。可波流古乃余乎。

難波衣迺。余之阿志和可底。與畱奈美爾。伎之乃宇毛例喜。久知也波天奈無。

和禮由惠登。於毛比等良受波。以可波加李。比登能許己呂遠。宇羅美王弭末之。

太能米氐母。於保都可奈之那。左散可爾乃。伊等與利保曾久。加可流美那禮婆。

奈可南迦耳夜栖加良末之乎散理登母等多乃牟許己路迺都可受阿里世
婆。
餘能南可遠志羅受可保二天。須碁之奈婆。奈二故登乎加波。宇之東那解可
牟。
予遠宇之等。古己呂爾志禮杼。思加須賀二。舜天南牟等波太。於毛比波難例
受。
伊登波之伎余等波志例杼母。由久須衞乃。志良禮奴加羅爾。許己呂比可連
都。
游九斜岐遠。太能牟古許路耳。古里須磨能。有良美武等之母。於毛波散李氣
利。
於毛比思留非等母阿里奈武。登之布等毛。能伎迺之乃不與。伊呂奈可波利
什。

登之古路酒那解紀毛都岐牟於母飛志晋比等阿里安氣乃余爾之阿非那婆

右國風一百一十六首

象山淨稿

安政二年先生自ら輯めたる文稿にして其の心事自序に詳なり。今其の原本を獲ること能はざれども先生の門弟北澤正誠氏の藏有せし淨稿寫本現に京都帝國大學圖書館に保存せらるるを以て本書原稿は主として之に據りたり。然もまま其の寫本と字句の異りたる所あるは後年に至りて先生の改稿せりと認めたるものに據りたるものなり。其の他箇箇の異本にて參考に資すべきものは別に之を欄外に注記したり。

詩一卷とあれども京都帝國大學に傳はれる淨稿本には之を缺けり。按ずるに其の詩は本全集中に收むる詩鈔及詩稿中に在るものの他に出づるものには非ざるべし。

象山淨稿敍

予嘗以謂大丈夫所以自顯於世者。在行事。何必區區於文章。以故雖有所述。往往不留稿。間存其稿。亦直貯之一嚢。卒不復措意也。洎吉田生獄起。逮錄在繋。禍未可測。始思士不幸中道而廢。可以擧其心事。白之於天下後世者。唯文章已。於是竊有惜文之念焉。既得定奪。禁錮故里。乃次第稿之存者。爲文三卷。詩一卷。繼此有作。當續錄也。別有獄中所著省諐錄一卷。雜文詩國風附焉。安政二年乙卯九月。松城平啓書。

象山淨稿　目次

賦　頁
望岳賦……九
永思賦……一一
春雨賦……一三
羣鶴應瑞賦……一三
感春賦……一五
琴賦……一六
記
象山記……一七
勿堂記……二一
不言園記代……二三
清風樓記代……二四
恭默齋記代……二六
正誼館記……二八
琴記……三一
先公手澤太宰府都府樓瓦硯記……三三
觀魚記……三四
有斐亭記……三五
重陽登高記……三九
藥廁記……四一
記演天砲……四三
序
送弱山壯吉序……四三
送蟻川生歸省序……四五

別梁公圖序……四八
送國分士達序……四九
贈小林炳文……五一
贈永山生……五一
贈片山西洲……五二
贈川路君……五二
贈柏木生……五二
贈齋藤子宜……五三
皇國同文鑑序……五五
孝經正解序……五六
文公短牘序……五八
竹下集序代……五八
邵康節先生文集序……六〇
增訂荷蘭語彙序……六二
星巖詩集序……六三
杉本生名字序……六四
竹荼文公壽序……六七
礮學圖編序（第二卷礮學圖編の部に讓る）
藥論序……七〇
遠西砲術略序……七一
八田養井翁壽序……七二
本朝銃家智囊序……七五
春秋占筮書補正序……七六
詠史百絶序……七八
琴錄序……七九
琴錄後序……八〇
省心雜言序代……八一
礮卦序（礮卦の部に讓る）

書

呈一齋先生……八二
與本多伯楙書……八三
答加藤士成書……九二
與呂谷精溪論士祭……一〇〇
與近藤篤山書……一〇二
與山口菅山書……一〇三
再與山口菅山書……一一〇
三與山口菅山書……一一三
答一齋先生論太甲在桐年數
尙書孟子不同……一二六
與安積艮齋論朱學管窺……一二七
復佐藤有鄰……一三五
與君毅……一三六
答竹村中甫……一三六
與菊池溪琴……一三七
與澁谷洒侯……一三八
復溪琴……一三九
柬桐山先生……一四〇
復桐山先生……一四〇

說

紹齋說……一四一
黃金臺魁首說……一四二
謙齋說……一四三
勉齋說……一四四
懼堂說……一四五
格堂說……一四七
序盦說……一四九

仁木佶嗣子名字說……一四九
象山說……一五〇
筆　說……一五一
柚　說……一五二
雞　說……一五三
又……一五三
盍徹說……一五四
孟子不取武成說……一五五
睽蹇說……一五七
青木樸字辭……一五七
題名
題安樂寺壁……一五八
湯澤題名……一五九
金澤四時總宜樓題名……一五九
蚊　喩……一六〇
鑑劑考……一六〇
溫壺考……一六一
釋　琴……一六二
書高野武盛卷……一六三
書加藤生卷……一六五
誡內山生……一六五
題跋
公所書磊々落々四字恭跋……一六六
書義人錄後……一六七
又……一六七
跋朱子答王近思書……一六七
跋泰西海戰圖……一六九
跋泰西陸戰圖……一六九

又……一七〇
書吁戒卷後……一七〇
止戈類纂跋……一七一
恭跋台德廟賜祖先安政札……一七二
跋佩刀……一七二
跋背旗……一七三
書賴子成邊防諸策後……一七四
書太古遺音後……一七五
跋心越禪師金澤八勝詩卷……一七六
洋錄合璧跋……一七七
跋徂徠書……一七八
跋熊澤蕃山眞蹟……一七八
跋石川丈山書……一七九
跋菱湖書……一七九
跋三岳先生墨蘭……一七九
跋宋墨爾……一八〇
跋李太白詩……一八一
跋郭有道碑……一八一
跋楊孟文石門頌……一八二
跋漢孔文禮碑……一八四
漢韓勅造孔廟禮器碑跋……一八五
又……一八五
漢史伯時孔廟後碑跋……一八五
孔宙碑陰跋……一八五
跋武榮碑……一八六
漢熹平二年斷碑跋……一八六
跋漢鄭季宣碑陰……一八七
跋褒斜道石刻釋文及題記……一八八

跋道因禪師碑……一八八
跋大雅集右軍書吳將軍碑……一八九
跋顏魯公爭坐位帖……一八九
又……一九〇
又……一九〇
又……一九一
又……一九一
又……一九一
又……一九二
又……一九二
又……一九二
又……一九三
又……一九三
跋玉煙堂顏帖……一九三
跋陳化成小傳……一九四
熱銅八十斤老檑地礮全圖跋……一九五
跋接彌利堅使始末……一九六
海防臆測跋……一九六
書片山西洲詩卷……一九七
書柚說後……一九七
跋浦賀紀行卷……一九八
跋湯子遺書……一九九
跋所臨醉翁亭記……一九九
跋善導傳……二〇〇
讀唐鑑……二〇一
讀淮陰侯傳……二〇一
示諸生……二〇二
又……二〇二

又……二〇三
跋自書皦卦……二〇三

墓碑

三居仁木先生碑……二〇四
故侍從眞田公墓誌銘……二〇六
女菖蒲壙記……二〇九

祭文

祭宮尾溫卿文……二〇九
祭心越禪師文……二一三
祭中村平當文……二一三
祭赭野山文……二一五

年譜

神溪佐久間府君年譜……二一六

雜

彌利堅棋譜……二三四

天保十二年夏か？

賦

望岳賦

登麗譙以高視兮、望青天之尾鴻、正澔澔以洴洴兮。思宇宙之無窮。循欞檻而周流兮、聊披襟而向風。原野遹其案衍兮。盤不廡蔌麥之芃芃。嬰長阜之隱轔兮、攢平林之鬱葱、神岳幅屴其特秀兮。槶嵐彩於穹蒼。儵惝怳而意欣兮。若相思之乍逢、釋塵緒之縈繞兮、舒廓然之沖情、濬穆穆以自得兮。欲攝身而舉翀。杳玆山之所體兮、寔瓌奇而寡敵、八面環瓏其峭直兮。若剞劂之以施抆拭赫鱧鱧以崎嶸兮、羌高大而莫能測、淩九天之閶闔兮。跨十州之疆域、抱滄海之瀲灔兮、帶大江之逼汃、羲和廼撫轡於阾閬兮。豐隆纔驅車於麓側、兒崑崙而孫嵩衡兮。鎮皇輿以立極。爾乃專山岳之雄長兮。納雩禁之禱祭。感精誠之芶芬兮、降響答之德惠、始膚寸而出雲兮。旋觸石以霈霈。忽交覆而雨九隅兮。甘澤浹洽以淫滴、濟飛瀑之潏湟兮、似天潢之霣墜、泐幽隙而鼓傾碕兮。激石霤

之礚礚陟山冢以徊徨兮。遇宿雨之新霽。捫星斗之爛斑兮。觀海日初湧之變態。灌歙艴其電閃兮。現車上之寶蓋。時騰起以熀熀兮。暎黃雲之靄霨洵神生而鬼出兮。目冥眴而精昧。遠駭鴻洞之天籟兮。廼撟首而睎題。羣仙集於天末兮。雙闕竦於雲際。惚瞟眇以勿罔兮。象蜃氛之髣髴。於是鍾坤靈之富有兮。輿寶藏之鬼莪。燿琨瑤之玢豳兮。雜瑯玕之槎枒。歛金碧之煇煌兮。豁洞穴之谽谺。玉體溘溜於巖竇兮。丹芝敷英於澗阿。蒸靈液以噴煙兮。鬱寶氣而流霞。窮神麗之瑰異兮。匪布陳之敢誇。苟斯境之得遊兮。何懸圃之足多。惟人生之淹忽兮。等蜉蝣之飛舞。縱率黃乎蒼。能幾時兮。憫世俗之長苦。逝迫隘而淑郵兮。罔賢哲之所與。雖罹謗議之喧囂兮。豈可與草芥而朽腐。吁嗟乎我其將駕風雲而鞭電霆兮。披丹霞之輕裘。靡蜺旄之襂纚兮。拽氛旗之蚴蟉。逴六漠而攬八荒兮。道夫巔而駐軔。斞玉泉之靈液兮。采石芝以自羞。步夾雲之金闕兮。登中天之瓊樓。召徐福於東溟兮。迓安期於瀛洲。起神女使鼓瑟兮。發大和之古

謳出蓬萊之巨鼇兮。排陰經之潛虬。永婾樂以度世兮。與太清而爲儔。

佐藤一齋曰。余讀古今人望岳諸作不少。而未親似此賦之富贍有力量者。

永思賦

稟二氣之靈秀兮。生神州之衍沃。際天運之昌熾兮。浴皇化之優渥。雖寒微而在遠兮。敢爲邦而忘忠。愾犬羊之闖我兮。愍舟楫之多難。窮人理之終始兮。究物情之源流。悟反否於泰繫兮。徹覆遯於臨繇。借浮雲而上征兮。睨山海之疆理。指廣狹之險夷兮。數出沒之島嶼。忽翺翔而逾遠兮。託迅飆而周流。歷五州之離合兮。知坤輿之若毬。乃至赤縣之壄兮。憑高丘以四望。氛霧泱其蔽海兮。日月黮其罔光。自英戎之構亂兮。歲四周而未靖。壯者糜爛而膏土兮。老弱哀號而悲哽。何周孔之上疆兮。罹醜虜之蹂躪。事必有其所繇兮。宜訊審而思愼。彼伯多之桀起兮。于窮髮之荒穢。運宏規於遂淵兮。收低邦之精藝。造大艦與皇礮兮。嚴守禦之戎衛。竟警內而威外兮。垂偉績於百代。惟神州之逴躒兮。位

萬方之元首。雖疆宇之不甚廓兮。極民物之富有。況君臣之圖治兮。夕惕厲而如懍。絕意必以從人兮。仰神聖之前烈。宜鑒西淸之致衄兮。思夷主之樹基、起趾城之岌峩兮。範神器而成隄。抗靈威於異域兮。流美利於海涯。夫重明之燭幽兮。固姦慝之靡容。苟謀猷之云臧兮。何神人之不從。嗟吾生之側微兮。抱此懷而窮居。漠絕聲而竄端兮。傷初志之廢蕪。欲進取以嗽詞兮。孰能聽而爲媒。撫長劍而歎喟兮。心怊悵而永思。願假酒以盪情兮。謇鬱鬱而弗舒。

嘉永元年三月書したるものあり、作年不明。

春雨賦　以潤物細無聲爲韻

玄武移躔。蒼精出震。韶景呈和。條風致信。華滋之意漸萌。長養之機轉進。晨銷殘澌。驗暖候於水流。宵結浮陰。考雨徵於月暈。期旬日而不爽。沃野淋浸。不崇朝而克施。平田浹潤。爾乃霏霏似煙。細細如髮。籠罩亭臺。漂搖殿闕。初滃靄以廉纖。旋陰沈而軋沕。狀欲止而乍縱。勢將揚而還詘。浥曲岸之高低。灑長林之蓊蔚。奇如絺繡而依稀。淡類畫圖而髣髴。既勸發歲之農功。復宜艷陽之景物。

時則上林鶯嬌。南苑花麗。水颺輕煙。草抽長帶。弱柳婀娜。刷翠黛於瑤臺。天櫻爛漫。鏡紅妝於錦砌。入柳有跡。聯露珠而粒粒皆圓。濺櫻無聲。隨風力而點點殊細。添畫檣之飛溜。清琴激哀響之離披。泓水之晴波。幽鏡織圓文之連綴。若夫廿森初霽。輕靄微驅。日臨紫陌。霞彌紅衢。天穿蝸屐。人駕寶駒。草隄行小車轍如細乩之闘。香徑著幽鳥滑似凝脂之膚。露濃花臉未曉。塵動馬蹄猶濡。濕香襲遊子之裾。拂之途駐。空翠滴行人之袂。認之卻無。莫不愛春光之駘蕩。樂品物之昭蘇。于斯時也。耒耜爭出。畚鍤競興。歡溢飯牛之翁。野多喜色。慶騰饁畝之婦。塗載頌聲。隔墟而喚童。得非東阡課稼。循溪而飲犢。知是南陌催耕。瑣菜綺蔬。泛上花而吐翠。瑞麥祥禾。應天澤而迴青。覩蕃鮮之遍野。卜黃茂之如京。粲萬方之美利。兆九有之豐亨。足以表王休之嘉淑。匪止資大造之發生。

隼鶴應瑞賦

頭注せるは眞田家所藏の原本なり。

治教合訓。政養契謨。三辰齊協。萬葉昭蘇。麥畝餘糧。見珠芒之紛若。稻田臥穟。

璀如は璨如、肸蠁は芬馥に作る。

絡繹連牽は綽約遷延、蕩瀁は曠蕩、繞は巡、高城は高墉に作る。異稟は異性に作る。作經は傳經に作る。傳腦蠹成骨之名は存腦：名、何は突に作る。竹畔は竹下、西は消、林下は林際に作る。形勢は高峻、冠日域は挺中國、寵嵷は葱瓏に作る。照は暎に作る。

搖金穎之璀如。粢盛肅供。而肸蠁溢廟。衆庶足食。而歡欣載塗。深仁感孚。民既知其禮節。懋德宣達。天亦酬以嘉符。時維收成。氣迻肅爽。引商飆之颸颸。捐衆陰之氛埃。日輝澂清。天宇開朗。皐鶴時臻。連聲遠響。千廬繡錯。共望靑霄之聯翩。萬井雲鋪。同聆紫蓋之嘹吭。始騰騫以振翰。旋宛轉而舒頸。絡繹連牽。儴徉蕩瀁。繞高城之崔巍。集晴郊之平敞。原茲靈禽之受命。諒得異稟而誕生。因西兌之金氣。依南離之火精。固天數而多壽。亦自養以延齡。淮南作經。標形化生乇之事。抱朴遺說。傳腦蠹成骨之名（原本ノママ）。宜乎紀上瑞於六典。何翅亞嘉祥於四靈。爾其遊遐阡。戯邇陌。或連軒以鳳蹌。或振迅而龍躍。風前聞唱和之韻。似吹豳雅正聲。月下覩婆娑之姿。恰是簫韶妙樂。松顚竹畔。巘翎時疑白雪西。林下水邊。傾頂乍恐丹沙落。羽毛極其華藻。豈曰舊依山澤之癯。骨相已非尋常。定知骨對蓬瀛之客。維信山之形勢。冠日域而寵嵷。峭壁層陰之堅冰。九夏凝石。嶢峯絕頂之積雪。三伏照空。是以當秋氣之蕭瑟。促司寒之神功。霜皚皚兮灑落

以は衙、龍は爲に作る。爲降は監降に作る。

躍は躍、詩は詩、耀は輝に作る。

縣は縣に作る。

天保十一年正月。朱先生賦と題せしもの從來逸して傳はらずとせしが天保十二年閏正月十九日山寺宛手簡よりて察すれば

木風慄慄兮吼枯叢。鳥藏巢以閉戶。獸伏穴而絕蹤。胡能羽宗之胥集。便是天麻之爲降。於戲煦嫗所及。彰品物之融怡。覆育所加。致羣生之茂淑。乾坤改象。豈煩鄒文扣絃於師門。日月回春。非假鄒衍吹律於寒谷。暖風徐漾。旣盈瑞靄於西疇。仙鶴髙飛。復動祥光於東旭。于以鳴寰宇之太平。賁國家之和穆。是知靈通於神祇。誠貫於人天。宜宜爲典實。且播在詩篇。章安白鳩。吳臣之錄久不朽。雉縣神雀。漢帝之詔今尙傳。臣幸際盛美。親在陶甄。慶休徵之暎後。誇靈寵之耀前。虔頌天祥於永遠。兼祝君壽之緜延。天保十年。歲次己亥。南至日。臣佐久間啓頓首拜上。

感春賦

何芳春之令月兮。悸余心之獨惕。游道林幾二紀兮。無嘉猷以輔辟。守蓬蒿之壞室兮。哀年歲之弗再。俟河淸曷爲期兮。閔日華之晻曖。井胡渫而不食兮。擅其伐而在于心。恇憐以求援兮。孰衷情之可宣。斟罇酒以自弛兮。慰余懷之憀

此の感春賦と異題同文なるを知るべし。

戻。出蓬戸而相羊兮。聊負手以遊睼。原隰蔵其蔥茂兮。訝朗景而方綠。水奔濛以滉瀁兮。木吐芽其如沐。煽香飆之嫋嫋兮。搖朱英之蕤蕤。王鴡萃以鼓翼兮。鶬鶊鳴以喈喈。心感發而逾悚兮。意愴怳而增傷。乃盤旋而歸室兮。涕霑襟之浪浪。彼動植之末微兮。猶有恆以逑時。矧人類之靈秀兮。何勤脩之暫衰。省朝聞之聖謨兮。憬憒惱以勵志。履洛閩之景行兮。比璠璵之貞粹。追任摯以同懷兮。循賢回之攸服。苟明淑以進寔兮。庶俛仰而不愆。亂曰。道眞寥廓蕩無垠兮。惟敬靡失斯在人兮。炳體洞用業之修兮。窮神知化學所優兮。大鈞造我必有命兮。逑時罔具辱莫病兮。成器藏身世足賴兮。時乎不至夫何慨兮。

琴賦

爰有物焉。生於山阿。列于高位。其圓象天。其方法地。若鳳而長身。似龍而有翅。其動也微妙。無形而不可覩。通于神明。協乎四氣。潔靜而盪邪。中和而養志。夫妻以至。燕饗以成。祭祀以備。天下棄之則淫。尚之則治。臣惛而不識。敢請之虞

帝帝古之日此夫初生達。既而從繩者與。澤其貌而楊其腸者與。有嗉不能自聲。以蠶絲而鳴者與。性端理而德和平者與。友之則可以導德。翫之則可以宣情者與。樂之統也。器之重也。人心待之而後能正也。天下待之而後有慶也。純古澹泊而至美也。夫是之謂琴理。

記

象山記

頭注せるは本文より更に後の稿と思はるるものなり。

天保十年

象山在信之松城西南數百步之外。前低而後高。其狀似象。因謂之象山。承應中明僧木菴歸化。嘗來于信。爲寺於是山之麓。名曰惠明。亦以象山之扁揭焉。以其東面。脩竹成林。紺聯綠漪。彌望如靄雲。故亦名竹山矣。蓋山脈自西南而横出中開三降三稠。北延而盡。其最高者爲南峯。其次爲中嶺。低者爲北阜。一溪從山勢南來。過其東而北。曰神田之川。水甚清澈。其流之急迅。激石而鳴。響如佩玉其蓄而渟者。可鑑毛髮。登山有二道。竝達於北阜。而皆非由此溪。莫能

數百步之外を削る。

靄雲は族雲に作る。

中開三降三稠を削る。

有二道は東北二道に作る。

其一は其從東者に作る。
不知有暑は絕無暑色に作る。

其一緣溪は其從北者由佛寺皆取徑溪に作る。映徹は射之に作る。作羅縠紋の下に殊爲淸麗の句あり。十步は二十弓に作る。

前焉。其一度溪無橋。水中礀石錯落。躡之而往。西崖卽爲山足。得小徑而上。左右皆蒼林碧樹。時雖盛夏。不知有暑。道半腹。沙磧沒踝。山更嶮峻。乃扳蘿捫葛。傴僂而登。一失足輒仆。過十數步。斗折而南。徑漸坦夷。徑東有五松樹。大皆連抱。礧砢鬱盤。拖拽軒翥。怪偉殆不可狀。每與風搖蕩。聲震溪山。其根擢地一二尺。蟠屈成形。若榻若牀。可坐而琴且奕。自此復折而西上。乃出于北阜之南。其一緣溪而北。水蝕路幾盡。行者不得比肩。必魚貫焉。行不過二百步。路始開廣。得一橋。橋下溪流稍緩。小石平布爲底。水粼粼行其上。日光映徹。時作羅縠紋。度橋循崖。磬折西行。乃得山麓。麓之北。隔一徑不能十步。全石特立。自爲一山。曰離山（ハナレヤマ）。其上戴土。古木叢生。蒼藤蒙絡。中有諏訪神祠焉。臺殿亦頗魁傑。可觀。自山麓。曲折而上。約可二百步。回視離山。最勝絕。路傍又多黃精・牡鞠。其苗可采而茹。復上三十步。忽得平處。是爲北阜。眼界極明逈。西眺淸野（キヨノ）（地名）。村墟井落。歷歷可指數。東望淸瀧（キヨタキ）・尼巖（アマカザリ）諸山。松杉若薺。飛瀑如綫。僧房民屋布置。類善畫

所描而下則闤闠四達士女往來萬家煙火收之襟帶而城樓堡塢。隱見於茂樹交陰之間其外則千曲北滙犀水西出所謂川中島者。寬衍平博。如視諸掌上緬想甲越戰爭英雄授命處有不勝感慨者正北揖戸隱稜廉如劍。特出干霄卓絕衆嶺莫與爲伉儷者即世所稱劍峯。而其直下。赭堊丹青。間錯於蒼芒煙靄中者不問可知爲其善光寶地也。北阜南下。草徑演迤。忽又直上數十武。孤松傑立翠蓋拂雲其下稍平細草覆地可盤旋而遨。其上危巖墻峙。曰天狗巖高二丈許乾蘚交封青碧如織間生石蓮華特爲可愛。沓徑歷其巓而上。俯瞰山足如井底使人愕眙不能自保復從阜南履岐徑。西入灌莽。五六十步。至中嶺之下古松怪石攢植駢列。蘭卉綴之。妍茂紛蕤。恍若畫圖。最爲山西奇處。但病山甚險不可賞足耳。中嶺地勢頗夷曠。北有小丘。狀如臥橐駝。上生疎松蔓藥冬夏常鮮靚其東即爲竹林西邊翠光晶熒。照人衣袂固可愛玩。而以其竿不甚長望西條諸村於梢端尤爲殊勝。南峯又直其前。貞秀淸圓。如吉士拱

開生石蓮華特爲可愛を削る。

夷曠は夷宏に作る。

晶熒は晶瑩に作る

拱而立可敬而不可褻予嘗欲爲亭以賞其勝取何敬祖遊仙詩語名曰懷貞而未遂也循丘背度陘峴俛入蒼翳數步少下而復上乃抵南峯之巓平處不盈數丈四隤皆嶄絕不生雜樹白茅叢布如罽倚立坐臥無弗宜者蓋是山雖不甚高然至此而四睇則數郡之疆土皆在杖屨之下而遠近諸山環擁獻秀紫翠疊層不可盡數雖其峻岑嶢峯亦皆如欲見事之而不敢下視者方知是山之神秀奇特固不可以衆山比擬也予家世住於是山之東北距其麓百步而近所謂中嶺者當堂之南檐以故一山之諸勝不煩指呼大抵爲吾所受領若夫風雨晦明之狀雲煙花月之態以至遊人之旁皇禽鳥之飛吟則有一日之際怳惚變化不可得而窮者而吾講學於其閒適足以逌然自得樂以終身但所憾者境土非舟車之會欲觀四方豪傑之士而末由也已歲己亥來遊於江都以爲此天下之所輻輳可以觀四方之士乃寓居焉而是山之勝固亦不可忘發之夢寐無以寄其遐想因燕閒記其大略時而觀以自娛矣然亦卒不

於下ヶ池時代か。若山壯吉名は勝、勿堂と號す。美濃岩村藩の儒となり後幕府に事へて昌平黌の儒員となる。

能遊適於其間盤旋箕踞以極瞻眺之樂則眷戀之情未嘗一日不在於懷也。夫物不可得兼非天道之常乎苟四方豪傑之獲見雖不在是山其爲樂也蓋多。吾固可以無憾矣然此亦有不可期者焉則是山之勝將何時而忘情也哉。

勿堂記

巖邑文學若山壯吉顏其講誦之所曰勿堂友人象山子見之曰斯取四勿之訓邪夫天理與人欲爲消長私意氣習之既克則必本體全德之是復矣此固學者之所宜警省也。然是訓也顏子獨得聞之而其餘之諸子未之能與則亦豈易言哉今之後生晚進稍能記誦訓詁則皆輒言之而不復知其循序致精也及質其所謂非禮則未有不逡巡而拑口者矣。是何以異於夫說奥東肥西。孰不知奥之爲東而肥之爲西耶。而至其山川之條理。道路之曲折。井邑之廣狹土田人民之饒瘠多寡。雖穿草莽入荒穢者其閒猶或恐有遺漏焉。況乎未親經歷而能悉之者。吾未之聞也。夫天下之事。固有非禮而似禮者矣。亦有禮

而似非禮者矣。又有或時用之爲禮。而恆用之爲非禮。恆用之爲禮。而或時用之爲非禮者矣。其條支萬殊。至於不可詳悉。使非夫格物窮理之功。盡之於平日。而其至明之所照。已無蔽虧之患。其至健之所決。略無凝滯之失。於天理人欲發動之機。不待議擬而剖判焉者。則其疑似幾微之際。孰能割然中節。而無所乖離哉。彼其所謂非禮者。有未辨明。而規規欲是之勿視聽言動。是亦私意焉爾。氣習焉爾。何以能克己復禮。而爲仁哉。是故未盡於格物窮理。而徒以求至明至健者。愚也。未致於至明至健。而徒以察天理人欲者。妄也。未察天理人欲。而徒以欲非禮之勿視聽言動者。亂也。愚與妄與亂。其於顏子之學也背矣。故夫非禮之勿視聽言動者。其要在察於天理人欲。察於天理人欲者。其功在致於至明至健。致於至明至健者。其本在於格物窮理矣。壯吉曰。嗚呼。是吾之所志也。子知之。其遂書之。以爲玆堂之記。

不言園記代

以醫仕於東叡法親王者。曰大關伯悌。性愛桃。植數十株。名其園曰不言。蓋取於不言成蹊之語也。而來謂余曰。爲孝之愛桃。則出於天性矣。而桃以仙木稱之。而醫家以濟壽爲務。則寓意於茲。亦可乎。敢請有一言以賁丘園。余曰。然。桃有仙木之稱矣。然是皆出於道經異籙。而其事殆乎荒唐。固已無足取者矣。雖

二日は三日の誤か

然。寓意焉爾。又何不可。且聞伯悌之生。在三月二日。乃世之稱爲桃花節者。則顧有其氣之與桃。自然相感孚者也歟。則愛之酷深。固將有不容乎罔者也。然余猶有一言者焉。夫泛玩諸外。不若深觀諸內。抑夫理一而已。雖散在乎萬殊。而其本皆具於我矣。天地之升降。日月之盈縮。四時之推敚。雨露風霜之變化。

體一本軀に作る

何莫而非我之所具者。則夫桃乃亦固我之同體也已。故當春陽回。而楨幹之杪。花葉如一。則我之與道爲體。精神暢達。周流而無閒者。可觀也。秋氣至。而蕡實稍熟。色足香美。則我之隨時致功。累積漸進。以成其德者。可觀也。雨露灌漑。而萌蘖沃如。則我之攝神。而養氣者。可觀也。霜雪忽降。葉脫而色不艷。則我之

復命歸根。而反於沖漠者。可觀也。果如是則語默動靜。出處進退之際。見桃則自有所省於內焉。而所以悚動其志氣。勵責其依阿者。固已資於學業。而於醫已之道。將亦無出於斯也矣。傳曰。誠者非自成已而已也。所以成物也。伯悌誠能醫已矣。則其醫人。其亦易易耳。然則藉令斂其華而藏其能。塞其兌而閉其門。人之趨而歸之。猶之桃李之不言。而其下自成蹊也。奚疑乎。雖然。自非憤發忘食。日新積功者。亦未易語此也。伯悌其亦思有所自立哉。若夫摭華弄艷。以爲遊觀之美。吾不屑爲伯悌道之也已。

清風樓記　代

岡田藩。鹽尻子讓。作樓居之。名曰清風。而請予記。予惟。風之爲物。起於空谷之閒。揺於浩蕩之際。塵埃得之而飛揚。草木遇之而披靡。雲霧煙靄。隨之而解散消釋。故潔齋萬物。莫風若焉者。然其或變焉。則爲噎爲霾。爲暴爲颶。爲羊角。爲扶搖。如是者。不可一二數。則其清豈可必乎哉。而獨以清爲言。顧子讓亦寓意

耳。夫世衰俗降。爲士者。類多外良而內毒。奸狡譎詐。惟利是計。依違反覆。以壟斷相與。猶之塵之聚也。草之蔓也。雲之浮也。而人亦莫有非之者。則世道之荒穢。蓋至於此而亦極矣。子讓陪從諸公子。而久遊於予門。予觀其平日所存。取予不苟。廉而有恥。正與世俗相反。而今以清風名其居。則將亦無有意乎倡世焉乎。雖然風之動物。未始有意。而物之得風。不得不動。無他焉。感觸之際。有不容乎已者也。夫不亦曰。君子之德風。小人之德草乎。吾之所存者。精誠純實。而發見於言行樞機之間。人之從之。固將靡然有草偃之勢。然則人之所以未之能從者。則吾所存者之未誠也已。子讓果欲爲世之倡。尙滋明其心。而潔其身耳。吾能明其心。而潔其身也。其孰有不應其倡者乎哉。抑子讓自公之暇。燕息玆樓。乃清飆生座。肌骨灑然。環樓之嘉樹美竹。爲之披拂振動。掩苒爲態。子讓倚檻而觀之。其亦有所得乎。予將益助子讓之志也。乃復爲清風之歌。以系之。又屢歌其變。以警之。歌曰。

風之穆穆。于樓之中。君子于處。以潔其躬。風之淸淸。于樓之外。君子于興。物解其穢。

勿謂常穆。或時以愆。勿謂常淸。或時以變。或時以變。其暴其颶。有翼君子。求中其節。或時以愆。其噎其霾。有翼君子。胡不自誠。

恭默齋記代

昔者元文寶曆閒。有關思恭氏者。以善書名於世。其師爲細井廣澤翁。翁嘗書恭默二大字。與之。思恭以爲齋扁。蓋取之商書焉。思恭晩歲。擧其扁字。贈之其高足弟子吉川中務卿君。君於是乎。遂揭以爲號云。君家世爲東台法王坊官。今大藏卿君實爲其令孫。頃復取其故號以揭之。乃屬予記。予惟。思恭名躁於一時。其門徒繁。蓋可知矣。而中務君獨獲其扁號。則不翅其書法爲美。而平素言行。亦必有大過於人者也。而今大藏君。以祖考之故齋之故號。猶不忍改之。況於其訓督戒辭。固當尊奉敬持。無所不至。則如恭默之義。將亦無有待於予

焉一本也に作る。

言然勤勤焉、蘄而不已。予又烏得無言乎。夫君子之學。不過立誠而已矣。而恭默、蓋其功也。譬之水焉、誠猶源也。恭默其濬之者也。譬之木焉。誠猶根也。恭默其植之者也、水不濬則源竭、木不植則根槁。人非恭默誠則息矣。是以自古聖賢無時無處、而不以恭默爲事、思道之功。寧獨高宗爲然。蓋恭默則整齊。整齊則能敬、敬故能誠、誠故能明、明故可以周衆理而應萬事矣。苟其不然。汨然溷乎其中、騷然動乎其外、貿然措之於事爲、雖欲其不至于錯亂不可得也。學者其可不自省乎、抑世之爲恭默者。吾悲焉。傾巧以同俗。矯默以餂人。冀人之悅己也。輭媚其色而取容、慮人之覘己也。遮蔽其中以自誣。外假恭默之名。而內以行自私自利之實、嗟夫所謂誠者。又何由而能立。則亦無怪於顚倒繆戾。而終無見乎聖賢之道矣。故立誠必在於恭默。而又非誠則無以爲恭默也。彼老聃所謂知其雄、守其雌。知其白。守其黑者。若近乎恭默。而猶未免於有爲也。則非其至者也、必也無所爲。而後能至其極矣。有爲是爲私也。私則僞。故誠無所

爲無所爲。故不可掩。夫篤恭而天下平。誠之不可掩也。而恭之道至矣。天何言哉。四時行焉。百物生焉。誠之無所爲也。而默之道極矣。嗚呼。非聖人之至德。其孰能與於斯哉。大藏君肅然斂容曰。大哉恭默之義也。固非不肖所能及。然既承教。請不敢復有所遺忘。大藏君。名舜有。字子常。溫良恪謹。好學不倦。蓋有志於道者也。

大藏卿子常。見示其所藏。林羅山手抄。楊誠齋集。及廣澤恭默匾額於公署。是日君有事。姑置之署。其夜適災。極倉卒不救。服玩器用。蕩然烏有。而羅山廣澤筆蹟。則以其在於公署免焉。噫物之存滅。其有數爾乎。是亦不可不記。

正誼館記

古昔聖賢之論治者。必以道義爲務。而不以功利爲言。是豈高爲空疎之譚。以眩惑人聽。而甘受世之嗤詆也哉。蓋道者天下公共之理。而義則吾心之斷制。

所用以處此理者也。人苟有得於此焉。以爲君則仁。以爲臣則敬。以爲子則孝。以爲父則慈。凡彼我之間。無一不得其分願者。是故蘊之爲德行。措之爲事業。見而民莫不敬。言而民莫不信。行而民莫不說矣。然則道義未始不功利也。然而其不以是爲言者。蓋以是爲言。則人之行道義也。不免有求功利之心焉。一有求功利之心。則其所求未必得。而其害必至矣。是古今霸者之國。所以其上雖富下必虛。其兵雖強民必弊。其見效雖或速。而其流禍至久而不已也。漢董氏曰。仁人正其誼而不謀其利。明其道而不計其功。眞可爲天下之法矣。聖學不明。治敎壞隳。士大夫狃於積衰之俗。而不復知有道義。其所以爲心。不過於詭祕誇詐之間。則軒冕之圖。其不淪於夷狄禽獸者幾希矣。道有宋洛閩諸君子出。而後學者始得復聞聖賢之至論。然求其志之篤。而行之力者。或寡矣。嗚乎。若吾藩執政恩田君公準。則殆其人也。聞以正誼名其居。而俾啓記之。曰。吾少時不多讀書。至今悔之。旣亡及矣。然於董氏之言。而有省焉。故輔政之際。不

任智數。唯義理之當否是察。然其察之也不精。而守之也不固。是以功利之念。雖曰絕之。而未能無不絕者。道義之心。雖曰操之。而未能無不操者。顧吾之謭弱。其不振也如此。乃今以是名榜之。蓋將退食之餘。居處出入。常目在之。以戒其怠忽。吾子幸貽之一言。庶乎其有以自勵也。啓惟。君之所以擇名。固已美矣。而其省察之密。戒懼之深。則亦世之號爲鉅儒者。皆有愧焉。且猶不輕自與。而必果於下問。是則尤非今之從政者所能及也。乃拜而對曰。此固啓之所願學者。且自彊之不暇。而尙爲夫子助哉。抑嘗聞之。人之負大任。惟有浩然之氣。而後行事勇決。無所畏怯。若其或不然。則一時所爲。雖未必不出於道義。然其體已有所餒。則亦未免於疑懼。而不足以有爲矣。而是氣也。非可以一朝一夕之間。掩襲而得之也。蓋必其所行。皆合於義。俯仰顧眄。竝無愧怍。而後可發生焉耳。然亦非先卽其事物。而知其是非。則又何以望其行之皆合於義哉。此乃孟子之知言養氣。其次序前後。所以不可得而亂也。君誠能察於此。而推極究盡。

以明其理、漸積集養、以充其體。二者各致其功、而不已焉、則將有其心之明。固足以燭天下之故。而其氣之盛、大流行、亦有配乎夫道義矣。然則其履盛位而行大事、亦沛然行其所無事。譬如智勇之將。勝敗得失。已洞見於心目。而貔貅百萬、皆奉其號令、勇往直前。所向無敵而已。又何不振之有。願書此言。以記其壁。且因拜見之次、而取規於此焉。啓亦庶乎其有以自勵也矣。

天保十二年春

琴記

梁川公圖、數爲予言浪華野村乾一之爲人。予既識之矣。天保庚子夏。乾一以職事來江都。偶與公圖過予於玉池之上。譚咲半日。相與品評古玩。增信公圖之言。乾一誠質直者也。博古而精辨者也。於是締交、有如舊知。一日謂予曰。吾所祕藏、有古琴一張。金徽而玉掌。漆光沈而蛇蚹起。間一撫弄。秋潭月澂。而滿林風露也。鸛鶴回翔、而雨霰夜至也。其清越殊不可言矣。吾以重購獲之於泉南飯氏。飯氏之先。得之於黌僧竺庵。竺庵得之於清刑部尚書張某。傳爲唐高

宗時物。詳見於笠庵手記。大和法隆寺。舊有唐雷氏琴。爲天下之名器。吾嘗負所獲。往而比照之。漆色斷文。略無彼是之別。但彼款識儼然。而此則無之耳。然至其雅韻潤亮。毫無敞颯之聲。則恐當以此爲右矣。聞君深於琴道。願有一言以記其略焉。予以法隆寺之琴。舊爲畿內諸琴之冠。而今乾一所得。則能與之相頡頏。疑其誇耀之或過乎實。然而乾一誠質直者也。博古而精辨者也。安有自欺欺人之妄哉。因許諾之而未及爲也。明年春。攜一琴而過予曰。是近日所購。君其爲我鑒之。予諦視之。裁製孔度。其上池銘曰。崇禎某年。某姓名造。試一鼓之。發音寥翏。如出金石。蓋佳品也。余贊稱不措。乾一咲曰。君不見吾舊藏爾。此雖較優於常琴。然視之於舊藏。不啻瓦缶之與洪鐘也。予於是知尤物之不易臆議。而益釋然於乾一誇耀之不妄也。乃抽筆以其語予者記之。予久有西遊之志。而因循未果。如微天之福。異時得逍遙其堂。親視其狀。而手撫玩之。倘能爲之記其詳。

嘉永五年十月

先公手澤太宰府都府樓瓦硯記

先公嘗謂三村養實曰修理雖多疵瑕亦英雄也臣聞之感激流涕以謂其多疵瑕者臣之實也而英雄之稱臣何敢當然以先公之明而日以英雄其爲光榮果如何哉固亦知千百其身尚不足以報其萬一也雖然臣豈徒感激流涕而止乎其講究詩書六經欲以明其體也其歷觀史子百家以泊泰西之學欲以達其用也皆莫非所以圖報萬一也然才質不敏其志未及償半而先公淹捐館臣嗚呼痛哉嗚呼痛哉臣無復有望於斯世矣十月丁巳今公忽傳命賜臣先公手澤太宰府都府樓瓦硯一枚臣於是又感激流涕以謂今公其亦知臣歟舊例賜先公之遺品閑散之臣不與焉臣今以閑散與之實出異數非公能知臣之所以辱先公之知何得有此然則今公亦先公也已而今而後償其所志以盡忠於今公乃所以報先公也已矣嗚呼令臣之無望於斯世者再有望於斯世其亦將不在先公手澤之所存也邪

觀魚記

天保十年八月

象山子寓於江都。其宅之前。舊有一沼焉。己亥夏。久不雨。暑甚。沼爲之涸。鱗物卒死。底皆龜裂。蓋如斯者兩月矣。逮秋八月雨五日。於是水始畜。閱一日又大雨。於是水寖多。其翌又雨日夜。於是水滋多。雨歇。門人忽報曰。沼有魚。乃出而觀之。大者如指。小者如箸。其數不知爲幾十百。而潛躍浮沈。分隊成羣。似各得其所而樂其生者。蓋亦奇矣。門人曰。天雨之歟。抑人放之歟。何其夥然衆多也。象山子曰。否。非天雨之也。非人放之也。是所謂氣化者也。是可以觀天道流行。神妙而無方矣。是可以觀萬物之生長。不有纖毫之停息矣。是可以觀吾之爲學。亦不可以有斯須之間斷矣。小子識之。雖人之良心。豈無是生機哉。但其所爲梏於事物。斲喪戕賊。反覆無餘。是以頑嚚不靈。如彼憒憒也。然其生機之原。本係于天。終有不可得而停者。則其既往之所亡。雖固已不可復追。若其自今而盡力。以保之於將來。豈遂不可復得其養耶。門人未達。象山子曰。主一猶沼

頑嚚一本冥頑に作る。

也。義理猶水也。心猶魚也。外誘猶網罟也。故人之心也。畜之以主一則存矣。涵之以義理則養矣。而不擾之以外誘則美而大矣。夫是心而不畜之以主一猶無沼而畜魚也。魚可得而存乎。主一而不本於義理。猶有沼而無水也。魚可得而養乎。本於義理而不去夫外誘之私。猶養而擾之以網罟。魚可得而大乎。小子識之。

天保十三年十月

有斐亭記

頭注は眞田家所藏の原本なり。

世子之始在於築地之第也。樂翁老公爲書其匾曰有斐亭。蓋取於衛風有斐君子以致勸勉之意也。世子乃揭之於燕處之所。不敢忘老訓。朝夕顧諟以自助焉。間者命臣啓爲之記。臣因蹴然爲閉目。世子之揭是匾。豈爲取其偉觀哉。則知是命也。亦非蘄其稱頌。而樂聞規切之爲益也。然臣亦嘗學爲君子者矣。而志惛學淺。未之能踐修服行。且自責之不暇。尚何以獻規於世子。雖然。盛意固不可咈。且老公之功德。自爲小童即聞之。今乃承命。紀其大訓之所係。亦不

蓋取於の於の字なし。君子の下に而竊の二字あり。世子乃は世子於是乎に作る。燕處は燕居に作る。不敢忘老訓は不敢忘光訓之所寓に作る。卽聞之の下に其爲欽仰蓋非一日の八字あり。

係は在に作り賤は騎に作る。所以の二字なし。至善の下に豈人力之所爲哉の七字あり。

爲。非榮幸。則不敢以鄙賤辭。請姑誦其所聞。夫聖人之學。大學也。大學之道非他。明明德。新民。止於至善。其斯而已矣。而德之當明。與民之當新。與其所以明而新之之當止於至善。即天理之自然而然者也。然進道之序。明德爲本。新民爲末。何也。蓋明德之體。至虛至靈。湛然若水。灼然若炬。內外洞徹。萬理咸備。爲子則孝焉。爲父則慈焉。爲君則仁焉。爲臣則敬焉。於凡日用之際。莫不有本然之明焉。而是德也。與生俱生。初無加損。然而氣稟之或不齊。而物欲之或有蔽。

敬は忠に作る。

故自非生知之聖。則是德之常明。固未始不難保也。是以大賢已下。必資於學。

固なし已は以に作る。

講習討論。以究其知。省察克治。以力行之。求其明是德者。有以造夫至善之域。而爲其新民之地。苟有不進乎此。則行止動靜。或不能不失其時。而以此治人。乃欲盡其義理精微之極。其亦難矣。昔者衞武公。深知斯理。故學問自修。而德義充盛。光輝暢達。而斐然有章。入相於周。則澤又被於下。其德之盛而善之至。

是其の其なし。

遂使時人詠歌思慕。至久而不能忘。是其所以大學傳者。引其詩。以明夫明德

自然は撥檢に作り、續は蹟に作る。

講明大學之道率遵衛武之徽は講明大學儀刑衛武に作る。世儀表は世表式に作る。

之止於至善也、秦漢以來、聖學晦而霸術盛、世之爲政者、不知自其本而達之於末、則其所以見於事爲施設之間、類不踰於詭仄陰險、巧出僞作、所謂事求可、功求成、取必於智謀之末、而不循乎天理之正者而已。是以駕馭日勤而驕驁日多、偵察益摯而獄訟益繁、法令愈嚴厲禁愈密、而其成功底績之實、愈無以及於古昔、然終亦莫悟其非也。獨我大朝有樂翁老公、奮乎百世之下、乃能講明大學之道、率遵衛武之徽、懿德至行、蚤爲世儀表、曩者寬政初、昇平日久、天下之弊、數十年矣。政積事隳、俗因頽靡、自老公補政、示儉抑奢、進賢退奸、察民之利病而鋤植之、勵武勸文、以興教化、至是、人乃知滌垢礱鈍、自異於舊時、不數歲而天下之風俗、幾乎一變、蓋建櫜以還、廟堂名賢、代不乏其人、而其與復汎掃之功、信未有高焉者也。及其致政退居於築地之第、樂道養老、如與世相忘者、而聲光震耀、不啻祥麟威鳳、雖辭世之後、聞其名者、莫不擊跪斂衽、欽思追慕、嗚呼、此豈可以聲音笑貌爲哉。蓋亦自其本而達之於末、所謂盛德至

善。民不能忘者。老公其庶幾矣。豈不偉哉。今觀其名世子之亭。亦舉其所躬得者。以訓之也。臣之愚朦。固不足以窺大賢君子。然竊意其勸勉之意。蓋在於此矣。是以敢誦所聞。又具論之如此。抑世子之仁孝雅醇。不好虛飾。既留意於文學。又不懈於武事。今復樂聞規切。而滋求其所未逮焉。則其造詣之遠。固非臣所敢量也。惟願由是益念光訓之至深。知夫大學之本末。不容乎錯亂。而因以累其致知力行之功。誠敬積乎中。而光輝見乎外。其睟面盎背。四體不言而喻者。果有斐然之文章。而有以爲其止於至善之驗。則非惟不負於老公名亭之盛心。而異日所以承諸宗社。施諸事業者。亦將有其本而無窮盡矣。然臣猶有一言焉。夫其所謂至善者。以其義理精微之極。不可得而名言。故強目之曰至善。而爲聖人之學者。已以是爲準。則其任重而道遠。果爲如何耶。故立心弘毅。蚤夜孜孜。斃而後已。猶懼不及。而況怠遽躐等。暫作復輟。安可哉。譬如輿人適洛。其道路之險夷。山川之高脩。城郭之所由。郡邑之所從。必躬親經歷。半途不

無此理は不可得に作る。

能爲武公之所爲是亦武公也已は其用捨於武公哉に作る。

天保七年九月

廢後然洛可庶幾也。若不出戶庭之中。而望雲衢之縹緲。乃欲御風駕雲。以抵其所志。決無此理矣。故詩人述武公所以成其德。亦曰。切瑳琢磨。以明其治之有序。而益致其精而已。國語載。武公年九十餘。猶作懿戒。曰飭其士民。以儆己之不逮。其篤志力行。老而不衰如此。今世子之富春秋。豈可不奮勵而刮劘乎。顏子曰。舜何人也。我何人也。有爲者亦若是。世子能爲武公之所爲。是亦武公也已。臣雖不敏。願與國士勉焉。以無忘夫交儆之意。

重陽登高記

松代之東三四里。有峯巍然聳峙。南馳而北趨。若渴驥欲飮泉者。曰東條山。山之西。飛泉懸焉。最號奇峭。傍舊有觀音龕。近燬於野火。唯遺址存焉。適天保丙申重陽。桐山鎌原先生。將修登高之故事。前一日。宿賢士大夫。余亦得與焉。厥明午後。抱琴到先生之門。先生既出。問閽人路何由。則云由未岬。乃欲追而及之。中途景物。不暇顧視。疾行抵山麓。先生與諸賢。方憩於佛寺中。相見大悅。先

生白此舍輿而徐步。相將陟石磴。卒級東行。道稍平夷。傍多野菊。花盛開。摘而嗅之。氣極芬烈。又多稺松。刺天如矛戟。往往見鮮葩厠老碧閒。餤餤欲難。忽爲風所吹。繚亂灑人衣巾。始知爲霜葉。上行約百餘步。得新構大悲殿。頗亦爽塏。乃命從者。張幔敷茵。坐而西望。則遙岑隱見於白雲靑靄之閒。宛類神山在海濤中。縹緲彷彿。倏忽變幻。其他遠近之山林。粲然鬱然。皆以效秀於茲殿之前。於是拾斷樵。溫壺酒。行觴詠詩。懽抃嬉笑。衎衎如也。酒半酣。余語飛泉之勝。皆病登陟之勞。無欲往者。余意謂。今日之遊。何可負於泉石。遂請先生。奮然獨出。歷松閒石徑。直上可七十步。榛篠翳路。右手持琴。左手排翳。傴身而步。隨過隨合。行三四十步。又有磴道。苔蘚極厚。著屐輒沒。從磴斗折北行。路若稍窮。又復軒豁。是爲觀音龕故址。址之東北。皆怪巖詭壁。立者若浮圖。列者若屋舍。横若睥睨梁麗。懸若特鐘編磬。纓絡幢幡。若鵷鵠之翺翔。螭虬之屈蟠。獝狘玃猱之騰趠飛超。而其上嘉卉美箭。聳秀奇特之樹。陰翳蔽虧。中閒飛泉下瀉。可百餘

尺遇石稜突怒泉水激之躍起二三尺碎如蠙珠毿毿落前其響尤清。余踞石
鼓琴聲與泉相答氣象絕不類人世然懼日夕是以不復久留。還抵大悲殿。先
生與諸賢既醺然醉矣至薄暮下山取道於牧內復入實相院同飲。懽笑如初。
道出門白月已在南山之巓初先生以茲遊已樂命余以敍其勝事。余惟重九
登高其來尚矣而桓司馬龍山之會。最爲後人所稱述者。豈非以其同僚畢集。
而孟嘉之文甚美歟事之傳不傳。未嘗不存乎人也。茲遊也上大夫之會者。蓋
十有二人而皆吾松城之俊彥則同僚畢集固不足深艷矣。而先生之文章。能
贊造化而行鬼神則嘉之答嘲。亦何足以亹亹言之乎。且吾黨威儀與俯之秩
然。視夫疎放曠達蔑禮法者諒爲不同矣。則又安知後之述今。不若今之稱昔
也哉。

佐藤一齋評。今人遊記往往失於纖弱、此記峨峨委故與茲山頡頏歸、之末命意最有力。

藥廂記

友人澁谷君洒佚。一日出其所藏藥廂示余曰。此明戴曼公遺物也。公精通醫

覯一本覩に作る。

理尤邃於噎科。歸化後。傾其家方傳之於周防人池田某。某四世孫瑞仙氏。以噎科大顯于世。亦淵源於公所傳云。而此廂舊爲其家所襲藏。後流傳適爲余有。願得吾子一言以記其來由。余乃諦觀之。製造文雅。漆色奇古。螺嵌圖畫。精緻入神。蓋世之所希覯也。按戴氏初名鼎立。字則之。後改名觀胤。字子辰。又更名笠。字耘野。一字曼公。爲吳江縣學生。博學能詩。兼工草隷。醫術尤其所長。崇禎中。楚蜀擾亂。公慨然嘆曰。此非君子避世時耶。乃從番禺人。乘桴遂歸化皇朝。後遭黃檗山僧隱元。薙髮爲其徒弟。嗚呼。其棄儒術。從異教。毀削體膚。殄絶倫類。雖不免得罪於聖人之訓。然其視夫耽利冒色。辱身於賊虜。而恬然不知恥者。則既賢矣。況其絶藝妙術。足以啓佑後人。則手澤之器。豈亦不足以傳世也哉。洒侯嘗講蘇氏學。於其書頗富。舊所藏有東坡表啓五卷。係戴氏所弆。卷首款以陽文刻上。陰文戴觀胤字子辰二印。實屬奇品。今獲此廂。合爲雙璧。其間似亦有不偶然者也。因併記之。

嘉永三年二月

參一本攢に作る。

十、一本無し。

御長ヶ池時代か。

壯吉は若山勿堂の通稱。

記演天砲

蟲歌大悲閣。在松城東南一里所。其南有華水溪。溪前地勢平博。可演銃砲。庚戌歲。春分後二日。與二三子約。試洋制衝天砲。是日天氣寒烈。雪紛紛下。午後冒雪而出。街上積白盈尺。及出廓。人跡幾絕。天地一色。四望晃蕩。若入無際。進至大悲閣東。飛雪益猛。閣之左右。有老松數百株。戟立參天。翠蓋戴雪。望之如畫圖。每發一砲。溪山震動。風輒自上下至。松上積雪。飜飛撩亂。橫擊人面。僕從御立。殆不得息。二三子於是意氣增豪。連放十數彈。及暮而還。亦一時之快也。

序

送弱山壯吉序

德島弱山壯吉。以儒藝應召於巖邑之明年。將暫還其鄉掃先墓。因乞暇得允。起程在近。交遊諸友乃榮其行。集而餞之。有一友焉。進言曰。人之行莫大於孝。孝莫美於立身行道以榮其親。聞子幼而孤。養於族家。弱冠發憤。銳志文學。遂

去鄉土。絲浪華。抵江都。遊於一齋先生之門。十餘年。食忘味。臥忘寐。目不廢看。口不絕吟。乃爲社長。恆代先生。內課其晚進。外暨諸侯鄉士。名稱播而聲譽出。遂爲巖邑侯所聘。掌教於藩邸。而夙夜僶勉。教育不懈。以其有益於子弟。嘗蒙褒賞。此不謂之立身行道乎。於是乎。歸而掃先親之墳墓。訪親戚之居。問故舊之廬。而見其鄉人。誰有不欽慕而歎美者矣。此不謂之榮其親乎。復有一友焉。曰。斯行也。令親猶存焉。而聞子之學成。子之仕達。子之道行而子之歸。喜不自禁。倚門而望之。還堂而待之。忽見子之至。抱持泣下。敍且暮瞻戀之情。以舒積年怏鬱之懷。子亦乃集親戚會故舊。稱觴於膝下。相與獻酬成壽。欣欣愉愉。以盡色養之孝焉。則其相樂何如哉。而令親則不可起矣。是所深爲令親惜。而切爲子哀也。又有一友焉。曰。道無死生。無幽明。是故存則安其榮。沒則享其祭矣。今子則進其道矣。則致誠於廟而親臨之。固若抱持而敍情也。掃墓奉奠而親享之。固若舉膝下之觴也。言而親戚則之。動而鄉人法之。遠之則有望。近之則

不厭而親之悅之固若安色養之孝也。則亦何爲深惜。而切哀之乎。佐久間子聞其語而斷之曰。事則始之言詳矣。情則次之言悉矣。道則終之言盡矣。無可以加於此矣。而所期於壯吉者。其在終之言歟。諸友皆曰然。子請書而送之。

送蟻川生歸省序

天保十三年六月

蟻川生政年甫十一。從予於象山之麓。受業三年。能誦四子九經之文。天保己亥。予來江都。卜居於玉池之瀕。生不遠五百里之路。而又從之。齡已十三矣。又閱三歲。志益堅。業益進。洛閩諸先生之所說。孝經小學四子之大義。略已通曉。壬寅夏。有司以名聞。公嘉焉。加甄獎。聞者歎稱。莫不屬望於他日。於是將歸覲其親。予乃爲序送之曰。古人云。得天下英才而敎育之。樂莫大焉。予雖非其人。幸而得生。豈無所自慶。然亦竊有懼焉。夫譽之所聚。則毀之所倚也。望之所重。則責之所深也。君子成德於己。一疵不存。萬理明盡。外之所遭。毀譽得喪。初不足爲之軒輊。然苟未至此焉。則亦安可不加察而致徼乎。夫人生於兩閒。氣有

第一本壬に作る。

清濁質有純駁則其心固不能無智愚而其行亦不能無賢不肖。且以一概論之。則宜智者必賢。愚者必不肖。然其大不然者。吾見亦多矣。世固有知識昏昧。精神懦弱。不慣於文書。不務於記問。凡目前易曉之理。猶懵然不能知之。尚何可與之語六經之蘊。譚百氏之奧。講當世之利害。而論天下古今之成敗得失乎。如是者可謂愚矣。然省其平素所爲。則或謹厚縝密。不敢縱恣。和協輯睦。得人歡心。其所行雖未必盡出於純善。而其立志孤潔。確然有守。不爲於其所不爲。不忍於其所不忍。雖學士大夫。無以過之。如此則亦孰不謂之賢者乎。世固有視明聽聰。心慧言辨。習於經史則易通。講於伎藝則易能。世故人情。多所究知。筆翰精妙。才思兼人。如是者可謂智矣。然察其平素所行。則或驕慢侈肆。無所撿制。悖驁陵犯。奸詐邪穢。常情之所羞且惡者。乃或甘心爲之。而恬然不以爲恥。如此則亦孰不謂之不肖乎。故行之賢者未必智。而心之智者未必賢也。然行之旣賢。縱令不學無術。固不害其爲善人。設其行之不肖。雖有才智學問。

詩有之一本有詩ハに作る

君子必比之夷狄禽獸矣予觀生之素亦可謂得氣之淸者然其年齒猶少。血氣未定而其質之純駁則吾未之能知也今世道微敎弛士風不振賢者之行。百無一二而不肖之人。十常七八。是以其相與推盪。而驅諸罟擭陷穽世之強壯淳樸者其猶有不免於此況以生之年少血氣而周旋於其間則殆將惘然眩惑淪胥以溺又安能奮迅激昂以爲切劘砥礪之資。而增益其所不能耶。夫偷薄之俗妬賢忌能媢才嫉智故有一長於此肯無疵瑕其多口或不免矣。況有可指之失孰不羣起而詆毀之而又將曰。講學談理者。猶且如此。他人之子弟不足怪矣則不徒阻其譽而損其望。率國中而與不善。其爲禍將不可勝言。是予之所以大懼者亦豈得已乎。雖然生行矣哉。莊敬以存心。禮義以接人。廉儉以摧驕忠厚以破吝篤信此道日修其慝則其譽可以永終其望可以不損。而吾之所懼者又可以渙解而漸釋也。然詩有之。靡不有初。鮮克有終。予於生卒亦不能無懼焉爾。

弘化二年六月

梁川孟緯字は公圖星巖と號す。

別梁公圖序

美濃梁君公圖嘗來江都爲詩社於城東之玉池以其所能訓生徒從游之士。遍於都城。一時詩風爲之變。公圖亦甚樂之。若將以終身焉。弘化乙巳夏。忽售其詩社。爲西歸計。人問其故不言。強叩之。乃曰。江都民物富庶。海內無比。口數且五百萬人。食率日稍五合。則都城一月之用。不下七十萬石。而其稍多在海運所輸。近聞英夷猖獗。動寇於隔海諸邦。見其可取者。輒奪而據之。若西清之香港・舟山。亦已爲之有。古昔以英夷爲絕遠之方。今則迫近矣。而彼俗貪婪罔饜。又安知不朶頤於茲土。一旦連巨艦。列阜礟。以闚闞於房相之間。縱不得衝突海運之利。豈如今日。則五百萬之生靈。饑餓在旦夕。吾以老羸。遲遲於此間。轉死必矣。惟方今大朝。君臣合德。政治明肅。財富兵強。文武如林。凡爲民國計事者。既詳且密。則茲土之氓。終當無憂矣。然吾年老氣怯。不似曩時之強壯。則將去此而歸故山。托蹤雲霞。滅景林壑。冥然與斯世相忘也。予聞之歎曰。公圖

其過慮也歟。然知進而不知退、知存而不知亡、知得而不知喪者、天下皆是也。而公圖獨決然于此。易曰、介于石、不終日、貞吉。公圖其殆庶幾焉。予嘗序其詩云、其才之識、不惟能詩也。蓋亦非訣詞矣。於其行日、諸友門人置酒而餞之都門之外。既醉、序以識別。

お玉ヶ池時代
士達名は章
通称は平蔵
仙臺の儒官

送國分士達序

所貴乎文者、以其載道也。其不足以載道、不可以爲文。安足貴乎。是文之所以不易爲也。故爲文有要焉。不反之於身、無以立其誠也。不本之於心、無以發其明也。不養之於氣、無以致其昌也。不蓄之於德、無以成其宏也。然亦有方焉。學之易、以通幽明之故。學之書、以識綱紀之實。學之詩、以導情性之正。學之春秋、以立名分之嚴。學之禮樂、以致中和之極。然亦有序焉。先之以大學、而定其則也。承之以論語、而正其本也。次之以孟子、而觀其用也。會之以中庸、而探其源也。而後六經可得而窺矣。於是博諸史傳、以盡古今之變。參諸諸子、以審邪正

博の下一本
考あり

之辨。約諸濂洛關閩之書。以要至當之歸。序既循矣。方既備矣。要既得矣。然後有感乎外而動乎中。沛然不可沮。則託之於文字。以發其意之所欲言。雖亦無心於其豐約難易。辭達而已矣。然其言也。必誠必明。必昌必宏。若夫妖邪淫靡之氣。無隙而入。夫然後道載焉。於斯文也其庶幾矣。近世淸士。文風下惡。如袁枚・尤侗之徒。皆輕浮妄誕。經術不講。身心不修。以儇佻之才。煽橫恣之辨。滅裂義理。而不知名檢之所在。淫辭妖語。務夸耀人耳目。豈謂之文乎哉。而反肆然自大。往往詆毀古來有道者之言。是何異乎俳優而嘲端士。乞丐而訾王者。然世之樂放恣惡拘檢者。咸艷而慕之。一時翕然化之。餘波漸漬乎本邦。昧者比比欽挹而向之。關東爲尤甚。不遏其流而塞其源。遂爲斯文之害也不淺矣。於乎。今大朝。君明相賢。蕩滌舊弊。憲度淸肅。人知循禮慕義。淫侈貪墨。禁不得行。然而文風之妖邪淫靡。獨依然。抑何歟。予學淺力微。不足以變天下之文。然竊有慨焉。故每見其人。輒必言之。亦豈無所望而然乎。仙臺國分士達。吾同門友

也今玆且將東歸來告別予在師門日與士達久同几案知其有學有文因臨別又申言之蓋亦有深望於士達也矣。

贈小林炳文（字は炳文虎三郎と稱す長岡藩の人後大參事となる吉田虎次郎と對して象山の二虎と稱せらる。）

宇宙實理無二斯理所在天地不能異此鬼神不能異此百世聖人不能異此近來（近來一本近年に作る。）西洋所發明許多學術要皆實理祇足以資吾聖學而世之儒者類皆凡夫庸人不知窮理視爲別物不齊不好動比之寇讐宜乎彼之所知莫之知彼之所能莫之能蒙蔽深固永守孩童之見此輩惟可哀愍不足以爲商較大丈夫當集大塊所有之學以立大塊所無之言小林炳文從予游而說吾言者也於其歸省書以贈之。

贈永山生（玉池時代か。永山生通稱平八（北澤正誠氏の遺書による。以下單に北と略記するもの皆然り））

學之要在得其方學而得其方則糟粕塵埃皆足以開其知學而不得其方則經傳史子反足以蔽其知泰西之俗長於物理取以爲資豈無益哉今世學者

口誦格致之說。而動輒自外於泰西物理之學。是學而不得其方也。宜乎。其知之蔽。而其識之陋也。金澤永山生。有文才好學。相識雖未久。而其信予甚篤。故因其求言。遂書以勉之。

嘉永四年七月

片山仙左衛門名は重禮字は子立西洲と號す小濱の人（北）

贈片山西洲

輕慢粗暴。敗禍立臻。所知不徹。恆多障礙。急躁躐等。業必鹵莽。忽略不勉。何能濟事。故居敬而窮理。循序而致精。非特爲讀書之要法。寔亦學礮之軌範也。嘉永辛亥七月下浣。象山大星。爲西洲老友書。

嘉永四年九月

川路聖謨

贈川路君

天下義理。至大至公。所貴乎學者。爲能精此義。明此理耳。理明義精。言行施設。不貳於道。至大至公在我矣。又何智巧足恃。勝負足較。而名聲之足貪哉。左衛門尉源公。爲大阪東奉行。將發。徵言。乃書此奉贈。

嘉永三年八月

贈柏木生

柏木義武字ハ子儀、兵衞ト稱ス、紀伊田邊藩士。

田邊柏木義武、學西洋火礮之術也、就予於江都。予之北歸、相從於溪山之閒。搗火藥、綳火繩、卷火管、實火莢、製爲石榴・蒲桃・光霧諸彈、演習打放、幾無虛日。予之再出江都、又從而講究、技頗長、可以令開教晩進之士矣。庚戌秋歸郷。其志蓋在興起此術、以爲其藩士之倡焉。大邦武弁之家、以武技教導子弟者、必有其師免許卷。師亦非與其卷時、無以傳奧祕也。義武且發、來別。請其卷。予曰、何以其卷爲、予之講此術也、得之於西洋圖書。西洋之人、則其師友也。西洋之人筆之於書、公然印行、以傳諸異域、而不吝。其識量亦大。與夫世之得其一二、而自私、反祕之於同邦之人者、何可同日而語。故於入吾門者、吾無隱乎爾。子之所知也、又何以其卷爲。源泉混混、不舍晝夜。盈科而後進、放乎四海。爲有本也。西洋之學、固如是。故吾學如是。子之所學、子之所教、亦宜如是而已。義武拜曰、然則請書斯言。遂書之。

嘉永五年八月

贈齋藤子宜

名は利和通稱は碩五郎字は子宜嘉永四年九月入門す。

某月は子宜に與へたる原本八月に作る。

謂の下に原本之の字あり。

佐倉齋藤子宜。兼松有功弟兒也。有功長於予數歲。子宜則與予同庚。其爲砲學皆蚤於予。其術其藝。竝予所不逮。而二子以予讀書長於窮理。能發揮於洋說。而大小砲術。極有法度。而自稱後進。視予以先覺。子宜則遂自佐倉與其弟子三人來。而請於予。掃門側之堂。而朝暮執業。雖祁寒著雨。不少休息。有所不安。反覆推究。必求其是而後已。如此者有日矣。是以其業日異而月不同焉。壬子某月告歸曰。利和入先生之門。益知斯學之不易。今茲將拜辭。敢請。一言有以助不逮。予乃謂曰。予之法度。子悉得之。而子之藝術。則予皆不逮。顧何以助子之不逮。夫學之患。莫甚於挾私。世之拘泥窠窟。不能遷善。自是自誑。鞠爲正道之蓁蕪者。皆挾私之過也。子之昆季。夙以砲學名家。而不自主張。高島某之始唱洋法。遜志而從之。子又請益於韮山江川氏。遊其塾五年。究其閫奧而還。子弟受教者數十百人。而尚不自安。又復就予而勤苦學習。此非去矯飾之私。而脫門戶之見者。夫孰能及之。苟以子公平之心。而求其是於天下。何學不成。

而何功不立。抑西洋有三兵。步也騎也礮也。而礮之術涉於步與騎。其屬騎者。進退捷疾。爲利尤大。然本邦莫知講其騎法。故雖有馬。不能爲之用。雖其屬步者搬運之事。固係于馬。則亦非時調習。不足以盡其利也。若予所發揮。固亦不過步者之法。則僅得彼之半。而止耳。且西洋戰法。尙用奇而增練騎兵。本邦兵士。好用槍而寢廢騎戰。故西洋有三兵。而我亡其一半。多算勝。少算不勝。非孫子之言乎。有家國之責者。可以寒心矣。予雖在側微。深爲之憂。慨然奮發。講究洋籍。志在興夫騎法。而身分有限。不能遂也。聞子之國。多產良馬。而上有有爲之君。下有才能之士。今興起騎兵。以爲天下之倡。舍子之國其將何適。子歸必以此獻言於朝。倘有從焉。吾將努力以助子之不逮。嗚呼。補一世之闕漏。而贊皇州之神武。其在斯耶。其在斯耶。

嘉永三年

皇國同文鑑序

馭夷俗者。必先洞夷情。洞夷情者。必先通夷語。是淸賢主所以有同文志・同文

韻統之撰也。皇國龍盤虎踞。特出海表。神氣所鍾。人慧財豐。警內威外。可以雄視於萬邦。頃歲以來。東西諸蕃。託事寄舶。突來倏去。其情難測。先事而備。是爲知幾。予嘗竊有所深念。纂輯皇國同文鑑若干卷。然未以示人。近讀清魏源聖武記。如懲英夷之變。而作者。其附錄云。今粵東蕃舶。購求中國書籍。轉譯夷字。故能盡識中華之情勢。若內地亦設館於粵東。專譯夷書夷史。則殊俗敵情。虛實強弱。恩怨攻取。瞭悉曲折。於以中其所忌。投其所慕。於駕馭豈小補哉。此言洵符予見。因遂取舊著。覆加讐校。以命剞劂。荷蘭久爲互市之國。故以荷蘭爲首。

孝經正解序

彥根文學。作翁伯德。遺其子伯玉從予學。既而伯玉示予以孝經正解。而蘄爲之序。蓋翁之所輯也。予不得辭。則序之曰。孝者具於天命之性。而爲人道之本。孩提之童。無不知愛其親者也。人孰無是孝乎。君子之學。獨有以推之耳。故忠

者推之於君者也、弟者推之於長者也、愛民而仁物、亦未有不本於斯者。今之學者往往外其固有而不率也。舍其本根而不務也、是以支離瑣屑、日繁而日雜、終不知其何所抵極矣。嗚呼、君子之學、豈固如是也哉。吾始視伯玉之在門。口無失言。身無慝行。溫柔敦厚、居然稠人之中、固疑其平日家庭之間。必有訓忤之大異乎衆者、乃今見是輯、而果識翁之有得於君子之學。而釋然於伯玉之所以宜然也、聞翁年稍高、而學思匪懈。不倦乎教導。意其所論述、當亦不止於此矣、而伯玉又從而纈章之。則其傳來世、而勗後人者。將滋多也、然而忠君弟長則必自斯而脩之、而後可進焉耳。愛民仁物。則必自斯而充之。而後可能焉耳、然則爲作氏永世之家訓。亦豈有先於是輯者哉。且夫父祖心術之所寓。非獨玩好手澤之餘也、則爲子孫者。其可以不寶焉乎。雖然徒寶之也。而或不修之於其身。徒守之也。而或不能推而充之、是則雖曰寶之。猶不寶也。若此則伯玉纈章之意荒矣。

天保十年九月

文公短牘は長野市岡川五郎氏藏せり。

文公短牘序

余嘗讀朱子之書。已深知辭章之多弊矣。世固有以敏妙之文。煽捭闔之辨。棄本實衒浮華。顚倒乖戾。以壞人心術者。非夫物格知至。鑑空衡平之體。定於己。而羣言之是非。判然有所去取。則其不欣然從之。而遂化於其習氣也罕矣。方今幼學作書札。其筌蹄亦不尠。然余切懼童蒙之眞純。尤易汙染。因竊掇集朱子書牘中。言約意明而近於日用者。以成此編。更又爲之粗加點定。以便記覽。新學小生。旦暮誦之。而問其義焉。則作書札者。固有以得其模範。而於夫養正之功。亦庶乎其有小補云。天保己亥。秋九月下澣。後學象山平啓書。

嘉永三年

竹下集序　代

詩者發乎性情者也。故不貴乎能爲。而貴乎不能不爲。日月之代明。星宿之運行。非故爲之也。不得不然也。山岳之峙。川瀆之流。霞雲草木之卷舒榮顇。非欲其如是也。不能不然也。夫神化之妙。誠之不容已如此夫。古之詩亦何以異乎

橋本元吉は尾道の人（北）

是二南國風與雅頌之作矣曾有心於爲之哉情感於中。而言形於外。言之不足故吟詠之亦誠之不可揜爾孔子取而删定之列爲一經。傳諸萬世而不泯。天下誦而習之蓋以其言之出於自然而不雜人僞。得失勸戒。皆有以啓發人志而其見效尤速非他教之所能及也。迨後世作者不務思誠之功。於是舍本趣末競以虚僞浮華相高而詩大變矣。至若今時關東專以咏物爲工。關西盛以咏史爲唱則變之又變而所謂剪裁爲之者尚得謂之詩矣乎。然咏物咏史。亦未可盡非之也若夫少陵之螢火。爲李輔國發義山之茂陵爲武宗作。則固諷人之遺意而亦無愧於其爲詩矣。吾友備後橋本元吉以豪俊之資。而寘意於風雅漢魏唐宋以至近世諸作。無不諷詠而溫繹。功力既至。胸次豁然。及夫物觸於外情動於內則沛然發之於詩。袞袞乎。渢渢乎。罔知其所窮。且其運辭。雄而不鞫嚴而不刻頗有忠厚惻怛之意。是則可敬矣。然其所爲。果能無愧於少陵義山乎。果能無愧於不雜人僞。而垂教於後世者乎。予皆未之能知也。然

是言豈易道哉。予之嗜吟咏也。不讓於元吉。三百篇已下。古今諸家之作。亦多究心。今已四十稔矣。然而未能庶幾焉也。則又當與元吉共勗之。元吉刻其詩。授予序。乃書以質之。

天保十一年九月

邵康節先生文集は東京市立田革氏藏せり文先生の作品にあらざるを以て全集に登載せず。

邵康節先生文集序

爲學之要。在格物窮理。而方今人士。皆知誦格窮之訓。正學之旨。若大明於世。然其實日就雜擾偏固。旋復晦盲。余嘗潛思其故。無亦學者徒誦坐譚。不務其實之過歟。今之人。試與之言物理。輒曰。吾方窮人倫日用之不暇。而何暇窮物之理乎。嗟乎。豈有人倫日用。而外於物理者耶。余未見昧於物理。而周於人倫日用者也。夫三綱五常。大經大法。學者誰不知者。而臨事之際。輒已見其窒礙。政以學不足以觀物理之宜。是以有所昏蔽而不通耳。善乎。邵子之言。曰。物者身之舟車也。人而不究物理。猶之乘於無柁之舟。立於無轂之車也。雖欲利其行。豈可得哉。邵子先天之學。其議論端緒。若時有異者。然程伯子。在當時。既以

純一不雜稱之則其歸極之正固不待辨說。而至乎夫包括宇宙終始古今。盡事物之變而究天人之蘊則秦漢以來一人而已矣。故余嘗謂欲窮物理者。必當自邵子入焉。其所著皇極經世擊壤集二書。固學者之所宜潛玩。顧濂洛諸公其成書之外後世皆傳其文集邵子獨無。余常憾之頃讀朱先生語類。先生嘗欲刊其漁樵問對及一二篇書因竊沿其意。掇拾遺文以爲一集但無奈其所傳無幾耳然觀朱先生之語當時所存。亦恐不過于今。然則其文早已散佚耶抑其所作初止於此耶。今皆不可考。惟其篇雖不多。其說雖不煩。學者能於此而留心焉則陰陽造化之端道德生命之理。治亂興亡之原。吉凶禍福之幾。皆可以窺其大略而窮理之學。其得門也不難矣則拯夫世儒徒誦坐譚之弊。而復斯道之明又得而庶幾焉。抑窮理之本在養靜。而養靜莫若乎居敬。蓋聞。邵子嘗闢齋於百源深山獨處其中。王勝之常乘月訪之。必見其正襟危坐於燈下雖夜深亦無不然。嗚呼。其所養如此。是以其深造亦如彼也。此尤學者之

所宜知。故爲之序。而附以所聞如是。

增訂荷蘭語彙序

嘉永二年八月荷蘭語彙の「Aの部」東京勝伯爵家に藏せり。

此の序文は西洋式左書なるを今便宜により書改めたり。

後に問學者を學焉者に改む。

學必博。而後所見不偏。所識不固。而所施得其當。非惟詩書六藝。皆當究其閫奧。史子百家。亦宜廣涉。至於西洋物理之學。闡抉幽深。剖析微密。漢土之士所未及知。而多切於世用者。今我兼取以資於博。豈曰小補哉。予久欲效胡安定經義治事兩齋竝設之意。請國。寘明體達用二館。子弟之欲爲學者。盡入諸明體之館。訓以四子六經之道。以育其德。更擇俊爽強識者。入諸達用之館。講以天文地理兵法農政水利之類。兼用洋學。以擴其才。而未果。然往往有及門而問學者。則亦皆以此意而導之。夫西洋諸國。言語不通。書亦殊文。故欲爲其學。非先記其言語。詳其文法。不能也。詳文法者。固必須於師授。而記其言語。亦不可不求之於邦譯字書。予講習之餘。嘗補訂徒弗氏所譯荷蘭語彙。以便討索。今授諸梓。同志之士。或有取焉。

天保十一年冬

舊は故に作る。

嚮背は從に作る。

方今の下に皇朝を加ふ。

星巖詩集序

頭注せるは星巖詩集の板本なり。

詩其心之聲乎。外感乎物。内動乎情。情動而形於言。言形而比於聲。聲比而詩生焉。然則詩固心之聲也。蓋粗於其心者其詩尨。僻於其心者其詩澁。放於其心者其詩誕。蕩於其心者其詩靡。鄙於其心者其詩褻。故心敬而後詩得其莊。心潔而後詩得其清。心密而後詩得其嚴。心大而後詩得其昌。心理而後詩得其文。凡誠於中者。必形之於外。惟詩不可以僞爲也。是故可以經夫婦。可以成孝敬。可以美教化。可以移風俗。古之爲天下者。欲同民心而出治道也。乃設官司。博采而悉陳之。以之觀時變。察民風。考其得失之所繇。而有以斟酌之。故倫理正而上下安。國雖有不治者。則罕矣。自王政衰。詩道不明。在位者。無復知民心之所嚮背。故淫僻行而禮義廢。國雖有治者。則亦罕矣。詩之所係。其不大矣哉。方今聖明在上。賢能在下。政教備擧。詩學寖振。然世之作者。率猶昧於心術之要。而不知詩之本。徒逐逐焉遺内循外。剽掠摸倣。以鬻浮靡。其識之陋亦足

詩教は詩法に作る。

賤耳。獨梁君公圖起於美濃。慨然以詩教自任。其所作。大歸本乎性情。深乎比興。主文譎諫。不失風雅之遺美焉。而至其所自得。則能隨物賦形。豐約疾徐。咸中乎繩墨。而關鍵森密。嚴乎不可犯。寘之古作中。無復可辨識。此其所以傑然於時輩。世固有能知之者。何待余言而後信乎哉。天保中來江都。乃刱玉池吟社。日以倡明詩學爲事。遠近生徒。趨之者衆。其室氏張。亦善吟詠。而命意窈眇。措辭渾厚。頗類公圖所爲。余嘗戲之曰。今爲天下之倡。而自內始。詩云。刑于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。其公圖之謂歟。公圖天資俊絕。於書無所不讀。最慷慨談時事。其才之識。不特能詩而已也。其詩廿一以前。皆焚之。今鈔而授梓者。千二百餘首。凡若干卷。一日載酒而來。請余曰。子知詩之本。而又知我。肯爲我序詩乎。余曰。諾哉。遂序之。

余は予に作る。以下三ケ所皆同じ。
公圖は以下みな君に作る。
戲は謂に作る。
廿一は弱冠に作る。

杉本生名字序

天保十一年冬

越後杉本生某。自幼髡其首。而入佛氏之門。十七年矣。庚子秋。來游江都。聞予

其一本生に作る。

方與其徒講學於玉池之瀕、踵門而謁曰、某學禪多年、未有所得。願先生有以誨之。予曰、吾道與子不同、又何誨。某曰、雖然、敢以請。予曰、儒之所悖、即佛之所棄。假吾言之、子又何聽。某猶固請而不已。予於是默然久之。乃問之曰、子之軀惡乎得之。曰、受之父母。子久違父母、亦時思之乎。曰、無日不思。曰、子既出家。而又思家、毋乃失其所守乎。某惡然愧曰、某愚嘗欲去此念而未能也。予曰、嘻。孩提之童、無不知愛其親、及其長也、無不知敬其兄也。是則人之本心。乃天之所與、而不可得而泯滅焉者也。夫人與萬物同生於天地之間。而人之貴、兼乎萬物與天地竝而爲三極者、以獨有此心也。若人而去此心、其形雖曰上首下足。吾不知其與林棲水宿牢居野牧者、何以異也。子之所以不忘其親、則善矣。其所以欲忘之、則吾知其將不免也。言未終。某惕然若有所省。曰、然則何如而可以免焉。予曰、改子之故、而歸聖人之道、斯可以免矣。某愀然變色曰、始某之入佛也、父母實命之。今請改之。必不得命。若不請而改之。恐爲世之罪人。如之何。

則可。予曰。無傷也。昔者聖人之經邦國也。立官分職。以爲民極。乃立司徒之職。使敎以人倫。所謂父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有序。朋友有信。是已。當其時。人無異見。家無殊習。上自朝廷。下至田野閭井。莫不皆奉其敎。以相勸勉。烏有爲人之父母而使其子淪於禽獸夷狄者乎。逮王道衰。而佛法流入漢土。覃及大邦。邪說詖行。紛然競出。蘗蕪滋蔓。歲盛月新。髡首服緇之徒。遂盈都鄙。不織而煖衣。不耕而飽食。安然起居於崇堂夏屋之中。而猖狂恣睢以自用。而人亦莫有非之。反欽慕而敬禮焉者。天下皆是也。則亦固無怪乎子之父母矣。夫天下之道。有正有權。正之所不能行。權以通之。行權而得中。則不離於正。故舜之不告而娶。君子以爲猶告也。夫使其父母歸於善。是謂孝。見非而從。成其不義。是謂不孝。子誠能曉其非。而改其故。是乃掩父母之愆。雖云不請之。猶請之也。夫孰得而議之。某歆然若有所喜。辭謝而去。自此每旬餘。必一至。質以其所疑。蓋如是者半年。忽躍然若寐者之獲寤。頓首而言曰。某今而後無疑於先

生之誨而後知聖人之道若是其坦夷平直也而後知吾向之所爲幽深恍惚溺於詖邪而篤於虛罔也嗟乎吾非及於先生之門則幾乎虛此生矣幸哉乃若髮變服假門側之堂而受業焉其徒之相識者或嗤而非指爲狂妄某則恬然以自信而不爲意也間請予更其名字予惟天下無兩是無兩非道則一而已矣某今歸於一是之地而不疑焉故更其名曰歸一蓋與其進也然道見之不爲難明之爲難明之不爲難行之爲難行之不爲難篤之爲難夫見而明之行而篤之不爲難終之爲難明之不終猶不明也篤之不終猶不篤也故君子之道終之爲貴易曰知終終之可與存義是矣故字之曰終之蓋戒其退也嗚呼歸一夙夜祇敬以顧諟名字之義則亦庶乎其無迂於進德之途而有以造夫君子之域矣

（迂一本滯に作る）

（天保五年五月）

佐藤一齋曰正大高明之說不愧古有道者之言

竹莽文公壽序

竹莽名は活文

小縣常田村。有竹莽文公。龍洞禪院故住持也。公幼而穎異。好佛氏之學。既祝髮。參補陀絕海師。頓悟無上。機鋒迅速。宗法兼通。爲衆所推。嘗遊長港。與淸人陳景山輩。相往來。其唱和文詩。亦不尠。既乃隱於上田東巖門之廬。復徙于常田村多門堂。闢園圃。蒔竹卉。花晨月夕。朗吟長嘯。玩弄禪機。而冥然與世相忘也。天保甲午歲。壽屆六十。夏五月某日。値其降誕之辰。友人某等徵言於予。以進頌祝。予嘗就公於巖門。學華音。受琴操。而其見愛過太懇也。雖無諸友之言。固所樂道。而不容已也。而予平生不讀佛家之書。請姑以吾所嘗學者道之。夫道者神焉而已耳。神也者。妙萬物而爲言者也。先天地而生。後天地而存。有而未嘗有也。無而未嘗無也。常動常靜。而未嘗動靜也。是故注目而視之。不可得而見矣。傾耳而聽之。不可得而聞矣。竭力而執之。不可得而捉矣。今夫天之淸也。而日月運焉。雷霆鼓焉。風雨潤焉。類焉而言之無窮也。今夫地之寧也。而山河陳焉。艸木蕃焉。禽蟲育焉。類焉而言之無盡也。今夫人之生也。而耳目通焉。

手足動焉、意識藏焉、類焉而言之無殫也、其在於天、則其運焉者。則其鼓焉者。則其潤焉者、則其類焉而言之無窮焉者、其所以然皆神矣、其在於地、則其陳焉者、則其蕃焉者、則其育焉者。則其類焉而言之無盡焉者、其所以然皆神矣。其在於人、則其通焉者、則其動焉者、則其藏焉者、則其類焉而言之無殫焉者。其所以然、皆神矣、夫道者神焉而已耳。故易曰、無思也、無爲也、寂然不動。感而遂通天下之故、非天下之至神、其孰能與於此、惟無思無爲、是以能神、有思有爲、則不神矣、火必有光。水必有濡。心身必有思爲。惟至人無思爲、非無思爲也。外無物而內無我也已矣。內外物我既盡融洞。則神全而不澗。物至而順應、圓者圓、而方者方焉。因其自然、而吾未嘗思爲、此所謂至神也。若夫以物役思。神斯澗矣。如使寂然不動。必若木石、而以爲無思無爲。則亦何以通天下之故也哉、故失於有者。謂之逐物。失於無者。謂之頑空。逐物焉者。用其神於無用者也。頑空焉者。無所用其神者也。用其神於無用者。勞而無功。無所用其神者。蕩而

無歸。夫有無之間。眞機妙用之祕。非可以擬度而得也。而眞神會於此者。其生既先乎天地矣。則其壽將亦後天地而全也。予嘗與公說易。有論之所及。不期而同。意之所存。不言而會者也。則今以此言爲壽。其亦有契於公者乎。是爲序。

嘉永元年か（嘉永六年出版せられたりと云ふ）

藥論序

兵法曰。知彼知己。百戰不殆。不知彼不知己。每戰必敗。夫兵家之權。不可預定。必因其所利而制宜。出奇而應變。求勢而取勝焉。然彼有虛實。我有強弱。徒其所遇。而卒然接戰。以爭勝於鋒鏑之間。蓋亦危矣。又必審彼我之勢。而知其可以戰與其不可以戰。然後可以言兵。夫醫與兵一理也。其應變之妙。固不可先傳。然不知彼不知己。何其可乎。夫其望容色。聆聲音。切脈循膚。究病之源委。以定其可治。則知彼之事也。精分劑。詳稱量。覈藥性之強弱緩急。而制其節度。研明治方。以待病者。則知己之事也。亡論二者皆廢其或能察病之所在。不幸未明於藥性之說。亦猶兵家知彼而不知己。何足以爲民之司命哉。是林君健卿。

出奇而應變一本應變而出奇に作る。

民一本世に作る。

所以孜孜於泰西窊篤爾氏之藥論而譯述補訂以行於世也歟。頃聞健卿視一病者不耐苦楚以爲是非藥石所能救乃與社友謀刳割筋肉縛絡刮膜。取其毒而出之、漸漸縫合膏摩若干日病已如故。（詳見近日所刷印外科新驗）嗚呼。視其候證。決藥石之不能及是能知彼者也。按其治方不必藥石是能知己者也。宜乎。其能起難起者而終不陷危殆也。世之爲醫者。聞此而奮發以進。皆得如健卿其人生民之幸、其又如何哉。故予因其徵之序。樂而書此。且以風吾黨談兵。不知彼不知己而悍然自用者云。

遠西砲術略序

嘉永二年（北）一に弘化三年（日本文化史年表）

近年有聞西洋火術之略而自私其說。不輕以語人者。余竊咲之。彼邦既筆之於書。公然刷行。傳播異域。且不吝。我偶獲其一二。而反祕之於同邦。何歟。吾友江都大冢同庵。夙學荷蘭文字。兼講其火術。閒嘗譯述此書。以示同好。猶恐讀者之不多。傳者之不廣也。將鋟板以傳之於世。屬余爲序。余嘉其志之公平。與

世間隘者。不啻筵楹。而又喜此書之出。將大有補於武學。匪夷所思也。故不辭而爲之序。

天保十一年三月

八田養井翁壽序

頭注せるは八田家所藏の原本なり。

（養井翁名は嘉右衛門）

八田養井翁。世爲吾松代之大族。始與先君相友。既而以弟子之禮事先君。時先君俸薄債多。家無甔石之儲。翁每周之。沒先君之世。前後所給殆千金矣。而翁固無德色。先君亦卒無愧色。蓋相識相信之深則然也。以是啓又自童穉。深辱知遇。誼逾骨肉。而翁爲人大度。休休容物。苟當其可。雖鯫生小子之言。必取而用之。先君就世後。屢延啓而質疑焉。是以啓亦有所思。未嘗不爲之傾倒也。天保丙申歲。天下大饑。啓雖不與民務。亦知吾境之不能免也。思預爲之備。因竊講究荒政。斟酌時宜。適得程子之賑法。以爲費少而及廣。法之宜于今者。無過此也。即具其說。以請於政府。政府雖幸不以爲不可。有司未盡信從。是以莫之能行也。至十一月。果穀價踊貴。貧民大艱。啓不忍坐視。復申前請。然而猶未

予は啓に作る。

人は民に作る。

有獲命則遂詣于翁而謂之曰君闔城望也民饑餓至此。盍爲務施予。以行濟拯因告之以程子之說翁躍然喜曰是吾之所願。子又幸以良法見敎。敢不致力乃屬啓立規條詳節度。將刻日而始事。啓又竊謂。此於國體猶不能無憾焉。乃又請於政府曰八田某發儲振民。規畫已定。然德澤屯於上。而私惠行於下。國之恥也請假公命以正國體。政府甚然予言即日命下。如所請。翁又躍然喜謂啓曰。不獨遂吾所願。又得以弘公家之德意是亦子之惠也。於是置廠行賑。貧民歡呼至者日多。一日所給。蓋洎二千餘人云。當是時天下之民。室如懸磬。狼狽不知所爲者有矣。採艸根充饑腸。羸瘦黃委。面無人色者有矣。出無所往。還無所歸病而死於道路者有矣。姦盜倡亂。蠢愚隨和。羣聚肆暴。伏於夷滅之誅者有矣而吾境之人。得安土保居。以免於流亡夷滅之禍。暨於近鄉旁邑。亦無不陰受其賜。是則雖以政治之美。亦豈謂無賴翁之力乎。而翁不敢自當。則曰。是公家之德。祖考之澤。而執友之助也。吾何力之有。於是衆皆嗟嘆其賢。以

爲不可及也。今茲庚子。翁壽七十。三月某日。値其懸弧。時啓在江都。翁子某遠以書來。謀所以稱觴者。且以請言。啓曰。夫壽五福之首。而最人之所難得也。然亦有得焉。而羸憊病苦者。壽非壽也。又有得焉。而煢單無告者。壽非壽也。又有得焉。而寒窶窮困。朝不謀夕者。壽非壽也。又有得焉。而煩鬱煎中。患難連外。形神不獲康寧者。壽非壽也。今翁年逮古稀。神采爍然。子孫衆多。皆能屹立。家道豐腴。心志愷安。則其人閒之樂。豈不亦至矣哉。然以是而稱觴焉。未足以壽翁也。繄翁則幾於道矣。吾聞有道之士。其視有生之類。莫非同體。未始閒形骸而分爾我。故其愛人利物之心。自爲無窮。是以其日用之際。義乎師友而仁乎鄕黨。忘乎老少而忠乎君國。各隨其理之所在。爲吾之所當爲。有善而若未有善。有勞而若初無勞。其所存如春風之榮物。而不恃以爲能也。今翁愛敬師友。捐千金而無德色。則其爲義也盛矣。愍恤災傷。貶己而濟人。則其爲仁也厚矣。不論老少。惟善是聽。則其爲量也宏矣。不沾私惠而敷暢公德。則其爲忠也全矣。

連は纏に作る。

其の字原本に無し。

皆は成に作る。

功成而不居、名遂而不有。則其爲德也大矣、五者乃道之驗也、是可以爲翁之壽也夫、且使爾子孫皆有所儀刑矜式、而去夫有我之私。以全其愛利之心。出而治官也則用其道以澤其世、入而家處也、則用其道以善其身。如方圓之有規矩、各取法於此則是翁之壽、乃於爾子孫。尤足賀也。抑使世之同有是心而蔽於私者、亦有所羞愧勉慕、而奮興傑起焉。則翁之潛啓默相。以有功於斯道。

淺鮮也哉は小補六乎に作る。

豈淺鮮也哉、而邦家政治之美。亦將有所倚賴。而愈益光大。則翁之壽。不惟於爾子孫足賀、乃於世之人。復有足賀也。不惟於世之人足賀。乃於邦家亦有足賀也已、一人之壽、而世人邦家皆足賀焉。凡知其壽辰者。孰不有壽之之心。而

慶は祝に作る。

況啓通家之誼、豈可默止乎。則雖不文也。敢書此以慶。天保十一年春三月。象山佐久間啓譔於江都玉池寓居。

嘉永二年九月

本朝鈐家智囊序

智、其可囊乎。迎而不覩其面。逐而不獲其尾。眇然於方寸之間。而解紛於千里

之外者。智是也。覬且不可。而況可囊乎哉。然物非惟物。我非惟我。故能觀古今智者之所爲。而蓄涵融會。時而出之。雖曰囊也亦可耳。是馮夢龍氏。所以有智囊補之述也。吾師桐翁先生。教育之餘。嘗效馮氏。而輯本朝鈐家智囊。靖亂誅暴。拯急免危。兵謀權略。莫不備具。洵可謂士林之鴻寶矣。雖然。兵家之勝。不可先傳。故讀此書者。徒執其言。而不求其心。直泥其迹。而不觀其用。則囊乎不囊。而於先生之意失之矣。於是乎書。嘉永二年屠維作噩玄月。門人象山佐久間啓拜撰。

天保四年夏

春秋占筮書補正序

易之道。理與象而已。惟其象也。故理則象爲體而理爲用。惟其理也。故象則理爲本而象爲末。二者相因。恆輒不離。未有象而不原於理。理而不寓於象者也。大傳曰。易有聖人之道四焉。然其實則不出於象理矣。蓋象者理之象也。故理卽存乎象。辭者象之理也。故象卽存乎辭。變則象之動也。而非理不通焉。占則

理之兆也、而非象不決焉、而是四者固亦不可以廢其一也。一廢則聖人之道闕矣。夫自聖學不明、而易道遂晦。方伎之詭誕。外義理以言象數、而以欺於人。曰易固如是、偶有得其一端者、吾何以思之哉。彼已失其用矣。吾未見無其用而有其體者也。世儒之支離、擯象數以談義理、而以誣於人、曰易固如是。吁亦何以能得所謂眞理乎。吾亦未見夫無其末而有其本者也。啓妙齡好易。專精義理之聞、既乃稍覺流乎偏枯、而苦其散漫無歸。因又求諸伎術諸家、而飛伏世應、遂亦不堪其陋焉。適讀春秋傳、觀其所載占筮之迹。欣然有會於心、以爲古人盡象數變占之妙、於此可闚矣。然以其辭隱而旨微也。既莫能盡推測之所繇、而又汨於荒忽孟浪之說、可慨焉爾。其後得淸人毛奇齡氏春秋占筮書。而讀之、愛其幽深隱微之際。固已多所闡明、而考論之精確。亦迥出於漢唐諸儒之上矣。則如古筮書。固學易者之筌蹄。而不可以少者。然尙竊憾其發揮之未全盡、而間亦有所謬誤也。癸巳夏、以微疾在告。杜門讀易數句。忽恍然若有

得者。乃復取毛氏之書。而反覆之。滋覩其有罅隙斑瑕。於是僭不自揆。輒蒐錄所得。爲一書。以附其後。名曰補正。蓋心之所得。不敢自匿。聊明象數之端。以拯義理之偏。而因以庶幾體用本末之一致焉耳。則吾之爲是。亦豈專乎此而忽乎彼者也哉。嗚呼。觀吾之說而不得其意。謂是亦徒爲象數變占之資已也。則失之遠矣。

天保十二年三月

徳方通稱柔介畏堂と號す松代に仕ふ徳方は其の字なり。一本是なし。

詠史百絕序

（此の文淨稿本にはこれを跋の部に入れたれども改めて序の部に移したり）

物有效其所用。而漸生弊者。如人之病齒。久服苦參。齒愈後。腰疼不舉。世豈無類此者耶。學友小林德方。嘗厭究經家之固陋。遂用力於文辭。余數論其非是。而德方不可也。頃者過余。出其所著詠史百絕。讀之。意志灑落。詞調有法。視世之偏枯不文。塡綴鄙俚。而徵作蒼蠅之鳴於蚯蚓之竅者。則遠甚矣。然余憂其或將溺乎所好。而增弛本業。暗受其弊。而不自知也。於其徵序。書以遺之。亦朋友切劘之意云。天保辛丑春三月。同藩平啓書。

琴錄序

天保九年十一月
琴錄に附したる序文は較ゝ異る所あり、よりて頭注に掲ぐ。琴而已の下、矣夫琴者の四字、常御の下、之器所以樂心而調情而の十字、斯の下、乃の字、皆無し。蓋の字なし。

古者教法。六藝不可闕一。而移風易俗。以善民心。樂之教最爲急焉。遭秦焚書。樂經先亡。漢晉諸儒。掇拾煨燼。摸倣形迹。器數失眞。大雅絕響。其遺聲之存于今者。惟琴而已矣。夫琴者君子常御之器。所以樂心而適情。而又論其德。則斯乃衆樂之統。而鼓鼙鐘磬笙竽之屬。蓋其臣妾耳。故後世。求觀古樂之遺意者。舍琴其將奚之焉。彼方代變。新聲雅樂不復。妖淫愁怨響。都鄙皆是。而猶有好古之士。以傳受於斯。而或時言其義。我朝中葉以降。伶官失職。譜錄湮沒。古器雖存。聲歌無用。迨寛文中。明僧心越氏者歸化。始能興起廢墜。琴道復行於世。然其所傳。又皆騷人墨士之技。而定聲苟簡。高下無節。是以學者徒務布爪之巧而爭以蕭散淸雅爲高。其於古人定律精微之法。概乎未有討究。則其閒亦有稍涉於樂律之論而紀述焉者。率咸因仍簡陋。無足取也。嗟乎。彼好新聲以助欲者。固已不足言。其覺非而求古者。亦猶如是。則大雅之音。其終不可以明。

於世也歟。今之士大夫。間以五音六律。莫有能知其說。而不自知其爲闕也者亦多矣。啓之謭劣。蓋亦病之。於是講誦之暇。竊取經傳及諸子史雜書所載。有係於琴者。類別條疏。以爲此錄。大抵審法制。定度分。協律呂。正聲調。以爲之主。至其布爪之法。賞韻之致。與夫古來善琴聖賢名流之遺言逸事。則亦琴家之所當知。固不欲闕之。因擇其法明事確者。以附益之。但恨家少藏書。多所遺漏。尋有所得。當續書之。誠願同好之君子。肯就此而有考焉。庶幾律呂聲調。猶足以知其說。而於古樂移風易俗之意。亦可以得其梗概矣。天保戊戌。復月既望。

象山平啓子明書。

其爲闕は其闕に作る。

以爲之主の以なし。

天保九年十一月

琴錄後序

凡物之興。無不有其原。故首之以琴原。物生焉。必有體。故次之以琴體。有體者必有用。故次之以琴聲。聲者琴之用也。用之行不可無法。故次之以琴律。律各有分度。故次之以琴度。物度。然後可和也。故次之以琴調。調而翫之。可以觀其

理焉、故次之以琴理。觀其理矣、而後其致可樂也。故次之以琴致。得致必在知要、故次之以琴訣。載要訣者莫若記籍。故次之以琴記終焉。夫不本之原、則無以造其道也。不論之體、則無以立其本也。不審之聲、則無以達其用也。不嚴之律、則無以治其忒也。不謹之度、則無以防其亂也。不和之調、則無以序其倫也。不疏之理、極之致、則無以通其會而暢其樂也。不著之訣、述之記、則無以安其學而博其識也。是故道造而其原可逢矣。本立而其體可明矣。用達而其聲可經矣。忒治而其律可正矣。亂防而其度可執矣。倫序而其調可諧矣。會通樂暢而其理與致可得而盡矣。學安識博而其訣與記可得而忘矣。十者備矣。然後可以言琴。作後序。

然後可以言琴の下に、嗚呼此豈獨琴の六字あり。

省心雜言序代

玉池時代此の序は世子中良の爲に代作したるものなり。

余嘗謂、君子之學在於明善誠身而已。非有他門徑。故讀書但當近裏體察以觀義理之所在。若其可疑。雖傳以爲聖人之言亦必加審擇。若有可取。雖近出

於庸愚之口。亦必揚而用之。不必問其言之所出。顧其義理如何耳。余所藏有省心雜言一書。其言切要簡實。頗有益於明誠之學。而世尠傳本。因今活版印數百本。以貽諸同志。然是書舊題林逋著。或謂尹焞所撰。或爲沈道原。或爲李邦獻。說者紛紛。無復一定。其謂李氏者。乃淸人四庫全書提要之說。而較有根據。然亦未易遽從之也。抑余之是擧。意急乎名教之有裨焉。若夫妄執意見。斷決著書之人名。則吾所不暇。而亦非吾所欲也。故仍舊貫。題以林逋著云。

書

呈一齋先生

天保九年冬

久闕致誠。但深瞻企。而友人自東來者。無人不道道範之盛。此足以慰鄙懷也。今歲冬暖異常。伏惟尊候萬福。啓學況如舊。無足言者。但近來因讀易。乃見得文公本義。明白簡當。眞非諸傳注家所及。至其所引而不發。亦自覺如有躍然於心目間。然不敢自是。輒欲奉問。亦非筆札之所能悉。而拜見未期。則瞻企之

深終有不可得而解者矣。比又於張仲純易象圖說中得九宮一圖。左右運行自然妙甚。然其間猶有未盡者。故就而補之。然後益見奇特。切欲奉寄乞正。而今信極急。是以不果耳。及暮作書。不既所欲言。惟冀爲道自重。以副天下之望。

天保八年四月

與本多伯楙書

伯楙は茂一郎の字、名は楙、思齋と號す。淀藩の儒、一齋の門人、天明元年生。

辱下交。兩載接引日深。情誼日至。臨別又承巨篇。誨以學術之辨。勖以趨向之正。中間稱譽太過。固非生所當。然亦是誘掖之盛心。非深交篤愛。何以能及乎此。雖在枯木頑石。亦當感動激發。而況於人乎。而別後逾年。竟未一奉起居。悚惕深矣。然省其中情。非敢有他。政以公私紛沓。故多闕儀於友朋舊故。惟在先生固不當以常例視。然亦不欲以平生溫涼之語。煩瀆左右。且詩有言。投之以木桃。報之以瓊瑤。長者嘗投我以瓊瑤矣。我求其所以爲報而未得。是以如此其稽緩也。然而終不可以得。則其爲愧恧。又如何可言耶。雖然不容徒以已。則敢陳近來所見以獻之於帳下。是亦就正焉耳。豈敢爲向日之報云乎哉。生竊

謂。近世天下之學術。澆漓日甚。是以士之爲學也。亦日益難矣。功利之毒。淪浹於人心。習以成性。而終身不能出頭。幸而能出頭矣。則或溺於考據文辭。廢棄歲月。而無補於世道。適足以飾其詭譎。長其驕傲。幸而又能不溺於考據文辭矣。則或老莊佛氏之流。又控而引之。遂釋聖賢相傳民生日用之教。而求夫虛罔空寂。外人倫遺事物。而陷於自私自利之偏者。用力愈苦。離道愈闊。其獨善或能之。而要之不可以經世濟民。又幸而又能不控引於老莊佛氏。而有志於儒者之學矣。而儒者之學。亦復分派殊途。紛紛其莫定。在宋則洛閩金谿。在元則河內崇仁。在明則河津餘千新會姚江。同尊孔孟。同崇仁義。同講天理。同說至善。在初其辨也毫釐。至終其謬也千里。學者未嘗有剖析其同異。辨明其疑似。泛泛然循乎孔孟仁義之名。而致功焉。其不舍康莊大道。而趨徑蹊。踏荊棘者亦罕矣。嗚呼。士生乎今之世。而欲以爲學。何其難哉。夫學術壞而風俗隨之。風俗敗而氣運應之。參諸前代。歷歷有證矣。豈可不恐而懼哉。長者嘗謂學術

不可不愼、殆亦以此也、近日浪華之變。初聞傳者之言。大鹽某脅衆謀反。竊疑是必傳聞之妄、嘗聞渠溺姚學而不可救藥。雖然同是尊孔孟。同是崇仁義矣。焉存尊孔孟崇仁義而犯此悖逆之罪也。明正德中。寧王稱亂。陽明輒擒之。此亦渠平時所熟知者矣。安有學其擒賊者而效其賊之所爲者哉。大抵人情厭常好異、喜怪喧騰、波瀾沸起。而生尙皆惟以前意處之。是生非敢有私厚於彼。信道嗜學、誠心之所在。自如此也。後數日。乍有官府文移。始得其實。生於是喈然如有喪焉、異日見氓之蚩蚩。不堪久憤不忍積冤朋黨作亂。覆宗滅戶而不悔、以爲彼蓋昧於事理不知孝弟仁義之道。是以至此。私爲哀愍。因謂讀書粗知道理者、縱使不幸在於其際。決當無此事。不意今日乃有如此大變。後又見彼檄榜。狂妄乖棘。殊無義理。不謂講天理說至善者。乃自顚倒如此。吾於是益知學術之不可不愼矣。吾於是。益知學術之害。其端雖微。而其禍酷烈矣。夫君子思不出其位。不易乎世。不成乎名。遯世而無悶。正是學者處世之大經矣。昔

者顏淵在陋巷。簞瓢自樂。而孔子賢之。夫春秋之末世。周失其柄。諸侯無紀。羣黎百姓。殆墜塗炭。天下之勢。若將崩之隄。岌乎其洶洶。則其閒。疾痛患害切於身者。亦何所不至。其比之今日昇平之世。有小小乖繆。又果何如耶。然若其時。而憤激暴氣。瞋目攘臂。謀之朋輩。要之門人。鼓動久困積冤之民。以期萬一之僥倖。其謂之何。蓋此理亦甚明白。不俟智者而後知之。然渠惽於此。叛道亂正。陷於人得而誅之罪。抑何歟。蓋儒者之學。義理而已矣。堯舜禹之相授受。必辨於人心道心之危微。孔子十五志于學。至七十。始從心所欲不踰矩。然則雖聖人。亦皆一主義理。不專任心。故不曰義之與比。惟義所在。則曰以禮制心。則曰在正其心。則曰非禮勿視聽言動。彼陸王之學。則不然矣。剝落義理。惟其一心是任是師。曰。吾目能視。耳能聽。心能思。手足能運動。更要甚存誠持敬。曰。求之於心而非也。雖其言之出於孔子。不敢以爲是也。求之於心而是也。雖其言之出於庸人。不敢以爲非也。夫物格知至。實有得乎義理。以爲虛靈知覺之主。則

於動容周旋自能無不中禮而羣言之是非亦不啻蒼黃之易辨矣。其有未及乎此焉則已不能免於氣稟之拘欲之蔽虛靈爲之所累義理爲之所昏。則其所知覺者亦惟情欲利害而已耳則又安得動容周旋中禮。而羣言之是非。折衷之於我心乎。是以學者。微而不視不聞。顯而人倫日用。皆必戒愼恐懼以存之因物察極以從之。未聞有視聽運動任諸心。雖存誠持敬。不敢以爲法。言之是非折諸心。雖聖人之言。不敢以爲則也。嗚呼。拘蔽累昏之餘。而所講習者。又如前言。是其徒之所以顚倒繆戾。猖狂橫肆。自以爲躋於高明。而日淪於夷狄禽獸而不知矣。蓋陸王不知本然之性。故以知覺當之。遂謂理由覺生。而物不與。於是冥然悍然。斥格物爲支離外馳。夫指知覺爲本性者。執其用而忘其體者也。斥格物爲支離者。私其內而遺其外者也。忘其體。故雖知有知覺。而不及於其知覺之所係生。與其知覺之所爲極者也。遺其外。故雖知有事物。而不見乎其事物之所當然而不容已。與其事物之所以然。而不可易者也。宜。其弊使

人嬖妾代嫡認賊作子。則強者成拗而柔者流靡。高者簸弄精神而卑者陷入於權謀詐術甚或遂爲病狂喪心之人。而甘陷人得而誅之罪。亦其勢有所必至矣。嗚呼。學術之流禍。蓋至於此而亦極矣。良可悲痛也已。因近事觀之。愈益見吾程子格致工夫。確不可易。此蓋聖學之起手。學者不由此而求入孔孟之門。猶之舍規矩而成方圓也。必不可得矣。惜乎。澆漓之餘。雖閒有知從事於此者。而確定其志。朴實用力者寡矣。是以孔孟之正學。半明半晦。玉石混淆。譬之日月懸天。而雲霧翳之。雲霧不開。則日月何由復明。今歲大朝移營。此誠更張綱紀之大機也。近日竊欲上啓林祭酒。請乘此機會。一洗海內學術之弊。一如有明洪永成弘之間。上之教者。惟以程朱爲教。下之學者。惟以程朱爲學。其違叛於此者。雖在俊髦異材。必黜而不取。若果如是。則將功利之毒日消。而考據文辭之陋日減。老莊佛氏之說。與夫儒之相似而非者之言。亦漸漸而衰廢。於是使天下之學者。如開雲翳而睹日月。始瞭然識吾儒術之眞。而不復惑紛紛

莫定之説。則道德由是而一、風俗由是而淳、國脈之將衰者由是而浡然振起。
則使其政治、駸駸乎洪永成弘之初、固將不難矣、豈不愉快乎。既而思之、孟子
所以繼孔子者、蓋在積其知言養氣之功、而極其性善盡心之學、夫其所以爲
孟子者如此、而後能距楊墨、放淫辭、閑先聖之道、不亦善乎。若其學術未至於
此而徒日呶呶焉告於人曰、楊墨無父無君也、夷狄也、禽獸也、則又何得以能
服楊墨之心、而抑其氾濫之勢乎。且夫君子有諸己、而后求諸人、無諸己、而后
非諸人、吾之所以學程朱、未能心其心、居敬窮理、未能極其至、子臣弟友、未能
盡其分、則吾未嘗有諸己、無諸己也、而何可以求諸人非諸人乎、乃截然不復
續此念矣、顧惟學術之正、忠信之質、如先生者、而爲之、其可以庶幾乎。意者先
生眞誠惻怛、亦何忍於坐視是滔滔而竟不以援耶。盍一爲天下謀之矣。生索
居之久、無良師友能相督責、又何所長進、惟於格致之訓、實落用力、比舊亦較
親切、然拘蔽深痼、習染未除、禍機萌蘖、時而發生、雖便於其處、切加截斷、卻是

居敬未熟。料居敬熟時。當自無是患矣。然嘗幸蒙不棄之善導。於學術誠僞邪正之辨。既已明白。無復可疑矣。譬如馭六轡於大道。或時迂餘橫斜者。乃是馬性未和。馭手未調。然既在大道上。決不復趨徑蹊。踏荊棘矣。雖然。是亦以恕人可也。不容有以自恕也。只當朝夕痛自鞭策。益致居究之功。以庶幾異時相見。無所愧於今日之言耳。會有的便。撥冗執筆。傾倒之深。不覺累紙。雖已羅縷至此。尚未能盡其意。然其閒亦必有可因以垂教者。切望不厭煩瑣。晤言未期。臨風悵悢。時氣鬱著。惟祝爲道保重。

伯楙の文淨稿本になし、今參考の爲之を補ふ。

送佐久間生歸松代序　字子迪號滄浪

本多伯楙

凡士生於今之世。欲志於聖人之道。而有爲於家國天下者。不可不先擇學術也。苟其不然。而一爲異氏所惑。則心術壞而不自知。隨而蔽陷離窮之病生。終身不能悔。不唯不能入道。又必害於其事。可不愼乎。韓子曰。道於楊墨老莊佛之學。而欲之聖人之道。猶航斷港絕潢。以望至於海也。故求觀聖人之道者。必自孟子始。吾於道於陸王之學。

而不道於程朱子之學者亦云然楊墨之學則孟子既辨之。老佛之學亦程朱子辨之。其爲異端人人皆知之唯陸王之學以未遇大賢之辨駁其爲異端未甚明非有識者不能辨是以學者多惑之夫禪佛之所以難辨而可惡者以其說心性之近理而亂眞也然彼猶廢人倫去事物其跡全與我異則未甚難辨也陸王則否。人倫事物皆其所不廢其跡全與我同然而其實則與我異而與彼同。是所謂似而非之尤者矣豈不可惡乎然則其與我同者僞而其與我異者眞但改頭換面耳。陸王之所以尤難辨而尤可惡也況其人則一世之偉人而多方誘之乎。此學者之所以惑也。是以明之叔世其學大行幾至爲聖人復起而古聖賢下學上達居敬窮理之遺法滅裂無餘。學術壞而人心不正風俗隨之寇盜起朋黨立。而夷狄乘之。明社遂屋焉。故識者謂明之天下不亡於寇盜不亡於朋黨而亡於學術。學術之壞以釀成寇盜朋黨之禍也。嗚呼學術之不正不幸而行于世其弊至於此。可懼也。然則學術之關人心正道豈不大哉。吾故曰士志於道而有爲者不可不先擇學術也。松代佐久間君子迪來學於吾師林公之門。有年矣抑林氏之學羅山先生以來世司成均專宗朱子學術之醇正亡論至吾師道

德高。世人莫不仰。故四方之士。欲講正學者。皆來歸焉。然吾未知其果皆能得吾師之旨否。如吾子迪。其將庶幾乎。余因往來。爲忘年之交。爲人識高才秀。於小學尤用心。博綜衆藝。能文辭。妙音律。性又剛毅。議論不苟同人。勇遷於善。宜其年未及而立。而所成已如此也。吾復觀其所爲不安已成。日有孜孜。則知異日其進不可量。而必足當國家之大任也。聞有君命。將歸。來告別且請言。於是稱其能擇學術。而不惑於異氏。以贈之。

答加藤士成書

天保八年冬　士成は字、通稱は彦五郎、天山と號す。上田藩士。

秋閒之傾蓋。喜出望外。切欲控晤數日。少陳膚見。以求是正。而貴藩制嚴。勢有不能。忽遽奉別。徒增悒怏。爾來公私多故。不及以時通問。極切馳想。忽領長箋。反覆數四。恍如接顏色。沃慰可知。中間教喻不逮。議論痛快。既服多才。而又謙虛卑遜。不自賢知。此足以見用功之槩。感歎良深。至語及淺學。推許過情。固不敢當。且責以重大之任。謭弱何能堪此。夫學術一事。固非僕輩之所當開口。然杞國之憂。亦自有不容已者。故往與伯林一言之。其意則以謂天下莫大於學

術學術不正、則綱常不明、綱常不明、則朝廷不端、朝廷不端、則士習不美。士習不美、則民風不淳、民風不淳、則國脈不盛、而天菑隨之、將不止凶荒之荐臻矣。方今人親異見、家出詭說、割裂聖訓、無復統歸、天下之書益多、而道益晦、學者之事益繁、而理益乖、文辭益華麗、論辨益詳密、而其躬行實德益索然、綱常之不明、習俗之不淳、而卒成鹽賊之變、乃亦在於此、然則當今之急務、又豈有先於正學術者哉、幸而今歲大朝將軍宣下。必有更張綱紀、申明號令、宜乘此機會風勵之於天下。天下之大。未能遽及之。則宜先整頓江都。蓋江都儒者之淵藪也。江都學風已變於正、則四方靡然、將必有不假禁令而歸向者矣。使教學者專守程朱家法。無有背叛。務損浮末而就本實。然而其告令之際、當丁寧淳復、一不行則再、再不行則三、三則四、必下之從之、如風之相隨而後已。何啻一時號令之云乎。尊兄所以論反復二千言、其於正學之行。不必假官府之意甚詳矣、然以啓觀之、道之行則必由學制矣。夫古之王者、建國君民。教學之爲先、大學之制、昉於五常、其名曰成均。成云者。所以成其性之虧也。均云者。所

以均其習之偏也。虞之庠。夏之序。殷之瞽宗。周之辟雍。其名雖異。實則一也。又兼立四代之學。是爲五學。又有門闈之小學。以教國子。有四郊之小學。以教國人。其既長也。則由而進之於大學焉。其鄉遂州黨。亦皆有學。於諸侯之國。又有大學。有小學。有鄉學。而其教之之法。國子則師氏保氏大司樂詔之。中年而考校。九年而大成。其秀者官之。其不率教者屏之。至鄉學。則鄉遂之吏。受教法於司徒。以教之。歲時書其德行道藝。三年大比。與其賢者能者。而登之於天府。又中年論其秀者。升於大學。俾與國子齒焉。諸侯則歲貢其大學之秀者。天子試之射宮。視其能否。而行慶讓之法。天子又以春秋視學。修釋菜之儀。舉養老之禮。承師問道。合語乞言。以身爲之倡導。先王教人如此其周。又如此其至。是以天下之人。勉爲賢智。而恥爲愚不肖。皆莫不以蒸蒸丕變。然則道之行也。必由上之教導。顧不昭昭哉。夫古昔之所以盛者。以天下有此教學也。後世之所以不及者。以天下失此教學也。其一得一失之閒。而係盛衰治亂之故。教學之於

天下。又豈不重且大乎。夫東西殊域。今古異宜。雖未可遽取其跡。亦不可以不法其意也。苟欲法其意。舍程朱之議而何適矣。程朱之議。言明道熙寧箚子。文公學校貢擧私議。然今施行之。亦宜有講明而損益者。蓋成周之教。雖已善美。然未能如程朱之精要明備者也。恭惟大朝開國。承兵革之餘。海內學者。類皆鹵莽滅裂。惟林道春。頗爲閩洛之學。於是。日召辯中講明經史。咨訪治道。及其立學。又以程朱爲表準。大朝之制。豈有善於是者乎。升平于今二百餘年矣。天下之民。日不見干戈。耳不聞鼓鼙。各樂其樂。各利其利。雖固天運。亦由人事之修。而本其所由。則程朱正學之效居多也。厥後風氣漸開。耳目漸廣。往往厭舊喜新。舍利趨靡。而上下皆不甚畱意。是以漸復龐雜。文公所謂經學之賊。文字之妖。歲盛月新。積至于今。流弊已極。其勢不可以不革。尊兄既以兵事爲教。請復以兵事譬之。其玩弛偷懦之餘。謀決而不動。動決而不禁。紛紛擾擾。莫之能統御也。如此則如之何。必也更其號令。變其旌旗。懸非格之獎。以倡勇敢。然後兵氣可得而振耳矣。非惟兵然也。雖農亦然。

官久廢授時之典。民不知趨候。日中而不耕。寒至而不納。蠢蠢懜懜。莫之能平秩也。如是則如之何。必也復其舊典。申其敎令。示不貸之罰。以飭惰游。然後民事可得而興耳矣。故明道先生熙寧箚子曰。去聖久遠。師道不立。儒者之學。幾於廢熄。惟朝廷崇尚而敎育之。則不日而復。又文公學校私議曰。必欲乘時改制。以復先王之舊。而善今日之俗。則必如明道之議。然後可以大正其本。而盡革其末流之弊。以此論之。僕恐今日之勢。程朱復生。亦必望朝廷之整頓學制。而不敢以時之不用而默默自沮也。蓋天之明命。天下人人之所同得。非有我之得私也。是以仁者。己欲立而立人。己欲達而達人。視彼衆人之同得乎此。而不能自知者。昏迷瞶亂。陷險阻。溺汚穢。莫不恬然自安以爲是也。豈不爲之惻然哀痛。而思所以有以救之之術哉。夫程朱其道固在乎己。而道之顯晦。亦係乎己矣。故其公言而私議之者。未嘗不以道自任也。然世有程朱諸君子。則雖上無學制。人猶得爲規矩而取法焉。乃斯道之大幸矣。不幸今又無是人。有志

之士。既倀倀焉、無所附託、尋常庸下之者。又將焉定向乎。僕之無狀。何敢以此道爲己任、顧其心亦已粗知正學之歸趣、而其天命之本體。終亦有不可得而泯滅者。是以徘徊仰望、以冀朝廷之正學術、而澄治源耳。今誠賴朝廷之敎化。使天下之人。皆知向於正學、其閒又得英邁特達之士。維持翼奉。相共推明此學、由其所已明、而推以及之、則向之貿貿瞶亂。陷險溺穢者。亦皆可以漸革其舊、若是而後、明綱常、淳習風、可期也。雖然。此事極難矣。未識終得所願否、則我心之憂。何時而能亡之乎。所幸吾兄從事正學。所見不羣。所謂英邁特達之士。舍如吾兄者、而誰之望乎、則維持翼奉。已先有其人。得助不尠。是足以自慰也。但來敎謂、異端俗學。設外迫於其嚴。姑革其面。至心術之隱微。意見之執迷。恐無益也、是則所未曉。夫小人既革其面。革道可以爲成也。苟順從而尙深治之。則亦已甚矣。此理詳於程子易傳。尊兄取而看之。亦知小人之假善。君子之所容也、又謂彼之常態、撲之愈熾、觸之愈激。是奚足懼哉。若以爲可懼。則何程子

之疏之於前而朱子之議之於後耶、事之變革、雖得其至當、人之未信而致洶洶者、或時有之、然其久也、必相信從。易曰、革已日乃孚、其此之謂歟、又所引據明道之言、是但不過託詞道人之交際。務在涵育薰陶。相感以誠之意、非眞有此事也、若信憤慍爭訟、激成夫新法之行、其所以爲明道、果何在哉。因其有此言、亦卻見得本無此事。愈益分明。請更詳之。來教又以朱子爲能鋤其巨盜殘其猾賊、僕考之史傳。殊未然也、如橫浦・永嘉・永康之流。蘇黃門・呂舍人・葉永心之派、是其因朱子之辨而息者矣。至於江西之學、則辨之而不衰。排之而不止。遂起吳臨川・趙東山一派之議論。夫朱子之德與學、而猶不能普其道於一時者。無學制故也。明之君相。雖非如朱子之賢。而洪永・成弘之閒。能明正學於天下、朝皆純德之賢。而野多正行之儒。政治之隆。迴出於漢唐之上者。上有學制故也。白沙・陽明之起。蓋乘其制之稍弛、而政治自此而衰者。亦可以見僕說之頗有根據。高明盍試一思之矣。至其謂大兄與伯林云云、惡是何言歟。德之大。

學之正、自程朱後、史策既乏其人、其宜著顯赫、雖如許魯齋・薛敬軒・胡敬齋、猶尙依舊。未能有統一天下也、而況僕與伯林而能爲之乎哉。抑尊兄有見時之不可、而深知於心、故爲此說而相戲耶。不然則又曰、以力服之耶、以德服之耶。若將以德服之、願執弓戟而從其後、世未有有意於服人、而善服人者也。苟有意於服人、其以德與力、雖如殊途、特柔剛之分、而卒同歸於覇者之流矣。尊兄不察焉、乃欲爲之執弓戟、是殆將爲覇者之臣僕者矣。僕以是知此說必相戲者也。但尊兄以戲而贈之、僕亦以戲而酬之。君子以翰墨相戲、樂莫尤焉。詩曰。善戲謔兮不爲虐、此之謂也。雖然、尊意不以爲然、伏望不憚下教。亦此格致之一端、無益於尊兄、必有益於僕也。維時倍寒。千萬以道保重。啓再拜。

令弟之托、深恐不任。然重有命。敢不敬諾。但僕秋來爲東游之圖、再三請之而未遂、然冬內必得允報、則待早春、乃可上途。令弟年少。遠游計當不便。若欲必相從、在僕固不妨也。啓又拜。

吕谷碩、通稱は五郎、字は子巖、精溪と號す。津山の儒官。

與吕谷精溪論士祭

比日不審動履何如。向者溫山堂之會。妄論士祭禮。尊兄謂大夫三廟。士一廟。士之祭。固不及先祖。僕舉以曲禮士祭其先。尊兄謂其先不必是先祖。雖禰亦不害稱先。議論反覆。未有定極。而此事關係極大。不比尋常小小文字紕繆。尤不可輕放過。因錄愚見。以拜呈。如有謬誤。幸見指誨。夫先王制禮。本緣人情。喪祭禮之最大者。豈亦有遠於人情者哉。夫五服之制。自天子以至於士。未始不同。而祭祀則止及其立廟之親。是果人情耶。儀禮喪服傳云。禽獸知母。而不知父。野人曰父母何算焉。都邑之士。則知尊禰矣。大夫及學士。則知尊祖矣。所處愈高。則所識愈深。其理固然也。程子曰。高祖服既如是。祭祀亦須如是。其疏數之節。未有可考。但其理如此。若止祭禰。是知母而不知父。禽獸道也。祭禰不及祖。非人道也。此言誠合於人情矣。今乃執大夫三廟。官師一廟之說。而所祭不及祖禰之上。是不以學士大夫自處。而喪其孝敬之心矣。而可乎哉。夫禮本於

情、古今異宜、固當隨時爲之損益、卽使禮無明文、情之所不能止、尙可以義起。況其禮文、見於經傳者、數數可證。大傳云。大夫士有大事。省於其君、干祫及其高祖。古者諸侯、有祫而無禘。大夫有時祭而無祫。蓋禘天子之事也。祫諸侯之事也。大夫士固不得常祫。然有大事。見省於其君。則得上達而祫其高曾。夫天子諸侯之祫、皆於其常祭之祖。苟士大夫不得祭高曾。其祫祭又何以得及之乎。此士祭及祖禰之上。其證一也。喪服小記云。大夫士之妾祔於妾祖姑。亡則中一以上而祔。夫祔之爲禮。必以其昭穆。而其與己同昭穆者祖也。與祖同昭穆者高祖也。中一以上。則高祖姑無疑矣。旣祔於高祖姑。則高祖有廟祭。亦明矣。此士祭及祖禰之上。其證二也。大傳又云。宗其繼高祖者。五世則遷者也。夫惟適玄孫。得祭高祖。而族人之不得祭者。盡宗之而祭。故有繼高祖之宗。苟祭止及於祖禰而已。則是有繼禰繼祖之宗。而無繼高曾之宗也。然則經傳豈又有此文哉。此士祭及祖禰之上。其證三也。且夫曲禮。士祭其先四字。固是確不

可動。此一節本明天子以下。祭祀有等級。而上者兼下。而下者不得兼上。故天子曰天地。曰四方。曰山川。曰五祀。諸侯曰方祀。曰山川。曰五祀。大夫曰五祀。士曰其先。初非謂廟祭而有等差也。則其先云者。非謂先祖而何。經傳中豈亦有稱其先。而直以爲禰。如尊說者乎。僕以是知此。是賢者一時之強語。必非深考之說。故不復深議也。鄙見如此。明者以爲何如。

與近藤篤山書

天保十四年冬

篤山通稱は高太郎、名は春蔭、豫州小松の儒

啓欽慕先生久矣。往年奥山存中。訪啓信濃松代。留數日。爲稱先生之盛德。啓於是竊有所感發。後來江都。與金子必大相知。必大又爲言先生之容貌辭氣。其待人而接物者。溫厚和平。與尋常師儒自別。啓於是竊有所儀刑。近者貴門丹生來此相從。因又得聞先生講學之概。近人解經。多以講家末疏。以是支離繳繞。從爲虛說。其名雖曰尸祝於洛閩。其實與之背馳。而先生所說。不作聰明亂舊章。務明本經大義。大有事實。啓於是竊有所警省。雖未親奉謦咳。然其受

沽渥亦已多矣。獨恨牽制官守不能遠遊負笈有心執鞭無緣因囑丹生相爲介紹致書帳下以布綣繾之誠并有所懇。伏希垂鑒。啓松代有先人之弊廬。所謂象山者當其南檐。故嘗以象山書院命其聽事而未有扁字。又其山。中嶺者。地勢極不惡。坐此而望南峯其貞秀之狀。如吉士拱揖而立。可敬而不可狎。因欲爲亭以賞其勝取晉人何敬宗遊仙詩語。牓曰懷貞。又未果。屬者命爲郡監。將北還願得先生墨妙二扁而持歸。視事之暇。償夙昔之志。各揭之楣間。旦暮仰觀以寓矜式之意庶幾可以爲飭身寡過之資矣。則雖不得隨侍几杖亦猶永聆餘教也。伏惟鑒其誠悃而許其所請。何惠如之。啓不勝懇願之至。不盡。

絹素二幅納上。象山記及雜文數首。幷塵尊矚。閒時一過。幸賜鐫誨。亦所懇也。啓亦覆。

與山口菅山書

天保十年八月十日 菅山口小寶 字大夫二世

昨蒙銜雨見顧。遂華寵惠闇齋年譜。且辱款曲教誨。極荷不棄顧僕之謭劣。何

菅山との往復文詞寫本頗る區區たり。今菅山に贈りたる原本と對照することを得たる箇所のみ其の異る點を欄外に注す。

以獲此於先生長者、喜幸感激。不知所謝、夜來紬繹所聞、雖未能盡悟、然大意亦已釋然矣、獨至於鬼神之說、鄙心有未妥者。先生云。有是理則有是氣、故有當祭祀之理、則有當感格之氣、不必問其氣之安頓處所。僕謂精則精矣。然猶如隔一膜。更剔抉之、不知云何。先生云。剔抉此一層。或涉于怪。故不欲說。僕於是竊有惑焉。夫天下之理。唯其直而已。有而有。無而無。固無所容乎私意矣。若果有怪在焉。則呈露其怪、何害乎理。若果無怪在焉。則剔抉千層。何曾有怪。又何爲而傷乎理乎。今徒懼其涉怪。而遮覆含糊。不欲發揮義理之蘊。僕恐程朱子格致之意。亦決不如此也。自正學不振。世之學者。昧於窮格之訓。是以其所論說。多略上面一截。雖其稍高者。亦不免於世俗忌臭掩蓋之見。往往令人懊惱。惟先生德崇業廣。豈可與此輩同日而語。然以僕所見。猶或有微似之者歟。僕之鄙意。竊願先生姑不論其涉怪不涉怪。將箇物事。十分挑撥。至其皮膜盡處。便揭出其本眞體面。以示晩進之士。誰敢不心服。若或不然。所謂揣擬捏合。

象山の書、もと淨稿本に無し。されど彼此對照の便宜の爲之を補ふ。以下の分も亦然り。

假令有所發揮亦終非正學端的之窮理眞實之知見矣。夫語犯長者固所當戒然既蒙不棄不敢不盡其愚且疑而不質惑而不問非爲學之道又不敢不求其正但鬼神之事至精至微非末學之所先今躐等而問之恐先生不欲教答然或先其易者或先其難者各隨其淺深此亦程子格物之方伏望終以教之昨聞已有成説作書想僕之所惑當既有辨明之者切欲借之反覆詳味以助窮格工夫幸勿靳也。今朝已擬造高門以陳疇昔之謝會有劇幹不能出廬。此本手翰姑以敍謝意且以乞教。日閒若得少暇必詣謁以究所聞粗率不罪。

八月十日

復佐久間子迪書　　山口重昭

過日納謁晤言移晷既以佳酒嘉肴不勝鳴謝之至。詰旦忽承示誨見告以坐間所及鬼神之説再三捧誦警發不少。兼見尊見於窮格之學用意之鋭何慰如之。抑曩日一寸面晤之頃鄙生固不能盡拙論之顛末而尊兄亦似少有不悉鄙意之所在者矣。今

且略論之、大抵近時講性命之學者、以鬼神之說者理義之奧、故心下爲此先吃一驚嚇、必欲探討搜索其所以然者而後已、是以有形滅而理不滅、身斃而知覺不斃。紛紛之說、要之勞擾作弄。與彼爲梵天帝釋無位眞人之說者、何所異耶。程子所謂造化之迹云者。正欲驅除是等妖妄怪誕之惑。而說者解程語。以謂是程子敎人就造化之迹以窺鬼神矣。非以造化之迹直爲鬼神也。殊不知程子之意、乃謂風雨露雷之在天、飛潛動植之在地。有氣有形。有痕有跡。忽然聚。忽然散、莫往而不鬼神之功用焉。亦何怪之有耶。若夫伯有爲厲。元徽見夢之類、則其人用物弘。取精多之所致。猶爐火已熄、而餘炎猶存耳、故程子謂別是一理。而胡氏亦謂理或有之、未嘗以此爲鬼神之正理也。夫子論鬼神言。視之不見。聽之不聞。則其無聲色臭味之可言。亡論矣。而今之說者。大類欲必百方求些許聲色臭味於冥冥之中。而後甘心焉。何其悖耶。故鄙生曩日與賢者說之。意將明鬼神之不容說也。非不欲說矣。欲斥說怪之非也。非避說怪之嫌矣。而詳來敎之意。似以鄙言爲故作含糊曖昧之說。以欲幻人之觀聽者矣。若果然、則恐少不免於不盡人言之謬。而其所以然、則坐於鄙生之拙於頰舌。不能展布衷懷。以誤高

壯耳。夫子之論鬼神曰。精氣爲物。遊魂爲變。故知鬼神之情狀。則人之自少至老。血氣之滋息遊散者。卽是鬼神之情狀。而又曰。未能事人。焉能事鬼。則人之事生父母。所以事先世祖考也。斯理至正至平。至明至白。毫無怪之可說矣。鄙意如是。而計尊兄必有別有所見而與是大不同者。舉以見誨爲幸。別紙答玉井生書。併附呈之。願詳覆之。再下及尊意之底蘊。千萬不勝請益之至。

八月十三日　　　山口重昭再拜

復象山佐久間賢兄座下

答玉井生　　　山口菅山

鬼神憑依之說。千古難明一大題目。而尙齋先生有來格說。尤見先輩用意之苦。析理之密。然僕嘗竊疑其求之或過。而使人有說怪之弊矣。今觀尊兄所難。似逐一有理。而有符於愚衷者。甚愜所望。而僕之所疑。更有甚焉。然後學浪容喙於先輩。犯不韙之大者。是以逡巡而不敢發者久矣。今承下問之及。遂不敢泯默。以待左右訂焉。夫尙翁之爲說。動以祖考不滅之理言之。不知所云不滅之理云者。所指何說也。若以爲其居處

嗜好。言笑志尚、則涉於氣性、不可謂之理也、若以爲其仁義禮智之秉性、則性者萬物之一原、豈祖考之所獨專哉。況乎仁義之性。人固生前梏亡殘滅、而爲不仁不義之事者衆矣。豈得言沒世之久。尚能存而不亡乎。朱子答廖子晦書。說鬼神之理詳矣。其所云氣之已散者。既化而無有矣。而根於理而日生者。則固浩然而無窮也。是其最要語。而尙翁立說。蓋本於此、然理搭付氣而在焉。安有人之形神既散。而所云所賦之性。終古不滅。以凝立於形氣之外。溟漠之中之理乎、故所云根於理而生者。亦曰祭祀之報。本於人心。在子孫有當祭之理。在祖先有當饗之理。當祭當饗之理在於斯。而鬼神卽感格於斯。郊則天神格。廟則人鬼享、洋洋乎如在其上、如在其左右、此是謂神之格也。請以譬明之。陰陽相薄而雷放聲。石鐮相戛而火發光。是乃必然不可易之理。隨感隨應。觸處新生。何曾謂前雷已收。後雷未奮。前火已滅。後火未起之時。有不生不滅之雷與火。而才然凝立於陰陽石鐮之表耶。故程子與康節論雷起處曰。起於起處。蓋起於起處則滅於滅處。起則有、滅則無。豈以今日之雷。爲昨日之復耶。故陰陽薄而有雷發之理。石鐮戛而有火出之理。子孫求之而有神格之理。是乃所云天地之功用。造化之

迹者然也。朱子又答子晦曰。聖人之制祭祀也。設主立尸。焫蕭灌鬯。或求之陰。或求之陽。無所不用其極而猶止曰庶或享之而已。其至誠惻怛精微恍惚之意。蓋有聖人所不欲言者。非可以世俗麁淺知見執一而求也。豈曰一受其成形則此性遂爲吾有。雖死而猶不滅。截然自爲一物。藏乎寂然一體之中。以俟夫子孫之求。而時出以饗之耶。必如此說。則其界限之廣狹。安頓之處所。必有可指言者。且自開闢以來。積至于今。其重併積疊。計已無地之可容矣。是又安有此理耶。蓋子晦以知覺之原爲鬼神。故先生以是告之。今謂不滅之理。橫不絶之氣而復。則雖如僅免以精神知覺之不滅。說鬼神之弊然苟以謂祖考之理。鎭常在天。必俟子孫之求而後來復。則亦與夫嘯于梁立于堂者所爭幾何耶。要之雖有以知覺言。與以理言之異。而將同歸乎談怪說誕矣。是僕之所敢疑而不敢言者。偶承垂喩。因發積年之衷。以請商訂。

己亥八月　　山口重昭再拜

玉井賢兄座下

八月二十日

得益は開發に作る。

醻は酬に作る。

必は決、僕は鄙生に作る。

未下は頗多、稽緩は稽遲に作る。

也の下に豈勝敬服乎あり。終有所未安者の所なし。

頓は既、曉は喩に作る。

僕は鄙生に作る。

再與山口菅山

頭注せるは關氏藏菅山宛原本の一部なり

承誨諭鬼神之說、併示答玉井生書、拜讀數過。得益良多。前以晦疑極深、叨請其說、方懼率爾突冒、或獲罪於左右。豈意誘進愚蒙、不加譴訶、與之醻酢、綢繆如此。感佩之極。何如可言。來教謂、前書不悉尊意之所在。其所以然、則先生拙於頰舌之故。此必不然。正是僕輕忽之所致。悚懼亡已。然幸因長者之教、而知所以自警、則其受賜也亦多矣。敢不服膺以毖其後。屬此數日、友朋萃集、且鄉里書信、撥置未下。是以裁報稽緩。極切愧負。昨來稍暇、復取來教讀之。掩卷而思。思而復讀。如是者再四。尚未能該其本末。然亦足以知其博大昌明、果與世儒忌臭之見、有大逕庭也。然於鄙意、終有所未安者。來教所云。其端雖多、竊以管見窺之。大概似不過謂聲色臭味之無跡、以明鬼神之不可說。謂精神魂魄之頓滅、以曉怪妄之不容有。又閱答玉井生書、縷縷數百言。然其要皆不出於此旨之外也。若僕之所見、則雖固不能不與此同。然其閒又極有不能不異者。

敓は奪に作る。

歆は原本のまゝ

請先論其不能不同者而次明其所以不能不異夫鬼神者氣而已矣非理之謂也大極流行陽動陰靜一變一合五材順布經緯錯綜循環不已各以其類凝聚成形既已氣化而成形則形交氣感遂以形化而人物生生變化無窮矣夫人物之在於兩間其所以生生不窮者理也其聚而生來而伸散而死屈而反者氣也惟理也故性云者初不爲屈伸而消長不爲聚散而增損不爲生死而有無然此乃萬物公共之理而非有人之得私也惟氣也故鬼神云者總而言之天地之闔闢日月之升沈風霆之起滅雨露霜雪之變化四時寒暑之推敓潮汐之消息草木之榮枯凡有血氣者之盛衰生死何莫而非其功用程子曰造化之跡張子曰二氣之良能蓋謂此也然分而言之天地固不可得而混人物固不可得而淆又於其人云者之中亦各有隔限分類不可得而紛亂也故曰神不歆非類民不祀非族然既曰散而死屈而反焉則亦寧有塊然自爲一物而具聲色臭味隨祭隨出飲食醉飽與生人交歡之妄哉若夫伯有元徽

殆と矣となく、尊說の下に焉あり。來教曰は來教云に作り、夫子論鬼神の下に之情狀あり。

僕は生に作る。

所適は自然に作る。

不爲萃は萃非萃に作る。萃之大者也は尤爲大故に作る。

之變。譬之爐火餘炎。誠契鄙懷。其快殆不可言矣。是則雖有異於尊說者。終亦不能不歸於同者也。來教曰。夫子論鬼神曰。精氣爲物。游魂爲變。故知鬼神之情狀。則人之自少至老。血氣之滋息游散者。卽是鬼神之情狀。而又曰。未能事人。焉能事鬼。則人之事生父母。所以事先世祖考也。僕竊謂。夫子精氣游魂之訓。亦該萬物而言。不專指此人也。夫萬物之生。惟人得其秀而最靈。五性具焉。萬善足焉。神知妙覺。獨殊異於衆物矣。夫衆物之枯死。循其氣之所適。則其已散者。既化而無有。固已不待言矣。惟人以其靈通至情。不忍其祖考之精神。忽焉而歸於消滅。是以自其始死。弔魂復魂。立重設主。爲之宗廟以假之。立之尸祝以祭之。皆所以聚其已散。而不至於絶滅。蓋雖如涉於人爲。然此亦聖人之至教。所謂因其所有而品節之者。而固非有所作爲於性分之外也。易曰。萃亨。王假有廟。又曰。渙亨。王假有廟。蓋其義亦甚明矣。夫萃之爲卦。兌上坤下。澤上於地。爲萬物萃聚之象。然孰不爲萃。萃祖考之精神。萃之大者也。故文王繫此

憂虞は憂慮に作る。

辭は意に作り本義の上に文公あり。以は而、僕は鄙生に作る。

爲は成、觀は以に作る。二卦の下に見之あり。類注先祖…全部なし。

卦以此辭而文公又作之本義云。廟所以聚祖考之精神也。又人必能聚己之精神則可以至于廟而承祖考也。夫渙之爲卦。巽上坎下。風行水上。有離披解散之象。凡物之離散。皆爲可憂虞而莫甚於祖考之精神。渙散而盡。故救渙散之道亦莫大於收合祖考之精神。故文王於此卦發此理而本義又云。祖考之精神既散。故王者當至於廟以聚之。僕嘗亦觀其象萃與渙。皆有互艮。艮爲鬼冥門（見王應麟所輯鄭康成易注）即廟象。又其德爲止。故爲止祖考之精神於廟中之象。是則萃之所以能爲萃。而渙之所以能救渙者也。觀此二卦。祭祀之道。感格之理。豈不亦顯然明著乎。（先祖雖年代悠遠者。安知其精神之不存。故聚吾精神以庶乎其聚焉。亦萃渙之義也。）若窮理不及於此。輒曰。人物之生。同歸於一壤而精神魂魄。蕩然無餘。其已散者。不可復萃聚之。則人之靈與物之頑。相去幾何。而聖人之祀典。果出於強爲耶。詩書所明言。祖考來格。神嗜飲食之類。皆非其實耶。借曰。祭祀之報。本於人心。其牲幣酒醴。只是表吾心之誠。其饗與不饗。固不必問。其氣之散而無有。吾心明知之。則其所謂

面竊の二字なし。

以の字二ケ所ともなし。于の字二ケ所ともなし。

誠者、又何由而生哉、然則祭祀之敬。必自此而弛、報本之誠。必自此而衰。人之事祖先者、必自此而慢矣。嗟乎。果如此。則其言之害於名敎、不啻如兼愛爲己之說、吾誠不知其流禍之於洪水猛獸何如也。又竊謂夫子所以語子路蓋曰。人鬼幽明。其事不同。而其理則未嘗有二也。故事人者。爲子則孝。爲弟則弟。孝弟之至。可以事鬼神。能盡事人之道。則事鬼之道備焉耳。非曰人之生父母。即其先祖之同氣。故能事之。便是事其先祖也。僕嘗見上蔡我之精神即祖考之精神之說、而竊疑之。以謂謝氏之意。若曰除我精神之外。更別無祖考之精神。則其三日齋。七日戒。致精竭誠。求諸陰陽上下者。不識是求何物、若又曰只是聚我之精神。在我者既聚。即是祖考之來格也。則是乃自聚自格。自祭自饗。何異乎夫曰以口齕口。以目視目。其理之虛。而其勢之逆。卻不在于彼。而在于此矣。是安有此理耶。其後讀朱文公集。獲思上蔡語。則可見其苗脈之言、而昔日之所疑。忽釋然而冰解矣。蓋吾之此身。即祖考之遺體。吾之與祖考。初無間斷。

既不得其著落は何所落著に作る。

辨論の下に徇あり。僕は生に作る。

私智なく、偏見の下に誤謬あり。不鄙は不棄に作る。

故因此祖考之遺體以感招其祖考之氣如斯而已矣是文公苗脈之說而謝氏之本意亦不外於此也若惟語其理而不及其氣於聚散存滅之故所見不眞則所謂以類而感以類而應者既不得其著落而聖人享帝立廟之意亦愈茫焉而卒無了期矣是則雖有同於尊意焉者終亦不能不出於異者也夫天之生物使之一本故天下之理無兩是無兩非二者決不容離立而並存也今既奉至教而尚狂易僭越辨論不置豈敢自信其說而取必於然諾誠思僕輩雖嘗尸祝洛閩然其所學素無師授俛仰於羣言擾雜之間以擇其當雖自謂其理如此安知非私智偏見幸蒙不鄙而所見不合正宜傾倒胸懷呈露疑惑頼其折衷以歸從於一是之地又況來教誘掖之餘使得盡其狂言亦何敢不求其益而徒以僂儞雷同爲乎哉因復極陳其鄙見以請其定論如是伏望鑒其悃愊恕其僭率憫其所不逮而敎之則千萬之幸也啓再拜

答玉井生書論尚齋來格說大都以文公答廖吏部書爲斷案可謂明詳

上は別幅に作る。恐は必、中は當に作る。關氏藏の原本性者公共之理而已矣より以下六十行を缺く。よりて其の闕所は單に傳寫本のままとし頭注なし。

的確矣。然其間亦有可疑者。已并論之。今錄上呈。鄙見恐有不中理者。幸
賜批誨。啓又拜。

性者公共之理而已矣。故心有生死存亡。性無生死存亡。其爲不仁不義。雖若桀紂盜跖。然其性未嘗亡也。但心之惛蔽。不見知其理之備我耳。此一事。固與鬼神之說。不甚干涉。然吾人平時所講究。性理之學。此等頭腦處。豈可放過乎。仍遂及此。如未爲然。則詳悉見教。何惠如之。

廖吏部少學佛氏。其後雖讀楊龜山書。而悟入於吾道。尚往往不免於戀著舊時窠臼。認得一箇有知有覺底物。目爲己性。把持作弄。到死不肯放置之意志。文公先生欲痛破此見。故其所答書。造語太快。是以讀者多誤解其意。然寬心游意。反覆味之。當必見其端的處耳。抑其所謂日生而浩然者。不知尊意以爲何物。曰理。曰氣。

理搭付氣而在焉。誠然。誠然。若無是氣。則是理又掛搭何處。而又忽曰在子孫

有當祭之理在祖考有當饗之理當祭當饗之理在于斯而鬼神卽感格于斯此甚不可解矣夫曰祖考之精神尙存故祭祀之是僕之鄙見而非長者之正說矣若曰祖考之精神果散化而無有則亦豈可曰有當祭當饗之理哉而尙曰有之御似此理別爲一物而存於氣外者不惟與前理搭氣之言自不相符推而論之是可以離心而言性可以離視而言明可以離聽而言聰也豈有此理

以雷與火喩祖考來格之理殊覺未妥朱子語類中後波前波之譬如與高說相類然此御無不可蓋流水之波瀾前後似不相屬者然只是一脈未始有間斷故子孫之氣與祖考之氣相接續者乃得以是爲譬耳彼其陰陽薄而雷發石鐮戛而火出後雷與前雷全無干涉後火與前火絕無經歷而以此況之則子孫求之而祖考來格者亦今日之來格者非先日之發揚者也而可乎吳伯豐嘗有此疑而文公以爲非是願先生更思之

程子當起於起處之語。此亦有說焉。明道先生曰。堯夫欲要以數傳與某兄弟。某兄弟那得工夫。要學須二十年工夫。又晁以道嘗以書問康節之數于伊川先生。先生答書云。頤與堯夫同里巷居三十年餘。世間事無所不問。惟未嘗一字及數。蓋二程子素不好數。其意以謂。不必廢當面切近之功。而推背面許多之數。今與邵子爲此言。亦此意也。而先生引據之。以立起於起處則滅於滅處之說。恐不止於祖考來格之理。自相妨碍。而於程子立論之旨。亦未始不相錯齬也。幸詳之。

尙齋來格說。舊年嘗一讀。今都不記其語脈。故未敢穿鑿作之辭。然其氣既不絕于天。豈不有理在天。子孫求之。而祖考來格。是理之當然矣。先生遽坐以談怪說誕。而與夫嘯於梁立於堂者并論。吾誠恐天下後世。必有議其深文者也。狂言至此。未嘗不戰懼。然區區之至情。亦恃眷愛之深爾。若有可教。願不憚煩也。

十月八日

復象山書　　重昭

鬼神之說。再承商訂。極感不鄙。宜速奉報。而此議本發於玉井生。中間插入與賢丈往復稽緩十數日。玉井延頸久之。故傾賜書。不得不直去寄與。而生亦不作還來。加以衰憊不堪寫字。遷延日月。爲罪不細。伏惟憐察。抑鬼神之義。夫子有言曰。之死而致死之。不仁而不可爲也。之死而致生之不知而不可爲也。可以爲千古談鬼神之斷案也。而人失於其所好。是以以爲有。則固以爲有。而遂至煩瀆猥褻。無所不至。以爲無。則固以爲無。而遂至忽略怠慢。亦無所不至。二者皆病也。惟敬而遠之。乃仁知兼至。而爲達鬼神之情狀矣。尙翁來格說。極言鬼神之理。曰雖祖考已死。其理不滅。則其氣亦不絕。曰木主爲活物。曰不滅之理。藏於不絕之氣。曰祖考已死。魂魄不至遽散盡。至其門人爲說。則旣以此爲先覺未發之妙。而亦有祖考之理。藏於知而無迹之說。然則與彼伯有爲厲。程子所謂別是一理者。正同條貫。而尤非所以說神祇人鬼之正理也。是以愚不肖未能不容竊疑於其間。而來敎輒謂。其流禍不啻兼愛爲我。深自畏怖、不知所措、而又自謂三復忠告。漸補前失。以免洪水猛獸之害。則幸矣、然又自悼桑楡景薄。日暮途遠。一旦溘死、不能窮尊示之萬一。則爲憾多矣。旣而又自思。寧死。果有夫所謂不滅之

理不絶之氣與無迹之知也。猶能得尋思領略於九原之下。負荊以立於鬼冥之門則幸之又幸也。來敎所論五體鬼門之說。雖所不見於程朱之說。然卦爻之所蘊。亦容有此。謹聞命矣。其他人物有無等之說。蓋亦有所受矣。雖未能無一二。然非濫筆擬否之所盡也。至別紙所云云。則漫條陳鄙衷。古拙之言。固不足瀆高聽也。千萬惟亮。

十月初八　　山口重昭拜

復佐久間賢丈座下

所賜別紙。第一節。心有生死存亡。或似可言。而不仁不義如桀紂。亦失其本心而然也。舜禹授受。有所謂道心者。則不可以心概爲無賴惡少也。

第二節。朱子答廖書。尊意謂造語太快。讀者多誤解其意。據鄙見。此正是所以解廖之惑。自不得不如是。未見有太快之失。但不知是乃誤解之處與否耳。至節末理氣之別。則鄙意謂。所謂日生者氣也。所以生者理也。

第三節。有當祭之理。有當饗之理。鄙意本欲述上蔡祖考精神便是自家精神之意。而造語拙澁。致誤尊聽耳。

第四節。雷火之說。鄙生以是竊議。尙翁前後波之說。而取譬不佳。似有踏伯豐非是之覆轍犯推說太多。反成汨沒之禁者矣。擧而被告。深荷警策。然程子論日月。有一日一箇之謂。而朱子亦曰。日月陰陽之精。終古不易。然非以今日已昳之光。復爲來日將升之光也。以是推說。以論陰陽合散斷續之義。雖曰前雷後雷只是一雷。前火後火只是一火。其苗脈在陰陽石鑛之中。終古不易。亦似未見其有病也。

第五節。數者術家之所尙。理者儒者之所務。若欲以數了當天下之事。必有所窒礙而未免有疑也。程子發堯夫。所以扶持世敎。不曾當面背面好尙之異也。且既言發於發處。則不得不言滅於滅處。亦陰陽合散自然之理耳。

第六節。深文之譏。大砭僻性。受賜是深。但聖人不語怪力亂神。而朱子解之。以謂聖人於神。則論其理以曉當世之惑。非世人之徒語而反以惑人也。然其及之也亦鮮矣。尙翁排毀吾邦所謂神道者。斥以異端邪說。但恐人之惑之。而特於來格之說。屑屑言而弗措。終不知其何說也。然是宜闕疑而不敢言也。繼是有復被誨。亦或不敢回報以重深文之罪也。故豫敷此悃誠。若不深咎。幸甚。

三與山口菅山書

所論鬼神祭祀之義。再辱垂誨。感刻良深。來諭云。夫子有言曰。之死而致死之。不仁而不可爲也。之死而致生之。不知而不可爲也。可以爲千古談鬼神之斷案也。嗚呼。何以得聞此語乎。此僕之所從前據以爲言者。而今先生不揆又發此言。是所謂不約而契。不求而合。喜躍何可言耶。其大處既如此矣。其他小處。時或不能無出入。譬如東流之水。閒有派別。決知其終同歸於海也。則亦當置而不論。但反覆來諭。殆似亦以僕爲過立苛刻之論。陰助尙齋。是極不可悟矣。來格說。往年一讀。今雖遺忘過半。亦尙能記其大概。蓋以僕觀之。通編瑕滓極多。不但長者所斥。然此書只是要教人起祭祀之敬。以救時俗偷薄之弊。則意亦美矣。但其命意新奇。而文字簡陋。是以其說驚怪。弊病百出。不免乎所謂不知者耳。然亦不失爲君子之言矣。若夫尊說。便以此爲伯有爲厲之類。而遂謂祖考精神散而無有。是其正理。則或過於明知。而不幾乎夫所謂不仁而不可

爲乎僕論其流弊以謂浮於兼愛爲我者蓋以此矣昔者孟子之知言也。曰墨氏無父楊氏無君雖夫二氏亦是一時之賢者。且其爲說。或行仁而偏。或行義而偏耳其始固未有滅理亂倫之甚而其流禍之極孟子至比之於夷狄禽獸。夫行仁義而偏其所抵且猶如此。而況不仁之意思乎。正所謂毫釐之差。千里之謬不能不如此論然此豈容易發之。便是多少苦心。蓋不直則道不見。亦不欲自鄙外於門牆以負於惓惓之愛以是不獲已而竟一言之也。惟冀照亮。別紙重勞提耳既感且愧。而淺暗尚有未能通者更具於後。伏望視至其閒亦必有可因以指教者切祈不棄。

別紙首節鄙意但謂心可謂生死存亡。性不可謂生死存亡耳。不是聽說。卽先輩之成論。固非以心概爲無賴惡少也。不審先生何故又有此言。

文公答廖吏部書。文氣激昂。辨駁痛切。蓋不如是。廖之惑未易開發。誠如尊意僕前書云云。亦乃指此耳。未始以造語之快爲失也。亦各有時爾。故曰。寬

別引より以下關氏藏本に在り。乃ち比較頭注す。以自證焉は以證高說に作る。大抵本意明白處は本旨大抵、已是明白に、更は強に作る。

心游意。反覆味之。當必見其端的處。且僕所以有此言。蓋向所示書。所謂根於理而日生者亦曰以下數十百言。反覆論理。而不一言及氣。僕是以竊疑。尊意或亦以日生者認爲理也。故嘗一問之。然今誨答乃曰。日生者氣也。所以日生者理也。誠合愚見。則向之所疑。已脫之弧矣。僕又何言。

雷火之喩與水波之譬異之辨。初似亦見容納。而忽又別引程朱論日月之語。以自證焉。恐亦未免摘埴之弊。竊謂大抵本意明白處。即不須更以他說遷就。費多少分疏。既於本旨。無所闡發。復於餘意。反有所累。又況程朱所論。自有所指。不但如來諭所證而已乎。然却是枝葉末論。不敢執滯言辭。以取再三之瀆。他日謁見。以卒所請也。

既言發於發處。則不得不言滅於滅處。所垂喩。不謂無其理矣。然愚意終未敢安。因謂先生自創立此說。卻自不妨。但牽程語合之。則斷然不可矣。蓋邵子學老德邵。玩心高明。觀天地之運化。陰陽之消息。以達乎萬物之變。頹然

設は言、末俗は時俗に作る。

順は聞に作る。

（側山及び一齋の評語淨稿本に無し今參考の爲此れを補ふ）

其順浩然其歸固不可以術家視之亦豈可謂窒礙而未免有疑。故程子發之乎且邵程所論方位之說也。先生所主合散之論也。自是不同。故曰不可牽合矣而滅於滅處之說。終足以長末俗偷薄之弊則雖曰創說不妨。然亦未嘗不爲高明深憂之也請更詳悉。

末簡纔是有復被誨亦或不敢回報以重深文之罪。嗟乎。使長者有此言者誠狂妄之過也深知自責矣不敢多言文之。夫君子之過也。如日月之食焉過也人皆見之更也人皆仰之。僕雖非君子。乃所願則學君子也。理到之言固不得不順從如有不當望更示。

孟子與告子論人性也告子以杞柳湍水求勝。孟子析之以羽玉犬牛。象山與菅山論鬼神也菅山以陰陽相薄石鑛相戛爲喩。象山乃根據詩書。而斷以易卦。其筆鋒之銳。何啻斧以斯之剖別精核。辨析醒快。議論愈多。頭緒愈整如春蠶吐絲。如秋山出雲。逐層牽引綿綿不絕可謂有排山倒海之才。而有斬釘截鐵之力者矣或曰。象山所論理

則至矣。然措辭激切。動有圭角。以觸人之怒。是以至使菅山曰免洪水猛獸之害則幸矣。又曰負荊以立於鬼冥之門。則幸之又幸也。毋乃大圭之瑕乎。余應之曰。何傷乎。孟子大賢。尚有此英氣。顧立論義理如何耳。象山此論。有大裨於名教。學者其可不讀乎。乃跋此語於象菅往復六篇尾云爾。天保十年嘉平月。松代鎌原貫忠識。

佐藤一齋評　無可謂耳。

答一齋先生論太甲在桐年數尚書孟子不同

啓按。士虞禮云。朞而小祥。又朞而大祥。中月而禫。鄭玄云。中猶閒也。禫。祭名也。與大祥閒一月。自喪至此。（恐當作禫）凡二十七月。今尚書注疏云。湯以元年十一月崩。太甲以十二月即位。是太甲中篇十二月。卻在未禫前一月。而不得爲服闋之踰月也。然公羊傳。亦有三年之喪。二十五月之說。則是卻無不可。但必以二十七月之制。自復政而推之。則王之崩。實在九月。而非十一月矣。且蘇氏云。崩年改元。亂世之事。不容伊尹在而有之。是千古之至論。恐當從其說。以伊訓十

二月爲王崩明年之正朔卽位改元乃有道理也惟太甲以元祀見放以三祀元朝復歸其間在桐者實爲二年則疏云序之三年復歸者謂卽位三年非在桐三年此說近是而孟子三年以聽伊尹之訓己之云。畢竟爲可疑矣。然孟子此篇本承上文爲明伊尹不有天下之由而重言太甲聽訓之久則必是加其元朝未離桐之間以爲三年也如是爲說。似稍可通。然尙書古文。久爲識者所疑而朱子又曰湯時自無由可推。不必深考則此等同異。闕疑息辨似尤爲是也鄙見如此倘有不當幸賜至敎。

與安積艮齋論朱學管窺

向蒙寵示朱學管窺發明詳備固非近儒雜陋所及。況半陶思齊。討論之亦至。然猶博謀下詢。不棄蒭蕘尤見謙虛之德。愈下而愈光。第顧啓之愚鄙。不足以有裨補於高明茲爲愧懼耳。然反覆之間。亦有可疑者。不敢不盡所懷。計高明於此必有定論勿吝垂誨幸甚。

天地之所以生萬物者。陰陽二氣也。陰陽之所以升降翕闢者。理也。

此語固是至當。但其下並舉屬氣。帝也。神也。鬼神也。屬理物事。道也。太極也。無極也。而謂其名雖異。其實一而已矣。是則所未曉。不知周張程朱。亦有如此說者否。

理無形而氣有形。

下形字未妥。改爲象如何。

理不能獨立。必附氣以立。氣不能獨生。必因理以生。

此義甚精。然以啓見之。猶是多二能字。如刪去之似更佳。

氣同則理亦同。氣偏則理亦偏。

竊謂氣雖有偏同之殊。理則無偏同之可道。今曰理有偏同。極是可疑。恐不若刪去之愈也。

人稟陰陽五行以爲形。其氣同備。故其理亦同備。所謂健順五常之性也。善而無惡。惟聖人氣質清明。故得以同其性。中人以下。不能清濁昏明之不齊。

故性之本體雖善而無惡然墮在氣質之中爲其所拘蔽張子曰。所謂氣質之性是也。

按陰陽五行即天地所以爲造化者闕一則無以爲造化造化不可爲。則天地之用幾乎息矣故萬物之生雖由開蔽通塞而有人物之別然其必得此氣以爲形必得此理以爲性則亦無二致。所謂健順五常之性豈獨人也哉。觀中庸首章注及大學或問而可見矣。因謂此條只合依或問說曰人性本善而無惡。然稟有厚薄清濁必其上智以上。乃能同其性。而無少缺欠其中人以下。則雖善而無惡之性亦已墮在氣質中爲其所拘蔽則亦與張子所謂云云相通。而文義明暢自無弊病矣。

張子所謂變化氣質者。非盡變剛而爲柔。盡變柔而爲剛也。

盡字不必下欲作非謂變剛而爲柔。變柔而爲剛也。如何。

今人甚愛子不肯教戒其子驕傲日甚。遂至相嫉如仇讎。是仁愛之流而爲

惡也。

昔字未妥。相嫉如仇讎。亦恐與仁愛之流而爲惡。不相合。當若改作淺人愛子。惑溺姑息。遂使其子驕傲日長。甚則隕身覆宗。郤貼然。

據此則非性中有善惡。

善字恐羨。

愛之理。心之德。皆以未發之理言。

朱子此兩句。各含體用。亦自顯煥。今專爲未發之理。不知何說。

渾然之中。雖無形象之可見。而四者本是似有界限。

似字恐不可著。須刪此一字。界限下。加意思二字。方覺有味。

能敬而不失。可以立天下之大本矣。

或問孝弟爲仁之本。此是由孝弟可以至仁否。程子曰非也。蓋孝弟是仁之一事。若或人之問則離而二之。故程子非之矣。凡所謂可以者。皆用力之辭也。今

夫敬而不失便是立大本之事固非有二而以可以言之則是似敬而不失之外別有所謂立大本之功也然則其不失者何事而大本者又指何物殆不可通夫立本之說出中庸而其立字不是用力字。但謂其於所性之同體無一毫人僞而天下之道千變萬化皆由此出則此處亦須改爲天下之大本斯立矣乃庶乎其可耳。

世之用力於持敬者或拘迫執滯常把一敬字著在胸中。往往因藥發病。當年學者多是篤志實學故往往卻有此般病故朱子亦時及之。今則異乎此文辭考據姑舍雖其曰從事於朱學者大抵皆徒誦坐談。能用其力於持敬者鮮矣是以世亦未見有坐此病者也。若今而有斯人便是所謂空谷足音。假令其拘迫執滯間有弊病自是可敬況持敬之方。近出諸書既明且備。善讀者當自知之則又未必有此弊也此等議論。仍例存之。固不妨。然在今時未甚親切。則除之卻爲簡淨

虚靈不昧。見佛經智度論。

當爲佛書大智度論。雖異氏書。經與論。其體自有分別矣。

但電光石火。所照不多。

改多爲廣。如何。

格物之方。亦多矣。而其要在乎卽吾所接之物而格之。

此語固好。然下文謂。天下之事。豈得盡踐而悉究之。惟卽吾所接之物而格之。及其已久。則脫然會通。皆迎刃而解矣。則語意亦太粗矣。夫格物致知。正大學之頭腦。豈可艸艸如此說過哉。案朱子語曰。格物便是要閑時理會。不是要臨時理會。閑時看得。道理分曉。則事至時斷置自易。此方是說格物之時候。甚爲明白。又案程子語。一謂格物莫若察之於身。一謂當察物理。不可專在性情。皆是內外互相發處。尤可以見天下之理纖悉細大。須是逐旋理會之意。據今所論。同不曾見閑時工夫。而只以臨時爲主。而似在吾所接之外。漠然不復經意

者嗟乎。如此闊略而則其脫然有悟處、殆亦炊沙作飯矣。又謂登大山者。必躬經峯巒林壑而後可謂之實見也。遊京師者。必足涉康衢而後可謂之眞知也。若徒案圖而察之、雖盡精微曲折、竟不免爲虛見。此論亦切實。然恐未允當。蓋格物者、即事觀理以到其極之謂也。故躬經足涉。固是格物。案圖究之。亦是格物。初非有優劣。且既盡其精微曲折、而區域形勢、都識得他破、則雖得之於圖經、獲之於記聞、視夫漫然經過、討探粗略者、則遠甚矣。又安可謂之虛見哉。萬一如其云、則下文讀書格義理、莊敬以涵之。體察以究之。其未當事以前、則亦可謂之虛見歟。大率此條。欲務發知行竝用之意。而不知其反戾於大學之本旨也。望更思之。

中庸首章章句。兼人物而云。人爲萬物之靈。猶不能無氣質之不齊。況鳥獸乎。鳥獸氣之偏駁者。固不能具五常之理。又不能推而充之。然有是氣。即有是理。理善而無惡。惟爲氣質所錮塞。故虎狼之搏噬。非理之罪。乃氣質使之

然也。

啓謂。鳥獸已因五行之氣而生。豈亦不具五常之理哉。但其氣之偏駁。不能推而充之耳。因欲删去不能具五常之理又八字。如何。

又謂。鋼塞之下。似當有是以不通乎五字。

夫理寓乎陰陽。而不雜乎陰陽。本自周流無滯。

本自周流無滯。非所以說理矣。竊謂此三句當削去。於行文亦未見有所缺也。

天命有以道理云者。有以氣數云者。聖人所知者道理。若氣數。則聖人不能逆料之矣。

非聖人不能。不料耳。

鬼神

此條所論。與愚見亦大抵不相遠。但所引朱子二說。其閒雖若有異同。其實初無二義。而長者分疏之。一爲以理云。一爲以氣云。是則不可曉。其他亦不能無

一二疑晦然欲請其說亦恐措語煩擾啓嘗與山口菅山論此有書三道似稍纘自今往其艸本以代問目其所不中理惟高明裁之不勝大願不宣

一齋先生評朋友切瑳如此要亦不失古人之風可敬

復佐藤有鄰

君子之言遜順而正大小人之言矜誇而瑣鄙今賢者之云乃與君子不相似而與小人相類吾深惜之大學所謂明德只是人之本心包性情在其中朱子章句其義至明至白至允至當無可疑者特以賢者讀書究理之功不深是以自生疑惑耳然苟不有所疑不能至於無疑之地故讀書者有所疑爲可但當優游厭飫以俟之切不可牽強扭揑以立臆說他日於讀書究理有長進焉則今之疑惑以爲難曉者終必有所冰釋也

章句云明德者人之所得乎天此六字釋其所以稱德而虛心之寂靈心之感不昧心之光明以具衆理心之全體性也而應萬事心之大用情也者也已上十五字釋所以德而謂之明余以章句爲無可疑者

是也。賢者其以爲如何。

與君毅

天保十年十一月二十四日 君毅宮下氏通稱は主鈴松代藩士。

輕寒。侍養想清穆。啓卜居以來。塵事倥傯。無足言者。都下亦未見卓然有見於正學者。而朱夫子所謂經學之賊。文字之妖。則往往有之。然而自家義理未精。力量未足。不知所以爲之。良足憂懼耳。吾兒別來所理何書。所論何事。久不奉告。無由聞知。幸因便子細報來。時屬三冬。爲況又何似。即今作何工夫。門下後生。日所詣幾何。後來有望者爲誰。亦可一一喩及。

答竹村中甫

玉池時代 中甫通稱は的之進三州の人(北)

承手箋。謂志氣昏惰。爲學不進。敢請有一言以鍼砭其病。相與之厚。求益之深。三復仰歎。爲愧殊甚。顧僕何人。而能堪之。然竊以謂。苟知如此是病矣。則不如此是藥。亦可知已。若更問其治方。是則所謂騎驢覓驢。非所以望兄也。假使兄以強於僕。僕亦強應之。只成一場閑說話。俱爲無益矣。凡人之患。在不自知其

病今兒已自知其病卽自知其藥服之之方豈有他哉但實其所知因以盡其力善則倍勉過則改之平居須是儼然若思頻頻提起久之自熟當別有得力處夫輔仁固莫若朋友然爲仁由己豈他人所得而與於其間哉書不盡意惟心諒

弘化三年夏

與菊池溪琴

溪琴名は保定字は士固通稱は孫右衞門紀州の人詩を能くし又心を海防に用ふ

久聆賢名常懷葵心不料會於比鄰親挹清光幸蒙不鄙惠以近刻詩編拜賜之重不啻珠寶退而終編既深歎仰屬感得著邪未果裁謝又辱顧訪重荷渥惠自惟迂拙何以獲此愧悚之極不知所以爲報卽日熱甚不審起居何似僕以病後畏暑未能出門日間復三反賜刻增服其高情遠韻挺然有不羣之氣古人云膽欲大而心欲小近來詩家類以靡曼投時好而吾丈所作獨不爲流俗所移易是膽大也世之標榜門戶者或以奇蹇飾淺陋而吾丈所爲獨運詞清雅寄穠鮮於簡淡是心小也於戲非工夫有根本而能如此乎可敬可敬但

所憾於此刻者。編首序引。重疊煩瀆。令人懊惱。昔者歐陽公。作五代史。或作序記其前。王介甫見之曰。佛頭上。豈可著糞。竊嘗抵掌以爲快論。今吾丈之詩。世間不可多得。而諸子之文字。率皆庸妄猥瑣。不免如或人所以見笑於荊公者。夫佛頭著糞。固無傷於佛眞。然非莊嚴妙相之所宜在。則以愚視之。不如除去之爲愈也。吾丈近體。既非時調。而梁藤二子。何以尙慊乎此。前日已面叩之。而此事未及發。故因咨問起居。爲一言之。蓋亦深感友誼。肆意所及。不敢不自竭也。狂妄不罪。

與澁谷洒侯

通稱は修軒竹栖と號す洒侯は字なり松代藩の侍醫。

嘗讀葉夢得避著錄記。夢得始得山。卽散植竹。略有三四千竿。意數年後。所向皆竹矣。無幾竹皆結花而槁。方其初花時。有老圃告。亟盡伐去。存其根。則次年尙可復生。夢得不忍。至已槁而後伐之。則與其根俱死矣。閒者僕涉陋園。見往年所分惠兩叢。毿毿看花。因思石林之戒。輒盡伐去。庶幾來歲復得龍孫也。凡

竹之有花、係歲氣與種類。高園原叢、豈得無花乎。今而不作其計、恐有失根之患。故以此說報知、望早下手、莫使氣多洩可矣。不宣。

弘化四年十二月十五日

復溪琴

別來歲餘、渴饑曷云。得書又承詩惠、情誼惓懇。感佩殊深。詠誦高風、有同覿面。惟慊妙辭非足下之手筆耳。然書體遒美。極可愛玩、料非凡流、甚欲知其人、使聞幸亦及其姓字。地震洪水之變。洵如垂喩、幸家眷安全。圖書琴劍。無毫損壞。僕亦當震來時、不甚驚恐。黑闇中。扶老母。趨出外庭。傳命婢僕覆水滅竈火。倉卒之際、其所處置、不復失條理、以驗得自家心地。是爲可喜。岩倉山冢崩。壅犀水。諸有司莫知其將潰決、僕獨深言之。欲使沿川諸村之氓。移穀於高燥之地。以避其衝突。其言遷延不行。及施行而犀水已決。無補於事。是爲可恨。言及此者、非是矜誇、正欲以事實報知已耳。地震自春以來。日必六七動。若十數動。有無聲而來者、或有聲如雷如鼓而動者。三四日來。始稍穩。請想震自此止矣。其

他欲言者近日已書。達於杉田氏。會見之次。成卿必能言之也。此信發書甚多。不能一一。不宣。季冬望。

柬桐山先生

桐山通稱は伯耆諱は貫忠松代藩の家老にて象山の師。

雪寒。伏惟尊候鈞安。即日歳除。城市喧闐。啓於此時。既理了家計。穏坐一室。吹爐煮荈。觀書作字。儘得淸暇。老先生久謝世事。逍遙物外。其占淸權料加啓一等矣。近所收燕閒四適。探坐右得此。乃以奉示。前所奉貸江村銷著錄。現在亟需。懇乞轉付。勿推延爲禱。

復桐山先生

嘉永元年十二月廿八日

承誨答。擲還銷夏錄。感謝何罄。啓今日恬然無事。品題書畫。偶有挾西施浣紗圖而求售者。正是亡友渡邊華山所製。乃棄貲購之。華山才識超逸。兼深畫學。其所藏多元明名家之筆蹟。又有西洋妙品數十幅。時時摸倣。以集其所長。故其筆力精勁。設色巧妙。非他畫家所得齊馳。然其人不可復見。展觀之際。感想

往事不啻鄰笛也其圖絹本長三尺四寸。闊三之去其二西施身長尺餘。立于溪邊輕粧淡抹纖穠都雅美艷照人。左手執白紗右手抒之溪色澄碧。紗之下端垂入水者隱隱搖曳于水底旁有秀石石上紅桃一樹。花蕚靚妍。亦與西施之面相映蓋神品也他日造謁當持以供清鑒不宜。

說

紹齋說

脇山惟馨之父曰退齋先生學贍而識卓。以文知名。仕越之村上爲督學。不幸年未及知命歿惟馨夙修箕裘以庶幾繼先人之志也。乃以紹齋自號。徵予爲其說予問其詳則曰不幸先子即世。而遺文存焉。時端坐齋中。薰香而讀之。而思其所以紹之肅然若聞詩禮而趨於庭。未嘗知其亡也。斯紹之所以名齋。予曰是固然矣雖然子以爲其所以紹之也。盡於是而已乎。將猶有大焉者也。曰。上則聖次則賢次則忠臣孝子。凡其遺教垂訓。美績善行。經典所載史籍所傳。

悉皆先子之所志。而學而習者。則於是乎朝夕爲研精致力。庶幾其遺緒之紹矣。如是奚若。予曰。是固然矣。雖然予以爲其所以紹之也。盡於是而已乎。將猶有近焉者也。惟馨默然良久曰。知之矣。子所謂近焉者。其吾身之謂歟。吾身之前億千萬歲。自混元既分。繇繇相紹。以逮於吾身。吾身之後。億千萬歲。又自吾身。繩繩相繼。以迄於無算。其長且久。豈可以數智究乎哉。而吾身一有過焉。則前焉而何以紹之。後焉而何以繼之。則其咎果安所歸耶。君子之所以日又一日。乾乾惕厲。不以人欲害其天德之剛。以能自彊而不息者無他。懼其繼紹之或有間也。如是奚若。予曰。善哉子言。今則得之矣。然古人曰。非知之艱。行之惟艱。嗚呼。子果能弗艱其所艱也。則於其所艱無艱矣。

黃金臺魁首說

郭隗之說燕昭王。置黃金於臺。以召天下之士。而己爲之魁首而倡之。何其快哉。然吾觀於世。其能秉心至公。而不爭於聲譽利勢者鮮矣。而隗能來樂毅・鄒

術劇辛之徒與之協同遂以殷富其國則亦果秉心之至公者歟夫物之先休美之所歸也亦咎羞之所會也故能克有我之私去物欲之蔽外致卑遜中存恭敬撙節退讓虛己以受人如是而居焉休美隨之其知或不及於隗人將望風而親之則適足以倡斯世矣而況其賢於隗者乎若夫有我之私不能克物欲之蔽不能去乃惟嵬岸矜傲自高自是輒以勢利爭以技能如是而處焉咎羞逮之其才或賢於隗人將聞聲而畔之則亦何以倡斯世矣而況其不及於隗者乎故所謂魁首者公私之關也義利之分也吉凶之機也其可無愼乎吾友長岡高野伯順奮然先衆請遊學於其廷得允負笈來江都遊一齋先生之門乃以黃金臺魁首而自號蓋亦取郭隗之事也非曰吾樂魁於多士矣將以樂爲國家興起斯學以爲多士之倡也其秉心之至公殆亦無加於斯者也矣雖然是又可以無愼乎

謙齋說

謙者天之道也。地之道也。人之行也。謙則虛。虛則明。明則神而無不通矣。是故天惟謙也。故能下濟。而化育萬物。地惟謙也。故能處卑。而上交於天。君子惟謙也。故自卑焉。而人益尊之。自晦焉。而德益光明。故曰。謙尊而光。卑而不可踰。君子之終也。而其道也非他焉。勞而不伐。有功而不德。篤實堅固於內。而罔或爲僞於其閒也。弘厚柔順於外。而罔或虛假乎文飾也。如是而已矣。世之人士。卑言辭。遜面色。屈形體。忘乎內而循乎外。避人之毀己。干人之譽己。日夜逐逐。以終其身。非無似乎所謂謙者。然亦言辭而卑焉爾。面色而遜焉爾。形體而屈焉爾。非所以誠乎謙也。則亦僞而已耳。佞而已耳。寧有所謂亨而有終者哉。君子其惟無所爲而爲。是以謙道恆而不變。何往而不亨乎。新潟高田致遠。以謙名齋。請予爲之說。

天保九年冬

勉齋說

勉齋は松代藩士藤岡伊

古人之學。爲己之學也。非爲人之學也。故從師親友。以求中正仁義之道。夙夜

藤忠克の齋號、象山の門弟。

勉勵而思所以成其德焉故其讀聖賢之書眞如飢寒者之於衣食也惟求其暖與飽而已曾有忨歲愒日鹵莽厭煩之事哉今之人則不然矣稍知讀書解文則不求諸己而求諸人或以志於聞達或以從於利祿其無意於聞達利祿者則亦率優游偷閑不復知勉斯學而所謂飽食暖衣逸居而近於禽獸者矣不亦大可哀乎故知爲己則不願乎其外而知自勉矣知自勉則不至於怠惰放肆而爲己之學得矣藤岡忠克從余學余懼以其質之寬柔而或怠忽無所成也故因其請齋之扁而敬書之曰勉齋告之以古人之訓如是忠克勉旃毋背余繾綣之意也

天保九年秋より十一年春迄の間の作。懼堂は松代藩士山寺源大夫の號。山口重昭曰是本孟子件命之說而以過不及張點

懼堂說

懼之於人大矣人而知所懼則可懼之患日寡人而不知所懼則事物之至乎前者孰非其可懼者哉故君子之學無所不用其懼目而色也耳而聲也口而味也四肢而安佚也懼其有過也仁而父子也義而君臣也禮而長幼也和而

御是一箇大議論。

夫婦也。信而朋友也。懼其有不及也。不特此也。言焉而懼不忠信。行焉而懼不篤敬。處窮而懼濫。居寵而懼亢。臨財而懼苟得。臨難而懼苟免。猶不特此也。見賢而懼不齊也。見不賢而懼不自省也。求乎古昔而懼其不可及也。思乎後昆而懼其或貽羞辱也。瞻山林臨川澤。而懼吾施之不博也。見艸木見禽獸見蟲魚。而懼吾之憒憒與之同期於朽腐而無聞也。然尚有最可懼焉者。自學之不明。士皆馳騁於功利辭章。而巧僞虛飾。習以成風。是以茫茫焉。昧心術之要。奸黠傾詐。跰其中而掩其外。悍然自得。以爲天不足欺矣。人不足罔矣。殊不知天之明命。靈昭不昧。無晝無夜。嚴然於方寸之閒。其一萌於思。幽暗之中。纖細之事。善惡是非。皆不能逃乎其情。則其赫見明顯孰加焉。且欲自欺罔而不可得。而尚謂可以欺天罔人乎哉。況乎誠於中者。必形於外。十目所視。十手所指。固將有暴露而不可揜者矣。嗚呼。可懼之極。豈有甚於此者也哉。是以。君子之學。微之不睹不聞。顯之日用常行。必存畏懼之心。而朝乾夕惕。不敢有斯須之閒

斷、是則其所以德成道凝、而語默動靜、自無過不及之差也、故爲學之功、固莫先乎畏懼、見效之速、亦莫過乎畏懼、蓋懼則必敬。敬則必誠。誠則必動、以化。是故畏懼以御百姓、則百姓安之矣、豈惟在上位者、雖卿大夫亦然。以畏懼事君、則君任矣、以畏懼服政、則政和矣、以畏懼治事、則事乂矣。豈惟卿大夫。雖士亦然、父兄非畏懼則不說矣、閨門非畏懼則不整矣。鄉黨非畏懼則不順矣。豈惟治平之世、雖行兵亦莫不然。子路曰。子行三軍誰與。子曰。暴虎馮河死而無悔者、吾不與也、必也臨事而懼、好謀而成者也。夫懼事者自不得不好謀。好謀者必由乎懼事、兵而不知所懼。此敗亡之道也已、吾友山寺不息。好講兵書。扁其居曰懼堂、蓋亦取於夫子之言也。而屬說於予。予將助不息之志。而進之於其本也、故爲著其說如是。嗚呼。以不息之才。盡力於此而無怠焉。則聖學中正之功、可以馴致矣、寧獨兵云乎哉。

山口重昭曰、層層說上去、遂歸於一者、轉轉得妙

嘉永六年正月

格堂說

中津公族大夫奧平君公權。好經濟之學。其來江都。過予求堂名。予書格堂二字以遺。公權問其說。予乃告之曰。格之言正也。孟子曰。大人爲能格君心之非。又感也。書曰。格于皇天。又至也。記曰。致知在格物。此三者各爲一義。如不相通。然以予觀之。其實未始不相資也。夫國家政治之得失。繫于君心之是與非矣。離是則非焉。生於其心。必害於其政。故經濟之術。以格君心之非爲急。蓋國家之利。知者興焉。國家之害。直者諫焉。然君心之非未改。則事事而興之。後漸廢其事。將不勝其興矣。作作而祛之。嗣復有其作。將不勝其祛矣。是以輔相之職。必在乎格君心之非。而欲格君心者。非有大人之德。則亦不能也。何謂大人之德。正己之至。足以感格于天。而人觀而化者。即是也。然而天下事物。千緒萬端。有隱有顯。有粗有精。其理有所未究至焉。則知必有蔽。心必有累。不翅不能應世用。而酬乎時變。雖欲獨正己之身。而已亦有不可得矣。況能感天而正君乎哉。故經濟之學。必先從事於格物。理之在事物者。既至其極。則知開心通。可以

酬酢萬變。而正已而物正之感。亦可以馴致焉。夫一正君而國定矣。孟子豈欺人哉。公權曰善。遂請予書之。

安政元年三月

序盦說

禮者序而已。萬物各得其序。而後和樂。君君・臣臣・父父・子子・兄兄・弟弟・夫夫・婦婦。然後天下和平。苟不以其序。則陵節犯義。因咎隨之。求免或不得。而況可樂乎。月岡萬里。吾藩之精於茶禮者也。一日予受其茶供。器之設。物之制。禮之數。莫不各得其序。而意甚樂焉。乃曰。推斯禮可以治天下。伊川曰。自灑掃應對。可以至聖人是矣。遂題其居曰序盦。萬里旣謝。且求說。故書以授之。

仁木君嗣子名字說

天下之事有常有變。而處之之道。有經有權。然未能處常守經。而猝言變權。猶人未能立而欲行。鮮不仆矣。然旣守其經矣。而不復知時措之宜。則又何以通天下之變而周天下之用哉。故知守經而能權焉。斯君子之道全矣。仁木使君

徵啓。定其嗣子之名字。啓不得辭。乃請得名之曰守經。字之曰公權。蓋勖以君子之道也。嗣君丰采溫厚。異於常兒。而亦既從事於入孝出弟之學矣。當宜識啓所以奉名者。而居常不失乎其經法。異日進於信道之篤。則又因其所以命字者。而益窮義理之精微。以求適時之宜。必如夫稱錘之隨物低昂。以合於斤兩。而不錯於毫髮焉。則庶乎其有以全君子之道矣。

象山説

昔者陸子靜。講學於貴溪之象山。人因號之曰象山先生。予廬之西南。丘陵奮起。其狀巖然類象。土人目曰象山。則余亦遂以象山而自號焉。或曰。子志氣豪雄。銳然以斯道爲任。常稱天下無一物非吾體。無一事非吾用。堯舜其君。成康其民。固吾分內事也。其氣象亦略有似陸子。今又以象山爲號。是殆將自比於陸子歟。不然。昔之人慕藺相如。而更名相如矣。則子亦有慕於陸子也。余應之曰。吁。子之言。始則過矣。而終又不及。夫陸子。躬行如彼其巖也。政治如彼其美

可一本易ニ作る

也著乎文辭如彼其勁遒也是雖出其天資抑亦功力之所致陸子誠不可及矣而吾何敢自比之但其見理過於高尙存心失於易簡而法度之正節目之詳有不察焉是以規模腔殼雖已致乎廣大終亦不免淪於夫禪佛之偏矣豈弗惜乎嗚呼學術不可不愼其人之賢也雖如陸子而猶不得以入於聖人之室者無他亦由學術之不正焉耳予嘗竊有見於此故爲學之方一以程朱爲準將以居敬而窮理循序而致精精粗不遺內外交養以庶幾乎明體達用之學矣而子顧以爲慕於彼乎哉抑吾之取號也則以山也固無所事於陸子然旣曰象山焉其以彼自警則有之矣若乃徒口其言而不身其行虛假其名而不踐其實陽以正學自表而陰有以驅馳騁鶩於俗儒利名之轍是則世道之蠹賊也已則豈但獲罪於孔孟程朱斯獲罪於陸子而天下人人亦得而誅之也是最不可以不自警

筆說

予得一韓筆試之極良。每有所書寫。輒必用之而不廢也。人有惜其或速敗者。予因告之曰。子惜其敗。乃所以敗之也。子欲其壽。乃所以夭之也。夫人之與物。孰無天職。忠信以進德。修辭立誠以居業。終日乾乾。兢惕而不懈。因其位而利物。非君子之天職乎。其身不幸早死。其德將永蒙于世。則亦壽也已。字書描圖簡簿註記。惟人意是承。因其時而致用。非筆之天職乎。其質或速敗。其績在世而不滅。則亦不敗也已。彼其溺於體軀之私。而廢棄其職。而忳忳瞢瞢。無一德可稱述。若是者歷世而長存。亦與夫深山之木石。荒野之瓦礫。奚擇。吾見其夭且殤也。然而世之知之者鮮矣。孔子曰。朝聞道夕死可矣。此其所以全壽之道歟。昔者顏淵三十二而歿。至今未亡也。子其能信之乎。

柚說

食柚。有極芬芳者。有不甚芬芳者。始亦未之能揀也。後審之。圓滿滑膩。觀之甚美者。必其無香氣者也。其貌不平。礧然磈然。望之若甚不佳者。必其芬芳者也。

以是揀之、蓋百不失一焉。予謂其芬芳必不在於圓滑者。而必在於磊磈者。蓋非磊磈之能爲芬芳也。芬芳之實、鬱之於中。而後發之於外。其不得不磊磈。亦必然之勢、無足怪者。世之人、惟圓滑是悅。而不知磊磈之可尙。是以常失於其所取也多矣。嗚呼、是豈獨柚而已乎。

天保七年五月

雜說

雲出於山而能潤山。然山之爲氣也不厚。則其興雲也不多。故天下無往非山。而能興雲以成雨者無幾矣。蓋其仰之也、雖如高巖危壁。而所畜薄。所發微。施用每不繼。且欲自潤或不足。安望其能及乎遠也。夫泰山之雲、觸石而出、膚寸而合、不崇朝而徧雨乎天下者。豈有他哉。以其本厚也。而今雲不興。雨不降。徒爾巖巖、自表曰。我泰山也。則吾不信焉。

天保十年

又

雲龍之所興也。故有龍必有雲。風虎之所致也。故有虎必有風。是以天下患無

龍、而不患無雲、患無虎。而不患無風、惟物有顯晦、時有消息、故龍虎雖在焉、或有時而無風雲。然方其一吟而嘯也、則雲油然冥。風塕然駭。景象變化、不旋踵矣。故易曰、雲從龍。風從虎。今有物焉。曰是龍是虎。而卒不見風雲之從於其吟嘯、是非眞龍虎也。若夫眞龍虎。則必興雲致風也矣。

盍徹說

年饑。固當薄斂。而吾之用不足也。則不得不加賦。是哀公之意也、有子或不喩其旨乎。何其對之似迂也。曰。有子固已喩其旨矣。不喩其旨、何以盍徹對、以盍徹對者。欲哀公之反其本也。曰。反其本何謂。曰。節用而厚民也。凡足用者。不在於加賦。而在於節用。用之節也。雖徹而有餘。用之不節也。雖加賦亦何以能補於不足、曰。意在節用。則宜以節用言。而以徹言。何邪。曰魯之取什二尙矣。故節用者未必及復徹也。徹之未復。爲桀者不免焉。徹復矣。而後量此以制其出、百度斯擧矣。有子以徹言。蓋爲此也、曰加賦者圖末也。復徹者務本也、旣知之矣。

然圖末者有目前之利而務本者。無一旦之效。無一旦之效者難舉。有目前之利者易行。令易行而從難舉不亦難乎。曰。此其所以欲反其本也已。夫民之財。君之財也。民之力。君之力也。車乘則民爲之出芻粟。則民爲之供。板幹征役。則民爲之備。君能行徹法而稅斂薄。貢賦寬。令民充然足焉。則民得遂其生。而所以給其公上者亦必全矣。奚患其不足也。不然。則人民離散。而田畝汙萊。其亦何取以足其用乎。故有目前之利者。反釀後日之患。無一旦之效者。實與長久之功。是乃君民一體。古今不易之理也。昔者季孫氏以兵不足而欲用田賦。夫子曰。有周公之典在。魯之稅畝。已加倍於古。不可。有子之所以對哀公。非講聞於夫子者有素。其孰能及於此。噫。有子其眞不迂也哉。

孟子不取武成說

盡信書則不如無書。吾於武成取二三策而已矣。仁者無敵於天下。以至仁伐至不仁。而何其血之流杵也。說者以爲。孟子以學者之於書。苟觀於辭而不知

以義斷之則時或有害於義不如無書之爲愈也。卒引武成而證之。然武成言。武王伐紂。紂之前徒。倒戈攻于後以北。血流漂杵。則本謂商人自殺也。非謂武王殺之也。孟子懼天下後世。籍口於是。以長其不仁。故特設是言耳。予謂不然。果如斯說。其懼長不仁則美矣。設是言則不可。書之旨如彼。而我設言如此。人豈有信之者哉。爲不可信之言。而不自識不智也。識其不可信。而求人信之亦不智也。皆君子所無也。而謂孟子有之乎。且慮人之執於辭而害於義而已。則離書立意。強爲之說。其又何以爲訓。其弊不至於廢書而自師也幾希矣。孟子之說詩曰。無以文害辭。無以辭害志。以意逆志。是爲得之。其爲詩如此。其於書可知矣。而云云者豈得已乎。然則孟子之本意如何。曰。孟子於次章。固明言之矣。曰武王之伐殷也。革車三百兩。虎賁三千人。王曰。毋畏。寧爾也。非敵百姓也。若崩厥角稽首。征之爲言正也。各欲正己也。焉用戰。夫殷人聞王言。皆稽顙而欲正己。無所用戰焉。則雖倒戈攻後之事。亦宜無之矣。若倒戈相殺。其血流杵。

是在後殷人猶與王師抗也不可謂各欲正己也。孟子以後章發前章。其意甚明矣。說者往往不察于此以前章爲特設之言不亦謬乎。

弘化二年正月以前

睽蹇說

睽是合睽之方蹇是處蹇之道。凡合睽者以宛轉委曲爲主。不可拘常分。睽卦自二以上以陽爻居陰位以陰爻居陽位。是其義也。凡處蹇者。以貞正固守爲主不可陷於邪濫。蹇卦自二以上。五爻皆當正位。是其義也。然宛轉以求其合。而不本天下之大經則枉己屈道。雖使睽合。亦非吉道也。故君子觀睽卦之初爻居位正當則知合睽者。亦必以得正爲基矣。貞固以處其難。而不知天下之大權則陷險速禍。而難亦不可濟。故君子觀蹇卦之初爻。以陰居陽。則處蹇者。亦必以知權爲要矣。

天保十二年

青木樸字辭

斗女青木以文年老不廢學。篤實君子也。有男曰樸。請予爲之字。予謂人之未

學也樸矣。其就學也。將以成器也。然器成而不醇實。謂之賊其樸。安足尙哉。自道術不明。文飾勝而奸詐行焉。於是學者士其辭而商其事者有矣。夫其貌而妾其行者有矣。浮薄狡僞。又何所不至。若是而謂不賊其樸。吾不信也。然則夫醇實者。其治樸之表準乎。請字之曰醇實。奚若。以文曰。善哉。乃作字辭。辭曰。

世咸斲也。爾則抱樸。世咸儇也。爾則守醇。世咸譎也。爾則務實。允用茲功何患道之不積于厥躬。

弘化三年七月

題名

題安樂寺壁

余以弘化丙午。七月二十又三日。來浴于別所村湯泉。其翌登普門閣。攬觀山川之勝。遂入冰谷。索冰不得而還。明日遊村西安樂寺。寺後有八角四層之塔。制作甚古。非八九百年外物。不能有此。寺僧仁恭。迎接供茶。出所藏書畫古器以示。玩覽半日。樂而忘歸。象山平啓書。

湯澤題名

嘉永元年六月十二日

此地舊有湯澤之名。然以其泉不溫。土人賤之。嘉永紀元六月。余以公事過此。察知其源由於茲崖之下。乃發石疏溪。刈青草而環之。果有溫泉滾滾而涌出。若有所欬而顯者。以泰西華氏量溫尺測之。其溫蓋一百二十六度。其味酸。其臭如蒸卵。他日入浴者。當有賞音。象山平啓。

金澤四時總宜樓題名

嘉永三年八月

予嘗學西洋火砲之術。及讀洋籍。多所發明。嘉永庚戌之夏。來江都。寓書于下曾爾先生。以陳其概略。先生方在相之浦賀。訓鍊士卒。深納予言。將革其故。書答適至。招以懇詞。迺七月戊午夜。整裝艤舟於靈巖洲。爲風所阻。留三日。八月壬戌。風少衰。於是解纜發舟。左右曲折以走。自辰至戌。纔達神奈川。癸亥。風惡不可舟。乃陸行半日。抵金澤。憩四時總宜之樓。是日陰晴不定。微雨時來。雲煙舒卷。山水之勝。數改其容。予與同遊諸子。命酌凭欄。以玩景物。樂甚。乃書姓名

於壁。以誌韵事。信濃松城佐久間啓子明。同遊諸子。若狹小濱片山重禮子立。美作津山中尾景直正甫。紀伊田邊柏木義武子宜。阿波德島高畠文季章。播磨木梨村上省吾希曾。伊豫大洲武田斐裁之。松城望月重遠子仁。蟻川直方子厚。

蚊喩

象山子夜坐。有蚊。止于其臂而嚼焉。乃欲觀其所爲也。忍痒而觀之。始而下觜。若有厲焉。既而能吮。若安焉。又既而大吮焉。通腹殷紅。又既而若稍飫焉。而若稍休焉。而又大吮焉。乃忽充然若極飽也。抽觜竦身。鼓翅欲飛。而身重不能擧。忽遷轉隊地。引燭眎之。腹潰而死。象山子曰。世有貪饕於富貴利名之場。而不知足者。其猶之蚊乎。作蚊喩。

鑑劑考

考・博二圖。竝有鐵鑑之目。余竊疑。鑄鐵質粗。不可以照物。鑄以爲鑑。亦何所用。

信は鉛の字の傳寫の誤か。

西洋諸國有鑄銅、美如寶玉、可鏡毛髮、然漢土未聞有此法、何以能爲之。頃者。余按洋法製一鑑、金劑之量、三分其銅而錫居一。六十其錫而信居一。鑑成。其色如精鋼、堅剛亦略似之。磨礱以法。不假鴻膏、清瑩如水。惟質脆易釁耳。因悟。彼所謂鐵鑑者、即是也。周官考工記云。金錫居半、謂之鑑燧之齊、古者鑑劑多錫、於是可徵矣。然三代之鑑。不復可見。而圖譜所載。類亦漢唐之工也。意漢唐之工、病其易釁、漸以減錫、卒使鑑質一變。如今所存者。其間適有範古劑以造鑑者、後世傳之、以爲鐵鑑耳。蓋漢土之士。性率粗陋。於品物多不加精究。故以其皮相近似、遂定爲鐵而不疑也。然余未目覩其所謂鐵鑑者。因姑記所疑。以俟他日之考。

嘉永の初年

溫壺考

近得一古銅器、高七寸。深六寸六分。口徑七分半。腹圍一尺。重四十五兩。其色黧黑、瑩潤如玉、頸有繩環。腹有平帶。帶上紋縷精巧。細入絲髮。自非漢工。莫能

措手也。此器考・博二圖竝以爲溫壺。溫壺一名鈷鏻。可貯湯以溫手足。自環以上手主之。自環以下足主之。然予竊謂。壺者盛酒之器。詩云。清酒百壺。禮云。烝嘗饋獻。凡用兩壺。次於尊彝。用於門內。是也。又按詩豳風。八月斷壺。古文瓠壺相通。而瓢瓠者。古人所以盛飮也。溫壺之制。率皆口邊有稜。細頸鉅腹。其形蓋象瓢瓠。則其爲酒器。亦可徵矣。今以此爲溫手足之器。則其取象不類。古人制器設象。吾知其決不然也。因謂此器蓋所以溫酒。故謂之溫壺。然李唐以前。除合藥外。無溫酒者。而溫壺之名。又不經見。則倂其名亦可疑也。但山海經。華山首云。湯其酒百壺。郭註湯或作溫。是或溫壺之一證矣。然終無確據。姑擧臆記。以俟知者。

釋琴

琴首所以架弦。謂之臨岳。其前謂之承露。承露上者。謂之弦眼。臨岳之上。謂之鳳額。臨岳之下。灣然爲枘。謂之鳳嗉。其張而起。謂之肩。其灣然如上而較淺者。

謂之腰肩與腰之間謂之鳳翅爨爨如貫珠嵌之以金玉螺蚌。按而取聲者。謂之徽徽之畫謂之焦尾焦尾之端。飾之以堅木者。謂之冠角。冠角之線。謂之冠線其下所以銜弦謂之龍口。龍口之緣。謂之龍脣。兩線繚繞。以爲之貫者。謂之龍鬚龍口上際所以受弦。謂之龍齦。其背謂之下齦。琴頂之淮。謂之舌穴。淮中者謂之鳳舌舌穴之下。當岳之背。謂之軫池軫池謂之軫杔建杔中而轉弦者。謂之軫纏軫而擐之。上入弦眼而出之。以制弦者謂之絨扣軫杔之側。下垂而相對謂之護軫護軫謂之凫掌凫掌謂之鴈掌。琴腹者謂之聲池。聲池謂之鳳池其下者謂之韻沼韻沼謂之龍沼。當池沼之間。離立而收弦者。謂之鳳足。所以安足謂之鳳腿琴弦謂之冰絃朱之謂之朱絃絃首謂之蠅頭。蠅頭謂之蜻蜓頭大絃謂之倍徵倍徵謂之下徵。其次謂之倍羽。倍羽謂之下羽。其次謂之宮。其次謂之商其次謂之角。其次謂之徵。小者謂之羽。

書高野武盛卷

高野武盛從余遊。性酷嗜酒。余欲誡之未發。一旦惕然自悔曰。從己之欲。可以爲學乎。自此不復飮。非有志之士。能如此哉。持茲卷請書訓戒之辭。余不敢虛其請。則書之曰。聖人之道。仁而已耳。心之全德。是謂仁。故君子之學。惟求斯心。雖至於博施濟衆。參天地。贊化育。未有外於斯心者也。孟子曰。學問之道無他。求其放心而已矣。蓋謂此也。夫心之爲物。出入無時。亦無常處。舍而不操。則放。放而不求。則人欲肆而天理滅。又何所不至。唯能克私窒欲。以收其放逸。然後視人如己。視物如人。而其本然之德可見已。武盛一旦奮發。斷酒不復飮。斯克私之端。求仁之機也。實能充擴於是。仁可勝用哉。然克私未足言仁。克盡其私。皆歸於禮。是乃仁也。故雖克私收心。涵養之尤艱。所謂歸禮。所以涵養之也。夫禮者敬而已矣。敬之一言。卽百聖傳心之眞訣。最爲學者之喫緊。武盛質愨惇厚。友朋中爲難多得。然似亦微乏於恭敬之意。恐出入起居。接物處事之際。不能無不恭。纔有不恭。便此心走出。不復在於軀殼之中。卽是不仁也。可不察乎。

子曰出門如見大賓使民如承大祭當其出門使民其敬如此則未出門使民時敬可知也武盛能如是用心能如是存心則於求仁也其庶幾乎然而其機則在我矣所謂爲仁由己者而非他人所能預焉。

天保十二年正月

書加藤生卷

加藤生通稱は勘次、字は士逆、士成の弟なり上田藩士。

論學所以窮其理而致其知論學而求勝則此心已陷於邪假令所論盡合於理既已喪其大本矣況其所論不必合於理則徒以滋其蔽而已耳又焉在其爲論學也哉我方以此自省因書此以贈。

誡内山生

内山有存本名は小河原宥諱といふ後の水上藏風なり枕斗又王孫明と號す象山の門弟。

有存自謂吾有志于學以予觀之甚無志人也何也予常見有存既晨而不興必待喚醒而後起非病腦在體但志昏氣惰貪睡而遂縱之耳有存不能於此處少加省察克己自彊而自謂有志不亦異乎有存之心將謂吾讀書窮理每必達四五夜以故早起甚難也是尤不可矣夫晝興營事夜寢安身人之常道。

猶如農夫之三時服勞。而冬日居室也。今有人於此。冬日不居其室。載夫南畝。推耒揮耨。流汗如漿。比及三時。而反懈怠其身。則可謂之知務者乎。有存所爲。何以異乎此。夫無志于學者。過而不知改。有過卽改。唯有志者能之。有存誠有志。宜勇改之。勿自棄措致咎。二月念一

天保七年九月

題跋

公所書磊々落々四字恭跋

先臣國善。晩蒙推擢。眷顧特異。前後所賜手書多矣。此其一也。臣謹按。先臣度量開曠。氣宇磊落。平素殆若不撿細事者。一旦奉命。督城背土功。兩歳而告成。其經畫規度。初如素定。其所使役。日千有餘人。定擺布祭。勤惰責課。慰勞曲盡其情。至於簿書注記之煩。亦皆身自爲之。而毫無走作。於是。與事者相顧。埳然垂手。而歎服而已。夫世之好行小慧。不知大體者。固不可謂之磊落。居動粗放。

惜其思辨而不違於時宜者。亦安得當之。唯若先臣者。始可以爲磊々落々人矣。公擧而用之。又以此賜之。是知人之智也。燭理之明也。嗚呼。國家治安。豈有不由是明智者哉。臣愚竊謂。後之賢主。亦能念於此焉。則於爲政之道也。其庶矣乎。天保七年丙申秋九月庚戌。臣佐久間啓謹跋。

書義人錄後

聖人而遇此變。吾固不知其何以處之。然聖人觀幾防微。決當無此變矣。惟其遇此變者。而成此擧。亦可不謂之就分存義者乎。近世聞有妄議之者。吾甚悲焉。因閱此錄。遂書之。

天保十一年十一月

又

百世是此天地。百世是此人心。啓今讀此。不覺爲之扼腕。

跋朱子答王近思書

向所寄論。筆勢甚可觀。但少主宰著眼目。多被題目轉卻。已是大病。又多用

莊子語。虛浮無骨肋。試取孟・韓子・班・馬書大議論處。熟讀之。及後世歐・曾・老蘇文字。亦當細考。乃見爲文用力處。今人多見出莊子題目。便用莊子語。殊不知此正是千人一律文章。若出莊子題目。自家卻從別處做將來。方是出衆文字也。老鈍久不爲文。如此主張。未知是否。更思之。

此朱先生答王近思書也。先生道學拚文章。是以後世不在文家之列。然素深於文。故其教人作文法。如此其簡妙也。習文子弟。能用此訣。而熟之。不患其久在人後矣。

學書訣云。初不必多費紙墨。第熟覽古人之蹟。閉目而索之於心。若有成字在前。然後舉筆。而追之。始而得其一二。既而得其四五。則多書以極其量。自將去古人不遠矣。予謂學文亦用此訣。先取古人之文。精讀之。凝神靜慮。熟念斡旋。轉折開闔。反正抑揚。頓挫起伏。牽搭之法。皆歷歷在目。然後試之於手。且念且試。反復以時其習。則將亦用功約。而得力多矣。偶爲子弟書文公

文訣因併錄此。庶乎其有以發之。天保庚子復月。象山平啓。

弘化三年正月

跋泰西海戰圖

此泰西千六百七十三年。荷蘭土名將軷乙哲。與拂郎察及英吉黎之兵。戰於海而克之之圖也。嗚乎。荷蘭土七州。劣可以比吾鎭西之地。而軷乙哲爲將。能破二大國之兵而張其威。是可以見國勢之強弱。不在大小。惟在其人也。彼世之謂小固不可以敵大。寡固不可以敵衆。而欲成苟安之計者陋矣。因覽此圖。竊有感焉。遂書之。弘化丙午正月朔旦象山平啓。

軷乙哲所以制勝。不啻在運籌之精。而亦在大艦巨砲。其用不匱。覽者又不可以不思也。啓又書。

弘化三年正月

跋泰西陸戰圖

余自少讀和漢兵書不尠。而孫子司馬法一二書之外。率皆粗淺。無足觀者。惟明戚南塘。從杜氏通典所載唐李衞公兵法。參以其所嘗經實歷者。著爲紀功

新書。吾邦荻生氏又仍之撰鈐錄。是爲可取耳。然其間藝法器制。猶有類兒戲者。不爲無憾焉。弘化乙巳歲。適獲泰西兵書。因學洋文而讀之。其所論著。精到明備。大要與孫・馬・李・戚相表裏。而其城壘船艦陣營火砲之巧妙。則皆數子所未知矣。故余謂。生乎今之世。而欲講明兵法。非兼取洋法不可也。近又得此圖。是係于其千六百七十年間物。距今實百七八十年。故陣法器制。多與今日不同。然軍爭狀態。與書中所言。互相發。大有可見者。因書其後如是。以諗諸同志云。

兵法一本兵書に作る。

狀態一本景象に作る。同志一本同志者に作る。

又

同前

兩陣相接。紛紜撓亂。互相殺傷。而其未接兵者。隊伍齊整。其徐如林。兵法云。戰者。以正合。以奇勝。觀此圖者。可以得師矣。

書吁戒卷後　裒西洋海陸戰爭圖裝潢以爲卷者

嘉永二年正月

多事之際。常情皆知儆戒。無事之時。賢智猶或忨愒。是益所以有吁戒哉儆戒

無虞之言也。夫君而不知儆戒、則失於所以令之。臣而不知儆戒、則失於所以行之。君失於所以令之、臣失於所以行之。政刑兵備、其不衰弊委靡、以至于敗壞也罕矣。左衛門尉源公、嘗觀此卷、慨然書吁戒二字於其首、亦足見賢明用心之遠。覽者其察焉。嘉永己酉上元後三日。象山平啓展玩輒書。

衰弊一本廢墜に作る。己酉の下一本正月丙申平啓子迪父門閑題に作る。

弘化三年十一月

止戈類纂跋

凡事不由實歷、而能得力者、吾未之有見也。雖然、在學兵者、欲試實於太平無事之時、豈可得乎。必也博觀史子傳紀、遇其涉兵事者、若寘身於當時、以揣其情僞、亦有所得焉。豐藤熟之將、刊其所編止戈類纂、謁跋於予。予閱之。建國之際、上自烈祖、下至列侯及其諸臣、計謀方略、用心技巧。凡係兵事者、搜訪網羅。摭輯略備。夫漢土傳紀、浮而少實。我邦記載、質而多要。浮而少實者、倘可以爲閱歷之資、況質而多要者乎。又況是編所輯、世代不遠、情法易通。且國家所以弭亂安民、肇三百年之至治者、往往而在焉。則其可貴重、何所容予言乎。惟兵

此文後に用心を持心に改む。少は二ケ所とも寡に改む。

嘉永二年正月朔

遺一に遣、寶傳舊物一に寶藏之物に作る。今の字一本なし。然必一に恐に作る。出史筆の下に一本者なく與史筆の下に貸然なし。作一本同、賜簡札の上一本特あり。慰勞特一本慰勞竝に作る。

嘉永二年正月十五日

家之勝。不可先傳。其不窮之變。固非可以迹窺而言究也。觸類而長之。通變而制之。相機權而趨其會。則在乎人矣。弘化丙午南至日。

恭跋台德廟賜祖先安政札　久右衛門君諱藩翰譜作安次。今據家牒所載。啓謹按君原諱安政。屬北條氏政時。避其名更政爲次。

啓家數遭顚覆。寶傳舊物多散失於今。存者惟此札與安政之刀及其背旗云。或盛次故物而已。札中所稱久右衛門。卽安政也。其承賜年歲。今莫能考。然必是其爲相作衆時事矣。謹按。當時之俗。其書札雖出史筆者。若其名押必親書之。此札台諱及華押。其墨色與史筆貸然不侔。則其爲親書無疑矣。蓋著時治水。事之小者耳。而賜簡札。加以嘉貺慰勞特至。小事猶然。則其大者可知矣。嗚呼。其務攬英雄之心也如此。宜乎海內通志。而成萬世無窮之基也。嘉永二年。歲次己酉。正月朔旦。信濃松城藩臣佐久間脩理平啓謹書。

跋佩刀　朱子文集有跋蔡藻筆一首。今用其例。

祖先備前守安政君所服之刀。傳以至予。其身迊蠆。長三尺零五分。其色如冰。

此の文同年正月二十一日に至りて心竊を快然に、有契焉を、有契於心に、施を繫に改む。

光芒射人。無銘。相傳山城來氏所作。然予年壯而形頎。常病其短。嘉永紀元冬。適觀鬼丸刀圖。心竊有契焉。乃長其鐔寸餘。自鐔至鋒。得二尺四寸五分。於是。鐔。畫之以蟠虬。室上所施帶之金。飾之以飛鳳。室之尾。鏤之以蘋葉。而出入必服焉。蓋虬龍之屬。今蟠焉者。待其時也。易曰。龍蛇之蟄。以存身也。是矣。鳳。南方禮文之禽。因時而隱顯。今飛焉者。覽德輝而下也。詩曰。鳳凰于飛。翽翽其羽。亦集爰止。是矣。蘋。菜之潔者也。君子取於其潔。不嫌於其薄。春秋傳曰。苟有明信。澗谿沼沚之毛。蘋蘩薀藻之菜。可薦於鬼神。可羞於王公。是矣。今取飾於是。非敢爲觀美也。蓋欲蚤夜常目在之。以自進焉。庶幾乎亡忝祖先也已。嘉永己酉上元日。佐久間啓書。

嘉永二年正月十六日

跋青旗

青旗一面。以白絹二幅。爲身。長三尺九寸。横二尺四寸五分。其章翠藍色。圓輪内横作三畫。是吾氏族所常用。章下一大畫。横貫旗身。恐是當時別爲號者。然

常用の下に一本也あり。

血痕一に血迹に作る。

乎哉一に哉に作る。

嘉永元年十二月

此の文後に有如此數策者の下に是爲可惜耳を加ふ。諳後に知に改む。一大局の下に而下子を加へ平日の下以視に改む。下子を制勝に改む。洪瀾を洪濤に窮溟を巨海に改む。

今不可攷矣。此旗傳爲盛次君所樹。或爲安政君。亦未詳孰是。惟其絹色之古。體製之朴。則不問可識爲元龜天正間物也。諦視之。往往有血痕。祖先勤勞於干戈之間。於是亦足概見。嗚呼。爲子孫者。安可優游玩弛。而坐食人之祿乎哉。

嘉永二年春正月既望。佐久間啓記。

書賴子成邊防諸策後

迂闊固陋。爲世學之通弊久矣。求其辨博縱横。究知當世之利病。如賴子成者。殆絕無而僅有也。然其力不及兼攻海外之學。而通觀大塊之表。故規局褊狹。而其立論有如此數策者。譬諸碁。低者見滯一隅。而不能灼照全局。固無足道已。雖其在高者。深諳全局之利害。而今遽令連屬碁局五六。以爲一大局。則平日以爲全局者。又在其一隅。而亦惑於所以下子焉。夫本邦與漢土。小碁局也。五大洲。大碁局也。外蕃航海之術。至近日滋精。截洪瀾。絕窮溟。如一葦水。而本邦在海中央。凡東西南北之虜。皆可航而抵。豈非向之所云全局者。又在一隅

略を事に改む。

也耶。子成今則已矣。嗚呼。安得識此一大局碁者。與之抵掌論邊防之略哉。嘉永紀元冬十二月旣望。象山外史平啓書。

鯨を土に改む。

寧の上に無を加ふ。

子成云。我所守者。非土地乎。吾之土地。寸不可失。寸之外。雲海茫茫。與天爲際。何與我事。何不思之甚也。今夫浪華。蓄積饒多。號爲金穀之湖海者。以海運在焉故也。今夫江府。爲天下之名都。口數且五百萬。而其用不匱者。亦以海運在焉故也。海運。豈在寸之內乎。相之氓。踰漁于房之海。房之氓訴之。房之氓。踰漁于相之海。亦如之。相房之海。猶且有界。況大邦之四邊。寧無所謂日本海者哉。近年以來。東西諸藩。有捕鯨船。爲隊五六隻。若十數隻。來屠我近海之鯨。烹肉收油。獲利不貲。而上下漠然。不聞有制馭之者。是亦子成之說使其然歟。噫。啓又書。

嘉永二年正月

異流の上の在一本なし。

書太古遺音後

心越禪師。恥爲滿淸之氓。泛海來大邦。止於水戶天德寺而不還。是雖在異流。

志操の上に一本其あり。
眞蹟一本筆蹟に作る。
心法一本心學に作る。
丙子一本雨水節に作る。

志操亦偉矣。師作字雅醇。畫亦淸婉。於琴尤高。後之業此者。皆宗之。是書下卷有朱文越字印一方。而其標題及調名。爲師眞蹟無疑。則故爲其藏本。可以證也。予在江都日。得之書肆。頗自喜。第卷首題太古遺音・伯牙心法・琴譜合璧十二字。而佚其伯牙心法。是爲可惜耳。然物之離合。亦各有時。其所佚猶存于世。安知不復幷集耶。因記數字於其後。以爲異日合劍張本。嘉永己酉正月丙子。

象山平啓。書於松城所居淸英閣。

嘉永三年八月

跋心越禪師金澤八勝詩卷

心越禪師。明浙江婺郡人。住於杭州永福寺。迨滿淸奪明。厭爲其民。航於海歸我。雖在異流。志節甚峻。視夫常稱碩學名儒。而貪利冒勢。屈事夷人。恬然不知恥者。爲如何哉。宜乎。水戸義公。尊崇禮待。以終其世也。師風流文雅。彈琴尤優。後之學者多宗之。予亦嘗傳其譜。但師所傳。騷人墨士之技。而予則因以審明律呂耳。嘉永庚戌歲秋八月。遊于金澤。流睇江山之勝。憩三星亭。得觀師之詩

卷首載之下。尙可欽其高風。蓋亦不必在筆墨文字之閒也。展玩之餘。敢書數字。

嘉永元年か

洋籙合璧跋

是二書。弘化丙午歲。得之於江都同社。其一譯曰造物疏。拔答費亞學徒所編述。其一譯爲析術開端。英吉黎賢禮所撰。而荷蘭禿論母悉所譯也。二書裝結旣同。印行之歲又相若。而其爲說。固亦相須而爲用。因收諸一函。題以洋籙合璧。西洋造物圖錄。不知其數。而雪際亞靈孺斯所著。最稱該備。惟其卷帙重大。無力者不能購。中下之資。又苦不能終編。如此疏。彼地學徒。特錄其近於民用者耳。然予讀之。頗多所發明。嘉永紀元夏。巡行葛野山中。觀其山勢與石質。以知金實所在。乃深入無人之境。遂得銀鉛諸礦於絕壑之底者。實讀此疏之績也。析術之擅名者。亦數十百家。而賢禮其一也。蓋析術。深奧微密。初學者茫然。無所措手。故賢禮著此書。以發其端。人能由此而學。得萌芽而進焉。則其枝幹條達。可屈指而跂也。吟氏序云。此是其果之仁。爲善喩矣。予析其所得礦。而詳

其爲銀爲鉛者。亦賴此書之說也。夫漢土五典十倫之道。列聖群賢之所相傳。固無以尙焉。獨至於品物之學。類屬粗陋。如明李瀕湖。當時頗有博洽之稱。而其所編。本草綱目。分類排纂。非麤則漏。瀕湖已然。其他可知已。予故云。漢土數十種本草。不及此二卷書遠矣。嗚呼。此言若不信。後之賢者其糺之。

天保十一年十二月

跋徂徠書

翁之字畫。眞與古人上下。此其學至古人之效耶。象山外史因覽爲識。時天保庚子。冬十二月望。

嘉永二年正月十五日

跋熊澤蕃山眞蹟

國卿眞田志州所藏熊澤老子之書。觀其筆法。圓勁縱橫。毫無委媚之態。老氣翩翩逼人。曖翁先生定爲晩年心畫。寔爲有徵矣。對此而諦玩。則夫以英雄之資。抱經濟之學。聲色貨利之習。介然無以入於其胸中。挺特邁往。跨凌今古者。於此亦可想見其彷彿。而百載之下。令人竦然起敬。如對嚴師畏友。此不但爲

老氣一本老着之氣に作る。

文苑之淸賞而已。君能重襲而葆之。其志亦可知矣。

（安政二年七月）

跋石川丈山書

公之詩可作。公之書可爲。公之勇功不可能。公之勇功或可能。公之隱節不可及。是其可作之詩。可爲之書。所以使人褒愛珍襲。不啻金銀珠玉也。是非細故矣。覽者其有所省哉。乙卯歲立秋日。象山平大星因觀輒書。

跋菱湖書

菱湖之書。紆餘透迤。無艱難苦澁之態。此其所長也。然動闕完無意思。此其一失矣。是帖雖步驟道風行成二卿。而博采西方諸家。更自拔出機杼。故能擅其長而無一失。蓋晚年得意之筆也。

（嘉永二年正月）

跋三居先生墨蘭

三居先生。不惟深於琴道。繪事亦高。然乘興而作。興盡而止。不許人之請。故不多流布世間矣。予以琴學後進。屢得侍其燕席。一夕先生大醉。放歌朗詠之餘。

（朗詠一本朗吟に作る）

忽援筆及此。洵率意所點染。然而猗猗之狀。曄曄之態。蔚然於楮墨間。可愛也。乃乞而藏之。後十數歲。偶覩諸篋笥中。慨然歎先生之不可復見。因裝褫成軸。時懸壁間。以寓追慕之意云。若先生閫閾性行。既詳於予所撰墓誌。嘉永己酉歲孟春月丁亥日。平啓子明。書於象山書院中。

跋宋墨衕

嘉永五年三月

宋墨衕之書三帙。予以五十餘金購之。或有咎其價之太貴者。予曰。否。昔宋人有善爲不龜手之藥者。世以洴澼爲事。客買其方百金。得之以說吳王。吳王使之將。冬與越人水戰。大敗之。終以地封。若此書所載。海上不飮水。而永不渴方。一旦有海警。與戎虜戰於洋中。甘水既絕。又無餾海水器。方是時。知之則生。不知則死。其急於用。奚啻不龜手之藥。況其所載不止此類。宇宙間。大小物理。無不備焉。而予沈潛誦讀。日識其所未嘗識者。則雖千金購之猶可。又何五十餘金之足言哉。且不龜手之藥一也。或取封爵。或不免於洴澼。顧其所用如何耳。

嘉永二年正月

噫如此書不可不擇其所用。嘉永壬子三月丙辰。象山平子明書。

跋李太白詩

西施越溪女。出自苧蘿山。秀色掩今古。荷花羞玉顏。浣紗弄碧水。自與清波閑。皓齒信難開。沈吟碧雲間。句踐徵絕艷。揚蛾入吳關。提攜館娃宮。杳渺詎可攀。一破夫差國。千載竟不還。

戊申冬末。偶得西施浣紗圖。乃亡友渡邊崋山所製。用筆設色。幷皆精妙。殆無愧於元明諸名勝矣。其圖之意。甚合太白此詩。因書此以附之。嗚呼。余訪崋山之居。談說今古。辨論天經地記。屢移晷刻。如昨日事。而今不可復見。展觀遺蹟。徒增鄰笛之感耳。翌年正月丙戌。觀水道者。

跋郭有道碑

予少時觀此帖於金兒子讓許。以為中郎書而喜之。摹而藏焉。後讀金石萃編諸書。知其係近人傳鄭二氏所重書。然先入之見。深在胸間。故尚私好之。而反

怪諸子之嗤其書法矣。是以獲韓勅・史晨諸名碑而玩之。亦未識其妙處也。然而諸子之說。既有根據。故常常比方以究其實。爲日之久。始釋然悟舊見之非。而後視此帖。則其於韓・史諸碑。媸妍夐絕。不啻嫫母之與西施矣。嗚呼。諸碑之美如彼。此帖之陋如此。初非難辨。而仿像比較。久而後識者。蓋先入意見爲之累也。古人云。與溺於利欲者言猶易。與溺於意見者言卻難。果有然矣。因書其後以自警。又將諗之同志。相與善焉。

嘉永五年五月

跋楊孟文石門頌

是碑隸體古勁。時有篆籕氣。位置行數。錯落不齊。各具姿致。集錄家推爲東漢人傑作。洵不誣矣。但予所藏韓勅・孔龢・史晨諸碑。拓法並皆精巧。然鋩鍛猶多漫漶。獨此碑摸拓不甚淨。而字畫如新。因疑是必後人摹刻。壬子長夏。出而玩之。舒卷之際。偶見其墨光糙粗處。往往有樹皮石蕊著紙背。因又大疑。更覆諸家說。此碑在褒斜谷中。其地絕險。椎拓頗難。蓋棧道在山半時。磨崖壁勒文。後

椎衆一本椎拓に作り椎拓の上に其あり漢刻中より而以まで十三字の代りに後用曹全碑の五字あり。

代棧道移而漸下。今欲摸拓。必須長梯巨架。斫伐藤蔓。剝淨苔蘚。勞役多端。所費不尠。故臨池家不能盡得近人學之者少。於是始知此其眞本。決非摹勒樹皮石蘚。足證蹤跡。且拓法不淨。亦可想見椎摹之難。而嗜古之士。不囑工人。親手搨之。故不能甚巧。亦未可知也。漢刻中曹郃陽碑。最稱後出。而以搨工日衆。不免寖就漫滅。此刻終古巋然。字畫猶新。蓋以地險而搨者罕至。又奚疑。嗚呼。眞本漢土之士。既不能盡得。況乎我邦。其能有幾本哉。眞可寶也。乃命工裝潢。以附記其後如此。

碑中命字升字誦字。並用垂筆。而命字殊甚。所侵幾過二格。又空兩字。方書其下句。兩漢金石記云。此特因石理剝裂。不可接書。而垂下耳。蓋亦未之深考也。果不可接書。而垂下。則其下空兩字者何說。而升字誦字未見石紋斷裂。何故又作垂筆。嘗觀李孟祈神祠碑。年字下垂又甚長。是爲漢隸取姿媚之一法無疑。而後人未有能學之也已。

嘉永五年五月

跋漢孔文禮碑

此碑。清雍正三年。始出土中。故顧寧人金石文字記。顧藹吉隸辨碑考。俱未載之。不惟歐・趙・王・郭諸氏不曾見也。碑面雖極剝蝕。文字可讀者猶多。隸法亦自爾雅。且按三國志註引續漢書曰。山陽張儉。以中正爲中常侍侯覽所忿嫉。覽爲刊章。下州郡捕儉。儉與融兄襃有舊。亡投襃。遇襃出。時融年十六。儉以其少不告也。融知儉爲長者。有窘迫色。曰。吾獨不能爲君主耶。因留舍藏之。後事泄。相國以下密就掩捕。儉得走脱。登時吏捕襃送獄。融曰。保納藏舍者融也。融當坐之。襃曰。彼來求我。罪我之由。非弟之過。我當坐之。兄弟爭死。郡縣疑不能決。乃上讞。詔書命襃坐焉。碑中臨難引□各爭授□等字。隱隱可辨。乃其事也。嗚呼。文禮・文擧。各盡兄弟朋友之道。蹈危險犯患難。取禍辱而不悔。非其生稟至性。學有淵源。夫亦孰能至此。其遺風餘烈。千載之下。足以振頽俗而敦薄夫矣。則此碑蓋深有補於名教。不但爲嗜古好事之玩而已也。壬子仲夏求是室書。

[illegible]

漢韓勑造孔廟禮器碑跋

是碑隸法勁拔。碑陰亦復跌宕。郭嗣伯云。字畫之妙。非筆非手。古雅無前。若得之神功。弗由人造。漢諸碑。結體命意。皆可髣髴。獨此碑如河漢。可望不可卽也。蓋定以爲漢隸第一矣。然以余所覩。似當以楊孟文石門頌爲第一。此碑雖妙。猶讓其右。未知鑒識之士。所見與余果如何耳。

又

石門則豪爽瓌琦。此碑則高雅玄妙。熟玩之餘。夷考其實。則此碑信賢於石門也。若向之所品題。蓋亦閻立本初觀江陵畫壁爾。

漢史伯時孔廟後碑跋

史伯時祠孔子有二碑。是其後碑也。郭徵君以爲前碑誤也。王虛舟辨之詳矣。但徵君稱。此碑分法爾雅超逸。可爲百代模楷。是則不磨之論。

孔宙碑陰跋

是孔宙碑陰也。按金石萃編。當有篆額門生故吏名五字。而此搨逸之。題名三列二十一行。凡六十二人。皆具書其郡縣名字。蓋碑陰之最謹嚴者。隸釋云。漢儒開門受徒。其親受業則曰弟子。以次相傳則曰門生。未冠則曰門童。掾屬曰故吏。古籍曰故民。然今列弟子。反在門生門童之後。則此言似亦未可深信。姑附記之。以俟後考。

跋武榮碑

是搨。下邊甚燬。而文字亦已漫滅。不可屬讀。且亡其左角一紙。故久疑其非全搨。近得王昶萃編而檢之。云。高七尺二寸五分。廣一尺九寸五分。十行。行三十一字。而其所亡紙。適當其剝泐無字處。則是全無缺矣。將命裝潢。因輒記之。

漢熹平二年斷碑跋

此石。歐・趙錄中所無也。其來由已詳於阮氏之志矣。古人不得見者。後死者得見之。亦非幸邪。碑面不盡刻字。後半餘空石。漢代間有爲此制者。金石圖云。武

榮碑前敍後銘中界裁畢虛其半無文字他碑少似此形制蓋不知又有此石也。

跋漢鄭季宣碑陰

據金石萃編是漢尉氏令鄭季宣碑陰也。橫刻篆書處士人後當有名字。而下二列右闕二行左闕七行不知搨時偶紙幅褊狹因不及拓耶。抑殘闕之甚。無字可辨。故遺之也。王氏云。此碑。金石錄始有跋尾。然僅能辨其年月。餘已斷續不成文理。無怪近日剝蝕如是。翁氏補遺十處云。石質最鬆。一動即損。是其所以致剝蝕。是刻分法高古。窺其一斑。可以想見全豹。而殘壞至此。豈不惜乎。因謂人欲碑之不朽。宜擇貞石而爲之。不然。文書雖美不能以傳遠也。平啓跋。

古人醇實。建碑勒文。當必揀堅石。此石之鬆。恐非其故質。意歲月之所積。風寒暑濕之氣。或使石質變耳。他漢碑今古巋然。字猶不失鋒鍛者不尠。而此碑獨如此。則雖石亦不免於壽夭之數也。則今日之堅者。安知異日之不鬆。

唯君子臨事。自盡其心焉可矣。啓又書。

嘉永五年五月

跋襃斜道石刻釋文及題記

漢鄐君開通襃斜道摩厓石刻。在清國襃城北石門。此拓本乃其碑陰所刻。宋晏袤釋文及其題記也。而佚其原文一百五十九字。良爲可惜。然按潛研堂金石文跋尾。此碑歐・趙・洪三家。俱未著錄。宋紹熙末。南鄭令晏袤始得之。爲文記其事。然其地崖壁斗峻。苔蘚阻深。自晏令作記。後六百年。罕有津逮而摹搨者。然則若其原文。彼土古人未之多覩。而此釋文題記。今人亦不爲易致也。予也生乎是邦。得此於滄海數千里之外。誰謂非奇遇耶。嘉永壬子五月端午。象山平啓書。

安政二年六月

跋道因禪師碑

蘭臺蚤孤。及長購求父書。不惜重貲。力學不倦。卒與率更齊名。世號大小歐陽。但率更碑版尚傳數種。而蘭臺止存此碑耳。然率更數碑。字多漫漶。鉤磔波撇

佐藤一齋曰、量字重出。御見。嘉永元年正月八日

而書法、一本而其書法に作る。書本細技也、一本書細技也に作る。近人、一本近世に作る。爲事、一本爲

不可復尋此碑則鋒鍛猶新凜然有風霜之氣亦足尚也率更楷法源出魏齊蘭臺多用險筆雜以隸意亦北朝遺習可以見家學師法所由來矣

跋大雅集右軍書吳將軍碑

此碑久埋沒土中世無識者明萬曆間文學王堯惠者始得之於西安府隍中則缺損已無碑形而文辭亦不可屬讀然書法極類懷仁聖教序而筆畫猶存鋒鍛足爲臨池模楷亦非趙宋以後所及矣惟右軍書古今極爲難學往時翰林侍書輩多學聖教序了乏高致遂有院本體之謗然聖教何嘗俗但學者力量不及耳欲學此碑者亦自量其力量可也

跋顏魯公爭坐位帖

顏公一代之名臣忠義貫日月而書法奇偉俊拔亦如其爲人百世之下玩其筆蹟而尙友之亦可以長吾精彩矣書本細技也其巧拙固不足以爲人品高下近人往往有荒廢百事弊疲精力以學書爲事者極爲可笑然字畫甚無法

事業に作る。不自省覺一本不自省に作る。可羞矣の下一本讀書子弟の四字あり。名人法書一兩卷一本一兩卷法書に作り合の字一本無し。

度鄙野刺人目而不自省覺。其亦可羞矣。宜寘名人法書一兩卷。時時摹臨。以求合規矩也。

又

魯公此帖。眞爲千古之絕筆。宋之蔡・米・蘇・黃諸大家。皆莫不學之。是搨雖少漫漶。法猶可尋。後生潛心。不爲小補。

安政元年三月

書疏稿本一本書稿に作る。十五一本十六に作る。書の下の二一本無し。上の字一本也の下に無く公の下に在り。

又

是公一時書疏稿本。豈亦有意於作字哉。然每逢同字。必變其體。亡論其二三見者。如之爲數四十八。不二十八。有十七。僕射十七。別僕一。以十五。一十四。爲十三。軍令者竝十一。尚書十。別尚一。書二。三而下竝九。公亦乎竝八。天人也上將竝七。與如高未此於欲然行品是竝六。國當功闕同右位官可所開何則得自若朝廷竝五。故又及非府今明卿從古友史師衆別監尊竝四。皆窮其變。無一有同者。人或疑於其設意焉。予謂不然。今夫長江大河。一瀉千里。豈有心於

一波一瀾乎。至其曲折流轉。奔蕩變化。則鬼怪神詭。出有入無。無復可以端倪。
而其層波疊瀾何曾有同者。是可以喩公之此書矣。其無意於爲之。又何疑。甲
寅三月下澣子明重題。

嘉永元年正月七日

又

古人用筆。初無定法。或謂迴腕。或謂當使指運而腕不知。各因其所得而爲說
耳。然在學者。卽其所學。知得其用筆之意。乃爲有益。如顏公此帖。則是所謂迴
腕。非是指運。然亦不易見。唯細心善學者。乃能知之也。

一本各より所謂まで卅七字なく代ふるに然此帖明決耳とあり。

同前

又

東坡云。書初無意于佳。乃佳耳。嘗評此帖。瓦注賢於黃金。雖公尙未免。蓋亦謂
有意不若無意也。然無意之妙。豈可遽至。唯心能運腕。腕能運筆。一點一畫不
苟者。可以馴致於心手相忘之境爾。下學上達。雖小技亦莫不然。

相忘之境爾一本相忘耳に作る。

又

嘉永六年十一月

是帖一本此帖に作る。自の下一本是なし。一本文末に嘉永癸丑南至日象山平子明書とあり。

公屬此藁。固草草不經意。而變幻百出。光景無窮。公之於書。眞所謂動容周旋中禮。盛德之至也者耶。

又

是帖。縱横跌宕。如不施控勒御天馬。令後人莫復措手。然與二王之傳。自是別派。其源蓋出于北朝碑版。評書家動言。無一筆非晉法。是矮人觀場。不足論也。今細玩其筆意。往往有隷古之趣。此可以見其淵源之所繇矣。

又

此藁。雖倉卒援筆如不經意。而其筆勢遒邁。氣象嚴毅。若老將擁兵。刀槍森列而隊伍不紊。眞可謂烈烈大丈夫之書矣。彼心役名利。抗容走狀。如俳優妓倡。嫣然冀人之顧眄者。奚其書。奚其書。

又

是帖。文字大小疎密。錯落不齊。本皆出于不用意。而各有不可名狀之妙。曾子

固嘗評老蘇之文云、侈能使之約、遠能使之近、大能使之微、小能使之著。煩能不亂、肆能不流、吾於是帖亦云。

又

虞永興曰。心神不正則書攲斜、明道先生曰。作字時持敬。不是要字好。只是學。

心神不正則書攲斜一本心正則筆正に作る。此帖の下一本者あり。

正敬二字。不啻斯學大頭腦、亦是書家正法眼藏。欲臨此帖、當先知之、

又

筆札一事、日用不可闕、且可以適情而娛心。然一概耽之。是爲玩物喪志。志於道據於德、依於仁、游於藝、學者不失其先後之序。輕重之倫。可也。予學此帖而甚悅、因書此以自警、

不可闕の下一本者あり。

安政二年三月

跋玉煙堂顏帖

此帖、山寺懼堂所贈也。鹿脯奉辭等狀。較快雪・滋蕙諸刻、字形差瘦。疑此其眞筆、而彼肥者、宋人所臨耳。爭坐位書。此於陝刻、精彩少減。然此搨鮮明處。可以

補陝刻之漫滅。並存固爲有益。送劉太冲敍。鬱屈瑰奇。觀者目驚。宋四大家。皆出於公之爭坐帖。而米獨似兼學此敍祭季明文稿。初不用意。往往塗抹改竄。然字字皆存法度。鬼雄勁利。有快截長劍之勢。與坐位帖大略相似。但坐位以故筆書之。此則新筆。故筆勢如有異耳。小字麻姑壇記。遒峻緊結。或疑非公之書。歐陽永叔云。筆畫巨細。皆有規矩。愈看而愈佳。非魯公不能書。不誣也。奉使題字。沈蔚古澹。酷似蔡明遠序。董華亭云。臨明遠帖五百本。後有少分相應。於此帖亦宜然。嗚呼。魯公書如端人烈士。其莊肅嚴毅。人初見而畏之。然愈久而愈可重。古人謂書爲心畫。非虛語矣。然則吾人欲學書。亦豈可無所去趨哉。愛玩之餘。乃題其後。乙卯暮春。象山平大星。書于松城聚遠樓。

跋陳化成小傳

陳提督。忠誠致身。終殉國難。千里之外。聞風聳敬。其軍敗之日。馳塘督戰。砲兵缺處。親自裝藥點放一節。尤壯人意。然初吳淞防堵。鑄巨砲六十位。其最大者

八千斤可及數十里相度形勢設爲砲臺者予竊不能無憾焉夫大氣攔彈藥力有限天下豈有及數十里之砲哉而率意以爲可及設用備賊是其取敗之道也又察其兵可用授以避砲法云先辨煙色其白者空發可不必避惟黑煙冒出宜急避之火道恆離地三尺故伏地乃不損亦見其疎於砲也洋兵用砲本主殺敵決不空發以費火藥凡火藥上好者其煙白惡劣者其煙黑初不係彈之有無也且銃丸至疾在近發者決不可避其遠者不必中則不必避西洋巨砲有輥射躍射碎射臂射鑽射等法其火道不可期離地三尺則其授避法者使兵卒徒長顧慮挫其勇往直前之氣而無益於事無乃不可乎嗚呼陳提督其人而有此疎漏蓋習俗使然也習俗之弊非惟淸國讀此傳者其亦知所戒哉

嘉永六年夏

熱銅八十斤老櫑地礮全圖跋

洋礮之制有銅鐵之別銅者薄而長鐵者厚而短薄則用劑少厚者反之長則

飛彈狠。短者反之。熟銅堅靭難鑿。鑄鐵過剛易裂。此其所以不能無別。洋人窮理實驗。一事不苟。如此。邦人不學。往往以銅料鑄鐵形。多費而少利。予甚鄙之。癸丑夏。江都有海警。薩邸將範老櫺地礮以備之。大礮奉行新納君。令折田宮原二子。就予而謀。乃製此圖以貽。予講新礮法幾十年。不敢謂得洋人心髓。而本邦礮道。至予一變。世間明眼。當有知者。

秋月胤永の箸(北)

跋接彌利堅使始末

讀此錄。而不忼慨痛哭者。其人必非志士。讀此錄。而不眥裂髮豎者。其人必非壯士。讀此錄。而不思以身殉家國天下者。其人必非烈士。吾安得志士壯士烈士而共泄胸中之不平哉。

安政二年七月

海防臆測跋

古賀侗菴一本侗菴翁に作る。蓋其は蓋翁に作る。

古賀侗菴海防臆測。雖一二不免似書生空譚。然宏綱大旨。皆能切事機。適形勢。蓋其秉心樂易。所學博洽。潛心於當世急務。而日與識夷情者。上下其說。故

其は翁に作る。言論は其言論に作る。因讀此卷の上に古人云無備何器也無久分高能之理錯行此策尙不背行於世亦寧條乎あり、文未に政卿中元象山特と響す。嘉永三年

也。視夫拘儒局量褊淺。媢美疾長。國家利害。寘諸度外者。則遠甚矣。往日使其立於林氏之上。掌文柄。參朝議。則言論尙有可見者。而天下武備。久就修緝也必矣。夫豈至使醜虜虎視於要害之地。而永貽朝家腹心之憂哉。因讀此卷。竊有感焉。慨大息而書其後。

書片山西洲詩卷

小濱片山西洲。年五十九。以善刀槍火砲之技。鳴于其藩。歲庚戌。予在江都深川。方與二三子講歐羅巴兵法火術。西洲聞之。介山口菅山。納贄求敎。其居在牛込之邸。距予寓棲十里而遙。西洲不遠其路。每三四日必來。與少壯者執事。雖暑雨而不厭。何其壯哉。聞敍其平生。窮困之極。饑餓瀕死。而不忘君臣之大義。何其偉哉。及觀此卷。則雖其倉卒之作。閑澹蕭散。如獨鶴孤松。何其韻哉。西洲所存。寔不可測。敬歎之餘。遂書之。

書柚說後

陸龜蒙怪松圖贊云。草木之性。本無怪。生不得地。有物過之。而陽氣作於內則憤而爲怪。范文正初數言事。當權者不善。每目爲怪人。文正知之。及後上疏曰。吾又將怪矣。乃書龜蒙贊。以遺當權者曰。朝廷方太平。不喜生事。某於搢紳中。獨爲妖言。旣齟齬不復伸辭。因乖戾得無如龜蒙怪松乎。嗚乎。范公爲有宋人物之冠。後世誰有異議者。而其在當時。人不相喜。至於目爲怪物。士有學問異材。而獲於其上。一何難哉。適爲人寫舊所著柚說。時亦記起此事。因併書此。

柚說は說の部に出づ。

安政元年三月

跋浦賀紀行卷（甲寅春彌利堅發軍艦八隻。來于浦賀澳。本藩猝承應接館護衛之命。山寺懼堂以公命抵浦賀。伺偵事情。其往來所作諸圖及文詩。裒爲一卷者是也。）

懼堂。天質穎敏。好談兵略。長於吏務。筆翰如飛。未嘗壅滯。多事勞擾之際。抽毫紀行。吟咏諷誦不異平日。觀此卷亦可槪見其才力矣。惟懼堂不講泰西之學。而諳艦礮之術。以故視不勝猶勝。是爲病耳。因予請懼堂欲改火輪方可碎鐵舷豈難傾。攻伐何無術。請休誇海城。作火輪未易制。鐵舷亦難傾。攻伐知何術。

顧瞻暗白驚而懼堂不從也懼堂尙然其他何足言哉浩歎之餘乃跋數字

嘉永甲寅三月念七象山大星書於江都所居求是室是日罷參謀發予所請召士卒百若干餘名歸國

安政二年夏

跋湯子遺書

嘉永癸丑夏予徜徉乎江都之市偶覩此書於坊賈山城鋪乃購而還閱之卷首有佐藤藏書印卷尾有一齋先生手記中間評論批點皆係先生手筆則舊爲先生所藏無疑不識何由又出坊閒因欲攜詣先生以問其故會有墨人事起公務拮据不得如意甲寅春初公承朝命發人護衞墨人應接予以參軍事在選奔走又復數旬事竣歸家無何門人吉田某欲索虜情有所建言觸法下獄予爲之連累同在繫半歲終遭禁錮此書來由不可復問故姑記所以獲之以俟他日云爾乙卯長夏平啓子明書于聚遠樓

安政二年五月

跋所臨醉翁亭記

此帖不知何人所書。王弇州曰。東坡後有王逸老者。善書。自欲出懷素上。或是其筆。趙鼇屋云。此公筆法。卻勝蘇仙。何不自顯姓名。而署蘇仙耶。殆不可曉。閑日適發興。臨此帖。因及之。政卯夏五。象山子明。

安政二年七月

跋善導傳

予覩世之病狂失心。自輕其生死而不悔者。平生惑溺鬼佛。而過求福田利益者。十常八九。善導法師。以晚暮之歲。急欲往生。乃登所居寺前柳樹。投身以死。其爲病狂失心亦甚明矣。宗徒不以爲醜。反艷稱之。何其愚哉。夫天下莫重於人命。漢高除秦苛政。約法三章。亦殺人者死。當時善導。倡般舟往生之旨。煽惑民間愚夫愚婦。京華諸州。或投身高嶺。或委命深泉。或自墮高枝。或焚身供養。向百餘人。父母而死於非命。其子之痛恨如何哉。子而死於非命。其父母之痛恨如何哉。殺人以梃與刃無以異。以刃與言無以異。所宜深懲痛創。以在其淩淫。而唐之君臣。不以正法。可謂怠矣。然善導發狂失心。不得令其終。蓋天誅之

也耶、念佛一宗、於夷法中、如少害者、然而猶是可不察乎。因讀其傳、輒書此。

讀唐鑑

吾始聞伊川先生讀唐鑑、三代以後無此議論之語、而意謂是必論辨曲折、義理高遠、超出於人意之表者也。及得是書而讀之、則其三百六編內、無一畸論、悉皆簡要明白。先得吾心之同然者而已耳。吾於是始信君子之道、易簡正平。夫婦之愚、可以與知焉也。夫鑑之爲物、自非無目者、則必莫不就焉以辨其姸媸也。若是書凡有心者、一讀而了然於其三百年間得失之迹、與夫善惡邪正之效、則其以鑑爲名者宜矣。嗚呼、使凡有心者、皆一讀而了然於善惡得失之辨焉、此是書之所以後乎三代、希有此議論也歟。

讀淮陰侯傳

韓信下魏破代、平趙降燕、定齊滅楚。遂爲漢幷天下。固亦赫赫希世之豪傑也哉。然始其爲布衣、不得推擇、屬項梁無所知名。屢干項羽不用。亡楚歸漢。高祖

聰明一本明察に作る。

亦未奇之也。由蕭何數言之。而後擢爲大將。夫以高祖之聰明。而猶且如是。則士之得知也。吁亦難矣。然漢幸有蕭何而得之。後世無蕭何矣。而使豪傑之士。終生不顯。亦豈可勝數哉。此則可悲已。

示諸生

予觀漢人之談兵。大都如海上蜃氣。雖變幻百出。目可悅其奇。而足卒不可踐其境。至泰西兵法。一若平地起百尺樓臺。其功非倉卒可辨。然及積年累月。而其工告成。則巋然煥然。吁可畏乎。其駭人也。賢輩所學大小砲術。乃其作樓臺之土木也。勉自奮拔。以萃其工。是予所深望。

又

予之爲礮學。無他奇特。但要一傚於西洋先覺所爲。不加私智。習熟積累。有得於心手耳。而其因礮分員。隨員執事。動作相濟。若使手足。是尤爲當務之急。凡西洋礮法。悉定於軍爭實驗之餘。與夫偷安之世。出於淺人妄意者不侔。然爲

之而不習。習矣而不熟。生澁杌隉。身不與事相安。所謂五穀弗熟。不如荑稗者也。何足以充於膺懲敵愾之選哉。西洋兵家之言曰。欲行者必動其足。諸君勇猛奮發。以進其足。毋久濡滯。是願是望。

又

礮陜道也。故其所營爲。多違異拂亂。不得如意。然所以困心衡慮。増益其所不能。蓋亦在此。近日大森之演習。時有乖謬。大不可人意。雖是礮性宜然。亦吾人不熟之所致。不加警省可乎。吾甚欲與諸君滋勉奮發。以觀新功。優游忨愒。苟以自恕。非所以望於同志也。幸諒此意。

安政元年三月

跋白井礮卦

余礮卦之著。所謂本諸身。徵諸庶民。建諸天地而不悖。質諸鬼神而不疑。百世以俟聖人而不惑者也。頃年洋夷猖獗。而吾士習迷陋。邊備不振。礮卦之言。足以破其迷而拯時弊。乃欲鐫版以布于世。而林大學阻之。阿部閣老亦抑之。時

事可概推也。雖然。風雨如晦。鷄鳴不已。君子報國之志。豈可以時之用舍。而改其度哉。蟻川直方。慨於時事。學礮兵於吾。相從之久。其藝大進。故四方來學者。予有疾病。必俾直方指教焉。可謂吾門之丁寬矣。今手書礮卦以贈。蓋嘉之也。直方其益勉旃勿怠。嘉永甲寅。春三月小盡。象山平啓。

墓碑

三岳仁木先生碑

頭注せるは碑の搨本なり。此の碑深川本誓寺に在りしが大正十二年大震火災以後其の形影を失へりと云ふ。可惜。

天保十一年春（北）

碑本嗜は耆に作る。

啓自少小。卽好音律。最嗜琴。學之而未有良師。雖閒按譜撫弦。導紓鬱而寫幽思。意不自安也。迨游學於江都。與詩人梁川緯相識。緯爲啓云。今時以琴名家者。曰三岳先生。嘗受業於宿谷默甫。又與僧蘭室游。其眞積之久。有以深得於心越師之傳。都之欲學琴者。多趨其門。啓聞而慕之。乃介緯求教。先生嘉其篤志。遇以隆意。誨招誘掖。亹亹焉不倦。往來門下三年。學習三十餘曲矣。將辭歸鄕。乃授以祕譜。更以越師書畫一卷爲贈。惜啓之去。咨嗟如不忍者。後四年。再

訃は赴に作る。

遊於江都。即日往造之。先生喜執啓臂曰。吾又見子。殆將忘食矣。啓在鄉日。考訂琴說著書十篇名曰琴錄。便舉其要以質焉。先生又喜曰。子之新功。可謂不負四年之別也。然其書猶有未妥者甚欲得講論。以求其歸會有卜居之穴。因循未果。而先生遽然下世矣。啓聞訃往哭之。不自知涕泗之交頤也。先生嘗謬許。得啓而道不孤。啓何敢當之。今先生歿而啓則孤矣。烏虖哀哉。其將葬也。嗣君守約以墓銘爲屬。啓雅不樂銘墓。時有謁者皆辭謝之。惟於先生義不可辭。遂次而銘之。先生諱守昌。字天福。仁木氏。稱甚五兵衞。三岳其號也。世仕大朝。七世祖諱勝長。稱周防守。六世祖諱雋長。又稱周防守。皆爲番頭。先生資質淳古。不修邊幅。接人無貴賤親疎之閒。尤厭世營。或値馳逐紛囂之場。如溽暑置身赤日下。其在郞署也。有勸媚貴權求薦者。先生曰。吾豈耐夏畦之勞者。遂不從。早以家事付嗣君。就賜第之西北。雜蒔花卉竹樹。築亭其閒。常延賓客。觴酒弦琴。燕嬉笑語。竟日夕不倦。如是者若干年。嗚呼。其視世俗貪名耽利得已而

不已者爲何如哉。先生既精琴道。兼善繪事。其所作花草蟲魚。人爭貴之云。娶曾我氏。去之。娉大維氏。菅谷氏。並先卒。後娶京極氏。子男若干。女若干。皆亡。唯一女在室。養長崎奉行久勢君弟爲嗣。生於明和八年正月二十日。卒於天保十年九月十六日。得壽七十。墓在深川本誓寺内。從先塋也。銘曰。

江東之原　當知之山　有寧一宮　千載無患

墨水在西　其流洋洋　人則亡矣　琴音不亡

松城　佐久間啓撰幷書

嘉永五年六月

故侍從眞田公墓誌銘

嘉永五年六月壬午。故侍從眞田公。薨於江戸櫻田新橋之第。以其月戊申。歸葬於信濃松代先公之兆次。前期。今公命臣啓。爲之誌。臣啓謹按。公諱幸貫。眞田氏。世爲松代城主。世系氏族。詳于史書。公本姓松平氏。故少將白河城主定信君第二子。而東照神祖八世孫也。先君幸專公。乞養爲嗣。以女配之。文化十

三年十二月敍從五位任豐後守。文政六年家督。改伊豆守。後又更信濃守。天保二年十二月敍四品。十二年六月擢爲加判列進侍從。十五年以疾辭職。嘉永五年夏益病請朝致仕號遂翁。今公承後。後月餘遂不起。享年六十有二。夫人原姓井上氏。故濱松城主河內守正甫君之女。以其眞田氏生也。幸專公養以爲子。公有三男二女連夭。唯一女適隱岐守朽木君。初乞島原城主松平君忠馮第八子幸忠君爲嗣。早卒。乃養今公之考幸良君。定信君之季子也。任豐後守。又先卒。今公時年十歲。稱雄若。立爲世子。今信濃守。公生有異質。聰慧絕人。氣貌俊爽。聲如遠鐘。少好文武學。挺然自奮。未迫弱冠。名聲顯于遠邇。其接人和以有禮。其處事敏而能斷。馭煩若易。制大若細。倉卒之際。人未及思議。而公則從容出之。妙合至理。遂入爲嗣。善事太公太夫人。愛敬誠至。一若所生。其施於有政。惠而有制。嚴而不刻。洗垢易敝。以新邦俗。益篤儉素之風。以躬先之。衣食居所。平民所不能忍。公處之晏如也。其自奉之至薄。人或以爲慳。然至於

備海警。鑄巨砲。慮水患。嚴隄防。振學政。育人材。雖日費千金。弗吝。聽言納諫。類如耆欲。雖有不懌。未嘗見聲氣。及過中年。德容益粹。溫厚慈祥之氣。藹然薰人。其與人言無險易。賢不肖皆使之各得輸其情。人有過失。含容隱匿。唯恐其或宣。人有一善。欣欣稱道。唯恐其或不宣。故雖剛愎暴慢者。望公之貌。聽公之言。莫不意阻氣消。而退稱其賢。是以大小諸侯。慕其才德。就之質疑釋惑者日衆。公負天下重望。方當朝政聿新。賢能彙進。一旦立朝。殆將伸其美志。以大其利澤。而病不久其位。又不究於壽耇。及聞其薨。公卿大夫。下至布衣諸生。莫不痛惜而傷惋曰。吁命矣夫。公善御馬。兼邃砲法。有願學者。輒諄諄誨之。其他武藝。咸出等夷。然常能韜晦。不輕以自試。故雖近侍左右。莫之能窺。嘗在溜池之第。有虵登庭樹。狀甚惡。左右持杖。欲擊之。高不可中。公執小弓。放一矢。隨手墜地。其藝之精。大率類此。然公知信仁勇。人君之量。大有過人者。或以技能之末稱之。淺乎其爲言矣。銘曰。

既孝且仁、又儉以勤、均其貴也、莫與之倫、山爲谷海揚塵。後之人視諸斯文。

弘化二年十一月

女菖蒲壙記

菖蒲者、松城佐久間啓之長女、而其妾田中氏之所出也。弘化乙巳五月二十日、生於江都玉池之寓舍。以其五月生也。因名以菖蒲。菖蒲綾女國讀同。故亦以阿綾呼之。是兒眉目清秀、生未數月、而不苟叫啼。莊靜溫雅之態。完然可悅。見之者、莫不奇而愛之。歲十一月暴得疾。三十日殀。嗚呼痛哉。吾之久居於江都所交游、多天下之士。故所延之醫。亦皆天下之選也。而不能拯。命矣。江都寺院葬地極狹隘。窆後數歲。動有遭掘擾者。吾深懼之。乃歸藏於松城蓮乘寺內之先塋。以其殤故。惟礫書諸磚。以誌其壙。如此。

祭文

天保五年七月

祭宮尾溫卿文

天保五年甲午七月。佐久間啓。聞溫卿之訃幾日。洒割心致哀。遠托親友山寺

常山謹告于溫卿之靈。嗚呼傷哉。溫卿吾見其秀也。而終無見其實耶。世方馳騖於小慧私智。而不復知有斯學矣。間有有志之士。亦惟晨星之落落。而未見其能耀大。而溫卿獨奮。傑於僻壤之中。以穎敏之資。講明正道。遠邇秀者。毗賴而興起。蓋亦不尠矣。又夙嗜軒岐之術。多所自悟。老生碩師。未之及精者。溫卿旣得之於其心。驗之而無違焉。則其期遂以是與一家。誠其宜矣。雖或亦嫌於爲名。而察其心事。正在爲其父祖。而振揚其家聲。則固孝子順孫之情也。而可謂之有他乎。世方植私貪利。縱媢嫉而究詭險。而溫卿獨誠實忠信。樂善好德。思以榮人之能也。而不自知其身之爲辱。謀以濟人之困也。而不自知德窮之萃於其身。嗚呼。若溫卿。蓋所謂雖無文王猶興者也。其心休休焉。人之有技。若己有之者也。樂分施而恥積藏者也。此豈獨今之時而不易多見。將古之記牘。亦未數數載也。嗚呼。今歲其何歲也。春而宮本櫟齋亡。夏而今井寒泉殁。今初秋也。而溫卿又復棄我而逝。吾安歸其咎乎。天其或者實無意於斯世與道乎。

胡其善類之難植而易凋善人之難成而易殞也抑彼蒼之所好惡與此民不同耶將此民之生於偶然而天亦無主宰於其間耶嗚呼傷哉。嗚呼傷哉。予少年客氣胥見世道之衰薄士風之萎薾乃憤激以謂。如此則何以爲君之腹心。如彼則何以爲國之幹屛因不自量夙夜彊勵。唯以忠直剛毅爲志以興文武之道矯振弊風爲務而卒亦未知微力之不可得而爲也。性又偕野不能屈下於人屢戾忤貴權終陷廢錮之罪以此市朝之間。舉若仇讐口舌無數煽騰相攻當是之時其所久與游亦遠去而不復顧獨其終始弗渝者。溫卿四五輩之外眇乎其寥寥也而溫卿之於予。其趨異而異焉。非苟同於予也。同而同焉。非苟異於予也。然而原其歸焉。快然而合。融然而同。冥然而契。不知溫卿卽吾耶。而吾卽溫卿耶也則相知之深。相信之篤。能復有溫卿若焉者乎。而今不圖鬪其計其爲哀痛何如哉。去歲冬予之東遊。入佐藤先生之門。溫卿亦私助其志矣上途前一日訪其廬而告別。溫卿曰。君質厚而氣豪。銳然有志於家國。今方

就學明師。其能專心致精。則奚憂其不成。其或不成。是亦不爲而自棄也。使君而無志則已矣。今君既已有志矣。而亦容有終於自棄乎。吾亦有志於斯醫。益精其所未精。愈研其所未研。自成一家。而待君之榮歸而已。嗚呼。孰謂此時之別。竟成千古之永訣耶。自予入師門。未經十月。亦幾有所益矣。則將積數年而後還。與溫卿握手一室。敍其所嘗修進。以求質正。此亦人生之一快事。而溫卿今則亡矣。嗚呼傷哉。雖然。今封內鄰境。誰不知東福之邑。有宮尾溫卿者。爲善良之彥。且因溫卿之德而生焉者。藉溫卿之惠而脫窮困焉者。憑溫卿之術而免死焉。遠患焉者。比比則不止。今時而稱其名。將傳之後昆而不泯也。然則溫卿其既有實矣歟。彼黃髮台背。與夫木石無別者。又何可勝言。欲得如溫卿一日之生而死。亦豈能之乎。則在溫卿。乃可謂無憾矣。獨斯學之失助。而亦不及見其志之大成也。則吾安能以無悲傷乎哉。嗚呼。溫卿言在吾耳。溫卿志在吾心。將滋修吾學業。以求有益于君國。期終不負知己之志而已矣。溫卿其有靈。

庶幾能發吾之昏蒙而救吾之惰窳耶。山河悠遠。靡由走慟。臨文嗚咽。涙下如雨。山寺常山。於予太款。在温卿亦親善也。故今以此囑之。布告予衷。温卿有知。其尙聽之乎。辭有盡而哀無窮。嗚呼傷哉。

祭心越禪師文

嗚呼越公。歸我而逝兮興此廢音。弘厥傳兮惠後之人。我思公兮不禁。揭遺影兮致悃忱。秋風咽兮鬱閟祠之宋林。瀨淺淺兮石鳴。蟲啾啾兮哀唫。俯而聽之兮若聞公之琴。道之同兮異方且親。心之契兮曷云幽明之古今。我拂朱絃兮寫茲心。魂髣髴兮其降臨。

嘉永三年か

祭中村平嵓文

嗚呼平嵓。年甫十八而亡耶。曩予之在茲土。大人以文學締交於予。遂託予以子。子時八歲。資質温厚。不妄言咲。舉動知思。殆如成人。方其肄業。僶俛盡力。有髫童相戲於側。泊然似不聞知者。予深愛重以爲奇特。予以君命北歸。子年十

三。果能誦四子六經左氏班馬之文。悲予之別。哽咽不禁。予亦深惜不及以成其材也。閱一歲。聞大人訃。嗣得之於友朋之書。云。子督家政。上事二孺人。下待門生羣僕。巨細大小。各當其可。雖成人莫能及。又克承家學。療危救急。視人如己。遠邇乞治者盈門。予於是悲喜交至。不自知其所以過之也。嘉永己酉冬。再遊茲土。而見子。子出所蓄疑議數條以質焉。予辨之且謂曰。子疑宜也。學不疑乎其所無疑。而疑乎其所宜疑。長進之驗也。其勿替之。子悅欲增加鞭策。而有瘍發其膝。遷延歲月。醫治不效。終殞其軀。嗚呼痛哉。聞子病間與門人善碁者碁。初低其人九子。後數日忽高其人九子。子之才知。迥出等夷。天假之年。豈惟家學優長。播聲名於今時。將必有發斯文之光輝。而翼斯道於悠久。而乃一仆而不可復起矣。嗚呼痛哉。然生而人厭之。孰謂之壽。死而人惜之。孰謂之夭。壽也吾不知其可希。夭也吾不見其可惡。惟如子之賢。縱壽而終。衆猶傷之。況亡之於未弱冠之年。誰不痛惜而失聲乎哉。雖然。命也可如之何。一奠永訣。涕零

嘉永元年六月廿五日

一本山の順序を異にす。

湯出根一本湯弦根に作る。

一本二荒を先にし御嶽を後にす。

文賜を脱に作る。

産物一本所産に作る。

足資一本資給に作る。

碑第一山第二山第三山第四山第五山一本各山の字なく殻は硬皮に作る。有所破裂者：諸

如雨。言有盡而情無窮。魂乎有知。歆此哀誠。

祭牿野山文

牿野之山。其最高者曰岩菅。次之曰横手。曰大倉。曰稲包。曰大高。曰赤石。曰三引。曰湯出根。曰榛峯。曰前志賀。曰外志賀。曰鉢。曰白山。曰赤楊。曰寺小屋。曰東館。曰西館。曰燒額。曰猿面。東連上野。北亙越後。則其大可知矣。一陟岩菅之巓。則遠揖富士。近援淺間。西睎御嶽。東眺二荒。甲斐之八岳。越中之立山。加賀之白山。佐渡島。出羽陸奥之諸峯。歷歷莫不可指數。則其高可知矣。夫其高大也如此。宜乎其神之靈。時興雲雨。有能潤百里之外也。然以其在僻遠。雖有産物。不爲人所知。惟樹竹柴薪。足資細民而止耳。故有司忽焉。啓去歳巡佐野笠岳之麓。觀其山脈與石性。以知茲山爲天下第二山。按泰西說。凡天下之山。五等。碑石凝成者爲第一山。碑石。蓋大地始成時之殼也。如上而有所破裂者爲第二山。而諸礦藏焉。有海物遺骨者爲第三山。砂土混成者爲第四山。湧起火煙者爲第五山。而藏諸礦。迺以今茲六月十三日。出于上野。過雨。止三日開霽。乃自入山上州吾妻郡村名過布池。沿溪

礦藏爲は識諸礦者爲第二に、涌起火煙者は火山に作る。絶壑之底一本に野川南崖魚作る。甚廣一本甚富に作る。祭一本致謝に作る。

而下。十八日。果得諸金之礦於絶壑之底。所出甚廣。當大利于公也。於戲。茲山廣袤彌百餘里。峯巒列峙。溪谷錯流。遽入其中者不可辨識東西。而啓入山僅二日。大得吾所求。豈獨啓之力哉。抑亦神之靈也。不可以不報。迺下山之三日。寅具白雄鷄二隻。清酒五樽。以祭於神。惟神有靈尚饗。

年譜

天保五年十一月

佐久間氏略譜竝に長沼佐久間氏系圖何れも家義を家村に作る。

神溪佐久間府君年譜

府君。諱國善。字之祥。稱一學。神溪其號。一字淡水。本長谷川氏。松城世臣。千助君諱善員第二子。而原其冑。寔越後名將下野守齋藤昌信六世孫也。同班彦兵衞君諱國正。乞爲嗣。因冒佐久間氏。佐久間氏之先。出於高望王。爲平姓。居相模之三浦郡。爲三浦氏。其別子家義。當鎌倉之盛。居安房之佐久間莊。緜是遂氏焉。後數世從織田氏。有武功。入大朝。仲叔封侯。仲世爲信濃飯山城主。叔世爲長沼城主。彦兵衞君之考。曰三左衞門君。實長沼大老岩間又兵衞君之

次子元祿間長沼侯因事國除乃委贄於松城而以其祖母爲飯山侯家之出遂從其姓是爲松城始祖府君氣宇曠朗行止偉岸少言語通文武學尤精易道殊邃劍術志在經濟而深恥自售以故久不爲世用逮晩年籌策一行功德永見然其充實之美非一事一功之可稱俾之蚤得其志大顯於用則其所利濟豈可勝道哉府君不喜文飾專務躬行自少壯時以忠誠淳厚自飭至晩年朝野稱宿德之良必以府君爲首者非私譽也凡其嘉言懿行足以貽於將來矣譜具左方

寶曆六年丙子春三月五日甲子府君生父千助君好學善書稱於一時母萩原氏有賢德其身子必愼動作常居靜室焚香讀經既乳稍能食視以毋誑少長飭勵甚嚴有或過失輒掊擊不少貸府君自幼穎悟孝友謹篤能副成其賢父母之志矣

明和三年丙戌府君十一歲納贄於岡野元韶受句讀一過無遺元韶疑其既

讀也。試諸他書。皆莫不然。於是。大稱其材。

明和六年己丑。府君十四歲。從八田流水。學卜傳氏之兵法。至於忘寢食。是年。始冒佐久間氏。

明和七年庚寅。府君十五歲。九月初謁于天眞公。

明和八年辛卯。府君十六歲。正月生母荻原氏卒。

安永四年乙未。府君二十歲。先是。八田流水物故。府君又從矢島頂水學焉。是年學成悉傳其奧祕。時佐久間氏。家道窮困。府君每疲奔命。友人维田子成。謂府君曰。以子之才。圖功名於四方。何憂其不達也。何乃自苦若是耶。府君曰。吾非不知之。然吾有父母矣。焉有棄父母之命。而可獨利其身也。縱吾得封侯之榮。我不忍爲之矣。聞者服其誠孝。

天明元年辛丑。府君二十六歲。春。娶相澤氏。是年舉一女。秋九月。彦兵衞君老。府君嗣。十二月入郎署。當時士風軟熟。無復義烈之氣。府君夙蓄矯張之志。剛

介勵行、每面折人、不以毫髮假借、同署憚畏之、府君嘗在江都、從兄某等、請府君出遊。紿至娼家、府君無奈何也、及宴罷各入房、獨兀坐達旦。其勵行類如此。

天明三年癸卯、府君二十八歲、六月女千代夭。

天明五年乙巳、府君三十歲。春三月、彥兵衞君卒于江都、君既致仕、遊覽於江都、是月得疾篤。報至。府君驚駭。卽日就途。二日夜而抵、則君已卒。

天明六年丙午。府君三十一歲。女逸生。

寬政元年己酉、府君三十四歲。二月爲世子親信。四月假兼常侍謁者。先是天眞公有命、使諸臣各言其所見。府君乃上封事。公器之。因有此命云。是年世子肇學劍於府君、府君每執技事以規諫。盡心將匡焉。作詩曰。操心宜與古人期。相照同明無有涯。俯仰乾坤皆我道。思之不得百思之。府君始爲享保之學。頗究其說、後讀程朱之易。忽然醒悟曰。道在此矣。卒棄去舊學。專尸祝於伊洛諸賢焉、嘗因好易、精研占筮。所言多驗。人較稱神異。久之又悟曰。此非至道也。遂

此の年神溪先生四十歳に當る。以下文化八年迄一歳づつ計算違なり。

不濫試其術。務體諸己。
寛政七年乙卯。府君四十一歳。出妻相澤氏。
寛政八年丙辰。府君四十二歳。秋九月千助君卒。君嗜酒頗多飲。動窮於其費。府君欲使其無憾。而生理不豐。遂自罷飲。擧其貲盡給于君。以終其世。
寛政十年戊午。府君四十四歳。八月爲眞。
寛政十二年庚申。府君四十六歳。五月改後房令。
享和元年辛酉。府君四十七歳。五月免後房令。府君曾與國老某氏及中謝某不相善。至此陰爲其所中云。始府君之在公所。公深信重之。既免。卒亦不遺忘。時發于夢寐。後語府君曰。嘗夢微行某地。惡少年數輩。狀貌兇獰。當路而不避。意甚惡之。忽見一學府君通稱從後。心思則安。
享和二年壬戌。府君四十八歳。府君性有巧思。其所制作。每出驚人。先是歳星入井。府君有感焉。則欲製活潑井以利民事。去歳以來。在閑散旦暮致思於此。

活潑非器名僅激揚止水致之高所蓋府君之創意云。十二月再入郎署。

文化元年甲子。府君五十歳。元旦賦詩曰。埜守靈淵望紫微存身養德待天機。自珍吾匪池中物時至起雲行雨飛。府君數丁困厄屯邅轗軻。人所不堪。而處之恬然。益累牢鍊之功焉。常語人曰。備嘗艱難揣摩於人情時變。然後學問始進矣。

文化二年乙丑。府君五十一歳。五月女逸亡。八月納妾荒井氏。寔啓母也。性慧敏善助家政。

文化五年戊辰。府君五十四歳。頃年魯夷猖獗。松前上變。聲勢相逮。物情洶然。於是於賜邸之南隅建蒼龍之軒。大集生徒講演武技。曉而至。暮而散。日數十百人。三月女蕙生。荒井氏所生。

五十六歳の訓

文化八年辛未。府君五十七歳。二月子啓生。昔年府君在江都。遇相者聞其言。往事皆徵。乃曰。志願可達。獨恨無嗣子耳。府君曰。象相本無形。吉凶皆在我。我

將以索我嗣也。至是果擧啓云。府君性仁惠好周人急。見單窶者。必思賑給。一時儲財爲之空。亦不以爲念。又衣服器用。與親戚朋友通之。有取而不還者。遂不復顧。長谷川某。府君從姉之子也。嘗爲司金。坐贓家幾滅。親戚莫之能償。府君深憫之。貸人十金。捐之以徇焉。親戚愧恥從之。其家遂得不絕。其救濟之勇。皆此類也。教啓讀書。訓董諄摯。每言曰，汝不能務博觀善文辭。非吾憂也。不能爲篤實君子。是吾憂也。又曰。積誠可以交神明。學不足以交神明。皆俗學也。又曰。不能克己者。是天下之至弱。

文政七年甲申。府君六十九歲。八月爲侍書。兼主書令。公召見府君。言欲用之意。府君辭以衰老。公不聽。翌日乃有此命。

文政八年乙酉。府君七十歲。監築城背防水壩。委任甚至。公在江都。土功事無巨細決於府君。大朝之制。城主不得濫修其要害。我之土功。雖世得其允。有司有倘抱不安者。互建異議。府君諄諄諭之曰。諸君勿以爲念。他日萬一有朝譴。

老夫當身抵之、爲國家釋之耳、無復煩諸君也。由是衆議始止。松城舊爲山本道鬼之所構、背筑摩川、以爲形勝、眞當公之世。以其數爲秋潦所衝、遷川道於西北半里外、衛後形勢大損、而水害亦不必免、今公襲封。深以爲憂、欲築長壩於城背、以備水潦、且以補形勝之缺、謀之府君、府君乃進策。效周文爲靈臺沼、既而封內之民、果翕然裹糧而至。樂而攻之。日或千餘人。度築之聲。聞于野外。府君日著草鞋、與衆執畚鍤、不避寒暑、拔木決水、躬必先之。是以衆徒莫不相勵而趨爲之、啓與母懼其或過勞得疾。請少自緩、則曰。身不自勞、可獨勞人耶。遂不從。

文政九年丙戌、府君七十一歲。三月女蕙適北山氏。

文政十年丁亥、府君七十二歲。二月患中風。蓋齡已高。勤勞過節。故有所損傷也、四月疾愈、是年土功畢。自始役至此。蓋三年矣。上無費財、下無怨言、其爲壩也、高若干、厚若干、長若干。儼若天生地作、害息形足。永世賴之。實公之盛德。而

府君之碩勳也。然而謙沖不自居。歸功諸有司預事者。及其奬行。受絮袍一領而止。

文政十一年戊子。府君七十三歳。冬十月致仕。子啓嗣。府君嚮時意構活潑井。既得其機樞。未及造之。會有土功之命焉。致仕後又圖爲之。而財用不給。以故不復果。洎府君就世。其訣終泯。可勝惜哉。

天保三年壬辰。府君七十七歳。秋八月二十日。子初刻以疾終。其病在簀。體貌安閒。不異平日。若十九日。晝間數命酌。最後微醺。顧啓等笑曰。任自然爾。怡怡如也。其臨終高風。世之所希覯。所謂視死若歸者。殆是歟。嗚呼。其涵養之深。於是亦可見矣。天保五年甲午。十一月日。孤啓謹撰。

雜

彌利堅棋譜

嘉永四年九月

此戯捌於彌利堅。嘉永辛亥秋遊浦賀。聞之土人。頃年彌利堅船來。船中人

好爲此戲予得其一端而玩之有深契於用兵之術者故演而作之譜。象山外史

體制第一

枰之形方存道於地路之經緯各九。用數於天子之式上圓下方。取象於人。洋兵結伍之法以三爲率。故子之數。又以三爲率。三三。四三。五三。六三。七三。八三。九三皆可用矣倍而二之。賓主分焉。

布子第二

布子一如陣法直衡正斜斷續離合。因時而爲之。故賓主之勢。不必若一。至其運子則賓主迭之也。

行道第三

子之行必避四正四隅詭道也。上下左右。皆可開一路行之。一奇一正也。

主客第四

我動而進。敵安而當其行。輒反而用之。其行之所達。遷延轉回。窮其所盡而止。敵不得動手。我安而敵動。亦如之。然惟可一路進取。不許枝出剽掠。

用智第五

靜而相持。不能相制。必有動焉。而後可能制人。然審明去畱。推測虛實。無食其餌。存以爲援。是知者所尙。

心機第六

夫動者恆勝。制人也。安者恆負。制於人也。勝而不殺仁也。反而用之知也。必以全爭於天下。計之得也。以神運知。原始要終。予而奪之。存而絕之。縮而能盈。死而復生。轉禍爲福。反敗爲功。此不可以言傳而迹示也。惟在悟者自得之耳。

礮卦

礮理を易象に擬して述べたるものなり。先生嘗て曰く「宜會東西言以作一家書」と。此の著其の抱負の一端の現れと謂ふ可きものか。嘉永五年十月成る。當時先生其の出版を幕府に請ひしも許可せられず、翌六年熊本藩の門人莊村助右衞門同莊林某と共に藩地に於て私にこれを鐫せんことを企て先生に謀りしも先生思ふ所ありて諾を與へず、後又安政四年に至り佐倉藩の門弟齋藤碩五郎再び之を企て先生意に之を欲したれ共前に莊村等に許さざりし關係上端的に之を許すこと能はず、遂に頓挫して其のままとなりたるものなり。本文原稿は長谷川五作氏藏の版下本に據れり。但此の本には敍文を缺けるが故に他の寫本より異れる兩樣の敍を補ひたるものなり。

敍

予之先君子淡水先生好周易。每夕讀之。必畢一兩卦而後就寢。故予二三歲時旣能耳熟、誦六十四卦名、稍長。受漢宋諸家易說而讀之。潛玩之久。乃若有得其要領焉。頃日與門弟子講新礮法。其術政與易理相發。躍然有不可言之妙、於是遂演爲礮卦一篇、旣以自警。且以示同志、俾無蹈危厲之地。而自取其咎云。嘉永壬子陽月、象山平啓。書于求是室。

敍

予之講新礮法於江門。生徒稍稍盍簪。或有問於予曰。古者兵器。以弓矢爲尚。豈非以他兵弗能格耶。自銃礮流傳。致遠破堅。摧鋒陷陣。弓矢失其所長。廢之可矣、獨疑弧矢之利。聖人著諸大易。而今不足以威天下。後世蠻方創見之器。反可以警內以畏外。則聖人之知。果有所未周。而荒外侏離之氓。其才亦有所高於聖人歟。抑擬礮於易何卦當之。予曰。聖人有作。順從風氣。不先天以開物。

各隨時而立、政結繩以治。弧矢以威。無非隨時焉者、當今之世、微銃礮不足以制馭內外、聖人豈違時乎哉。周官司馬之屬。有蠻隸・夷隸・貉隸、各執其國之兵。以守王宮、亦可以見聖人大智。固有以資用外國之利器矣。如其易象。則弓矢睽也、礮亦睽也。時冬夜寒烈。予與客憑一爐、予乃爲畫爐灰、以指示其象意、客稱善不已、更請筆之書。予亦欣然領之、遂演爲礮卦一篇、吾黨爲礮學之士。苟得此而玩心焉。則庶乎其可以無大過矣。至其果有益於家國否乎、則予所不敢知也。嘉永壬子冬十一月。象山平啓子明。書于江門所居求是室。

礮卦

象山平啓 又大星 字子明 著

夫易廣矣大矣。以言乎遠則不禦。以言乎邇則靜而正。以言乎天地之閒則備矣。故達人物。横四海。亙古今。而無有乎不準。無有乎或違者也。故未有卦畫之前。所有之物。其象固存乎易。已有卦畫之後。所有之物。其象亦存乎易。見易而制器。卦固未始不備其象。未見易而制器。卦亦未始不備其象也。礮之爲器。近古起于西洋。天文以後。漸盛於我。頃歲新礮法。來自荷蘭。器之製。用之具。術之法。至是而益精。斯器雖後出。求諸易。其象與理。蓋既具于睽卦。觀其象而玩其理。不惟器之體用。術之終始。與夫學焉者之利害得失。視諸掌上。國家措置用舍之義。人心向背通塞之幾。炳然昭著。如望日星。斯可以見易之妙矣。易中直以物爲卦名。而繫詞者二焉。曰井。曰鼎。今用其例。姑以睽爲礮卦。而別繫之詞。更作傳義。以發其意。如左。

䷥ 兌下離上

圖爲卦上離下兌。所以爲礮。則取於其象。取於其義焉。取於其象者有二。以全體言之。則後者爲尾珠。次者爲當。二實相重。堅壯其當之象。中有孔。火門也。對横焉者。肘也。上虛者。口也。更實其上。強固其首之象。是非礮乎。以上下二體言之。則上腹中虛。下開一口。厚當以固之。亦非礮乎。取於其義。則火發於金口也。火有飛之義。口有吐之義。爲放發之象。洋人謂礮曰貅兒蒙礴。貅兒。華言火。蒙礴。華言口。即火口也。稽諸卦象。冥如合符。易之爲書。廣大悉備。洵不誣矣。

礮。貞厲。君子吉无咎。

圖礮。本睽卦。睽。乖異也。上離之火炎上。下兌之金下降。性情相反。又卦除初九外。餘皆不當其位。故所欲爲。多違異拂亂。不得如意。且礮之爲器。兵之佳者也。兵愈佳則害人愈多。天地之大德曰生。而礮之德反之。乖異之大者也。所以雖正亦危矣。然卦才之善。可以合睽而濟事。乃君子之道也。故爲礮學

者必君子則得吉而无咎。蓋有吉而不免咎者。有無咎而不得吉者。吉且无咎。乃完善也。

象曰。微睽也。火輕而上。金重而下。二物之性睽而不相濟。故貞厲。

圖是釋卦義也。火之性輕疾而炎上。金之性重遲而下墜。二物之性違異而不相濟救。固爲睽義。火則厭之。金則飛之。宜上而下。宜下而上。亦爲睽義。凡微之事。莫不以睽爲用。雖正而不免危。蓋由此也。

內說順而外文明。柔得中而應乎剛。是以君子吉无咎。

圖是釋卦才也。兌說順也。而爲貞。離文明也。而爲悔。故爲內說順而外文明。內說順者。優柔厭飫。而心不戾於理也。外文明者。學術足於中。英明發於外。又能審利害之機。而不蹈危厲之地也。六五以柔居主位。有說順文明之善。又得中道。而以剛爲用。可謂君子矣。是足以合其睽而濟其事。吉而无咎。不亦宜乎。

同年十二月に入り「是推裝彈之理而贊其用之大也」を「是推裝彈之法又合睽義而贊其用之大也」に改む。以下の注記も同時に改めたるものなり。

「以爲天下之大用」の下に「寇賊姦宄蓋其相睽而相資者」の十二字を補ふ。「不令姦宄果於披倡」の「姦宄」を「亂賊」に改む。

欲出而入之。欲進而退之。欲伸而屈之。睽之用大矣哉。

圖是推裝彈之理。而贊其用之大也。未嘗入之而遽出。則形有所不至。未嘗退之而猝進。則勢有所不極。未嘗屈之而速伸。則力有所不足。形不至。則爲之難。勢不極。則物易背。力不足。則功不全。物之理也。人之事也。未嘗有不如是者也。老子識之。故其書曰。將欲歙之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。亦同揆也。嗚呼。於入知出。於退知進。於屈知伸。其於天下。如示諸掌。豈惟睽云乎哉。

象曰。金上火興。睽。君子以警內威外。

圖睽不常有火。有時而用火。故不云有火。而云火興。金火之性。雖相睽違。有時相資。爲睽之大用。君子觀睽之象。而知相資之理於相睽之中。以爲天下之大用也。取其貞兌正秋肅殺之象。嚴飭節制。以統邦內。不令姦宄果於披倡。取其悔離南方盛大之象。震耀威武。以備海外。不使夷狄萌於輕侮。警內

威外。敵之能事畢矣。

初九。習有素。往何咎。

圖初九以剛陽居說體而在至下。無所係應。是有剛陽之才。而從事斯學。沈潛自說。習熟有日者也。陽剛則務敏。在下則遜志。處說則能繹事理。無係則不事衒鬻。學者如是而往。何其有過咎也。

象曰。習有素。其志美也。

圖學習有素。不事衒鬻。志在成器而動。豈不美乎。

九二。晝日瞿瞿。中道愬愬。悔亡。

圖九二以剛居于陰位。宜有悔咎。然優柔處中。離體而上又應離明。是學得其方而知識開通。深知火術之可懼者也。故爲晝日瞿瞿。中道愬愬之象。而其占曰悔亡。瞿瞿。顧瞻不安之貌。愬愬。畏懼之貌。蓋晝日明融。無所不照。而猶周慮顧瞻。瞿瞿然不敢寧所。中道坦夷。無所不達。而猶畏敬恐懼。愬愬然

「不敢慢易」の下に「其小心愼密若是」の七字を補ふ。

不敢慢易。所以亡其悔也。若乃昏於其理。而不得其道。怠於周顧。而少於畏懼。有一於此。敗禍立至矣。其能免於悔乎。

象曰。九二悔亡。敬不怠也。

【傳】九二以陽居陰。本當有悔。以其知之而猶未知。能之而猶未能。敬愼之心。不少懈怠。是以其悔得亡也。

六三。眇能視。跛能履。焚如。死如。棄如。

【傳】以柔居三。才不足而志剛者也。故濫惡之器。以爲得精。醜拙之技。以爲得巧。如盲眇之見不明。而自以爲能視。跛躄之行不遠。而自以爲能履。其剛愎粗暴如此。而操火礮危厲之技。必罹焚燒死亡之禍。而爲明智者之所棄絕。其凶不待言而后知也。故不言凶。

象曰。眇能視。跛能履。不可以有補也。焚如死如棄如。其禍自取也。

【傳】剛愎自用。則不能取人爲善。人亦不能親近爲補。平易之事。無補或誤。況

危厲之技乎。其焚燒死棄。乃自爲之。抑咎誰也。

九四。有善大其舟。利用禦寇。用征伐。

陽貞。內也。故繫以學者之事。悔。外也。故繫以天下之務。四。大臣之位。今以九居焉。有剛柔不偏。文武兼濟之象。能當天下之任。而爲天下之備者也。司馬法曰。人習陣利極物以豫。是謂有善。是也。言人皆習戰陣之利。極盡器之精。以豫備之。有得天下之善計也。舟者。與礮相須而爲用。故雖有其舟。其礮不精。不足以盡其利。雖有其礮。其舟不大。不能以成其用。今礮精而舟大矣。貪暴之寇。安得闚闞於我乎。其猶有不率服者。則利用以征伐之。蓋兵法以守攻。以攻守。其力適足以攻伐之。故雖有強暴之國。亦顧望畏縮。不敢啓其釁矣。若其不使人備己。而己獨備人而已。則勢分氣屈。而其守禦亦不固矣。何能稱雄於天下哉。

象曰。有善思。鄰戒也。

圖鄰指三也。三之暴慢自是。以取禍患。猶如滿淸不講西洋礮艦之術。率然與英夷連兵。屢致大敗。貽天下之笑。四能思其戒而知懼。防禍亂於未然。可謂勝大臣之任矣。

大其舟。計之得也。

圖既盡礮之精。又造大舟以佐之。國之上計也。戚繼光曰。我船高大如城。而倭舟矮小。故乘風下壓。若車碾螳螂。設使倭舟其大亦如我船。則吾未見其必濟之策也。反而觀之。利害見矣。

「反而觀之利害見矣」を「反而觀之得失見矣」に改む。

六五革故以新。已日乃孚。終用譽命。

圖六五。文明得中。以居尊位。勢柔虛己。而得二四剛陽之賢。凡在下者。莫不說服。足以革天下之弊。新天下之治。夫事之粗糲而不可用。與經久而弊壞。皆宜革而新之。然變革其故。則人心所未能遽信。故雖明君在上。賢相在下。改爲之際。亦必詳告申令。至於終日。而後人始信孚也。革之而利於天下後

非其非、非其是、ともに上の非は虚字。(嘉永六年二月十七日山寺宛予簡)

世雖欲其譽之不終、不可得也。

象曰、終用譽命、明功也。

闡事之非者、不可飾之以非其非、理之是者、不可誣之以非其是。於其當革、斷然革之而不疑、所以致譽命也、非明睿之功、其孰能與於此。

上九、執其故貞吝。

闡卦本睽也、上九當其終、事之乖違尤甚者也。而不中不正、又與六三之暴貞爲類、故自是自欺、執滯其故、而不能遷善。所謂正道之蠹賊也。而迷惑之甚、守以爲貞、豈不可羞吝乎。

象曰、執其故貞吝、不知公也。

闡所以執滯偏固。不舍其故、由不知公道也。若使之知公道、則必舍故就新。而不至於可羞吝矣。故學尚致知。

傳曰、古者弦木爲弧。剡木爲矢。弧矢之利、以威天下。

圖高者抑之。下者擧之。反戾睽乖。以取其勢。斃人於百步之外。古昔之兵。莫利於弓矢。後世知者。易之以礮。鑄金爲彈。合藥火之。碎堅及遠、以示有備。外邦以畏。中國以肅。蓋取諸睽。

圖鉛。鐵。亦金也。礮之睽乖取勢。與弓矢同。而其猛烈奮迅。非弓矢之可比。當今之世。非斯器無足以威服內外也。

礮卦後記

以易卦別命名而繫詞。自宋元卽有之矣。輟耕錄載輥・斉等卦。是也。然皆出於文人一時之巧思。而與易之觀象而繫詞者。全然不相類。且易之彖象。句皆有韻、而是則闕然焉。彼方文士。擬其古經。作之文字。而尙不識其體製。殊爲可笑。今予所爲。其可韻者。悉用古韻。至其所繫之詞。亦無一字不寓其象。如初九習有素。九變爲八。初至五。體習坎。故爲習。素。白也。物之質也。有從前之意。兌。正秋

之卦其於色爲白。易中曰素。曰白。皆取於兌。履之初九素履。取於下兌也。賁之上九白賁取於兌位也。此曰有素。象同於履之初九矣。志者。陽剛之在內者也。美者。兌之悅澤也。如九二。上有離日。以中應之。晝日也。二變爲震。震爲大塗。而當其中中道也。嬰嬰。愬愬。皆震雷驚愕之象也。離爲火。火主禮。禮者敬而已矣。又震有修省之意故爲敬。不怠也。如六三。互離爲目。下兌毀之。眇也。又按說文。有目不相視爲睽。謂上離互離。原有兩目。而四爻間之而爲睽。則此卦本有眇象。震爲足。兌上具震之半體。此爲不全之足。跛也。又卦自大畜來。互震之足。易爲坎蹇。亦跛也。三居離中。焚之象。又在兌體。兌爲澤。離火入兌澤。爲澤水所滅。死之象。離火飛升。兌澤流下。互相睽離。而三當其際。而在下。棄之象。不可以有補者。兌上缺也。禍者。互坎多眚也。自取者。艮手之位也。如九四。離爲美。故曰有善。與離之六五曰有嘉正同。離爲舟。上離互離相連。方舟之象。然中間有互坎。坎爲寇爲隱伏。不免有寇賊出沒於舟間之象。今九變爲八。二至上。成大離。而

「如六五革故以新」の下「兌金之鏽敗者離火鍛而新之也」を「兌金在下離火在上金之鏽敗者火鍛而新之也昔者攻金之爐火多在金下近世洋人同焰爐法火多在金上是其象也」に改む。

坎寇從坤土。是爲造大舟而寇賊竄跡。仇敵服從之象。故曰。大其舟。利用禦寇。用征伐。三與四相接。卽鄰也。防患曰戒。離外剛。有戒象。坎爲心。思。計。皆心之用也。四巽位。巽爲近利市三倍。得之象也。如六五革故以新。兌金之鏽敗者。離火鍛而新之也。離下兌上之卦曰革。革者。兵也。離火鑄兌金以爲兵也。兵者。革也。順時而更革也。用兵之要。在去故而擇新也。劍。昔用銅。後用鐵。今則刀。鏃。昔用石。後用銅今則鐵。昔之戈戟。後世不用。今之銃槍。古昔所無。是可以見兵之所以爲革矣。此卦。又離與兌。故又有此象。猶之噬嗑與豐。同震離之卦。而俱有刑獄之象。離爲日。爲爭。而卦有二日。五處其終。故爲已日。離美變爲乾。乾。虞氏易爲嘉。爲好。竝譽之象。又有五巽。巽爲命。卽譽命也。離爲文明。而五當君位。故曰明功。大傳曰。三與五同功而異位。三多凶。五多功。是也。如上九執其故。故者。兌金之經久而鏽敗者也。蓋指三也。離火當革之。而反執之。何也。離變爲震。震。倒艮也。艮爲手。有執之義。上九在睽乖之極。故爲反戾執之之象也。離日懸天。無所不照。卽公也。而上當其伏。而又兌位。兌爲西。爲澤。有日沈虞淵。

昏黑不辨色之象故曰不知公也此數者乃予所以繫詞之大略也初傳中欲釋此意而惑朱子燭籠之喩遂別筆記以附于後云。

文稿

全集編纂の際、安政三年以後の文及び其の以前の作にして淨稿より漏れたる文を輯め、文稿と名づけたるものなり。増訂版には更に二十二文を増補したり。

象山先生文稿目次

頁

賦類
櫻賦……九
觀櫻賦……一六
擬騷　星巖居士。有隱山之意。象山平子知之。乃歌楚辭以留之。……一七
序類
春秋辭命準繩序……一八
品題家藏漢碑序……一九
天石硯銘并序……二〇
賀矢澤國老生子詩并序……二一
蟠溪詩鈔序……二二
功課簿序……二三
送櫻宇林先生序……二三
和田生字敍……二六
贈羽倉簡堂……二七
贈久保平甫……二七
贈八田子靜……二八
記類
記化石……二八
遊梅墅記……三〇
惟有蘇齋記……三一
演砲雜記……三三
記治病……三五
又……三六
又……三七

佐良志奈神社石表記……三八
說類
文說……三八
恕堂說……三九
迅發擊銃說（示諸友と改題し題跋類に入る）
題跋類
書常陸帶後……四〇
書饒臨川墨蹟後……四一
書柳泉恩田君肖像後……四二
書柳泉歌集後……四二
書自畫山水後……四三
又……四三
書自書後……四三
書拓本款冬葉後……四四
書先君子神溪先生遺墨後……四四
書海國兵談之後……四五
書紀公遺墨……四五
題項易庵畫冊……四六
題一齋先生遺墨……四七
題古鑑……四七
題先考所扁聚星二大字……四八
題磐瀨華沼書卷……四八
題楠公像……四九
題椿椿山畫……四九
題先君子淡水先生詩後……四九
題龍田生像（生通稱玄道）……五〇
題漢碑後……五一
題磐瀨華沼書後……五一

題自詩後……五一
題米帖……五一
題自畫　按白湘詩山……五二
題自書後……五二
題十二册獨野戰佃圖……五三
跋宇宙記……五三
跋毛西河眞蹟……五五
跋十七帖……五六
又……五六
跋華山西施浣紗圖　淨稿題跋部跋李太白詩と同文につき削る
跋唐宋八大家法帖所載魯公筆
法十二意……五六
跋古事記傳……五七
楊孟文石門頌跋……五八
跋漢碑……五八
又……五九
跋顏魯公家廟碑……五九
跋爭座帖校本……六〇
跋顏魯公爭座帖……六〇
又……六一
又……六二
又……六二
又……六三
跋懷素帖……六三
跋林緯乾墨蹟……六三
跋米帖……六四
跋劉中使帖……六四
跋攀雲閣帖……六四

跋停雲館帖……六五
顏魯公三表稿帖跋……六五
項易庵畫冊跋……六六
漢孔君墓碣跋……六七
又……六七
又……六八
魏百官勸進碑跋……六八
跋菱湖書……六八
跋自書……六九
又……六九
跋自書神號後……六九
跋三神鏡……七〇
跋佩刀……七二
跋痧脹玉衡書……七三
畫石跋……七三
跋贈勝義邦礮卦……七四
跋阿片始末……七五
讀今川氏壁書……七五
記砲制……七六
題晴山寫生芋花……七六
題大槻磐溪蘭畫……七七
題臨孟頫畫……七七
題孔夫子畫像……七七
題合作畫……七八
題二十拇人砲圖……七八
示諸友……七八
錐斗考……七九
題蘇東坡像……八一

加藤士逵所寫天文圖卷跋……八一
跋石韞玉魯公三表稿跋……八二
書竹叢軒遺稿後……八三
跋停雲館摹勒子昂帖……八四
跋陳老蓮九歌圖……八四
題紅蕉館帖……八五
題酒井雪谷筆孔子觀宥坐之器圖……八五
跋侍從公靜古軒三大字……八六
賴三樹代書梁公圖答木內清卿帖跋……八七

尺牘類

與立田靜山……八七
復羽倉君 附羽倉簡堂書牘……八九
慰澁谷洒侯……九〇
與士固……九〇
與小林炳文……九一
慰子存……九一
與子存……九二
復子存……九二
又……九二
又……九二
又……九三
又……九四
與鹽野宜邦 字子儀號筑水……九五
又……九五
又……九六
又……九六

又……九七
又……九七
又……九七
答常山……九七
與須田澹山……九八
與鎌原輔三郎……九九
與勝海舟書……九九
與菅沼旭齋……一〇一
呈長野豐山君書……一〇一
復飯島紀鄉……一〇四
呈桐山先生……一〇五

贊類

神后贊……一〇七
聖像贊……一〇七
鳥居勝高贊……一〇八
石贊……一〇八
望月翁贊……一〇八
正誼館恩田君遺像贊……一〇九
金兒雪庵先生贊……一〇九
白井翁像贊……一〇九
大久保喜八眞贊……一一〇
霞峯林大輝像贊……一一〇
大輝畫岩石贊……一一一
炎帝贊……一一一
邵康節先生像贊……一一一

碑類

力士雷電之碑……一一三
山極高明退筆銘……一一三

雜
象山書院學約……一一四
增訂荷蘭語彙例言……一一六
春秋辭命準繩例言……一一八
臨清社會約……一一九
虎狼病治驗一則……一二〇
鑑銘……一二二
硯銘……一二三
寬卦幷引……一二三
雜言……一二五
又……一二六
懷煙嵐勝處……一三〇
二十歲文稿
藤田五美誄幷序……一三〇
奉送鎌原先生之江都序……一三一
與金兒子讓論印文書……一三二
呈桐山先生……一三三
送菅沼子之江都序……一三四
呈鎌原先生……一三四
復林掌教……一三五
呈桐山先生……一三五
祭岡野先生文……一三六
岩鼻記……一三七
鳳山禪師文稿序……一三八
呈恩田頼母書……一三八
駁仁齋東涯……一四二
伯母哀辭……一四三
呈鎌原先生乞齋記書……一四三

藏古書畫者說……一四四
與山寺源大夫……一四五
不孝……一四六
精誠……一四六
呈鎌原先生書……一四六

櫻賦

萬延元年閏三月

百鳥一本水鳥に作る。煜燿一本炫爚に作る。爛一本戩に作る。曄曄一本曄曄に作る。閒一本開に作る。蔚暎一本蔚映に作る。

有皇國之名華。鍾九陽之靈飫。翳列樹之茉蓴。韡樛枝之交加。稟妙色於自然。煌妍茂而無瑕。冠羣卉而特秀。亙終古而不差。故詠浪津於皇嗣。命開耶於邦媛。國男忘老於染殿。王孫發感於渚院。既乃惠風微動。沖氣淑淸。庶艸始綠。百鳥和鳴。於是紅苞舒榮。穠蘂吐芬。光色煜燿。肸蠁豐醇。颺丹霞之晴輝。散白日之景炘。滋鮮麗於晨露。斂絢采於夕曛。遠而望之。爛如卿雲垂翠微。近而睇之。璨如珍珠綴林陂。赫乎曄曄。焜乎猗猗。爾其帶雨罩煙。飄風嚮月。綢繆縟繡。縹緲紛霏。紛旖旎以陸離。郁晻藹而祕靜。既的皪以冰淨。復縈盈其如雪。至於閒松柏之葱菁。靚峯巒之嶔崟。吐朱閣於遠寺。靄翠樓於高林。沿水流而蔚暎。繞井闕而垂蔭。固千象而萬趣。光難得而備譚。於是豪華公子。佳麗季女。瓌姿綽態。嫺都妖冶。曳綺羅於西林。步驌驦於東野。憾春光之不長。憐芳菲之易墮。折

纖枝以相授弄殘葩而心寫。若迺崇堂曲樹騷友詞賓。尊貯洌醑。盤登素鱗珍饋咸具。副鷹畢陳。而嘉樹坐錦茵。金斝揮羽觴巡。奮藻思以鬪麗。馳妙辭而競新。顧餘霞之散綺。竢雲月之飛輪。又有天涯遊子。深閨少婦。感和氣之絪縕驚陽節之暄煦。惜珍麗之徙芳。恨歸期之屢誤。羨黃鸝之耦飛。妬紛蝶之雙舞。陟夷岡以徙倚。憑華陰而搔首。望所思而不見。懷長門而遠慕。更有慷慨之志士。倜儻之豪俊。睎芳野而大息。哀皇業之不振。臨奧闕而仿偟。欽上將之烈駿。嘉高德之刊餘。題片言而晴進。雖忠誠之未報。永無慚乎王藎。方華蘂之盛時。知物候之流遷。對落英之繽紛。增感慨而自奮。是以都鄙尊卑。老少智戇。觀斯華者。莫不日愛而色悅。神感而情動。若其勝地所宜。則有寧樂故都。嵯峨・嵐山。醍醐・白河。小倉・大原。與夫武之金井。總之墨川。此皆都人之所周覽。士女之所遊觀。逮于動磯・霞浦之澳。岐蘇・足柄之巓。亦有慕名賢之風雅。足優獎而磐桓。夫何茲樹之奇犆。泯景響於蕪漢。挺芬蕤於日域。攢壯觀於神何。資豊壤之粹澤。

彷偟一本彷徨に作る。

應皇化之炳煥、寔儀光之獨異、空萬内而莫先、故譜類而夷考、豈桃李之足算。

乃作頌曰、

貞樹徠服、育神州兮、受命特立、終不流兮、瑩潔無瑕、豈不可喜兮、窈窕自持、章天地兮、潜然不衒、嘉賓衆兮、帝宮神寓、無弗可兮、深林窮谷、膺天光兮、閲其無人自芬芳兮。

櫻賦

男恪注

男恪注とあれども先生の自注なるべきこと想像に難からず（文久元年松田宛手簡參照）乃ち參考のため附錄す原稿は宮下幹氏藏有の寫本と山口勇雄氏刊行のものとを對校したるものなり

有皇國之名華、鍾九陽之靈毓。鍾、聚也。九陽、謂春氣。傅玄陽春賦、生氣方盛、九陽奮發。言櫻聚陽春靈妙之和氣、所以爲皇國之名華。翳列樹之苯䔿、嚲樛枝之交加。苯、布忖反。䔿、祖本反。嚲、典可反。○翳、隱也、蔽也。苯䔿、草木叢生也。朱子白鹿洞賦、山木苯䔿、枝相樛兮。嚲、垂下之貌。木枝下曲曰樛。交加、參錯也。言開花爛漫、滿樹垂枝也。稟妙色於自然、煌姸茂而無瑕。稟、賓上聲。煌、胡光反。○稟、受也。煌、光明也。姸、好也、美也。茂、亦美也。其光明美好、無玼瑕可指、自然而然。故曰、稟妙色於自然。冠羣卉而特秀、亙終古而不差。卉、百草之總名。亙、竟也。終古、猶永古。離騷、吾焉能忍與此終古。差、舛也。言自千萬世之上、至千萬世之下、無不以櫻爲羣華之冠弁也。故詠浪津於皇嗣。詠浪津者、謂三韓人王仁詠難波津歌也。仁德帝未踐祚時、在津國難波宮。與宇治皇子讓弗嗣、空位三年。於是王仁上歌以諷。歌中所云木華、即櫻也。萬葉集有據焉。其謂梅

花一者、古今集之序謂レ之也。命二開耶於邦媛一。爾雅、美女曰レ媛。毛詩鄘風、展如レ之人兮、邦之媛也。命二開耶於邦媛一者、謂二木華開耶媛一也。媛、大山祇之女、名曰二豐吾田津媛一。顏容姝妙、如二櫻花一故又名曰二木華開耶媛一。瓊瓊杵尊聘以爲レ妃。國舅忘二老於染殿一。國舅、謂二忠仁公一。染殿后之父也。公觀二后御前瓶櫻一、忘レ老而作レ歌。王孫發二感於渚院一。王孫、謂二業平朝臣一。朝臣、阿保親王之子、桓武帝之孫。不レ曰二皇孫一、避也。渚院、在二河内交野一、惟喬親王所レ居、一曰二離宮一。朝臣在二渚院一、而感慨詠レ櫻。千古絶調。既乃惠風微動、沖氣淑淸。春風曰二惠風一。沖、和也。淑淸、湛也。庶草始緑、百鳥和鳴。於レ是紅苞舒レ榮、皫蘂吐レ芬。光色煜耀、肸蠁豐醇。皫、彌笑反。煜、余六反。肸、黑乙反。蠁、許兩反。〇苞、通作レ包。說文、包象二人懷妊一。巳在レ中、象二子未一レ成レ形也。紅苞、謂二紅華未レ開者一。榮、榮華也。皫、白色也。華外曰レ蕚、華内曰レ蘂。芬、芬香也。煜、燿也。耀、照也。肸蠁、濕生蟲、蚊類是也。其萼、望レ之如二氣之布寫一。言香氣積來、如二此蟲之羣飛一也。司馬相如上林賦、肸蠁布寫、晻薆咇茀。豐、盈足之義。醇、淸粹也。蓋紅苞舒二榮華一、而光色煜然、皫蘂吐二芬香一、肸蠁豐粹也。颺二丹霞之晴輝一、散二白日之景炘一。滋二鮮麗於晨露一、斂二絢采於夕曛一。颺、揚同。炘、許斤反。絢、許縣反。〇景、光也、明也。炘、光盛貌。揚雄甘泉賦、垂二景炎之炘炘一。滋、浸也、又益也。絢、文貌。采、通作レ彩、精光也。曛、日入餘光也。一曰、黄昏時。謝靈運詩、夕曛嵐氣陰。遠而望レ之、爛如三卿雲垂二翠微一。近而睇レ之、璨如三珍珠綴二林陂一。赫乎曄曄、焜乎猗猗。睇、田黎反。璨、倉案反。曄、筠輒反。焜、胡本反。〇爛、明也。瑞雲曰二慶雲一、或曰二卿雲一。古歌、卿雲爛兮糺縵縵。爾雅、山未レ及レ上曰二翠微一。一曰、山腰也。睇、迎視也。璨、玉光也。珠、珍貝也。南越志、珠有二九品一、寸五分以上、至二寸八九分一、爲二大品一、有二光彩一、一邊小平、似二覆釜一者、名二瑞珠一云云。陂、阪也。一曰、澤鄣也。赫、明照貌。曄、草木白華貌。焜、光貌。猗猗、美貌。爾其帶レ雨罩レ煙、飜レ風嚮レ月。罩、捕レ魚器。爾雅、篧謂二之罩一。煙之籠レ華、猶二篧之捕一レ魚也。嚮、面也、對也。綢繆綉繡、綢、直由反。繆、武彪反。〇綢繆、繁密貌。五色交錯曰レ綉。言華彩繁密、交錯如レ繡。是其帶レ雨之狀也。縹緲髣髴。縹緲、遠視貌。髣髴、猶二梗概一也。言華色朦朧、如三遠視二其梗概一。是其罩レ煙之容也。紛旖旎以陸離、郁晻薆而馝馞。

晻、烏感反。曖、於代反。馝、薄密反。馞、薄沒反。○紛、亂也。旖旎、旌旗從レ風貌。陸離、猶二參差一也。郁、文盛貌。晻曖馝馞、皆香氣貌。言紛亂陸離、如二旌旗之從一レ風。晻曖馝馞、而流レ香郁郁然。其隨レ風之變態也。

既的皪以冰淨、復縈盈其如レ雪。皪、朗狄反。○的皪、光明貌。縈、繞也。盈、滿也。言的皪鮮明、如二冰之瀅淨一。縈繞盈滿、如二雪之積素一。是其隨レ月之奇觀也。

至二於開二松柏之葱蒨一、靚中峯巒之嶔崟上、吐二朱閣於遠寺一、靄二翠樓於高林一、沿二水流一而蔚暎、繞二井闤一而垂レ蔭、因二千象一而萬趣、羌難三得而備二譚一。靚、疾正反。嶔、去金反。崟、魚今反。蔚、於胃反。○開、闢也。菁、謂二之葱一。蒨、葉盛也。靚、裝飾也。峯、山耑也。巒、圓峯也。嶔崟、山勢聳立貌。靄、雲集貌。沿、循也。蔚、深貌。井、市井也。市、交易之處。井、共汲之處。因レ井成レ市、故名。巷門、謂二之闤一。蔭、翳也。呂氏春秋、松柏成而塗之人蔭矣。羌、發聲。言華之粧二點景物一、其狀多端、不レ可二得而備悉一也。

於レ是豪華公子、佳麗季女、瓌姿綽態、嫺都妖冶。瓌、瓌偉、大也。綽、綽約、柔弱貌。嫺、雅。都、美。妖、豔。冶、媚也。言公子瓌偉之姿、季女綽約之態、竝皆無レ不二美豔一。

曳二綺羅於西林一、步二驌驦於東野一。憾二春光之不一レ長、憐二芳菲之易一レ墮。折二纖枝一以相授、弄二殘葩一而心寫。驌、息六反。驦、色莊反。○綺、細綾也。驌驦、良馬也。言西林曳二綺羅一者、季女之伴、東野步二驌驦一者、公子之羣、其趣各殊也。至二其感レ春憐レ芳、折レ枝弄一レ葩、則未二始不一レ同二其情一也。

若迺崇堂曲榭、騷友詞賓、尊貯二洌醑一、盤登二素鱗一、珍饋咸具、副薦畢陳。醑、私呂反。副、敷救反。○崇、高也。榭、臺有レ屋也。曲榭、謂二其形如レ曲者一。騷、愁也。屈原作二離騷一。言遭レ憂也。今謂二詩人一爲二騷人一。尊、酒器。或作レ罇、亦作二鐏、增一。今俗酒器之尊、別作レ樽、非也。樽、村木茂盛也。洌、水清潔也。醑、美酒也。歐陽修醉翁亭記、泉香而酒洌。盤、盛レ物器。素鱗、白魚也。杜甫詩、水晶之盤行二素鱗一。進二食于尊者一、曰レ饋。副、貳也。

面二嘉樹一、坐二錦茵一。金罍揮、羽觴巡。嘉樹、謂レ櫻也。罍、所二以酌一レ酒也。振二去餘酒一曰レ揮。曲禮曰、飲二玉爵一者弗レ揮。今飲二金罍一、故揮也。觴、酒器總名。孟康曰、羽觴、爵也。

奮二藻思一以鬪レ麗、馳二妙辭一而競レ新。藻、華藻也。言奮二起華藻之文思一、馳二騁絕妙之好辭一、以極二

其豔麗清新、而不與華相下也。顧餘霞之散綺、跌雲月之飛輪。餘霞、晩霞也。綺、文繒也。釋名、綺、敧也。其文敧邪、不順經緯之縱橫也。謝眺詩、餘霞散成綺。言歡宴賞華之興未盡也。又有天涯遊子、深閨少婦、感和氣之絪縕、驚陽節之暄煦。絪縕、本亦作氤氳、天地合氣也。易、天地絪縕、萬物化醇。陽節、謂春。煦、蒸也、又日光也。惜珍麗之徒芳、恨歸期之屢誤、羨黃鸝之翩飛、妬紛蝶之雙舞。珍麗、謂櫻華。皆是夫婦久別之感、所不能免。陟夷岡以徙倚、憑華陰而搔首。望所思而不見、愾長喟而遠慕。夷、平也。夷岡、山脊平易者。徙、遷移也。倚、立也。楚辭、步徙移而遠望。愾、大息之聲。喟、大息也。更有慷慨之志士、倜儻之豪俊。慷、與忼同。倜、他歷反、與俶同。儻、坦朗反。○忼慨、竊氣感激不平也。倜儻、卓異也。智過百人曰豪、智過千人曰俊。睎芳野而大息、哀皇業之不振。睎、香衣反。○睎、望也。芳野者南朝行在所、櫻華之勝、冠于天下。志士之遊此、未及賞其勝、而先興懷舊之悲感也。臨奧關而彷徨、欽上將之烈駿。奧關、謂莫來關。關在奧州地、故云爾。彷徨、猶徘徊也。欽、思望意。上將、謂八幡源公。烈、光也。駿、大也。公嘗莫來關詠櫻花歌、爲人稱譽、今欽慕者、不在其詠歌、而專在其將材之光大也。嘉高德之刊榦、題片言而晉進。雖忠誠之未報、永無慚乎王藎。高德、兒島氏、稱備後三郎、當時忠臣。刊、削也。謂削去木皮。木旁生曰枝。本根曰榦。晉、進也。詩大雅、王之藎臣、謂忠愛之篤、進進無止也。高德聞後醍醐帝西遷、欲奪駕以舉義而不果。乃變服、尾駕而行數日夜、竊入帝館、刊其庭櫻樹、題天莫空勾踐、時非無范蠡十字。護兵聚視、不解其意。帝覩之、欣然心知有勸王者。方華蘂之盛時、知物候之流運。華之極盛、衰殘隨之。時之隆泰、頽圮繼之。氣運然也。雖知亦如之何。日、泰否盛衰者、天運之所不能無。知而善處者、人事之所當盡心。故易曰、无平不陂、无往不復、艱貞无咎、勿恤其孚、于食有福。程子發此義曰、平者陂、往者復、則泰爲否矣。當知天理之必然、方泰之時、不敢安逸、常艱危其思慮、正固其施爲、如此、則可以无咎。處泰之道、既能艱

直、謂可三常保二其祿一不レ勞二覓偸一得二其所一レ求也。不レ失レ所レ期、爲レ字。如レ此則於二其祿食一有二福益一也。祿食、謂二福祉一。善處、祿者、其福可レ食也。言德善日積、則福祿日臻。德踰二於位一則雖レ盛而非レ滿。自レ古隆盛、未レ有下不二失レ道而喪敗一者上也。

對二落英之繽紛一、增二感慨一而自奮。繽紛、亂貌。櫻之落英、辭レ枝尤快、有レ似三勇夫甘心效二レ死。故死士對レ之、亦能感二動意氣一、以自奮發也。是以都鄙尊卑、老少智戇、觀二斯華一者、莫レ不下日愛而色悦、神感而情動上。戇、陟降反。○天子所レ宮、曰レ都。鄙、邊邑也。戇、愚也。若其勝地所レ宜、猶下彼梅之於二江南一、海棠之於レ蜀、牡丹之於二洛陽一、芍藥之於中廣陵上。則有二寧樂故都、嵯峨嵐山、醍醐白河、小倉大原、與二夫武之金井、總之墨川一。此皆都人之所二周覽一、士女之所二遊觀一。逮二于勤磯霞浦之澳、岐蘇足柄之巓一。亦有下慕二名賢之風雅一、足二優獎一而磐二桓上。澳、於六反。○巓、山頂也。磐桓、難レ進貌。已上名勝之地、名賢題詠、不レ知二其數一。人懷レ舊懷レ古、觸レ景慕レ賢、優遊賞嘆、磐桓不レ能レ去者、人之常情也。夫何茲樹之奇犆、泯二景響於黛漢一、犆、本作レ特。○景、上聲。○黛、房泛反、或作レ梵。○挺立曰レ特。○泯、盡也。盡、猶レ空也。景響、猶レ云二蹤跡一也。○黛、西域種號、出二浮居書一。○櫻華、漢土所レ無、漢人來二是邦一者、皆無レ不二一見激獎一、以爲二東方名葩一。是其證也。浮圖書載二蓮華、曇華、曇陀羅、曼珠沙等諸華一、而一不レ及二櫻華一。是可レ驗三西域亦無二櫻華一矣。挺二芬蕤於日域一。攢二壯觀於神甸一。資二豐壤之粹澤一、應二皇化之炳煥一。蕤、儒隹反。○炳、兵永反。本作レ炳。○蕤、草木華垂貌。○攢、聚也。○甸、書禹貢、五百里甸服。○孔安國傳、規方千里之內、謂二之甸服一。爲二天子一服二治田一。○去二王城一面二五百里一。猶二今之畿內一。○神甸、猶レ云二神州之甸一。○資、取也。○粹、不レ雜也。○澤、滋潤也。○炳、明也。○煥、亦明也。○櫻華空二蹤跡於梵漢之土一、而獨挺二芬蕤於是邦一者、何居乎。以レ資下取豐壤不雜之潤澤一、而相中應皇上德化之炳煥上故也。寔儀光之獨異、空二寓內一而莫レ先、散二譜類一而夷考、豈桃李之足レ算。寔、承職反、與レ實通。○寓、籀文宇字。○儀、容也。○儀光、謂二儀容光輝一也。○天地四方曰レ宇。○史記秦本紀、包二擧宇內一。○散、

布也。鮑昭舞鶴賦、散幽經以驗物。譜、屬也。夷考、公平稽考也。言實其儀容光輝之異於衆芳者、索之宇内而莫之能先、布列屬類而公平稽考之、則固非天林穠李之所能比擬也。乃作頌曰。頌、歌也、誦也。歌頌其德、廣以美之也。楚辭有橘頌。

貞樹徠服、育神州兮。受命特立、終不流兮。瑩潔無瑕、豈不可喜兮。窈窕自持、章天地兮。澹然不衒、嘉賓漿兮。帝宮神寓、無弗可兮。深林窮谷、膺天光兮。闃其無人、自芬芳兮。屈原既放、思君念國、憂心罔極、覩橘樹之美、異於衆木、而習服南土、不可移徙北地、自喩志節如橘、而作橘頌。楚辭九章之一也。家嚴慮國憂時、潛心防海、十數年。思人之所未嘗思、發人之所未嘗發、竭忠致悃、不翅不見其效、遂由是獲罪、禁錮九年于玆矣。念咎之餘、感著櫻賦。於其卒章、不言亂而言頌、且故假借屈原橘頌之字者、竊有所寓焉。具爲箋釋、或涉于僣。故不許見注之也。恪記。

観櫻賦

萬延元年春

鞾鞢の字玉篇正字通皆革に作るは誤なりとて特に華に改む此の論尺牘類復子存の「昨辱誨答」に詳なり。

坐塽塏之高樓兮。斟旨酒之芳醇。憑軒檻以流眄兮。觀櫻林之臻臻。熉熀重葩之艷艷兮。飛香鬱乎蓊藂。鞾鞢燐亂以麗靡兮。帶青幛之葳蕤。妍風蕤之璀粲兮。快落英之幡纚。忽生閒思兮。中情徘徊。時命所在兮。遭遇不齊。珍樹之生野兮。或蕪沒於蘩藤。彼樵豎之矇矇兮。又翦除乎嘉莖。與榛楛而爲薪兮。遂不壹

敗其榮已矣乎人之與物兮孰知命之所極。紛寵辱之相揜兮。豈斯心之足愕。

毀達人之大觀兮釋拘攣於末跡鼓夫缶以酣歌兮。至日夕而弗能息。

擬騷　星巖居士有隱山之意。象山平子知之。乃歌楚聲以留之。

靜房邃宇兮陌之陲。竹樹茉蒨兮蔭清池。黿魚噞喁兮水綠波。文之檻兮繡之帷。絃誦息游兮與時宜。芳馨播兮繽紛。士之集兮如雲。君胡爲兮不自聊。與彷徨兮焉求。昔冥冥兮雨風。心悄悄兮有忡。道路漫兮脩遠。山川阻兮多蹇。滯風波兮高堰。憩積雪兮峭坂。漭廓落兮無友伴。魂憒悢兮銷損。攀長途兮跣絕巘。憊疲勞頓兮人思返。幽崖陰谿兮虺蛇蟠結。僻聚荒鄉兮魑魅狐蠱。迴飇颾起兮裳衣縷裂。瘴煙毒霧兮將哽將噎。羈旅之情恫恫兮悲悲。憯憯兮悽悽。在室兮以思。中怵惕兮意迷。君胡爲兮弗恂。憯不憚兮西東。上士兮遠害。棲神兮塵之外。都城兮通衢。宛天姥兮匡廬。竹芊芊兮水虢虢。風嫋嫋兮桂夜落。鳥嚶嚶兮蟲啾啾。夫君兮可留。托踪兮何必雲岑之幽。

序類

春秋辭命準繩序

安政四年十二月

嘉永癸丑夏六月。彌利堅使至浦賀。冬十月。魯西亞使至長崎。天下多事。或問予經世之務。予曰。夫唯春秋乎。春秋謹名分。辨內外。錄功罪。明天理。正人心。以爲百王經世之大典。信窮理之要矣。不學是經。而處大事決大疑。能不惑者鮮矣。且內外傳。多載列國辭命。亦不可以不講。方今世界萬國。風氣大開。航海之利日盛月將。强國大國之使。相繼於邊。大似彼春秋列國之形勢也。而不知脩辭命之學。可謂知務乎。春秋之世。鄭以小國攝晉楚之閒。不虞荐至。殆無虛歲。逮至子產爲政。知非辭命無以爲功也。於是用裨諶・游吉・公孫揮之屬。而草創而討論而脩飾。亦從而潤色之。以應對於諸侯賓客。是以鮮有敗事。歷定・獻・襄三公。凡五十年。得免兵禍。社稷人民賴之。辭命之有益國家。如此也矣。予得罪禁錮故里。自省之餘。未嘗廢學。因讀春秋內外傳。遇辭命可法者。輒取而錄之。

剖理點定。以便記覽世之同志。或有取焉。所不辭也。象山佐久間平啓子明撰。

文久二年五月

品題家藏漢碑敍

歐陽文忠公不深書學。於隷體殊懵懵也。其集古錄中。收漢碑七八十種。每不加品隲。其玄妙奇特如禮器・石門諸刻。亦無復一語評論。偶有論及者。則多因人而爲言。如藁長蔡君頌云。待制楊畋嘗爲余言。漢時隷書存者。此爲最佳。余不甚識隷書。因畋言求得之。遂入於錄。又如南陽太守秦君碑。首錄蔡襄漢碑今存者少。此篆亦與今文小異。勢勁健可愛數字。且云。其筆畫奇偉。蔡君謨甚愛之。由是觀之。公無心解於篆隷可知矣。果其無心解。雖多亦奚以爲。予後公八百年。生乎是邦。其收漢刻僅一二十種。固無望公之富。然把玩摩弄。爲日既久。遂稍得識漢人之面。漢代隷書。雖後世皆莫可及。在當時自有精粗優劣姸媸之分。不能隨人而改。今據所見。以爲品題。雖不多亦足以自娛也。後之所獲不可逆知。即今所藏而論之。當以禮器碑及其碑陰爲第一。石門頌次之。曹全

碑又次之。次史晨前後碑。次卒史碑。孔宙碑陰・孔彪碑・武榮碑・衡方碑又其次也。景君・張遷二碑。幷非其至者。殘碑八。壞隳之餘。鄭固外莫知其爲誰碑。然書體往往有可玩。而漢隸世所難得。不可不襲藏。若孔褒碑則以其人而重。固非區區筆畫精粗之謂。第文字多剝落。殊爲可惜耳。鄭季宣碑陰。雖增缺滅。而碑首篆字尚存其形。而筆法特遒勁。足爲師法。至孔君碣。文字磨□多不可讀。然係是可以見漢碣之制。則亦爲有補於學。故特存之云。文久壬戌夏五月念六日。松代聚遠樓書。

文久二年冬か

天石硯銘幷序

余年八九歲時。與鄰童嬉戲。拾得片石。色黑質潤。而有一池。側圓不假斧鑿。左淺右深。深者可以貯水。淺者可以磨墨。先君觀之曰。昔東坡幼時與羣兒鑿地爲戲。得異石。有貯水處。善發墨。老泉曰。是天硯也。有硯之德而不足于形耳。可謂文字之祥矣。因手刻其匣以授東坡。後果爲大儒。今兒所得頗似之。毋乃亦

文字之祥乎。乃手製其槽以賜。余寶而藏之。余之才質固無以望於東坡。然年長學進。稍稍以文字見稱於人。至于所作賦。有辱瀆天覽者。天下聞之莫不爲榮。則先君之言亦驗矣。今爲之銘。以付兒恪。恪也其祗保之。銘曰。

樸而剛。重而靜。澤而光。以此進道。所以考其祥。

東坡元豐二年得罪下獄。家屬流離。書籍散亂。明年至廣州。求硯不復得。以爲失之。後四年。舟行至當塗。發書笥。忽復見之。喜付迨邁二子。余以嘉永七年四月。坐事下江都獄。九月。送鄉里。禁錮。書帙器用多所散失。此硯不復見。後數年。偶得之於雜具匣中。以付恪兒。其顯晦之蹟。亦有甚似東坡之硯。可謂奇矣。因附記之。

天保十年夏

賀矢澤國老生子詩幷序

古之君子必貴玉。比諸德焉。夫玉之瑩潔而澤。非仁也耶。縝密以斂。非智也耶。廉而不劌。非義也耶。垂之如隊。非禮也耶。叩之其聲淸越以長。其終詘然。非樂

也耶。瑕不揜瑜。瑜不揜瑕。忠也。孚尹旁達。信也。精采之見于山川。誠也。天下莫不貴者。道也。夫玉之爲物如此。君子之比德焉。不亦宜乎。天保十年己亥夏月。矢澤國老有弄璋之慶。啓聞之喜而不寐。但恨遊學於江都。不能歸稱賀於門下。然辱眷顧。既深且久。豈可黯然而遂已。乃奉君子所貴圜玉一顆。以中遙祝之私。而詩以歌之。其詩曰。

人之大德。維知維仁。文之以禮樂。是曰成人。處事以忠。待物以信。誠假道亨。天人兩順。言獻我玉。匪惟德是祝。其質之堅。庶以岐嶷。我玉言獻。匪惟質是願。其德之粹。庶以璀璨。其質既堅。其德乃粹。邦國以安。萬民受惠。

弘化三年五月

磐溪詩鈔序

士廣本以經術名家。然天才敏妙。博通群籍。故其所作詩文。汪洋放肆。愈出愈無窮。雖專門詞人。罕能與之對壘也。余舊嘗好文辭。然筆舌鈍澁。乃不能與才人爭短長。亦且自念其所不足。又有急於此者。因遂曠廢焉。頃者士廣以此卷

見示讀誦數四書以自失不復有餘念也感歎之餘爲書數字。丙午歲仲夏月辛酉日塚友象山平啓

天保十二年九月

功課簿は松代學問所にて用ひたるものなり。

功課簿序

爲學之要在立課程課程不立則業有作輟而學易荒墜。小藝猶且不成。而況聖人之道乎。因今頒諸生以功課簿一本。教各嚴立課程。自今以往。各將每日所讀何經所習何業逐一註明。以備父兄師長不時取閱發問。諸生亦可自相者考勤勉若課有餘力便宜做古人經義治事兩齋竝設之意。於田賦・職役・市糴・國用・學校・刑兵・水利・海防・弭盜・救荒諸務。事有經濟實用者討求參稽。原始要終以深造爲務不以涉獵爲能。異日涖官。持以應世。庶乎不爲空疎無用之學。如或憑虛捏塡發問時全無記憶。自欺欺人。其爲罪亦不輕矣。諸生其戒之。諸生其戒之。天保十二年辛丑九月。佐久間啓子迪識。

天保五年八月

送櫻宇林先生序

儒者之學。以經世濟民爲務。學不足以經世濟民。非儒也。然而昔者孔門言志。夫三子者。規規於軍旅財賦禮樂之事。而曾點則曰。浴乎沂。風乎舞雩。詠而歸。夫軍賦禮樂。固儒者經濟之當務也。若浴沂詠歌。則放浪閒適。一如無所事事者矣。而夫子之所與。不在彼而在此。何耶。夫三子所言者事功也。而其志則確而實。曾點所見者意趣也。而其志則高且大。三子固不及點之高大。而點亦未如三子之確實也。然以一時言之。三子者。各拘執於事爲之末。而點則超然於理趣之源。宜乎。夫子之獨喟然與之也。雖然。今日學者論之。其可以偏廢乎。世固有務三子所言之事者矣。然或失之才幹智力。而不循乎綱領大本之約者。是知有之爲利。而不知無之爲用。而伯術功利之徒。是矣。固有希曾點所見之理者矣。然或失之蕩罔虛寂。而不盡乎條支節目之詳者。是知內之可重。而不知外之不可遺。而老莊佛氏之流。是矣。是以一事一行或能之。而要之皆不可以經世濟民。此其事理之相須。蓋亦有必然者。是故必取確實於三子。而修之

乎學問思辨之間、以窮事物之變。必得高大於曾點而存之乎優游涵泳之中。以達自然之理、內外交養、而精粗不擇、有無相因、而動靜如一、然後始可以盡經濟之務矣。不然豈亦得以爲儒者之全功乎哉。祭酒林公世子、樫宇先生。生而英邁特達、加以庭訓之美。其學夙成、優荷堂構、其蘊蓄之洽而實。制度典常亡論也、自租稅征商之宜、以至行師用兵戰陣攻守之法。皆莫非其所究知。斯亦有取於三子歟、用是聲光揚溢。海內人士。莫不顒然仰望。期以斯學之棟梁。吁責亦重矣哉。天保甲午秋八月。以有宿疾。請告將赴熱海。浴溫泉。兼探筥根。遊鎌倉。徜徉於江島・洲崎・瀨門・金澤。覽觀山海之形勝。優閒吟詠。動盪血脈。以和暢氣體焉。啓因竊謂。先生灑落之致。超邁之識。將必於其浴盥遊覽之際。有深契於曾點詠歸之意。而直與天地萬物同流。得於夫自然而然者。則本末貫該。體用兼備。所謂儒學經濟之全功殆庶幾焉非耶。夫異日之所用。不外於今日之所得。則遂將參朝廷之謀謨。亦益周然應于無窮矣。動績著於社稷。而不

居其能。惠澤逮於衆庶。而不當其功。名教彰於士類。而不有其德。奚又疑哉。則玆行也。不獨利先生之疾。而於先生之學。亦將大有所資焉也。夫孰不欣躍而慶賀之。況乎。啓輩受教於門下者。而可以默默已乎。乃次序鄙言。以奉送其行如是。

嘉永元年正月

和田生字敍

人莫不欲善其名字也。其欲善其名字也。何爲也哉。亦爲重其身也已矣。然直善其名字而已。而未嘗修善行於身。是重身不若名字也。夫身者名字之所寓。本也。名字者身之所命。末也。忽於其本。而汲汲乎唯末是謀。此謂知類可乎。郡邑和田生。來請字。生名正誼。取漢董子之語者也。余謂正其誼而不謀其利。公也。雖不謀利。而物莫不得其宜。和也。蓋不公則和豈得。正其誼。非和則乖。安有得其宜乎。故公與和合。而正誼之功全矣。乃字之曰公和。且告之以前說。公和其因名字而知其要。力學深思以修其行。則進乎君子之盛也孰禦。戊申上元

節象山平啓子明父叙於松城淸英閣。

天保十四年六月

贈羽倉簡堂

君子所貴乎學者爲能立誠耳。苟誠而無僞則不言而信。不令而行。故曰。至誠而不動者未之有也。若其機心一萌則鷗鳥舞而不下。安望人之從己哉。故曰。不誠未有能動者也。癸卯夏。審決官羽倉君以職事如京攝啓久辱下交。義不容默。書之以奉贈。亦區區誠云爾。

文久三年六月

平甫名は三郎後成と改む松代藩士なり維新の當時より眞田伯爵家家職となり終身主家の爲に盡瘁したり。

贈久保平甫

忠義人所固有也。故雖農商走卒。未嘗無尊君愛國之心。何況學士大夫乎。然忠義之降激爲氣節。氣節之弊。流爲忿戾陵犯。夫氣節之風。雖或出矯勵。猶近於正。故爲可嘉。至於忿戾陵犯則顚倒名實。隳壞公義。其害政敗化也亦甚矣。不可不戒。文久癸亥六月。門人同藩久保平甫。充親軍役於京師。因其求言。遂書以贈松城佐久間啓書。

楽遠樓時代

子靜名は愼藏滄庵と號す松代藩勝手用役なり。

贈八田子靜

八田子靜。爲人溫良。雅馴于友。朋中爲難多得。然亦失之優柔。不能奮拔勉強而大有所爲。是爲憾已。至近日若有自知其病者。持此絹使余書警勵之語。且曰。將揭之於一室。朝暮覽觀以爲藥石。余曰不亦善乎。志固所自責也。人惟不知自責其志。是以因仍懈惰隨俗習。非見善不能遷。有過不能改。日淪於汙下。而弗自覺。誠可哀也。今子自知其病。又知其藥石。其服而求瘉者。亦但在子而已。禪者曰。如牛駕車。若車不行。撻車乎。抑撻牛乎。吾甚愛斯語。子盍亦參之。

記類

記化石

更級郡五十里村

松代西北山中有錨村。其地往往出化石。大二寸半。狀扁圓。有橢圓而更扁者。有正圓而背稜高者。皆瑩滑艶。可寘几案以作書鎭。以其上隆下平。彷彿龜形。故土人以龜石呼之。然非龜之所化也。余細視之。背上有文。陽遂足狀。其間斷

紋停均、略與蛇蚹無別、又有細文如魚子。彌滿全身、無頭尾手足、不知口眼。腹下絕似馬蹄坳者、或其口耶。蓋雖非龜類、而其爲介蟲所化、則無可疑。第不可識其名耳。或曰、此海星也、余謂不然。海星洋人所名。漢謂之陽遂足。其狀五出如手焉。有海星而形類龜者也。以背文甚相似、直付以爲其物、甚非也。李時珍本草綱目、以陽遂足注於海燕條下。蓋以爲一物。亦誤矣。海燕一名燕魚。亦名海盤。扁圓大寸許、腹下似海螵蛸。有紋如蕈菌。腹正中有口。口旁五路正勾。卽其足也。其狀扁圓、與口在腹下。宜與此若相似然。然此腹下無紋似蕈菌。口亦不在其正中。又不見五足。則非其類亦明矣。按西說、天下之山。凡七等。其第三等者、往往出海物遺骨。皆前世界物。多異於今日所在。而其山石之質五種。其一曰灰白閃結。今化石所含。卽此。則是爲前世界者無疑矣。凡海物遺骨。其在火山者、燒爲灰。遇硫酸者。解爲土。今茲物、沈薶淪沒於山石之閒。不知幾千百年而不爲火脈所侵。硫酸所毀。而偶爲好事者所得。旣足珍也。好事者得之。以

資於窮理觀玩摩挲之際。輒心往于邃古之初。地天始成。人類未生之前。不足珍也歟。

遊梅墅記

天保六年正月

梅墅在江都東郊。距城二里而遠。予遊學都下凡三年。始一遊焉。墅方百餘步。編竹爲藩。敝以兩扉。自扉而入。四面皆梅。疎密轇轕。高低參差。不知其幾千株。芬白馥紅。眩人目睛。中間架屋兩三楹。覆以生茨。木榻横陳。可坐而看花且喫茶。屋之南有老梅焉。條肆樛曲。偃蹇數十尺。碧蘚鱗皴。封滿花身。其奇古不可狀。曰臥龍。最爲盛觀。傳水戶贈亞相所名。眞數百年外物也。蓋茲墅也。境非不勝。觀非不美。但以其逼近都城。士女交錯。讙鬨如沸。是可厭耳。乃與花別。悵然而去。歸臥書室。夢入一衡門。榜曰梅墅。滿園瓊瑤。閃彩連娟。有苔蹊。迂曲通于林中。幽邃窈窕。闃乎無人。又大異於嚮所遊者。獨抱琴微吟而步花間。鳥可百許頭。翠羽朱背。大如鸎。鳴聲朗朗。見人不驚。倏然高飛。翕然降來。似從予所踵

而相樂忽見古梅五六株臨一大淸池狀皆類所謂臥龍者長數十百丈大可蔽牛花蘂之秀麗馨香之淸洌根幹枝條之奇特瓌偉不惟世眼之所不覩抑亦世想之所不及也乃沿池而歷覽美姝四五人在花陰見予笑曰何遲也吾輩待君已久予怪之不敢進有小鬟摟予強就座遂同飮飮半酣一人推琴而促予予爲彈瑤芳引少頃又一人請曰爲曲援琴歌之聲調極淸麗殆亦非人間調曲將闋俄而狂風撼樹隊葩撩亂灑而其冷如冰愕然夢寤回視茫茫今之夢安在乎向之遊亦安在乎向之所遊其果眞邪今所夢其果妄邪今之所夢亦果眞邪向之所遊亦果夢邪嗚呼噫嘻吾惡知夢之必夢而眞之必不爲夢哉天保乙未正月記

惟有蘇齋記

余友澁谷國手洒侠性倜儻富文辭深嗜蘇眉山之書自其老少之所撰至于其門六子之所述及史籍之關涉於蘇家者與書畫碑刻之出於其流者盡購

而藏焉、救濟之餘、繙帙披卷、優游自娛。不知年歲之暮也、遂扁其齋曰惟有蘇。或人聞而怪之、以爲學祖聖人、德庇天下後世者。奚止數百家而獨取於眉山。何其隘耶、余聞而哂之曰、是豈誠識洒侯者哉。吾能爲解之。洒侯之於蘇。蓋寓意也。古之人亦有之矣、劉玄德之嗜結髦。阮遙集之嗜蠟屐。奕秋之奕。宜僚之丸、皆其寓意、而終身樂之不厭、夫結髦與蠟屐。與奕與丸。非有光色動人。宜無嗜之樂之。而至其寓意。猶終身不厭也、況乎三蘇六子。撰述之雄拔、書畫之秀異。如大山長江之巍巍聳立。滾滾流注、嶄然可仰。而淵然不可測。彼其猨狖虎鳳、黿鼉蜃龍之屬、亦翺翔躍舞乎其間、若夫臺閣之魁傑。林木之鬱蓊。雪風花月之澄芬。雲煙波濤之洶怪。無一而不備焉。則其寓意之可樂、豈有此之若者乎、雖然是猶跡也。在於跡之外。而終始者。謂之神與氣。神與氣也、無有增減之差。無有古今之分。無有幽明彼我之別。上焉而照然爲天。下焉而隤然爲地、變而不窮。通而不塞。爲四時。顯著而明爲日月星辰。突然而起爲山岳。崔然而陷

爲河海動爲雷散爲風飛走爲禽獸潜躍爲魚鼈甲而拆。秀而實爲草木。孰非此神氣磅礴之所生成焉乎哉。其原則一矣。由是觀之。蘇固蘇也。非蘇亦蘇也。天也地也四時也日月星辰也。山岳也。河海也。雷風也。禽獸也。魚鼈也。草木也。皆蘇也。孰仰而非蘇。孰俯而非蘇。孰先孰後。而非蘇耶。於是乎浩浩焉。冥冥焉。神會氣合。不知蘇之爲我。與我之爲蘇也。噫嘻言其跡則惟有蘇矣。若語其神與氣則何必惟有蘇而已矣哉。

嘉永四年二月

演砲雜記

嘉永四年春五十斤石衝天砲始成。二月十七日。試之於城西生萱（イキガヤ）村。余嘗讀西書頗諳其運用打放之法。然未有其器。平素惟截竹爲梃。疊席爲架。安小砲於其上與生徒習其略於齋內耳。是日臨場。砲重不可動。定員外別增副手二名乃能辨事。然平日之習者再硬。熟者再生。而其遲澁極可笑。是知非事實上錬磨者難以應倉卒。因書以自警。且以戒吾黨之士。

將二三子は一本與生徒に作る。動一本昂に作る。一百八十七斤一本三百十二斤に作る。

十八日再將二三子到生菅村。執挺動砲。鉤彈擔之。服習數十回。各皆得力。生者漸熟澁者漸快。此砲度不合規。重於常量一百八十七斤。此砲係江川氏門人金子伯溫所鑒造。而俛昂運轉。終亦不甚難。因此觀之。演習之功豈可少哉。

西洋之砲其種甚多。有五十斤石衛天砲。其彈圓徑九寸有奇。上開一口。夾口有耳。楞然空其腹。實以火硝熱藥。別鏇木管塡火□者。以塞其口。鑿以藥線。鉤耳而入礮。礮發時藥線取火。直傳於管。飛行空中。磨風不滅。迨乎墜地。硝發彈裂。碎片四散。遠擊于數百步之外。凡所遇之物。罔不糜爛。蓋彈之最大且猛者矣。然其管失短。則彈在空開而發。不能害敵。失長則彈墜而不卽發。敵人得避之。故測知敵之遠近。定爲管之長短。是爲要已。今春與門弟子。造此彈十數箇。設標於三千步外而放之。無甚失者。就中予所照準。其彈到于標下。相去纔可三弓。墜地卽發。亦不能瞬間。觀者大愜。

將翅日演天砲。或曰。比日陰晴不定。其日如雨。當寛期乎。予咲曰。演砲卽習戰

也敵挑戰可以雨辭之乎其人無言而猶有不信色洎期臨場猛雨暴至。傾瀉洒面流潦沒靴予督諸子未少停放發而彈皆能飛無一不取火者於是其人稱善

西洋演天砲之法每裝彈撒末藥必執帚掃砲牀雖幾十回無不然者予竊疑洋人尙簡要是何獨不憚煩一日令諸生試放霧彈誤不掃床予亦不之省視也一生舉火杖逼之未及點放牀上遺藥引火發焰一時自彈上及裝藥彈爲之迸出然不能及遠比照常法減三之一乃悟每裝掃牀者洋人實歷之所發明而間不可易之矩矱也因記之。

記治病

門人林生淸照之宅與予所居相近。一日其母卒厥仆地。時年五十九時生不在家。有老婢走乞予救乃往視之舌強口噤。手足顫振。身冷如水脈不應指。急取冷水一鍾和忽弗滿液二十滴灌口內不效。乃用鍼刺尺澤亦無血。仍連刺其穴

及見血即甦。自言如夢魘得寤然。猶苦肩背攣痛不可回顧。於是又刺其患處。套吸角以出血數兩。以其蒸氣不發舌有白胎。接骨木華・蒲公英根・加密列溫湯煮過服之。又以其久不大便。大黄・覇王鹽作湯。加少許蜂蜜。以爲道法。忽通燥屎升餘。尋發泄蒸氣三四日乃安。

御使者屋時代か

柏原良田は埴科郡森村の醫

又

柏原良田女。年二十一。嫁人有子。久患眼目。不辨蒼黃。良田三世業醫。嘗百方療之。毫不見效。謁予治。視之。雙目黑白分明。與常人無別。所云青盲也。然六脈勻平。蒲桃膜縮張之機猶完。問焉而知月事不調。頭額時痛。乃翦頭髮敷以芫菁膏。用吐酒石研末。每服八毛。淨水八錢溶化。日服之三。每至七日。甘汞一分。苦土三分。白糖少許。冷水調服以取下利。如此者二旬。漸辨物彩。數月而愈。其女云。初其少差也。得明僅一尺。横三寸許。其外猶瞶瞶也。及涉旬。明處漸大。遂復常故。

又

興津某妻年四十九、患眼胞赤爛瘡滿、難開四年、時時腫痛、眵淚所及、輒生癮疹、去歲以來、雲翳遮睛、視物不明、衆工以爲血症之變、蒸之洗之鍼之灸之。皆無寸效、請予爲治、予乃貼百會及肩背、以芫菁膏、用甘澒一分半・苦土三分和匀、臨臥冷水服之、二夕、更以蜀羊泉・土茯苓・山蒡根・蘆根作湯。日服數椀。又亞鉛華・生水銀、和獸脂爲膏、挑簪納諸胞內、未及二旬。諸患半退。稍親鍼線、後月餘全愈。

小妾產兒後五日、暴發熱、腹肚刺痛、劇不可忍。令人按之、痛愈甚。呼吸短促。眼瞼有淚、脈之疾而緊、乃用蓬砂・雲母各五分。沒藥八釐、爲末。以鎮之。驗。因刺委中放血五兩許、其痛如失、更㕮咀蒲公英根・蘆根各一兩。大黃五分。以水九十六錢煮過、取六十四錢、加消石四分。分爲三。每一時服之。至翌日、腹又痛。再刺委中按痛處、鋪以芫菁膏、頻服前劑、而遂安。

佐良志奈神社石表記

文久元年四月十六日

若宮邑八幡宮神主松田直友。攜佐良志奈神社石表拓本。來示予且謂曰。直友所奉祀神社。載在延喜式神名帳。其欽祟之久可知矣。則社頭當富於古文書而中葉數罹兵擾。今亡復存者。惟有鎌倉源將軍願書壹通。脫於殘燹之中聊足爲本社吐氣而已。直友嘗在京師。深愛正親町三條大納言實愛卿之知遇。卿爲書此石表亦社頭之榮也。卿姑柳原太夫人。諱易子君。亦嘗賜更級里歌壹首。直友懼其久而或佚也。復謁卿而書此。幷刻之表側。願先生記之。直友舊俾其子重枝從予而學。且執禮慇懃。誼不可辭。遂記之。昭陽作詻夏四月既望。松城佐久間啓書。

說類

文說

愛日樓課　天保甲午

天保五年

天文者何。日月星辰是也。地文者何。山川草木是也。天地之文既若是之著且

明也、豈人之文而獨不然乎哉、故君子之爲文。明乎理而已。無所事乎奇矣。然日月而錯行、星辰而羅列、山川而雲煙興焉。草木而花葉暢焉。則其光景之變態固已有不可得而狀者矣。君子之文、純粹簡實。而羣彙趨焉。衆理會焉。則其氣象之神妙、固亦有不可得而貌者矣。夫自學術不明。世之爲文者。晦盲邪僻。專以新奇相尙、沿習已久、歳盛月繁、其間非無所謂彼善於此者。然亦率無所益於道也、則亦嬉戲之具而已耳。彼博奕猶賢乎已者也。斯義理之顚倒。獨奈其害何哉。故君子明乎理而已。無所事於奇矣。夫日月竝見。欃槍經天。山移川鬬、梅李冬花、史書則謂之妖、若其顚倒繆戾。徒以怪奇爲可喜。則夫妖亦在其所尙乎。

恕堂說

聖人之學、莫先於仁。求仁之方。曰恕。恕者。推己及物。所以克私心而擴公理也。蓋我與人同受斯形、同具斯性、故人之情。卽同乎我之情。人之欲。卽同乎我之

欲故我之欲孝欲弟欲忠欲信也。則當推以及人。使人亦得以滿其欲孝欲弟欲忠欲信之願。我之不欲不仁不知無禮無義也。則當推以及人。使人亦得以遂其不欲不仁不知無禮無義之心。果行此道。求仁莫近焉。施之家而家齊。施之國而國治。施之天下而天下平。其功用豈有究盡哉。推而論之。則堯舜之仁亦不出於此矣。後世學衰。恕字之指不明。往往解爲饒意。至於謂以恕己之心恕人。以爲名言。吁亦誤矣。夫己有過。且以自饒。人有過。又併饒之。乃將率天下同歸乎不肖而後已。而可乎。岡野子齊以恕名其堂。而蘄予爲之說。予不能別有所發明。乃書舊所聞以貽之。

子齊名は元賢、通稱陽之助、元韶の子。

安政四年二月

題跋類

書常陸帶後

水戸藤田東湖。遭厄日。傷其君之屈寃。著常陸帶二卷。以稱揚其美。癸丑夏。彌利堅事興。朝廷起水戸太公。參決大議。其在禁錮。如東湖□□（戸田某別號）。亦皆得

恩宥。再又用事。是雖由時變。常陸帶之著。與有力焉。予聞之而未及見其書。甲寅春聞下田之議略定。謂非至計。乃欲由東湖啓於太公以救之。夜詣東湖。時方三更。東湖猶在公。侯少時。始歸。相見陳所見。更與談論時事急務。漏闌而訣。蓋不與東湖相見二十餘年。至此相覯頃刻。又逼迫時事。不遑敍其平生。而問其著書。尋予得譴北歸。後一年。江都地震。東湖死。偶得此書而讀之。俯仰疇昔。如昨日事。而東湖則不可復見矣。因大息流涕。爲書其後。丁巳春二月。象山平啓。

書僞臨川墨蹟後

元臨川僞介之跋倪高士畫。計五十六字。畫亡而唯跋存。筆法遒逸。紙色亦甚古。人多定爲眞蹟。然余未輕以爲然也。介之當時以善書著稱。其筆力之妙。恐不止於此。疑是明人所爲。因思。倪跡不知爲何等狀。如今與此跋但存。卽世之所謂雙玉。且倪蹟極不易遭。縱是明人臨本。亦屬好玩。而今佚去。可慨惜已。既

而再思。書畫一道也。倪畫雖佚。猶有此蹟。亦書道之幸矣。古人云。學書須觀眞蹟。以詳其先後筆勢輕重往復之法。若只看碑本。則惟得字畫。全不見其筆法神氣。終難精進。然則此書果出明人。其用筆故自不凡。臨池之士。能精觀而詳究焉。其亦有賢於嚮搨法書者也邪。

文久三年七月

柳泉は恩田頼母の號

書柳泉恩田君肖像後

是松城執政。正誼館主恩田君公準之肖像也。余年甫十七。不與君深相知。一日折簡見邀。至則座無他客。酒饌甚盛。相對款晤。評論文武。商推古今。及夜半而還。自此締交如舊知。後知過矢澤執政。稱監物深承盛意。亦君介之也。二君不可復見。世又無如二君者。對此遺像。歎惋久之。癸亥七月。象山平啓。

文久二年六月

書柳泉歌集後

柳泉恩田君。天資敏妙。其所詠國風。不求巧麗。而人自以不可及。壬戌夏。以其近稿示余。命之品評。蓋以余爲可與語者也。屬余有幹事。留其稿逾月。而君淹

然捐館舍。嗚呼哀哉。君已逝矣。余復何言。因噓唏而志其後如此。象山平啓書于聚遠樓。

文久元年夏

書自畫山水後

辛酉夏。久不雨。暑威殊烈。人多不能安其室。余所居清夏軒。竹樹環合。綠蔭接階。不復見日光。故不甚病暑也。偶有客攜明人清溪濯足圖至者。展觀數日。乘興仿之。亦消夏之一適矣。但余雅不學繪事。率意渲染賦色。作家見之。當哂其杜撰耳。象山外史。

安政二年夏

又

乙卯夏月。屛居無事。偶得方于魯墨。因試作此圖。予素不學畫。而壹壹塗染如許。亦大可咲也。

文久元年夏

書自畫後

今夏暑毒異常。不堪讀書。乃借友人家李林之白摹本。作此。醫煩鬱。惟李眞蹟。

未知其如何。一經臨撫。已墮書史蹊徑。余雖存眼識。手筆極低。轉益拙俗。不足使人玩也。辛酉盛夏象山子明。

萬延元年冬

書拓本款冬葉後

是拓奧秋田之款冬葉者也。款冬一名款凍。又顆凍。又鑽凍。百艸中。惟此不顧冰雪。先春敷華。故有此數名。本邦款冬之大者以秋田之產爲最。聞其葉如雨繖。可以蔽人。截莖爲嚢。一片盈盂。其大可知。今觀此拓本。蓋其族之小者耳。然較之常品。殆絕類矣。予於是竊有感焉。鈞是人也。從其大體爲大人。從其小體爲小人。先立乎其大者。則其小者不能奪也。此爲大人而已矣。夫人學爲大人。其至也無以尙之。其未至者。比之常人。旣出其萃。亦猶是也歟。款冬吐芳於冰。凌積雪中。固有似君子之操。而此拓本又可以喩君子之學。因爲書此。以諗覽者云。商横芮漢冬月。象山子明。書于松城聚遠樓。

安政四年閏五月

書先君子神溪先生遺墨後

先君子之學。以躬行踐履爲主。初不留意於詩文。然執友間。亦不廢其唱和。而卒然不經意之際。每能發揮天理。闡明道妙。不似他詩人之口吻。望而知爲有道之言。時有醫員安藤玄臺。本武弁子弟。亦有學問。忠直君子。與先君子交友尤厚。樂貧翁其人也。八田子龍見示此卷。且俾書其後。惟啓賦性狂粗。不謹守庭訓。非時妄舉。陷身罪戾。捧玩手澤。殊以悲感。因敬書數字而還之。丁巳閏月三日。象山平啓。識于松城望家莊淸夏軒。

天保十四年秋

書海國兵談之後

海國兵譚十六卷。仙臺林子平所著。率皆飣餖舊聞。無足稱者。其水戰篇。自負前人未發。且以爲盡精詳。以余觀之。淺妄杜撰。尤爲可嗤。世固有不知彼不知己。率意妄作。而悍然自用者。不唯子平也。此書少時一讀多忘。癸卯秋再讀。乃書之。

安政五年十二月

書紀公遺墨

紀公之書。用筆有法。與晉唐人筆蹟。初無異同。可以爲百代模楷矣。惟此帖所收。有筆勢翩翩殊可喜者。是決非紀筆。明眼者自能識別之也。著雍敦牂嘉平月。象山翁觀於聚遠樓。

文久元年夏

題項易庵畫册

項易庵名聖謨。字孔彰。墨林子京孫也。以畫蚤名于明季。爲董思翁所深賞。能詩文。所著有朗雲堂集。予久聞其名。而惜未見其畫。不識刻於明季者耶。抑淸初也。此册倣前修者四幅。自運者四幅。共八幅。多有癸未幹支。則是作於崇禎十六年。實爲燕京失守之前年矣。于時盜賊麻起。游兵橫行。天下擾攘。民不聊生。易庵置身其閒。優游翰墨。不改其樂。可謂雅尚之士。畫徵錄載。客有以一罈酒餉易庵者。越數日索其罈。已爲游兵所碎。易庵遂畫一空罈償之。中作桃柳兩三枝。或斜倚。或側垂。丰姿婉約。綽有餘姸。上題五言長古紀之。亦不負其平生矣。意者作此册時。亦安知不爲游兵所擊。而觀其鉤勒渲染。古茂沈蔚。絕無

蕭疏氣展閑令人心氣俱冲眞靜者之能事。非常流之所能及也。嘗聞漢孔文擧爲袁譚所攻。流失兩集。而神色自若。今推易庵所存。蓋亦庶幾焉。劇賞之餘。輒書册端。俾覽者有考於其爲人。而知其遺蹟益可以貴重云。辛酉歲長夏月象山外史。

安政六年か

題一齋先生遺墨

余少時師事一齋先生。灑掃門牆兩歲。頗承愛育。嘗聞作文之訣。余於言下釋然自是如平地得路。了無凝滯。雖未足以追蹤於古作者。而陳意記事。受用有餘。實先生之賜也。但先生主張王學。不好窮理。余則專承當程朱之規。以窮天地萬物之理。爲斯學起手。漢人所未窮知。則以歐羅巴之說補之。是則所以不能與先生不異者也。因觀先生之書。偶然及之。象山平啓。

題古鑑

近獲一古鑑銅色黑黯。可見傳世之久。背作海獸蒲桃之狀。間以鳥蝶。形模典

雅。極可愛。雖無銘識。以宣和博古考之。其爲李唐物無疑也。象山眞逸記。

安政四年閏五月

題先考所扁聚星二大字後

先考修德淸靜。平心率物。嘗竊慕陳太丘之爲人。且有締交世之賢者之志。遂取續晉陽秋語。命其觀曰聚星。時葵丘老人。以書名家。爲書其扁。然以其筆畫不滿意。而未及揭之也。頃視諸古篋中。率然對之。字如不甚佳。熟而玩之。老筆蒼古。具存趣味。亦非時輩之所能爲。況其語實先考所取。則焉可不愛護而保惜哉。乃命裝工而治之。以其未有記文。姑自書朱文公聚星亭銘以附此。惟啓之躁急激昂。且匱師友。尤不可以不儀刑先考之盛德。則取而揭之於座右。蚤夜觀覽。以自勵云。丁巳閏月望。象山平啓謹書。

萬延元年夏月

題磐瀨華沼書卷

磐瀨行言。字子言。號華沼。島原藩士人。善詩書。書濃晩成一家。今觀此卷。自言臨老米。而無一捺一撇似老米。斯亦奇矣。所謂意足不求顏色似前身相馬九

方阜者歟。商橫芮漢夏月。象山子明。

題楠公像

以眇然之身。自任天下之重。知其不可爲。而猶且爲之。終擧一門之肝腦。竭諸國難而後已。以啓觀之。五大洲中。從古至今。未有忠於公者也。松城平啓謹題。

安政三年四月

題椿椿山畫

椿山生學繪事於故友渡邊崋山。筆法淸脫。花卉翎毛其所長。故觀生之畫。亦猶見崋山。林大輝兄見示此帖。時正首夏。樓頭睡足。心目爽然。殘櫻蔭前。幽禽語傍。明窗淨几。啜茶閱之。亦屛居之一適也。雖然。慨人才之已凋。嗟歲月之云徂。蓋亦有不可語人者。柔兆執徐之余月。象山啓書。

安政六年春

題先君子淡水先生詩後

（蟄守靈淵望紫微。存身養德待天機。自珍我匪池中物。時至起雲行雨飛。）

是先君子淡水先生所作詩也。先生抱負如此。而終身不得意以歿。豈可勝悲感哉。然其凌跨古今。斡旋宇宙之氣。百世之下。誦此詩者。尙可想見其人。已未

春雨角子求余詩。時余記起此詩。因謹書之。孤啓敬書。

安政六年夏

題龍田生像 生通稱玄道

玄道は立田樂水の嫡子

億兆之生。莫不歸於死。所爭但壽之少多而已。然其生也。天生之。而其死也。天殺之邪。抑人自生而自死邪。未易知也。惟其壽之盡。雖自努力。而不能增損分刻也。則歸之於天固宜。既歸於天矣。何壽數之足擬哉。邵子一元之數。十二萬九千六百年。可謂多矣。然由天見之。亦眇眇爾。自一元而至千萬元。猶如自一年至千萬年。固未始有紀極也。一元既同一年。則十二會猶年之月。三十運猶月之日。十二世猶日之時。三十年猶時之分也。之子年未滿三十而歿。視之多壽之人。則輸四五十年矣。然由一元之數言之。其所輸不逮二時。吁嗟。不逮二時之輸。於之子乎何惻。

是龍田翁嗣子武字子眞之影也。翁之哭之子。以是見請題贊。余家法不爲人銘墓贊像。但與翁莫逆之誼。不忍辭謝。因爲題此。亦聊欲寬翁之哀懷耳。

安政六年六月

題漢碑後

此碑集錄家推爲東漢人傑作。然以其在褒斜谷中。地勢險絕。椎拓頗難。故臨池家不能盡得。近人學之者少。余幸藏弆古搨。閑時出而臨之。亦以自樂也。己未晚夏子明記。

安政六年七月

題磐瀬華沼書後

磐行書臨米襄陽天馬賦。而不規規相襲其蹊逕。此眼目甚高。古人有以草體寫禊帖者。亦同揆也。安政己未。立秋前三日。象山平子明書。

萬延元年八月

題自詩後

庚申中秋月良夜。余在於聚遠樓上。高捲簾帷。長空無雲。月色如晝。林巒坌入。風露清凄。余於此興亦不淺。乃命杯酒。對月獨飲至曉。翌朝晏起。酒猶未醒。書此詩。以終餘興。象山子明。

題米帖

米老書海岱樓詩下小字註云。三四次寫。間有一兩字好。信書亦一難事矣。此老之書。似縱橫跌宕信筆而成。妍醜美惡一不經心者。而其言如此。又嘗觀天馬賦數本。其字雖大小不同。結體皆不甚異。是知古人作字率多著意。不如今人草草信筆也。

安政五年秋

題自畫授百瀨壽山。

壽山生爲余家道。曠廢許多日子。往返數十里之路。耗費數項物事。勤勞頗至。余報之以金而不受。因乞余畫。嗚呼。爭貨利忘文雅。雖士大夫往往不免焉。今壽山生。不欲得金而欲得畫。是商賈反有士大夫之心也。余不爲人作畫。亦不與人畫久矣。適爲感生之志。遂以此幀授之。生其勿輕出示人。

題自書後

余性懶。故不好書長卷。適爲人寫魯公筆法十二意。時秋氣宜人。絹材亦精。因不覺卒卷。亦可一咲也。象山子明。

嘉永三年十月

題十二册獨野戰砲圖

近來倡西洋火技之說者。往往有之。而類咸未及詳明西書所載。而臆度杜撰。誑惑盲聾。其所造火器。形不中式。度不合規。所謂觚不觚者。吾覩亦多矣。嗚呼。自誤誤人。其所抵終將及家國天下。抑何心歟。吾爲此懼。無徵於西書不敢書。無徵於西書不敢圖。無徵於西書不敢以誨人。思有以純謬妄歸眞正。張我武以爲掃淨海氛之資。而天下與之者鮮矣。豐前中津。君明相賢。諸有司各得其職。於當今衛邊。莫若兼取洋方以彼防彼。謀猷協同。罔有違言。乃特使屬予訓鍊其士人。製手銃鑄巨礮。盡取法予而用之。兵制幾乎一新。此礮固宜于野戰。尤便于守禦。而本邦未聞有製此器者。頃者中津侯將範此礮。予不欲分毫差違洋制。乃頗苦心作圖以進。蓋所以聊答侯之知。而四方取則於此。亦所竊庶幾焉云。庚戌冬十月。象山平啓識。

安政四年二月

跋宇宙記

宇宙記十編。題獨乙宋墨爾撰。荷蘭封茅搨譯。而其天體四編。則獨乙栗禿老所著也。蓋宋氏以栗書愈於己撰。而黜己表之。西儒有服善勇義如此者。往日宇杉諸子。久隷於司天臺。多閱官庫西書。而爲予謂。彼方窮理之書。流傳于我。未有善於是者也。故予囑通事吉雄某。捐三十餘萬錢而購之。是書無論包羅宏富。理義明暢。其楮墨華潔。圖象精緻。世所希覯。晴窗淨几。焚香而一披之。則心目先爲之開明。予得嚴譴。屏居一室。交友不得通。足不向戶庭者累年。從他人視之。如不勝無聊。然而晨興夜寐。囂然自得。而不復知罪戾之在身。蓋取娛於是書爲多。昔柳子厚。謫於永州。美其山水。樂而忘憂。永之治方不過百里。猶足以慰其志。況於是書。內則五大洲。山嶽湖海。絕漠洪原。傾崖急湫。卷石之微。金銀寶玉。墳壤塗泥。燠寒風雨。游氣之變。外則日月列星。太素之運。造物之終始。皆若燭照數計。權稱而度量也。其樂之深淺大小。果爲何如耶。丁巳二月象山啓稿。

跋毛西河眞蹟

安政元年三月

毛檢討經學文章洵爲一代大家其西河合集刻卷四百餘未刻者尚夥著書之富古今所希有矣李天馥云西河不可及者三身不挾一書胸有千萬卷所至爲筒無片紙而下筆蓬勃言論滔滔其不可及一有疾時求文者在門捫胸腹而應頃刻付去無誤者其不可及二自九經四子六藝之文傍暨聲音鍾律瑣屑之事皆無不極其根柢而貫其枝葉其不可及三今乃得見其筆蹟簡嚴精穩不留縫罅其才力獨有得於天分之多而無所施而不可於此亦可概見也感歎之餘聊爲此記嘉永甲寅三月下澣象山平啓書于江門所居大觀閣

世儒議毛西河以勝心客氣強辨叫囂其結習終身不除然予嘗聞之西河在湖西日與楚人楊氏之徒劇辯淫詩其說屢勝及聞其論孟子求放心不當在事物上求忽幡然下拜時座客皆相顧眙愕且微言曰此非辯詩者耶西河曰向所爭者詩也今所拜者求放心也於是座客大服然則西河雖好

辯。亦服其所當服。初非固我執滯如譏者之所言。亦可見矣。今窺其心畫平易簡澹。無毫激昂險怪之氣。是亦可以證其心事也夫。啓又書。

跋十七帖　文久二年

二王法書。不止轉傳摸勒亦多以倣書入石者其源委皆不可得而究詰。如十七帖雖稱爲右軍名蹟。而隋唐以來書家無弗臨撫者。董思白云。趙吳興所臨。不下數十本。然則其他臨本之多可知矣。而好事者各自刻板。亦復傳摹。今所在搨本。固不可識其孰近眞也。惟疏放姸妙可喜如此。豈其筆意或時有合其眞耶。

又　同上

余少時習二王書。皆無入處。中歲舍學魯公爭坐稿。今年甫五十二。偶得此帖而觀之。頗有所會。自今而學之。則儻其有所入乎。

跋唐宋八大家法帖所載魯公筆法十二意　安政三年十二月

魯公筆法十二意、收在唐宋八家帖中、余一見疑其非眞蹟、何也。明皇天寶三年詔改年曰載、則此宜書五載、而書五年、是其可疑一也。帖中字多似學爭坐位、祭季明文稿而皆有痕跡、與夫元氣渾厚。天眞爛漫者不同。是其可疑二也。唐人書畫、多無款印、縱令有之。不過一顆。今款兩印。如宋元以下人所爲。是其可疑三也、宋歐・趙以來。集錄家甚衆。而皆未覩此。至於清乾隆間。始出于世。不詳其來歷、是其可疑四也、徐季海・蘇明允・米南宮・倪高士諸跋、與其書幷似非眞、是其可疑五也、回循細閱。滋認其僞。余生不學書。筆札最陋。而悍然品評古蹟亦已僭矣、然自信具一隻眼、未知明鑒鉅公所見。與余果如何耳。丙辰歲嘉平月小寒日、象山外史書於東郭別墅之聚遠樓。

安政四年三月

跋古事記傳

此書大意、怪妄迂謬。固無足論。予嘗謂。孟子所云。詖淫邪遁。蔽陷離窮。宣長實兼之矣、然於名物訓詁、引徵該備。雖稍失之炫博。而本本原原。具有根據。亦非

他人所及。讀國朝舊詞者。備資考證究亦有益也。丁巳春三月小盡。象山外史識。

安政六年六月

楊孟文石門頌跋

此碑隸法古勁。爲東漢人傑作。集録家無有異辭矣。然以其在褒斜谷中。地勢險絶。倚崖縛架。椎拓極難。故臨池之士不能盡得。近世少學之者。余也幸嘗藏一本。既命裝工施横軸。頃又獲此本。乃翦裁爲帖。完幅者。已宜觀位置行列。全體制度摺帖者。亦便几上臨摹。各有所長也。嗚呼。彼土之士。不能盡得者。余得藏二本。時時從意所適而披玩。以爲樂焉。孰謂非翰墨奇遘耶。安政己未季夏。象山平子明。書于嵩嵩窩。

文久二年夏

跋漢碑

此碑明萬暦間始出土中。於漢碑中。最稱處好。而其初搨鋒鍛銛利。精彩照人者。尤爲可尙。近日撫搨既久。漸就漫漶。時人重加刻畫。字體失眞。至以乾爲軋。

可勝慨哉。予獲此本非復舊搨且亡八十一字然乾未成軌而尾有詩佛老人覽堂記詩聖堂圖書記二印爲大窪天民家藏本。乃四五十年前物。較之今搨差勝因晦日求本手補其所亡。命工修治。而書其後如此。壬戌夏日。象山平啓。

同　上

又

右漢碑殘字七種合爲一幀是雖斷裂之餘王昶・阮元輩皆存錄之以漢隸難得故也。在彼且然況傳于我者。焉可不愛惜而珍襲哉。文久二年五月廿一日書

文久二年九月

跋顏魯公家廟碑

是顏魯公家廟碑側面拓法頗佳。散落之餘。尤爲可惜。凡以碑刻拓本爲帖者。必剪裁接合令文屬讀此帖不知其法橫斷貼裝。文不復可讀。然學者因之亦可觀結字運筆左右相顧後先相避之法則所謂一失一得者耶。小川士益藏此帖甚愛之請予書後。壬戌蒲月。象山平啓。

跋爭坐帖校本

安政四年十月

是山寺不息所校。其朱書者。蓋全唐文所載也。丁巳秋借觀。以陜刻再校之。此本。父子之軍之上無以字。其志哉之上無能字。何必令他失位之上無亦字。而升別二字不加乙。按其文勢。皆當以陜刻爲正。故今補之。象山外史記。

跋顏魯公爭坐帖

安政五年十一月

此帖亡論書法奇特。刻法亦自精絕。不似他法書棗木摸稜者。雖少漫漶。筆意可繹。書家寶筏。舍此何取。但以清商一時多齎。邦人不知珍之。可笑而已。按金石粹編。爭坐帖。自宋以來。摹刻者有七種。安氏刻本。吳中復再摹本。米襄陽臨本。北京本。戲鴻堂本。嘉善魏氏本。關中本是也。然以予所見。尚有玉煙堂本矣。此眞蹟。宋時爲京兆安師文家藏。嘗刻以傳世。吳中復守永興。謂安氏石未盡筆法。因再摹勒。今在清國西安府碑林者。世謂之關中刻。此帖是已。不詳其出于誰氏。或曰。此石卽安氏所刻。然京兆·永興皆爲關中地名。此豈果安氏原石

耶、抑永興重摹者耶、不可得而究、惟筆法至妙處、非數經摹刻者之所能存、則其不出於安・吳二石之外、斷可知耳。世之論書家、或以米襄陽書史、有爭坐帖內小字是於行間添注、又於行下空、紙邊橫寫、與刻本不同、石刻粗存梗概耳之語、以謂此刻行列亦非其眞、是恐未深考也。米氏所云、於行下空。紙邊橫寫者蓋指第三十一行射哉二字矣。今此刻。小字皆添注于行間、射哉二字果爾橫寫、則其依循眞蹟、無容疑者、而襄陽所斥石刻。別自有本。亦可推也。因謂書字、字有字法、行有行法、不惟左右相顧。上下亦相映帶、行顚之畫。行底之筆。尤意思所存、故古蹟位置行列、固不可移易。分毫若犯之。則爲亂道矣。如董玄宰以書名家、嘗刻此帖亦中斷。行列顚倒。上下大敗。其觀極爲可怪。襄陽書史云。粗存梗概、恐謂此類耳。

安政六年六月

又

孫鑛書畫跋。跋論此帖云。帖首十餘行。尚覺屈彊未舒。至僕射指以下。乃始活

潑飛動。至皆有等威後。又更渾化入妙。結末數行。筆已倦。意已懈。而餘興淋漓。更出屋漏雨蹟。余謂此論未必確然。教人看法書丁寧著意。極爲有益。初學看法書。須是正看。背看。上看。下看。左看。右看。久久看。作幾片段。其起伏頓挫。與自家心手相肯方得。只見得渾淪。物事如何濟事。己未夏晚。象山子明跋。

御使者屋時代

又

予少時持項王之見。不肯學書。立年以後。稍好爲之。酷愛魯公此書。天眞爛漫毫無粉澤柔媚之態。然予平時。事馳馬演礮。率無虛日。則亦不得專力於此。第以其少暇。摸擬其似耳。凡事有規矩。然後可成。合得其規矩之所在。比諸前日之鹵莽。已有間矣。由是而進。漸漬以熟焉。則焉知異日之無所成哉。雖然此細技也。固非丈夫之所區區也。

嘉永元年正月十日

又

米老云。一日不書。便覺思澁。予生不知書。故久不省其爲何等語。自適獲此帖

日必書數百字。後半歲始服此老之知言。

又　（安政四年冬）

長江大河無意於波瀾。吾既已辨之矣。然此稿。太室之廷之廷。長守貴也之也。補筆分明。是爲用意。是爲不用意。學書家於此中參得。不妨奇特。若或未能然。待汝一口吸盡西江水。卽向汝道。安政四年冬月。象翁又戲書。

跋懷素帖　（文久二年六月）

是懷素上人得意妙筆。古人已稱有驚蛇飛電拔山之勢。洵不誣矣。而刻手亦精。法書之工於刻者固多。而及此者亦尠。可謂雙絕也。壬戌季夏裝成。玩之忘暑。象翁書。

跋林緯乾墨蹟　（文久元年三月）

余嘗觀林緯乾此蹟。以謂是平原規度也。偶讀董玄宰隨筆云。唐時林藻師魯公爭坐與祭季明文。乃喜余見之不誤。因此帖遂及之。辛酉季春月。象山啓。

跋米帖

文久元年二月

余未嘗學米書。然固知其以顏法爲宗。偶得此帖而臨之。則筆筆皆顏也。但顏變多而此變少耳。辛酉暮春。象山子明。

跋劉中使帖

文久元年二月

余嘗讀元人白廷玉湛淵集。久知魯公有此帖。頃於滋蕙堂法書中初觀之。其爲歡喜不啻覩景星慶雲也。公之行草大字莫過此帖。而毫無彫刻嫵媚之態。自然可以起敬。廷玉云。凜凜忠義之氣。如對生面。非石刻所能彷彿。然則其眞蹟之妙。想當如何哉。令德紀元二月。象山外史。

跋攀雲閣帖

安政六年秋

余年少時遊于越北。獲此帖於水原之市。以爲直摹勒漢碑者。後得石門頌・禮器・卒史諸碑而玩之。閒時對勘。乃知此爲臨寫本。而手亦非其至者也。恐後世輩或未能辨之。因識其後。己未秋日。象山子明父。

文久元年五月

跋停雲館帖

文衡山停雲館帖十二卷、撫勒精妙、近世諸刻、推此第一。蓋以衡山父子皆精書學、而又自能鐫刻、更有門客溫恕・章簡父輩、爲之周旋。且不強欲其速成也。頃聞東郭子獲善本、馳使借之、乃金兒雪庵故物。留玩數日。如對故人、神思甚適。時東郭以此紙求余書、因率然託此寄興云。

此紙舊而佳。古人云。舊紙得墨始有氣韻。余無書學。筆墨殊澁。可愧可愧。昭陽作噩盛夏。象山外史平啓書。

文久元年夏

顏魯公三表稿帖跋

余於此帖、始而不信。既而疑信半。終乃信而不疑。古人之法書名畫。宋元以來。著錄最夥。凡海內所存。雖姓名不甚顯者。亦賴以傳。況魯公逸蹟。此帖歷世名師鉅公賞鑒之家。未有一人錄及者。近年忽出於清人摹勒。余是以始而不信也。惟神物顯晦有時。名山石室之藏。寧無待後死者而啓者。是故既而信疑半

也。至於反覆視之沈潛玩之。方見其天機流動。有行雲走水。未易形容者。蓋魯公方能到此。而餘子要未足窺其髣髴。是以終乃信而不疑也。頃八田子靜獲此帖而質眞僞於余。因書數字其後以答之。辛酉夏日。象山平啓。

書不至自然。未足以爲妙。惟此自然尤爲難。至宋雷大簡。當時稱善書。嘗云。見顏行馬病・乞米・蔡明遠諸帖。苦愛學之。但憾未及其自然。然則顏書之妙。亦唯自然乎。黃魯直云。不拙揑容止。不強作態度。是其至自然之門徑。子靜方有志於書學。故復書此以告之。

啓

文久元年五月

項易庵畫册跋

項易庵畫。董思白曾稱之。其精詣可知。此册藏於若宮松田益甫家。用筆古樸。不求妍媚。大有元人風度。可入妙品。今時不易多遘。余借觀數旬。深賞不能釋手。幾欲奪之。然余讀書。頗知道理。故不敢也。益甫其祕寶之。再勿假人哉。歲在昭陽作噩芒種節。象山平啓書于松城屏居聚遠樓。

此冊旣書跋尾。而歸之。益甫知余深好之也。乃割愛以贈。何其幸歟。因舉座右所有物事數項。以爲報。時五月十四日也。是日新雨乍霽。薰風輕度。林光如沐。山色可餐。樓頭掃席。窗外捲簾。香鼎當前。瓶花在傍。披此家珍。啜茗玩之。人生適意。孰知其他。郎都城諸友。能有此樂否。啓又書。

漢孔君墓碣跋

趙氏金石錄。收錄此碣云。已殘闕。況又閱數百年。宜其損泐之加多也。明誠以其有元年乙未字。定爲東漢桓帝永壽紀元。其說極核。今則其四字亦不可復見矣。然漢刻之傳世者。已無多。雖見一兩字。猶可玩而不棄。況其可髣髴者。尙不下於數字。則是可存也。

又

漢孔君碣文字多剝落。然猶有隱隱可讀者。則不忍棄去。遂加裝潢。歐陽公云。好古之士。所藏之物。未必皆適世之用。惟其埋沒零落之餘。尤以爲可惜。此好

古之僻也。此言實獲我心。文久二年蒲月念二日書。象山平啓。

又

後漢書注曰。方者謂之碑。圓者謂之碣。而漢碣之制。莫究其詳。惟見於斯碣。始可以知其制。然則斯亦有適世用也夫。啓再書。

魏百官勸進碑跋

曹丕謀移漢鼎。羣臣承意勸進。乃勒石建之。此碑是也。世之知正理者。誰不嘗而唾之。但其書或爲梁孟皇。或爲鍾太傅。雖未知孰是。其字畫佚宕。蓋非二子不能。亦高品也。故予棄其事。而存其書云。

跋菱湖書

新潟卷菱湖。以善書名于一時。友人八田子龍。藏其書。陸天隨詩十二幅。中間一紙。爲人所取去。馳問遺索。卒不可復得。頃請予補其缺。惟予天下拙書人也。以拙書補巧書。人其謂之何。雖然子龍之請亦不可虛。因書跋尾數字。以塞其

責象山平啓。

安政五年十一月

跋自書 五絶。頭上山洩雲。

是予二十八九時書也。予生三十七年。始學顏平原筆蹟。時時臨摹以自娛也。由此以前。疎放自許。未及專心手學。故年垂三十。其書無法度如此。可以爲後生之戒。戊午中冬。平啓記。

安政五年十一月

又

德成而上。藝成而下。書之美惡。固不足以輕重人。然筆札下劣。甚刺人眼。而不自省覺。亦可羞也。子弟戒之。安政戊午中冬。啓又云。

萬延元年五月

雙鶴叟は沼田屋大藏なり。

跋自書神號後

凡神州之生民。誰不受此三神之釐者。宜其夙夜祇敬以奉之。余爲雙鶴叟書此神號。視之於張紫巖先生爲了賢僧書佛號。無愧也已。上章芮漢夏五月。謹跋。

跋三神鏡

文久元年二月

三神鏡體圓。徑七寸八分。重三十四兩。陰列四乳。皆有旋輪環之。上方一神人。戴寶冠。衣羽衣。穆然端坐。背畫雲氣。兩側有物如鳥。左右方有怪獸。張口對峙。下方二神人。皮衣尾茸。相竝而坐。中間子珠一顆。各擧一手弄之。亦有旋輪。輪上更作光氣上騰之象。其餘所具。詭異之物。多不可名識。外輪縭藻繁錯。間作九乳。此內四乳差小。華邊素鼻。土花所漬染。赭綠爛斑。審其質與色。參以博考二圖及西清古鑑所載。其爲漢物可知已。予更審定以爲武帝時物。何以知之。以三神之說知之也。三神之說。武帝前于史書無所考。武帝後亦無所考。獨武帝時不特一二見也。按太史公封禪書。武帝初立。輒好鬼神之祀。洎李少君進祠竈卻老方。而方士輩多相效。更言神事。亳人謬忌奏祠泰一方曰。天神貴者泰一。泰一佐曰五帝。古者天子以春秋祭泰一。於是令太祝立其祠長安東南郊。常奉祭如忌方。其後人有上書言。古者天子三年壹用太牢祠神。三一。天一。

地一・泰一、帝許之、令太祝領祠之於忌泰一壇上、如其方是三神之說也。應劭風俗通稱、武帝祠泰山・泰一・后土、亦是三神之說也、但與封禪書所云少異耳。今鑑陰所著、雖未詳其孰是、然三神者儼然矣。夫泰一其尊無比、祠壇在五帝之上、則今專位于上方者。當是泰一如天一・地一、本是陰陽二神、下方稱坐者。恐非別神、而中閒所弄之珠、將毋即陰陽交而物始生之象也。或從風俗通、太山・后土原非異類、其離坐于泰一下方、亦不爲無理矣。司馬相如封禪文曰。挈三神之驩、韋昭曰、三神。上帝・泰山・梁父也。如諄謂。地祇・天神・山嶽也。是亦三神之說也、始從韋氏則上方者上帝。而下方者泰山・梁父也。據如氏則上者天神。而下者地祇・山嶽也、亦無不可。亦按封禪書云。齊人少翁。以鬼神方見上。言曰。上即欲與神通、宮室被服非象神。神物不至。乃作畫雲氣車、又作甘泉宮。中爲臺室畫天・地・泰一諸鬼神而置祭具、據此則是鑑之造。恐於此時也。擧此數證。其爲武帝時物、庶幾亡疑矣。於戲。是雖微物。而閱世幾二千年。武帝作甘泉宮。係于元鼎五年

事。距今實一千九百七十有三年。超絶險越巨海。而流傳此邦。巋然獨存于今。可不謂神物乎。惟武帝。以雄材大略不世出之資。而惑于方士求仙延年之說。所以事鬼神者。既諂且瀆。不可以爲訓。爲困于慾也。觀於此鑑者。以此而爲戒。其於日用蓋亦深有補焉。不徒爲好事者無益之玩而已也。萬延二年辛酉春分節。清虛道人書。

跋佩刀

鰕鞓之制。傳爲八幡源公所剏。人多傚之。而莫能識其取象於蝦之旨也。予竊謂。古人佩服之文。必有法象。非特爲觀美已所不足。時觀其近者而思之。亦庶乎可以長善而救失也。夫蝦之爲物。善潛而好脫。所以特取象於斯。蓋以寓其潛隱晦養。不可淺露。見時而動。知難而避之意也。旨亦深矣。按史傳。公東征歸京。折節於大江匡房。就而受其學。意製是鞓。其在講學聞道之後乎。不然公之英烈驍勇。豈亦有心於潛晦哉。予於是益有感焉。乃用平日所佩之刀。以擬其

彷彿吏附新意欄釘之頭。刻之爲水。首尾及箍鏤之爲藻。蓋水所以養蝦。亦以喩道爲藻所以棲蝦。亦以喩文焉。喩道者。取於其利物而不爭。避高而趨下也。喩文焉者。取於其脩飾之道。可以免於粗暴鄙野也。是豈以爲有加於公之旨。顧予之狂粗所自警者。不得不然耳。

安政四年九月

跋痧脹玉衡書

痧病之論。古不經見。無足深辨。惟詳此編所云。亦似不問傷寒雜病。凡有焮腫可行刺絡者。指而爲痧也。故痧有實而無虛。辨則爲可醫矣。然其爲說。率皆怪陋瑣猥。穿穴無稽也。小兒遊戯之爲者。（放痧有十刺銀針之類。）若夫人身生活之理。發病之原。用藥寒熱溫涼之性。概乎無所究知。則一一而與之辨。亦徒費於言辭矣。但當舉其不經而一句抹之耳。丁巳秋九月象山樵人書。

萬延元年十一月

岦石跋

石豈易言哉。今夫山生草木。育禽獸。興寶藏焉。而語其質則石也。非惟山爲然。

雖大地之包五洲而有餘。振滄海而無洩。其實又石也。金銀寶玉則精其質者也。赭堊丹青則麗其色者也。沙礫土泥塵壒則出於其破碎磨盪之餘者也。固又不外于石也。故擧石則大地之事畢矣。其不易言不亦宜乎。然論其初之所成。則不出於水火二端焉。成於水者其質葉。成於火者其質粒。以是辨之。天下之石可盡矣。余性好石。少時裒奇石數十種。列之庭階。寘之几案。朝夕相對以爲娛玩。然但第其流品。賞其瑰奇而已。洎中年讀洋籍。爲石學。頗知石理。今則卽石而窺造化之源矣。中野綿貫公文。有石癖。看畫石又愛之。嘗藏雲泉畫石一幅。尤其所珍襲者。介人謁余。求題詞。余雖酷好石。未及畫石。而公文及之。然則公文之好。加余一等矣。特不識其所以好。與余同異如何耳。因書此以問之。且以發一咲。上章涒灘復月。象山平啓。

跋贈勝義邦礮卦

萬延元年春

（六月十一日勝宛書簡參照）

妻兄勝君義邦。幕府麾下之士。其節概議論。皆有以過於人者。嘗學泰西礮兵

於余勤習之久其所得足以使教導後進之士。然勝君之志。豈遽可若此而已乎夫兵之性革也燭理察事。因時而革。亦猶曆法。曆而不革。不足爲曆。兵而不革不足爲兵佛郎察波利穩王。亦嘗言此意勝君幸益勉之。近日余所著有礮卦一書頗以發明礮理且以喚醒時弊。今寫贈一通以助其志。從游之士。有及知此義者其亦出此示之可也。松城平大星識。

弘化元年九月朔

跋阿片始末

當今天下之可畏者。莫大於外寇而戒備之要。莫先於知彼。苟能知彼。則我之所以備之者。自不能已矣。而世人憒憒。鮮克知之者。獨子德於此勤勤。著是始末以爲知彼之資其識之遠。非特能文之士也。三復之餘。敬歎不足。乃書其後。

甲辰九月朔

讀今川氏壁書

今川了俊警其子仲秋壁書一卷。民間多擧以授童蒙焉。在乎士列。則率賤焉

而不取。蓋以其言之鄙俚也。余適讀之。至于其不知文。不成武。不學道。不可以爲政。五常治國之本。闕一則危。能治國者。貴仁賢。貪於民者。好使佞等之言。一讀而再三歎之。嗚乎。世之爲政。賤焉而不取者。比比皆是也。而知能出於此者。抑有幾何邪。是余之所以深歎息也。

記砲制

近往往有倣製西洋牛角氏天砲者。皆底屬方圓之耳。甚誤矣。凡天砲之制皆有耳。可以顯昂砲身。獨此砲無之。惟底設方版。以螺定托上。令與托爲四十五度角耳。是邦砲家。目不能讀洋文。依倣圖象。杜撰作摸。嗚乎。觚不觚。觚哉觚哉。

弘化元年

題晴山寫生芋花

是芋花也。李氏本草云。芋不開花。時或七八月開有開者。抽莖生花。黄色。旁有一長萼護之。如半邊蓮花之狀。即此矣。余少時。北鄰芋畝有著花者。人聚觀之。余亦屢往。晴山子寫生。必此時事。辛巳蓋文政四年。余時十一歳。後二十三年。

象山平啓書。

嘉永五年十一月

題大槻磐溪蘭畫

磐溪文章之餘。予書于畫。無所不巧。予疎狂拙陋。不善一事。唯能飲酒喫飯而已。是日同會常青園。衆客令予題此畫。爛醉之餘。自書其愧。壬子復月十八日。平啓。

嘉永二年春

題臨孟頫畫

己酉春日。觀孟頫畫而傚之。余素不作畫。豈其比較似與否哉。聊寓興而致耳。予雖不作畫。讀古今之畫論亦多。而平日心頗知其得失。及執筆臨紙。而手腕不奉心君之命。其拙陋極可笑也。東坡云。有見於中。而操之不熟者。平居自視了然。而臨事忽焉喪之。信信然然。

安政四年春

題孔夫子畫像

人謂泰西之學盛。孔子之教必衰。予謂泰西之學行。孔子之教滋得其資。夫泰

西之學藝術也。孔子之教道德也。道德譬則食也。藝術譬則菜肉也。菜肉可以助食氣。孰謂可以菜肉而損其味耶。

安政五年冬

題合作畫

天保間。余之寓于江都玉池之瀕。與梁川公圖比鄰。交情尤親。往來無虚日。大槻士廣。亦時時來會。一日會飲。興及墨戲。余作石。士廣寫竹。公圖添枯木。亦一時之適也。既而各自東西。不得合并。戊午之秋。公圖歿於京師。後月餘。見此紙於古篋中。俯仰疇昔。爲之慨然。象山外史平啓。書于松城聚遠樓。

題二十拇人砲圖

砲身甚短。宜仰放者。是謂天砲。若長砲不便仰發之。必準地平。似當有地砲之目。今此砲實位其中。以人砲名之。不亦宜乎。

安政四年正月

示諸友

一器之濫。足累一兵。而累及於全伍全軍。兵法所云。器械不利。以其卒予敵者。

是也。然則一器之精足利一兵而利及全伍全軍亦可知已。然從古大將全材。不遺細事能躬造木牛製連弩則諸葛武侯一人而已矣。顧予罪譴廢錮之餘。何足以知此。但憂時之念。遭厄不衰。頃欲造為迅發擊銃以少圖報效意構已成矣。默算其利裝彈之捷。加西洋舊銃三倍。故有新銃一千可抵舊銃三千。兵士三千可當萬人。是省器省餉。而得力三倍。可謂一舉三利矣。近日器成。尚附諸友以試之也。諸友刮目其俟之。丁巳正月十日。象山平啓書。

舊銃宜重兵新銃宜輕兵此利用亦不可不審。啓又書。

文久元年春

鐎斗考

鈞是鐎斗也。而其別有三。鄭康成註周官鬱人曰。築鬱金。以煮之鐎中。是煮鐎斗也。博古圖錄龍首鐎斗下云。趙襄子使廚人操斗。以食代王。古者行食以斗。而此有枋有流。知其為盛羹湇之具。是盛湇鐎斗也。史記李將軍傳注曰。以銅作鐎器。受一斗。晝炊飯食。夜擊持行。名曰刁斗。是軍中鐎斗也。三者之制固有

不同。而先儒往往合爲一誤矣。余所藏之鐎斗。通蓋高三寸九分。深三寸六分。腹圍一尺零九分。口徑一寸五分。重一十六兩五錢。三足而有枋有流。蓋與口傍作轉軸。以爲開闔。肩腹與枋。各皆飾以雲雷。枋中空。下有小孔。似更接玉木長枋。形制純古。色澤瑩然。可爲漢氏以上物。按博古圖錄云。尊彝之器。考諸漢唐。曾無一二。而鐎斗冰鑑。復不覩商周之制作。然趙希鵠洞天清錄曰。鐎斗如今有柄銚子。而加三足。予曾見之。辨其質與色眞三代物。趙氏辨析精審。爲後來賞鑒家所宗。則其言必非謬妄。是與鄭氏周官注及圖錄所引。史記趙襄子行食之事。可以爲周代亦有鐎斗之證矣。覽者其有考焉。但其流在枋右。意度殊詭。博古圖錄・西清古鑑竝所□也。余竊以謂。是必盛湇鐎斗。而流之在枋右。蓋取其便也。古者固當有此制矣。何以知其然也。禮少儀曰。凡進食之禮。食居人之左。羹居人之右。管子弟子職曰。先生將食。弟子饌饋。周還而貳。唯嗛之視。再益曰貳。食盡曰嗛。弟子之周還者。宜跪坐而面當先生。視其所盡者而進之。方是時。操鐎斗以益羹湇。其流在枋左。則腹奄其前。儀容有慊。不若其在枋右之爲便也。古者固當有此制矣。而收錄家不及此者。偶未得耳。北宋已來。古器之出于泉壤者。不可

勝數考古博古二圖·集古錄等書。可概見也。而左國史漢所言諸器。無復孑遺。呂薛二王所收之器。今亦罕有存者。則無見於今者。古未必無也。亦安知不有他日新出土之器。與余所藏者耶。姑記所見以俟來者。

所藏の下に洞父は知等の字あるべきか

天保十年春

題蘇東坡像

或置諸鑾坡玉堂。或放之朱厓黃岡。衆皆謂先生之憾。余則謂先生之常。先生蓋進不淫。退不傷。凌厲萬古。麾斥八荒。而大肆其文章者也。天保己亥春。象山平啓子迪書。

天保十一年九月

加藤士遂所寫天文圖卷跋

觀乎天文以察時變。曆象日月星辰。敬授人時。蓋易書之至訓。聖學之所係。天官其可略乎。而歷世天文志。徒有其書。不復載象。故讀者往往但識星名。不可以仰觀焉。獨有隋隱者丹元子步天歌。乃能句中成象。言下見數。三垣列宿。燦然如臚陳於人目睫間。鄭漁仲云。嘗得此歌而誦之。時素秋無月。清天如水。長

誦一句。凝日一星。不三數夜。一天星斗盡在胸中。當亦非虛語也。加藤士遂就予講學。頃問及天官。予因出步天歌使讀之。又示秦侍郎觀象授時所載星圖。士遂深喜之。乃截抄歌句。錯以星形。大抵如秦氏之書。但歷代史志之文。以其繁擾省而不錄。然書有徵。圖有信。雖小童孺子。見者可以觀象。則比乎夫有書無圖者。此洵便矣。而士遂庚戌始業。壬子卒業。其精志亦可嘉也。士遂能充此精志。聖學之閫奧。倘可得而庶幾焉。何天官之足道哉。往矣。勉旃。毋替予期望之意。天保庚子季秋。象山平啓。書于江都之五柳精舍。

安政六年七月

跋石韞玉魯公三表稿跋

宋時蔡·蘇·黃·米四家。都出自顏行。然彼時所傳。爭坐位帖而已。其後太沖·明遠二序及祭姪文。先後流傳。而觀者始盡得顏行之變。此魯公謝恩三表。向未著聞。近始得見雙鉤舊本。其筆意遒勁鬱勃。與祭姪文神情逼肖。蓋出於一時手筆。急勒諸石。以壽於世。所謂天下之寶。與天下共之也。　道光丁亥秋。吳郡石韞玉跋。

魯公謝恩三表。宋元以來。未嘗有著錄者。至清道光丁亥。吳郡石韞玉。始獲雙鉤本而上石。其流傳來由不無可疑。然彼國版圖極廣。名山石室之藏。俟後世而發者。不可謂必無。且其筆畫縱橫。如春雲滃空。流水行地。自然妙甚。蓋非魯公恐不至於此。則不必深究其來處。與爭坐位・祭姪・鹿脯諸帖。並寘諸几案。誰其謂之不可哉。己未孟秋。象山平啓識于囂囂窩。

石韞玉云。宋時所傳顏行。爭坐位一帖而已。是則未深考也。米海岳嘗稱。少學顏行亦不曰止爭坐位。且歐陽文忠集古錄。收蔡明遠・寒食二帖。黃文憲集。論祭濠洲刺史文。一紙半紙而眞行草皆備之妙。朱晦菴集。載劉共父學鹿脯帖。則當時顏行流傳。其有數種。亦可概見。但無言及此帖者耳。啓又記。

安政六年九月

書竹叢軒遺稿後

河原氏吾藩名族。世爲執政參政。上人其子弟也。嗚呼。上人不爲緇流。以此才而能講明於聖賢之學。以補吾藩之政。則其施設必有可見者。而文學之不振。

決不至此極也。故余讀此集。不追慶緇林之有人。而先憾吾藩之失人也。感慨之餘。遂書數字。已未晩秋。象翁。

文久元年夏

跋停雲館摹勒子昂帖

松雪書有插花美人之背者。特其少作爾。如此帖。實其晩年妙蹟。老氣翩翩逼人。可備太令適派。韓子曰。求觀聖人之道者。必自孟子始。予亦曰。求入太令之門者。必自松雪始。

文久元年五月

跋陳老蓮九歌圖

陳洪綬。字章侯。號老蓮。明崇禎間諸生。中中後自稱悔遲。按畫徵錄。洪綬畫人物。軀幹偉岸。衣紋淸圓。細勁兼公麟・子昂之妙。其力量氣局。超拔磊落。在仇唐之上。蓋三百年無此筆墨也。（人物畫。盡力墨骨。而設色淺淡是謂吳裝。此圖是也。乃唐吳道玄法。甚不易善。在宋惟李公麟得之。外此則陳章侯一人而已矣。故有識者賞之。）此卷意態不凡。與浦山所云相符。非常工可能及。然亦猶有不滿意處。疑是臨本。惟予知其名。而未見其蹟。無從考驗其眞僞。他日當訪觀

而細覈之耳。辛酉蒲月。象山外史平啓書。

董玄宰云。米海岳九歌。左方有伯時畫。畫史所稱。與伯時經營九歌者。是已。陳章侯雅故尸祝伯時。嘗記其少時搨杭州府學公麟七十二賢石刻。閉戸數臨撫。又數變之。億此圖亦撫伯時本而變之者乎。惟右方太短。似翦去者。恐是有善書者九歌而後人爲規利。剖而分之也。殊爲可惜。此卷□佳紙數尺。當待好手名士。請書以補之。但恐世間竟乏其人爾。啓再識。

文久三年十一月

題紅蕉館帖

紅蕉館帖所收東坡九歌。字體雖佳。往往有筆不到處。恐是高述潘岐輩書耳。錄以俟至鑒。文久癸亥復月小盡。懷貞外史。

元治元年三月

題酒井雪谷筆孔子觀宥坐之器圖

孔子至周。觀桓公廟中之欹器。問於守廟者。此謂何器。對曰。此爲宥坐之器。孔子曰。吾聞宥坐之器。虛則欹。中則正。滿則覆。明君以至誠。故常置之於坐側。於

是弟子知持盈之道

元治紀元三月望。象山平啓敬書。

跋侍從公靜古軒三大字

門人佐久郡下縣村木内胖卿所藏。靜古軒三字。故松城城主侍從公所書也。一日胖卿攜來。示余曰。靜古軒。乃先人某書室之號。先人既夤緣紹介。以請扁字於先太守公。又以請記於曖翁先生。願得夫子一跋。以傳後昆。余惟。其先人孝行之美。既得曖翁之文。以發揮之。吾先公手書。記章嚴然。固亦足以傳于後矣。余不肖。何敢僭越輒贊一辭。抑聞。胖卿嘗有功于官。官賞之。胖卿自顧。積德不及祖考。而錄寵獨過於祖考。心不能安。遂固辭不受。官亦感之。更以旌其閭。嗚呼。常人之情。有一小善。則自視哆然若有餘。及其報也。歉然若有不足。是所以有善意而不能務。有惡念而不能去。終以淪沒於小人利欲之淵。而不能自拔也。胖卿有善而不伐。有功而不處。唯恐榮寵過於祖考。其謹愼之意。愿愨之

行與常流遠甚矣、夫其祖考盛德既如彼。胖卿志操又如此。子孫賢者善繼述不失墜、不待古箴而知之。其家寶之永傳固當亡窮已。則益無待於余言矣。顧請不置。乃別書幅紙以遺如此。文久癸亥九月下浣。松城佐久間啓又名大星敬書、

文久二年九月

賴三樹代書梁公圖答木內淸卿帖跋

余得罪九年。杜門謝客。文久壬戌除日蒙恩宥。今春已來始得復交于人閒。木內胖卿來視余此卷。乃梁公圖答其亡弟淸卿帖。而賴三樹所代書也。公圖以癯然一詩人。憂勞國事。崎嶇反側以終身。三樹一介書生。亦能奮然。不顧一時權臣之威虐。直言侃侃。殺身而後已。皆凜凜乎有生意於百世矣。其遺書遺墨足可貴重。胖卿其愛藏之。癸亥九月。象山外史平啓書。

尺牘類

與立田靜山

銀鹿は家僕の名

樓窗讀倦。睡魔將侵。銀鹿及門。接授瑤函。正襟拜展。頓覺醒爽。快喜可知。領所囑艾園刻印石四枚。極感隆意。雖不甚工。儘可供用。亦足以慰屏居之岑寂。如意亦朝人多執之。或云其權輿出於佛者。然三國志胡綜傳載。時有掘地得銅匣。開之有白玉如意。所執皆刻螭虎。孫仲謀以綜多識。乃問之。答曰。秦始皇東遊。以金陵有王氣。乃鑿諸山岡。埋寶物以當王氣。卽是乎。據此說秦時如意既有之。此時佛未入中國也。然則如意之起。不在于佛。而在于周秦之閒。會見問及。草草奉答。十二日。

羽倉簡堂書牘　弘化四年十月廿三日

用九頓首拜白。象山君足下。分袂三歲。渴想曷耐。貴州初夏之變。實爲一千年來未有之事。聞之信人。貴家萬福。而犀河之決。處置得宜。松城十餘萬口。因君逭魚腹之厄。是其平生所學。因事發見也。敬伏敬伏。若令當路之人早從君言。其績果不止此也。惜哉。江都三月下旬訛傳。貴州洪水。而明月有此變。亦異。儻有記災之著。幸見擲

示拙著三律撫要刻成。玆呈梧下。琴三位敍。有故不得上梓。然僕不忍遺棄。乃謄寫以呈。邇者文字禁嚴。是爲可厭。僕每謂。隱士志願易足。所冀不過文字禁緩。燈油價低而答不可得也。呵呵呵呵。客歲除夜詩。在官師墨翟。居野學楊朱。何視安身地。今吾非故吾。亦供一粲而已。早寒爲國爲道千萬珍嗇。　陽月念三寄

象山君梧右　　羽倉用九拜啓

嘉永元年十二月廿日

復羽倉君

自違型範三換葛裘。區區瞻仰。徒增馳想。去冬拜接教翰。又承惠所著刻三律撫要。欣感之劇。何可言宣。此書簡明精確。洵可謂吏學津梁矣。非先生素有長於斯學。何以能至是。所示琴三位序俊拔。可謂有故不得上梓。可惜也。不知三位是何人。其文氣酷似先生所自爲。何哉。去歲地震洪水之變。慘亦極矣。啓向有復溪琴書。曾見之否。其間略記災時之處置。如先生所傳。大有過其實者。嚮拜書時。卽謀裁謝以所問。雨災雜記稍成條理。因欲其卒業乃馳呈求教。然資

性不敏。加之公私多故。未能脱稿。是以因循迨今。復增懼恥。今而不謝。稽報之罪。增無以爲辭。因聊布此數字。蕎米兹土之所宜。寅奉一筐以表謝悃。勿卻爲榮。雜記得淨寫。續當納去。頃者所作文詩若干。瀆矚乞正。所示除夜詩妙絶。但安知今吾不爲異日之故吾。是爲朝廷蒼生所深冀也。尙祝爲道珍重。戊申十二月廿日。

元治元年春（北）

慰澁谷洒俠

啓慰疏言。令郎離去庭闈。倏返泉壤。聞之悲痛。欲諭不能。先生高年罹此酷禍。父子至情。哀慕何堪。然死生有命。脩短有數。世所不免。莫可如何。惟冀俯順變禮。節哀強食。毋效卜氏失明。無由躬弔。謹奉慰疏。不次。

與士固

士固足下無恙。聞昨夜之變。高堂亦不得免。崐岡之焰。果不擇玉石。可恨可恨。然士固富人也。非淵明柴桑里遇火之比。想付之一咲。卻爲一段詩料耳。惟甚

欲知動靜便此候問、不腆微物、聊表弔悃、勿卻幸甚。

與小林炳文

文久三年十二月

忽得飛報高居失火、聞之駭然。然北闈令昆季。竝得保全。毫無損傷、固足以知天相之有在也、但先世所傳。足下所裒。文書武具。服玩器用、蕩然掃空。可爲惋惜、然老夫常言、人之學問。不爲火所燬。不爲水所淪。不爲盜賊所奪。是爲眞學問、是平生與炳文共之者。炳文於此無少欠缺、則身外得失盈虛。不足復置胸臆、惟冀逆來順受、以著新功、外具不腆。聊申寸悃、無卻幸甚。歲暮更乞保愛。

豚犬深蒙眷念、佩荷無止。僕秋末再領命。得免京師之行。暮年之幸、不可勝言、兒子仰教。亦當寬假時月。此事既附便奉告。今不一一。

慰子存

安政六年四月

子存は立田舉水の字

驚聞小郎遽棄左右。去歲以來。慶門疊罹凶變。聞者莫不酸鼻。矧至親之愛。悲傷奈何、惟莫之爲而爲者天也。莫之致而至者命也。不知命無以爲君子也、願

先生以君子自任。釋然寛懷。勿過哀痛。不一。大星再拜。

與子存

梅霖鬱蒸。不審起居佳否。昨爲座右鐵如意作銘。重昇儀堅忠吉辰畀旨。志字易象楚辭。竝叶平韵。今用之。錄呈以發一粲。貴藏如意。銘字奇古。與世間汎汎者迴別。懇乞借第一覽。俾得取法。則佩服隆情無有既極也。

復子存

辱使書存問。併領柿菊之惠。兼審起居佳勝。感喜良深。閒僕中霜寒。苦喘咳兩三日。今則安矣。幸不煩念。秋氣日肅。更冀珍愛。

又

得墨教。喜知體候輕安。辱惠鷲羹。此屏居最所難致。極爲珍貺。銘佩何如。卽命小酌。當用賞異味也。肅泐片函。聊茲展謝。

又

得書悉知體中復古。深慰深慰。雨後無著。甚適人意。然亦大有如先生所憂慮者。華山百合畫幅。皆領。謹按二則。詩二首。竝精妙。一二注管見。且附妄評。取舍唯命。見示酒侯之詩。筆力亦可喜。往日屢見書此詩。想彼老得意作也。暑威如燬。得書知起居安勝。爲慰。蕈蔬之惠。尤見眞情。感感。鞆菓一棬納上。非爲報也。永以爲好也。不譔。

萬延元年春

又

昨辱誨答。且見借正字通。感感。鞾鞢兩字。正字通亦從革矣。然余意終未妥。竊謂此兩字竝當從華。其從革者。皆爲無謂矣。何也。凡連語以聲爲形容。如崔嵬澎湃鏘鏗槎枒之類。多從其所形容者。今此兩字。狀華相次比之貌。而無他義。是其當從華一也。按說文曰。𠌶艸木華也。从𠂹亏聲。凡𠌶之屬皆从𠌶。䔢榮也。从艸从𠌶。凡華之屬皆从華。而𠌶下出韡字。䔢下出皣字而已。是亦其例矣。若鞾鞢等字而不爲華之屬。則當何字爲華之屬。是其當從華二也。說文革部曰。

革獸皮治去其毛。革更之象。凡革之屬。皆从革。而其文五十有九。多是履鞮束帶兵器車馬之具之屬。而無一涉于草木花卉者。是其當從華三也。且漢魏人用字有假借者。有通用者。有奇古者。有變易偏旁。及增益減省者。隸釋等書所表出。可概見也。鞾韈本字從革。而假借通用變易從華。則固無不可矣。至于從革者爲本字。而反以從華者爲非。則未深考之過也。愚管如右。不知高明以爲何如。

同上

此書は前書に先ちて贈りたるものなるが如し。

又

寄惠鱇魚。珍感不可言。晩酌添數杯。但不能對喫爲憾耳。辱鞾韈兩字之辨。如接風采。非先生恐無此議論。第以玉篇正字通字典等書所載。悉爲金科玉條。無乃過曲謹乎。世變遠矣。字變易形。音變改韵。前人之誤。後人泥古不覺者。往往而有焉。故明清諸儒。辨難不賓。已著典要亦不爲尠。不必墨守字書所存也。然此說甚長。非短箋所能悉。他日面拜。當旣鄙懷也。不謹多罪。

與鹽野宜邦字子儀號筑水

頃承惠訪偶有急幹不得奉接悚惕何勝即日新霽涼氣可人體況想當清福柳生母氏昨宵診之得疾經日年齒亦高血脈雖未至衰弱無復刺絡之候因隨其症作飲劑數貼付之全治未易遽言第庶幾其小可耳氣球之制聞推算之水塵一尺立方重九分七釐八毫四絲則球徑三尺可盛十三錢八分三釐一毫八絲三忽六微四八得水塵以水六分和綠礬油一分沃之鐵屑便可得大水百分以酸塵八十五分水塵十五分成焉今欲得水塵十三錢餘大約要水百錢礬油十六錢水塵輕重與大氣比例如一與十一大氣球徑三尺重可一百五十一錢故作紙球合蛋清糊線之料約可重三四十錢而止則與大氣比猶如一與三其升騰沖空不容疑矣製紙球果當此法否見山田長谷川二子子細謀之可也

又

昨源吾來詳牘。此冬寒。琴書安好。沃慰之劇。向所示唐荊川選朱集。其所類萃。殊無倫次。不逮吳訥本遠甚。必是坊間僞託荊川。須更有品評判斷。不止如此也。十六本納去。檢收爲幸。東府之報。宛似不虛。臺閣諸公。狼狽可想。至本藩諸君。依舊安閑。無些狼狽之狀。是反可憂懼。誰能襄彼衝動器。而刺激震盪。可使至於渾身得汗耶。

（襄の字誤寫なるべし）

（安政四年冬）

又

昨晩面言。頗亦喜慰。經宿起居康勝。辭命準繩略就緒。但一二所附論說。塗抹難看。便欲下手刊修。亦思得戰國策。商量一番。有本請見借示。若無本。索之友朋。示及幸甚。左傳校本一本還上。布謝不宜。

（安政二年八月朔）

又

昨得面見。不勝喜幸。所語戰國策抄。想必善本也。甚欲一讀。暫時許借。何惠如之。杏村所托羅池廟碑帖。今封附賤价。足下若欲觀不妨開拆。卻乞命銀鹿。附

去杏村許幸甚八月朔大星拜。

又

領使書知起居佳勝喜慰何言。蒙惠馬乳一籃風味異常。極服眷厚宣謝難罄。惟期面賦大星再拜。

又

領手教知體履安佳至慰至慰。亞鉛若干斤。幸落吾人手。妙妙。當速付工人也。子專道得之策略全出于源吾眞可謂勇將下無弱卒矣。尙容面賦。

又

一昨飮酒夜坐。冒寒發熱。頭痛尤劇。至今朝滋甚。因自刺臂上。放血六十許錢。始少安然譚說猶難。今夕之會幸寬以一二日較快。當報聞也。念六。大星拜。

答常山　安政四年か

又承不鄙手札垂問且見惠黒作烏賊一盤。必是能州所出。珍感珍感。英艦之

報。僕所未聞。想當訛傳。榜葛剌支那。俱有爭戰。支那假令議和。印度之亂未易遽平蕩。日今決不至出兵於此邦。故僕深以爲疑矣。若其報果信。甚願知其曲折。勿吝來教爲幸。春寒多愛。

天保三年二月二十八日

與須田澹山

啓白。須田君足下。無恙。啓始聞論者每說人物。以足下爲處士之秀。私藏諸胸中矣。迨視其文辭。惟其風采。則有求好之志矣。天緣幸會。卒得所願。蒙識蒙愛。其爲歡喜孰加焉。啓也生六歳而學聖人之道。旁屬詩文。於今積十七年矣。所遭遇而知詞人墨客。不可勝選。直能成章務華。執筆要麗焉耳。未見有鉤隱繳微。而識出於衆人。如足下者也。本邦學者。率不審於聲韻。動輒出孟浪之言。而足下所著。韻脚之論。極爲精細。且聞其言。暗合於淸人笠翁緣灣等之所發。嗚呼。非足下好之樂之。研乎人之所不研。明乎人之所不明。其奚能若此之至。啓之性也。聞有雖凡細技小藝。秀於羣拔乎萃者。則百年之前。千里之外。尚必企

而仰之、況逢老成人於咫尺之間、而聞所未聞。焉得不縱今而相懇懇耶。茲呈
拙文數篇覽觀、取笑、令郎學業有暇、幸時使過。春寒未退。千萬保攝。啓白。

二月念八　　佐久間啓再拜

澹山須田君足下　　左玉

與鎌原輔三郎（天保九年四月廿二日）

一別杳然、深關鄙懷、即日麥秋、想起居佳勝、緬聞尊府政務頗繁。實然否乎。今
上拙文數篇、尊府若有少暇。伏乞遞致。無有小暇、擲返是禱。未緣瞻奉。千萬多
愛。（尊府は補三郎の父桐山をさす。）

四月廿二日　　佐久間啓拜啓

呈鎌原輔三郎君足下

與勝海舟書（文久三年八月二十五日）

前數日、聞有郵使、肅修蕪牘。後知誤傳、是以遷延未呈。二十三日遞接此月十（此の書牘は別啓書簡の

部同日勝安芳宛の漢譯なり。何の故に此れあるかを知り難し。

三日惠函。環誦敬悉。伏審秋氣蕭爽。閣府勝安。頌抃并至。僕頑健如恆。頗慰關念。承示云。天下形勢。彌覺危險。盡邦憂民。藎忱懇摯。溢於楮墨。感佩何似。僕亦越俎。痌懷時難。欲協和朝幕之際。轉禍爲福。反敗爲功。自謂籌之極熟。唯在上之用舍如何。要之天下無不可爲之事。唯患乏其材耳。橫覽東西。人才銷耗。豈勝浩嘆。垂詢僕蒙朝徵。旣具別函。賜閱爲幸。又聞金川鎖港。近將定議。措辭如何。深以爲懼。嗚呼。蕭牆分崩。禍害鼎沸。不知要路諸公。能運宏謨。匡濟時艱。躋斯民於雍和恬熙之治乎。伏惟使君素負重望。宜爲億兆生靈。糜軀徇公。發揮大公。闡昭王道。翼輔皇綱。天壤無窮。而德川氏顯統傳於悠遠。久而益昌。非君誰望哉。僕私抱遠圖。期見施設。語曰。機事不密則害成。故略載於此。若得徵用。將爲天下萬世。披瀝肝膽。決不爲愛軀以背淸議也。使君將以月杪或次月初。筮祇役大坂。天假良緣。贍對光儀。罄竭愚悃。質正高明。不勝多幸。今夕遣門下。齎書以呈。隨時綢繆。善自愛重。

八月二十五日　　　　啓拜手

勝使君臺下

再白。時氣欠順。疫癘流行。然多愈。不似客歳横罹酷禍者。緣醫工較精。奏效得力。負天下望者。愼加攝養焉。

別函所托。務煩尊量處措。幷祈傳諭貴門下。及貴紀綱爲幸。

與菅沼旭齋

（文政十一年四月十日。六日江戸上屋敷竝に長屋類燒す。）

拜別以來。無日不企望。忽聞急遞之言。知朱邸有火災。想焚煬之間。定相震駭。伏詢。當此時。尊體平安否乎。中心菀結。非紙筆所布也。偶因人行。聊此咨問。

初夏十日　　　佐久間啓再拜

呈旭齋菅沼君足下

左素

呈長野豐山君書

（天保四年九月十六日）

頃者見山寺久道。聞足下河原氏宅。講孟子養氣之章。而辨吾我之別曰。我泛

而吾切。我輕而吾重。古人所使用皆若是。以爲定論。因說浩然之氣曰。此氣非常人之所皆有。而孟子之所獨有。故曰吾。設爲人人而有。則何必曰吾。此吾我之辨也。不識足下之所辨信然否乎。果然則反僕之所聞。蓋孟子之意。以爲有斯性則有斯氣。性之渾然善也。人與堯舜初無少異。第衆人溺於私欲而喪之。堯舜則無私欲之累而能全之爾。性既然矣。獨在於氣可謂衆人皆無而聖賢獨有乎。且許氏說文註。吾字曰自稱也。我字曰施身自謂也。是後之說字家所從而爲言者。讀此二語。其泛切輕重不俟論也。然重究其淵源。吾从五口。五交午也。與人交語。必有吾之口體而後可矣。故吾爲自稱。或謂自一至五生數也。而在此焉。自六至十成數也。而在彼焉。暫舉在此焉者以口并之。爲別於彼之詞。而一二三四皆類而在其中。故亦爲舉類之言。我从戈手。手古垂字。有仇向我。我取戈當之。他人無與焉。故我爲施身自謂。一曰。手古殺字。又曰。从戈刀。又曰。从戈首設勿。勿旗也。象柄有三斿。我之執刀戈斿旗。其柄在我。殺活指麾。惟

我所思、私我之義、蓋自此焉出、皆施身自謂者也。夫言語交人。豈不亦泛而輕乎、取戈向仇、豈不亦切而重乎。左氏春秋傳曰。我張吾三軍。又云。我食吾言。夫三軍吾類、言亦有類、故稱吾、而張而食者。唯我獨也。故稱我。莊子之吾喪我。又吾無糧我無食之義。亦如此。若夫小男小女謂吾子。此吾類之所子而見也。如云我子、則我之所親生。詩所謂予行役是也。又謂父母之國曰我國而親之者。亦以我父母之無與於吾類也已。都考諸歷世聞人所爲之書言。見皆一轍而義自分明。豈謂孟子之文獨不然乎哉。夫盡心知性。於凡天下之言。無不有以究極其理而識其得失是非之所以然。則我之所獨長。非我知言邪。天地之正氣、盛大流行。浩浩然也。人人所得而生者。初孰無之。然人不知所以養之之方。故從而虧矣。今善知此方而善養此氣、使充塞于天地之閒。則我之所獨得。非我善養吾浩然之氣邪。如足下之所說則反此矣。語曰。毫釐之差。謬且千里。故其瑣瑣者尚究窮之。況其大若山海日月者哉。若此章亦孟子之山海日月也。

豈可忽焉哉。而今足下易稱古人云云。夫所謂古人則果誰歟。君子之學務毋自欺欺人。其於所知。則浸浸乎充之。其於所不知。蓋闕如也。故其忠信足厭服衆心。人之取式也弘。若或不然。雖才如子建。博若張華。皆棄於仲尼者也。雖然足下儒林翹楚者。豈自欺欺人之徒也邪。想必讀乎吾之所未讀。聞乎吾之所未聞而云云也。夫明而教之。君子所以開導後學。足下請勿有所隱焉。啓白。

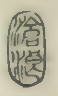
復飯島紀鄕通稱楠左衛門

啓白。領去月二十九日手教。感慰曷已。未審入冬來體氣何似。伏惟淸康。前日貴家誤火。燒寢衾二領。幸而天助吉人。得容易沃滅之。雖然令眷弱質。遇之震駭。大損正氣。爾後時時妄語。似若有魘。而偶言有爲僕見怒之事。念之爲勞。先是僕讀熊澤子雅樂解。曰箏曲有菅攬者。即協河圖之數。會聞令眷識之。私心欲學之。既而思。宜俟來年足下榮歸之後而效之。然好事之性不能徒止。便遣紙乞之譜。令眷辭。不乞遂已。蓋聞心煩者細事攪意。想令眷之言。必向之事而

已。而城下或傳其言以爲啓有穢行。昔阮公。鄰家之婦當壚沽酒。公恆從其婦飮。醉則眠其側。主人始已疑之。伺察終無他意。公與鄰人。情非同袍。誼非知己。故伺察而後可矣。豈聞流言不信其行者之事邪。僕雖固無步兵之識量才能。至于其節操。誠所不量馬耳焉。是足下所以熟知而誼過於骨肉也。囂囂之徒。動輒以小人之慮。揆君子之心。不亦足捧腹而笑乎。頃造貴庭候之日。向安痊。勿以過念。時氣增寒。請愼眠食。啓再拜。陽月十八日。

佐久間啓頓首拜
この啓は印章

紀鄕飯島君足下

小啓。近日號改滄浪。偶鐫一。

今具高矚。

天保五年十二月十八日

呈桐山先生

啓懇請府廷。而遊學。惟刻精讀書講習之間。而不顧其他。則其所宜。是以雖親戚故舊不敢頻頻通問。獨在吾老先生。承恩極深。荷愛極厚。誠不當以此例視。然士大往來者相踵藩邸。先生動止時時聞之。箋簡虛文。亦似有不必然者。用

是動輒數句不奉狀。故其跡若甚簡伉者也。先生不以爲罪。曩者惠以手書。副以雄篇。辭旨慨慨。勖啓進修。亦寧不感大人君子之篤於仁愛。卽欲獻所爲文。以少答所遇之萬一乎。自惟。啓之在家。蓋刀槍之奔走。射騎之馳騁。夙夜倥偬。莫敢遑息。加之資質惛愚。而才力不能周於物。則固陋寡聞。人亦當不深責。今也廢絕諸伎。從事文學。而若學步邯鄲。未得其能而失其故步者。則雖以啓之下愚。亦豈無慚愧之心哉。其所以久不爲報者。蓋亦欲俟有少進而成之爾。然而天星一周。歲亦莫止。而遂無復所加。則其爲愧恥益深矣。既而自悟曰。先生之明。固亦悉啓駑鈍。則宜無非分之望。然則觀其迂迴。將亦不必深咎。而反有惻然者。於啓雖有所極愧。然或因先生之指點。而少知所以自覺。則啓之爲幸多矣。遂錄近文兩三篇。附箋呈覽。伏望從政之暇。有痛以正之。承次君仲實拔擢番頭。長君曰唯婚娶禮成。老先生之歡喜奈何可言。豈不亦欣抃而慶乎。新海苔廿紙。聊效獻芹之意。幸勿擯斥乃感。維時栗烈。伏冀爲國爲道自加保重。

不具

桐山鎌原老先生帳下

臘月拾八日

門生佐久間啓頓首拜啓

屬有賤幹書不能謹伏乞海容

贊類

神后贊

思神后受神眷顧專錯如甞時維天皇在懐神異三韓卽服生而聰睿玄監深遠臨照四極崇信文教振揚武義永貽典則升爲明神陰相黎庶諸産蕃殖福善禍淫威靈燀燀天下攸惕千載追道原念聖烈祗頌厥德

天保八年四月

聖像贊

仲尼之道不異乎我我之道不異乎仲尼人皆知仲尼之爲仲尼矣而不知仲尼之卽爲我矣人皆知我之爲我矣而不知我之卽爲仲尼不欲知仲尼之卽

爲我斯已。若其必欲知仲尼之卽爲我。則舍我將何之焉。不欲知我之卽爲仲尼斯已。若其必欲知我之卽爲仲尼。則舍仲尼將何之焉。天保八年歳次丁酉夏四月。

鳥居勝高贊

昔有解揚。宋楚以平。奥平有勝高。茯國以興。舍之而楚莊沖天。戮之而甲武隨泯。雖然。我唯節是守而已矣。敵國之榮枯。於我何有哉。立義著名。志士之所烈。得已濟衆。君子之所越。象山平啓贊。

石贊

石之一角可品崑岷山之一石可探寶珍。天地有鐍。造化有源。戞然一叩。詭祕解紛。

望月翁贊

萬延元年（北）

喜怒不見。匪勉而能。智策機警。匪學而名。有忠于君。有惠于民。有禮于士。庶類

古人一

文久三年七月

正誼館恩田君遺像贊

崇崇德門。巍美世令。君嗣徐慶。憲言是徵。邦思其弼。人厚其生。擧善興能。朝野振聲。靡然其形。腴然其情。麗辭揚芬。妙翰含英。天趣爾雅。風神瓏瓏。霄漢月白。秋江水淸。象山平啓拜。

弘化元年

金兒雪庵先生贊

若林之老。爽俊且良。勤儉自牧。不敢緬荒。六十五歲。氣體健康。家道以腴。於前有光。爲善之門。天降之祥。尙其子孫。式之莫忘。

萬延元年

白井翁像贊

屋廬華潔。裳衣明鮮。于酒于棊。詠歌自歡。中國雍熙。無復外患。令君安樂。七十一年。

白井翁歿。嗣子子康。以像贊屬余。余雅不樂銘墓贊像。每有請者輒卻之。然

子康與余莫逆。故重違其請。破例而爲之。

大久保喜八眞贊

大久保喜八は南原村の人。

問其人則丈夫。校其行則妾婦。吾得而賤之。視其年則童稚。校其行則成人。吾得而敬之。是夫也。身久在卒伍。而晩劣得伍長之命。然余聞之。其持志之壯。其守身之正。其演武技之捷。其育子弟之盛。雖士大夫不及此者固多。不待爭訟而論已定矣。然則疇有以遭遇之不至。而病之者也邪。

安政四年十一月

霞峯林大輝像贊

人皆未知。而曰予知。而不顧學也。人皆未能。而曰予能。而不欲通也。嗚呼大輝。己知而自視埳然。如有不足。己能而自省慊然。執禮日以恭。蓋其志將以集中西之學。而攬其長。兼古今之宜。而收其功。孰謂中道而殁。以貽同志之恨於無窮。嗚呼。其言不可得而聞矣。觀於此者姑就是而想像其德容。庶幾足以振頽靡而起懦退。砭傲惰而發塵蒙也耶。

大輝畫岩石賛

今夫山。一卷石之多。然則雖泰山。亦此石之積爾。學者察之。善之微不可以不爲。惡之微不可以不去也。

清虛子題

炎帝賛

過毒七十。始定藥劑。繕生救死。茲世之濟。天長地久。人蒙其惠。何其仁耶。吁嗟。

子迪甫畫幷賛。

邵康節先生像賛

眼光朗朗動於梧桐上月。髭毫鬆鬆奮於楊柳邊風。足不出戶庭而直游天地之外。手能探月窟而默知鬼神之情。汪洋浩大。貫徹精明。詠歸之襟懷。毋寧使曾點獨見稱於尼父風流之豪傑。豈惟喜子房善藏用於赤松。蓋有用而無心。故不可得而器。有體而無迹。故不可得而名。嗚乎。是其所以爲先生也歟。

象山啓

碑類

力士雷電之碑

力士雷電。信濃小縣郡大石邨人。姓關氏。父曰半右衛門。母後藤氏。雷電生彊有力。異甚。其兒戲不類人所爲。睹者皆駭。年十八九。身長六尺五寸。肢幹如鐵。而貌温厚。自然可親。來江戸。從力士浦風。學相撲。無幾何。以其技冠于天下。雷電之號。都鄙籍籍稱之不置。上自大將軍公。以洎列侯。屢召使鬪技而觀之。亦莫不偉其狀。愛其貌。而唶其傀力之無能偕抗。初雷電入相撲羣。其所對敵。動有殘傷。苦難鬪觝。於是其技之老相議。禁其手勢尤難當者三。人始得安與之相角。然卒莫之能勝也。歷選力士之徒。蓋建櫜以來壹人而已矣。嘗以技仕松江侯。後辭歸。以文政八年卒家。壽五十九。雷電去世二十七年。孫義行欲述其祖之蹟。傳于無窮。乃礱石於其邨之道旁。特來謁辭。昔越前秀康卿在伏見。召名妓國兒。觀其舞而泣。人怪問之。曰。今天下女子千萬人。此女爲第壹。吾生丈

文久元年夏

此の碑其の碎片を所持すれば膂力を得との迷信より此れを碎き取るもの多く損壞甚しきに至り近年再建せられたれ共其の筆蹟眞を失ひ原碑に比すれば實に霄壤のみならず識者の痛惜する所なりとす。

文政八年より文久元年までは卅七年なるを廿七年と記せるは蟄居中を憚りたる

夫不能爲天下第一流大有愧於此女故泣。今予爲雷電識于斯碑。亦殆將泣也。系曰。

注意の爲なり。稿には三十七年とあり。

信山崇峻。信水清駛。神氣所鍾。迺生瓌偉。吁嗟雷電。力武罔比。閒世壹出。固天恪爾。我爲上人。不能魁琦。爲爾勒銘。心焉忸怩。

嘉永二年十月

山極高明退筆銘

山極高明。稱茂吉。世居信之金井。爲人寛簡慈祥。聞人有爭訟。輒循循解之。人亦往往爲之渙然。故終茂吉之世。里無大訟。善書札。學其筆蹟。執弟子禮者。六百人。散居於信越之閒。年七十三。病終于家。門弟子追慕不已。乃需其退筆於其家。瘞爲一冢。詣予請銘。銘曰。

上古結繩維厥初。降及後載易以書。頡皇創體鬼夜呼。經天緯地贊聖謨。統記羣事通情途。匯汝靡能世所須。無晨無昏恆勞劬。方圓曲直與心俱。有功吾人崇且許。襄而盍之何其蕪。師氏手澤此其餘。弟子視之泣漣如。謀設幽

坎東藏諸。隆師有典情非虛。鑽辭豐碑詔鄉閭。嘉永二年己酉冬十月。象山平啓子明撰。

雜

象山書院學約

天保十二年五月

予至陋劣。於道未有所得。諸生不鄙。相集於此。以問學爲事。意甚盛。予愧無能爲助。然爲諸生慮者。亦爲無窮極。故述學約數條。以效忠告。此中豈有不率是約者。若其或有之。諸生鳴鼓攻予教導不嚴之罪可也。

凡在此中者。以聖賢之學爲志。除去世俗浮華之習。讀書務以小學爲先。次四書。次五經。以及周・程・張・邵・朱諸子之書。務在循序致精。毋得鹵莽躐等。非理無益之書。不許妄看。

言忠信。行篤敬。乃可以從事於聖賢之途。不然則雖多才藝。不可與入堯舜之道。

立志卑陋。以聖賢之事爲不可爲。舍其良心。甘自暴自棄。唯以工文詞博記誦爲能。存心欺妄。不知爲己之學。好爲大言。互相標榜。修飾外貌。專務虛名。營營一生。枉爲小人者。世間比比有之。諸生可以自訟。

凡學以德行爲首。才識次之。文藝最末。

凡讀書。必斂身正坐。看字斷句。緩徐讀之。務要字字明亮。若用心不專。目視他處。手弄他物。雖多取遍數。必無長進。

凡作字。不問巧拙。切要專意把筆。務求字畫齊整。毋得輕易狂率。潦草斜歪。其戱書硯面几案及器物上。尤爲不雅。切宜戒之。

治事肄業。俱當有常。不得朝更夕變。一作一輟。

書院中。常宜收斂莊肅。毋得不盥櫛讀書。毋得衣帶斜寬。坐立偏跛。移步當安徐。不得跳足急趨。

居常須要簡默。其有所言。必須聲氣低俏。毋得大聲喧聒。

容貌詞氣。德之符也。故溫恭退讓。和易雅醇。吾知其爲君子之徒。狂躁傲惰。放誕無恥。吾知其爲小人之徒。可不儆乎。

戲言戲動。不惟妨廢學業。抑且蕩性亂志。童子輩尤宜戒之。

筆硯几案。書劄箋紙。務要安頓齊整。不許敧斜雜亂。

朋友同處。當知久敬之道。狎昵戲謔。尤非親友之禮。

日間言語行事。須準於經義而出之。其有不合。宜洗心靜氣。以求其當。正是格致之尤切者。

已上數件。皆是古聖賢教人之良規。非予之私言。諸生其愼聽。毋忽。

天保辛丑五月　佐久間啓識

增訂荷蘭語彙例言

嘉永二年十月

原本左行に始まり右行に終る今便宜のため普通に書き改めたり。

一原本荷蘭語彙。蓋有題法爾末・瑪璘者。近又有泐乙蘭獨・馬兒珍・亞臥論・鑾埓列・狄扢爾等諸書。然惟泐乙蘭獨・馬兒珍。可稱專書耳。其餘蓋爲彼國學

拂郎察語者而設焉、各書並以拂語爲上卷、而以其國語解之。國語則在下卷、而拂語釋之、是其證也、文化中。荷蘭人徒弗久在崎港、頗通本邦之語。乃與荷蘭通事數輩謀、取法爾末下卷、換其拂釋以我邦語。以便於邦人爲荷蘭學者、其間雖不無疵瑕、斯學之筌蹄、無過此者。故今仍依其本、採摭瑪璘以下數書、會萃而附益之、并註邦譯。

一徒弗所譯、毎多崎港俗語。故有鄙俚可厭者。今雖不可悉加釐正。亦略潤色。庶幾不刺人目。

一荷蘭之語、分部次序。有古今不同者。今一以沕乙蘭獨爲主。但如聚成語。沕氏註諸首語之下、初學往往難於檢査。因姑依法爾末・瑪璘諸書之例。悉列首語。

一此書本爲初學。故毎語原註。務取簡短。然語同而義異者。一一註明。庶無遺漏。

一漢字註以洋語。洋語釋以漢字者。始於英人莫(モ)栗(リ)宋(ソン)。荷蘭通事吉雄永保。取莫氏之書數種。翻英爲荷。以纂一書。今語下往往存漢譯者。多從吉雄氏之本。

一凡語。馬兒珍所收。而載在沕氏學藝語彙中者。槩置不錄。蓋將續此刻而亦刊其書。以貽諸同志。故逆避其重複。

一語註略例。馬氏雖似太簡。卻爲便捷。今多據此。其記號解說。附於首卷。閱者詳之。

安政五年春　象山氏識

春秋辭命準繩例言

一…………………………(闕)

一…………………………(闕)

一所錄雖零言碎語。必標其姓氏。或書名。使觀者識其所出。

一每篇中所錄。多他意相承。故不分世代爲次。但原記一篇。較以世次錄之。

一怪誕不經之說。一切不收錄。至其收錄者。則雖似乎怪。而有其理者。故辨正焉。

一余始讀。雖有語說不安其義。及得宋槧太平御覽而校之。乃一讀豁然。是知。本固亦不可不擇。因以御覽爲正。參以他本。取其義勝者。以爲定本。爲之註釋。以授子弟。凡觀書當正其文字。辨其音讀。然後以求其義理。故余審其音。乃精其義。

一題外之辭可註者。亦以圓爲句。如戲之盟。子展・荀偃・伯輿・主叔之訟。范宣子判之。是也。

一……………………………………………………………………（闕）

臨淸社會約

是社。桐翁先生久涖牛耳。洎先生歿。社廢矣。今二三同志。謀尋舊盟。復社會。乃因先生會約。約法三章。如左。

一午飯畢卽赴不待促。夜二更則散。

一序齒不序爵。

一晩餐設具。務要簡素。唯酒無巡數。深淺自斟。主人不勸。客不辭。下物宜一兩器。倘有他餽遺可佐歡者。添爲三器。亦在所不禁。

右三章違者。每事罰一巨觥。

虎狼病治驗一則

文久二年九月

九月朔夜。予讀書於南堂。初更後。內子來側訴曰。胸痞嘈雜。幾欲作嘔。兼有惡寒。肌膚生粟。而視其腕。予診兩寸脈。微而濇。以爲胃家不祟酸飮爲祟。用芳香散。加炭酸苦土進一服。惡心不可忍。遂發嘔吐。忽曰。手指酸痲。延及臂腕。予察是虎狼病。使用吐根一分六釐。吐酒石一釐六毫研和。以微溫湯送之。更快吐一二次。吐已。扶就枕席。蓋以衣被。用接骨花煎汁。再煮薄荷葉・葛密列華行之。手足厥冷。手指皆屈。啓之不能伸。如足指則或時下。或時上翻。每其屈翻。節節

有聲、左手攣急尤甚。乃刺左臂放血可七十錢、更用前藥、加阿芙蓉丁幾三十滴、忽弗滿二十滴、薄荷油五滴與服、兼以硝酸蒼鉛一釐六毫、和白糖少許行之、轉筋入腹、病勢益猛、精神昏瞀、不省人事、六脈沈伏。呼吸迫窘。牙關緊急。口吻歪喎、眼睛上竄、微見角膜、顏容殆非生人。乃以龍腦精塗抹胸腹。命侍者強摩擦兩手、用巾浸芥子湯、罨覆兩脚。少冷則易之。又用芥子泥攤紙貼腓與肩背、更作芫菁膏、搭膊及頂上、發作少息。輒行前藥。如此數四。未見少效。忽記瓦爾華尼設衛動機。有效於此症。乃裝所嘗手製者。令侍者以一導子握在病者手、予右手執一導子、用左手大中二指。按兩肩端。乍見眼睛下降。呼吸亦稍安舒、驚喜際、予掌適觸天庭。便覺攣急頓息。手脚如故。予滋喜其妙效。令觸此機多時、病勢大減、嗣後雖亦發作。纔用此機抵觸天庭。昏瞶忽醒。轉筋卽息。不啻影響、洋書固云。此機有效於此病。而未載其妙之至斯也。以甘汞三分二釐。和白糖、分爲二十貼。每一小時。與一貼。水瀉二行。

二日。食機全缺。發作亦稀。用泡劑兼行甘汞如昨。午後。少思食。進稀粥葱羹加椒葺。水瀉一行。

三日。處方依前。但以齒艱微爛。停行甘汞。痙攣屢發。輒用衝動機鎮之。

四日。每食後必微發作。食止便觸衝動機數刻。則不復發作。處劑依前。下利黑物。

五日。氣力頗復。處方如昨。晚獲小赤鱻魚。新鮮可喜。和粥少食。心腹不安。即吐。

六日。行劑如舊。胃氣漸振。

七日。痙攣不發。食機益進。用藥依舊。

八日。倍快。處方依舊。

重陽。入浴。嚴行食禁。

十日。復故。

予看護閒。與一二侍者。亦往往覺惡心嘈雜。腸中雷鳴。兩脚下節弗溫。知是

微感其毒使用冰片精塗擦胸腹以接骨華・葛蜜列華・薄荷葉・泡劑服芳香散噏丁香若冰片令僮婢摩兩脚或咀嚼榴皮用鹽水送下或抵觸瓦爾華尼機復常而後止由是竝皆無恙嗟乎今秋冷疫流行彌漫於信州高燥之地自八九月益甚或至闔門感傳死者相接古今所未曾聞予初不讀書不知醫固不能以救內子急患亦安得能自衛衛人而擧家保安無恙也孰使予知讀書通曉醫理者豈非天寵也哉

天保七年七月

鑑銘

鑑照吾前猶吾心明鑑不見吾後猶吾心有蔽而不明故聖人不鑑鑑而鑑人不察吾面而察於吾一心天保丙申初秋

硯銘

靜以制動簡以馭煩持堅守黑君子萬年

弘化二年春

寛卦幷引

左衞門尉川路公。天資超邁。加以講學之功。馭煩應卒。綽綽有餘裕。弘化丙午之春。從普請奉行轉奈良奉行。將西上。啓謂。如今寛和之時。施爲宜隨之。因作寛一卦以奉贈。隨時之義。平日與公論之詳矣。公今觀於此。當有不言而契。不約而同者也。

寛。有孚亨。可貞。利用居上。以往。吝。彖曰。寛。緩也。寛有孚亨。內不疚乎心。外不迫乎物。從容以履其信。是以亨也。君子素其位而行。不願乎其外。可貞也。利用居上。得衆也。以往吝。偏乃傾也。天地寛而萬物盈。聖人寛而五教行。寛之時用。大矣哉。

象曰。屋宏大。寛。君子以容物御衆。

初一。碩人之寛。无交害。无咎。象曰。碩人之寛。其志正也。无交害无咎。明功也。

次二。寛如。其栗如。吉。象曰。二之吉。得中也。

次三。寛居之。得其甫田。利用耕耨。象曰。得其甫田。所獲弘也。利用耕耨。擇諸躬

也。

次四、有厲、象曰、四之有厲、未得衷也。

次五、寬有制、從容以和、有譽。元吉。象曰。寬有制。可以協邦也。

次六、寬无制。不及事、无攸利。象曰。寬无制。其道窮也。

弘化三年春

雜言

火能自熱。故能熱物。水能自寒。故能寒物。雷霆能自動。故能動物。規矩權衡自能正平。故能正平物。凡天下之物。皆莫不然。然則君子之欲治人者。豈可不先自治其身哉。

著力推究。須在有字處得力長進。須在無字處。

人欲無病。莫若乎寡欲。果能寡欲。不惟可以醫身之未病。亦可以醫心之未病。

赴湯火。踏白刃。武夫之小勇也。燭理自克。君子之大勇也。有大勇者。小勇可能。有小勇者。未必有大勇也。

恃一藝之能者。不足以與語大道。善一節之美者。不足以與成大德。精神死了。天下無可濟之事。

又

易中除純卦。外乾者七卦。除同人外鮮不凶者。外坤者七卦。除明夷外鮮不吉者。然同人所以無凶咎者。以柔得位得中而應乎乾。則固柔之德也。明夷卦雖不吉。而能遠禍患者。以內文明而外柔順。則亦未嘗不由於柔也。是知外剛者有招凶之道。外柔者有致吉之理。學易者宜發深省。

有聞見之識。有眞知之識。眞知雖有從聞見得者。畢竟與聞見自別。

物一發聲。雖爲獲不能止其響。此聲樂所以動人。

治河。急流者。急折之。緩流者。緩折之。治人之法。亦宜然。

今世之醫。以參附殺人者多矣。而人亦不怨之。然其殺人之罪則不可逃。今世之政。以寬貸賊人者多矣。而人亦不尤之。然其賊人之罪則不可辭。

天地間之事。不外於理法情三字。然情與法。不幸不得兼。則棄情而從法者也。法與理。不幸不得兼。則棄法而從理者也。

士君子欲有所樹立。須執心堅確。如銅柱鐵礎。一切外議。略不爲其所撼。彼譽之則喜。毀之則忿。是之則安。非之則疑。志氣浮躁。局量褊淺。其人已不免於流俗。尙何足以任天下之大事哉。

平居講學窮理。心下已有定見。而應接之際。有持守不定者。只是涵養不足。

人以小廉曲謹。繩英雄豪傑。固不可也。然在英雄豪傑。則小廉曲謹。亦不可不留意。韓魏公嘗言。學者行己。當如金玉。不受微塵之汚。及其成德。有所容受。亦爲無害。此言甚好。

嘉永二年六月

○

逍遙樹竹之間。槃礴琴尊之側。寄情風月。觀化魚鳥。或爇香兀坐。靜玩物理。閑居無事之樂。豈有過此者哉。嘉永己酉晩夏。象山平子明。

○

頃余徜徉於山間。拾得一塊石。紫黑色。高三寸長倍之。峯巒矹硉。奇秀無比。寘之几案上甚宜。毎焚香其前。煙雲繚繞於岩岫間。久而不散。使人蕭然有丘壑之想。象山子明。

○

士不貴無過。善改過爲貴。善改過固爲貴。善償過尤爲貴。國家多事之際。能爲難爲之事。能立難立之功。償過之大者也。

○

予得罪歸鄕。舊廬廢蕪不可居。乃僦居於望家莊淸夏軒。地勢殊勝。結構亦不安。所謂聚遠樓。此西臨小巷。東北樹竹扶疎。絕無城市氣。四山屛列。遠邇掩映。凭欄瞻眺。嵐光襲人。雖咫尺不出門。悠然如在山林之中。不自知罪譴之在此身矣。

○有學問文章而不知防海之要者。不可以爲有學問文章。知防海之要而不存忠勇義烈之志者。不可以爲有學問文章。知防海之要。存忠勇義烈之心。而身在順境者。不可以爲必也。才備三長而身處逆境者。始可能辨事。

○先君教大數之法。自萬萬曰億。至萬萬正曰載而止。余謂數不可盡于此。因問。萬萬於載。謂之何。先君奇而笑之。是余四五歲時事。

○大丈夫。猶迅馳騁當自千里。何依倚人。彼非附驥尾。不能致遠者。信蚊蠅輩已。

山田長儒

甲寅春日爲山田弟書。

○人皆可以至聖人。而君子之學。必至聖人而後已。不至於聖人而後已者。皆自

宮下主鈴

棄也。孝其所當孝。弟其所當弟。自是而推之。則亦聖人而已矣。天保九年泰月。
爲宮下仁兄書。象山啓。

安政元年

懐煙嵐勝處

予遊佐野。而樂溪山泉石之勝。旣而得民棄地。乃欲寘一矮樓。名以煙嵐勝處。時時遊往。以爲風月主人。及稍鳩工。適爲事所逼。遂攜家而東。住都下四年。其風聲永韻。未嘗一日不往來于懐也。

天保元年

二十歳文稿

藤田五美誄幷序

藤田喬字五美。不幸短命。春秋二十二。文政十三年夏五月丙戌卒。嗚呼哀哉。
乃作誄曰。

蘭秀石間。馨香遠施。嗟茲五美。故有其儀。羈貫志道。鉤隱探微。冠仁服義。干櫓書詩。孝實烝烝。友亦怡怡。在彼無厭。在此乃宜。雋聲淸劭。朝野是奇。多才豐藝。

振耀于時。意若涌泉、言若鶯囀、發口可詠、下筆堪賞。尋奉公命、進句讀師。誘掖諄諄、後進胥隨、弗圖弗意、乃疾乃羸。昊天不弔。吉往凶歸。我悶德者。禍無勝斯。維此天秩、宜不顚墜。如何斯人、凋摧其委。似天欺我。其將訴誰。嗚呼哀哉。哀哀嚴父、皦皦慈母、昆弟宗姻、號慟疾首。行雲徘徊。悲風颼瀏。歸禽失歸。走獸忘走。嗚呼哀哉。昔吾與君、講德討儒、通志爲鄰。修好爲徒。行必接肩。坐必同氈。情和琴瑟、分過友于。庶幾永年、與共歡娛。何居奄忽。別我夙徂。嗚呼哀哉。探篋開匱。展視遺稿、乃文乃詩、或隸或草。誦讀反復。采色翾好。想見其人。臆增懊惱。嗟夫萬物有始必終。死生之理。豈有不同。身沒名垂。志士所崇。行以述美。德以誄隆。啓也故友、哀慕竭忠。是旌是告。傳後無窮。嗚呼哀哉。

奉送鎌原先生之江都序

啓聞、江都四方之所輻輳、繁華無雙。是以來于斯土者。多爲此見鼓動。遊蕩花柳、沈湎卮酒、以失其身。垢黷公家。而罪及父母者。往往而在。第下慮其如此也。

五馬將還。必選其人於執政中。命之俾代而鎭焉。苟非沈斷而習於事。端愨而勤其務。進退取舍。無擇於遠邇親疎。有文武威風。可畏而信者。則不可矣。今茲伯州鎌原先生。當其選。及是命也。上下莫不悦者。皆曰。今世子在藩邸。年猶未也。選其左右。而愼其身。審父子君臣之道以示之。明文武之教以敎之。以輔翼之。而道諸道者。固在是人而已。又曰。是先覺而富文辭。果毅而嗇武力。能恭能儉。爲內外所宗。望位益高。謙遜滋甚。斯其所感動者遠矣。如是而在任。自大夫士。以至步卒之屬。其無惡矣。啓嘗辱先生之知。受教誨於左右。深荷栽培之恩。其鑽仰道德也久。頃聞前言果信而有係。啓及其發日。雖黯然以傷其別。然亦竊美斯行。乃遂書之。拜手以獻云。

子讓は金兒丈助の字、雪庵と號す。

與金兒子讓論印文書

頃者適町田氏。視爲足下刻印章。其文曰。海津司農府長。啓私心甚惑。計足下倉卒囑之。故偶謬誤耳。不然。則我松城未嘗有司農府者。足下以何當之。其以

大廄當之歟。抑以代官歟。果以大廄則既有藏奉行矣。以代官則代官者。郡奉行之吏胥。安得稱司農府哉。若夫以郡奉行當之則其爲之長者。宜別有其官。然則足下等。乃爲之屬胥。何可均乎。啓聞之師以古之道。苟今之世。固識者之所譏。何異乎。夫契丹且以唐山之名當皇國之官。固所當憚。而況名實不當乎。竊考海津者。城地之名。而非封境之稱。時俗不言海津侯而言松城侯不言海津封內而言松城封內。然則直曰松城郡奉行。似宜爲當。伏惟足下善書。人咸識之。其字畫有時過誤。非所病也。至于躬當重任。而舛戾其官名。豈惟一人之恥哉。故勤勤以云也。足下有說。請以相告。不宣。啓再拜。

呈桐山先生

嚮賜改竄拙稿。併示澁谷氏所呈之書。幸甚幸甚。夫澁谷氏所奬與。啓固不敢當也。惟使不佞啓。名聞于江都。爲人所推奬者。職由先生栽培之恩。豈勝感激欣躍之至哉。茲錄拙文若干首。謹乞雌黃。伏惟以時自重。

送菅沼子之江都序

菅沼九兵衛七月廿五日側役兼世子（幸良）側役を命ぜらる。

菅沼子長啓十九歳。辱忘年之交。至其吐出肺肝而論時務。不啻若阮籍之於王戎。張鎰之於陸贄而已。文政十三年秋。菅沼子自監察。選爲世子中謝。將祗役于江都。啓將有竊仁者之號。送之以言。用輔其志。而況其請之惓惓邪。遂謂之曰。嗚呼。任重而道遠者。不可以不弘毅也。苟弘而不毅。則儜弱而難立。毅而不弘。則狹隘而無以居之。能弘大剛毅。而陳善閉邪。責難於上。以成世子之德。社稷之福。豈有如焉者乎哉。子之功勳。亦豈有加焉者乎哉。子之同列。先在江都。必當有志于茲者。請以啓之言。爲始會之資。

呈鎌原先生

八月二十一日。門生佐久間啓頓首再拜。致書伯州鎌原老先生執事。曩者啓讀孟子。喜其義理極暢。自時而後。每作一議論。必取法於孟子。細加揣摩之功。以索其神化。蓋追昌黎老泉之轍也。乃錄而呈覽。則遭執事塗抹者。多於前日

矣。因竊自疑畫虎不成。反爲狗者乎。然未爲改之也。執事祇役之前一日。語啓曰。近著之文。意趣稍可。然多傷冗。宜勉收斂之。奉教之後。務攘其繁冗也。頃讀唐彪讀書作文譜曰。少年之文。要英發暢滿。東坡答人書曰。惠示之文。詞氣意皆不凡。然但傷冗。後當去之。今則不可也。又歐陽公答人書曰。凡文去其繁。不必勉強。勉強簡之。則不流暢。宜待自然而至也。啓竊惑焉。抑初學而學極暢如孟子者。其不可邪。將啓之所以學焉者。不可邪。願聞金誨。拙文數篇。附書送上。請賜改竄。朝夕冷矣。伏惟爲國自重。啓頓首再拜。

復林掌教

藩の儒者林單山通稱丈左衛門

久闕致誠。乍接教字。爲感何已。承問以周官中有玉人之名否乎。嘗記考工記畫繢鍾氏之下有玉人。而啓不藏其書。不敢以爲信然。請更他問諸。惟昭亮。屬有過客。忙迫作答。不謹。

呈桐山先生

九月十六日啓啓。霜露條深。伏惟老先生執事。尊候動止萬福。昨府廷以啓勤勤勉勵。爲學不怠。奬賜銀子三枚。啓何敢當之。且慚且懼。退而思之。世之噂噂嗒嗒。以費天日。墮窳敗業。而利口體者。或將奮然植志。退然自克。持身務業。而有所進焉。啓嘗讀國策。觀涓人買馬骨。不期年千里之馬至者三。昭王從隗始。士爭趨燕。焉知今之不如古也。然則府廷以啓爲隗。榮幸何若哉。於戲。使啓不佞。有茲褒譽者。是豈非執事導訓憂楚。鼓舞孱駑之所致哉。恩德極厚。無任感激負戴之至。近文數首。冒昧乞正。伏惟鎭撫外。以時爲國自重。謹啓。

祭岡野先生文

維文政十三年。歳次庚寅。九月二十九日。石城岡野先生卒。啓念。先生氣醇學高。以能教導後生。因羞奠以祭。爲文而弔之。其辭曰。

惟先生。弘大溫恭。和而不同。魁然異表。長者之風。文學蚤就。于吾藩雄。博覽強識。孰敢竝躬。教導不倦。德豈非嵩。於士大夫。若在麻蓬。天之故生。其意胡空。是

有是鞠適貽厥功餘帙纂說實發屯蒙盈案遺文。采色瓊瓏。春榮秋殺。在彼蒼穹於公安然。誰者不惆過八趨九。年其非降於公無憾。我哀誠窮。懷公長逝。難復接丰設祭泣下文以明衷。嗚呼哀哉。尙饗。

岩鼻記

出松城郭門而西過矢代・戶倉・坂木・鼠・四驛。傍清湍而行。又數百步。山皆積石。峯然起於路側岈然相峙。嶔然相角。突怒偃蹇。鬱峍崔巍。如豺兒從獸。而獼猨乎林莽如鶻鷙掠禽而軒翥乎雲表。落落欲崩焉者。類蜂房之懸於簷。簇簇欲垂焉者象肺肝之露於胸丹蔦紆之。青蘇雜之。綺縮繡錯。殆難名狀。其下則怪石森然屋若者堂若者。榻若者。棊若者。其餘當路而立。臨流而臥。偃仰疎數。爭爲奇狀者不可勝數也。游斯地也。則日與磊落之狀謀。耳與潺湲之聲謀。有若柳子厚。得鈷鉧潭西小丘而喜者矣。庚寅冬十月。余訪文師於上田而歷斯地。胸中不能無感。遂援筆以記其大都云。

鳳山禪師文稿序

鳳山禪師名は活文竹庵と號す松代藩士森條七の二男なり佛門に入り小縣郡神川村龍洞院の住持となる後老して神科村岩門に居り次いで上田に移る。

鳳山禪師。吾華音之師也。蚤熟梅子之機。無不通明。同閧其道者。不得攀而倫之也。昔者寓居于長崎。與清客陳氏之徒交。妙通華音。又善鼓琴。可謂偉人矣。近年卜居於上田。嘯咏乎雪月。若文若詩。發洩禪機。庚寅之冬。奉訪師廬。師出文稿三卷示啓。啓得與覽焉。寂寥乎短章。舂容乎大篇。發口成章。殊不費力。似工非工。似不工非不工。瀏瀏焉瀛瀛焉。所謂不可以智知。不可以識識者邪。師徵啓敍首簡。嗚乎。凡庸之匠。豈可操斧於公輸之門乎哉。然不敢辭者。貴師命焉爾。

呈恩田賴母書

啓再拜。執事之家。世執國政。輔翼明君。崇道樂善。孳孳用辨別邪正。明白是非。爲國家成大益。以爲己任。及于執事之躬。丁非常之顧遇。與尊大人並在政府。能相協同。而繼列祖之志。澤流如春。威行如秋。德業追日而積。名聲從風而傳。

一本如之何の上に可あり。

誠所謂國之爪牙蕃垣者朝野之所盡瞻仰也。不亦偉乎。啓年齒幼弱。才質愚陋。然聖人之書無所不讀。至其至理精妙。雖未盡知曉發明。亦粗知世之得失。事之可否。意欲施之事業以報國恩久矣。然啓狂簡之性。不能求合於人。以爲世俗之態。與己合者與之往來。不合者雖接坐一席。不欲強與之語。如是。故雖不敢爲大過革怪。衆罵詈詈而至。其有所言。孰爲聽之。噫時也。勢也。如之何。然啓聞昔日仁人明其道而不計其功。正其義而不謀其利。雖不能盡爾。奚可向風順從。汲汲恐不得合乎。日者執事徵啓高堂。醉之以酒。飽之以德。且謂啓云云。情誼有如知己。啓是時也何幸。乃得執事。可謂深井之內。仰視白日之正中也。今有一事於此。欲盡其愚而陳其衷。嗚呼。其聽之者果誰邪。計聽之者。非吾執事而誰。輒云其事爾。頃聞府廷喜爲心學之說者。賜食力石村農夫某。引諸中街之待客館。日講其書。令八街市人。封內百姓。就而聽之。又使上毛遊民某。巡乎封內村閭。一日夜而唱其學。是何事與。孔子之言曰。民可使由之。不可使

知之。夫聖人設教馭民。固非不欲家喩戸曉也。然不得使之知。故但能使由之耳。使民知之者。聖人其猶不能。而況其他乎。而又況心學者流乎。孟子曰。一日暴之。十日寒之。雖天下易生之者。未有能生者也。假如民可使之知。心學者流。能爲使民知之。一時導之。多時廢之。其能如之何哉。鄙諺所謂。小兒之戲者也。孔子云。無欲速。無見小利。欲速則不達。見小利則大事不成。縱令有得小利何爲政者。而務是瑣瑣之事也。況萬萬無此理。且彼心學者。果文公之流乎哉。啓嘗覽其鼻祖石田勘平所著之書。多取佛氏之意。叨錯於聖賢之旨。爲利口之說。以裝飾之。鄙俚其言。以逞愚夫愚婦之心。易解易入。而將使人狙狂。或以鄕愿。誠似而非者。此之於儒。猶莠之亂苗。紫之亂朱也。夫異端行則正道廢。其勢不並立也。昔者周之衰也。楊墨塞路。天下不入楊則入墨。二帝三王列聖羣賢之道。於是蔑如也。皇國欽明天皇之時。西藩百濟。始獻佛氏之像。及佛氏之書。厥后馬子廏戸之徒。專崇信其法。終至于弑天皇。戮忠臣。簡慢乎神祇之祭祀。

亂朱一本專朱に作る。

導一本合導に作る。

絕滅乎、歷世之典籍亂亦僭矣、自時亂亡相繼、不有能深知皇國之典、明聖賢之道以救其弊、永絕根本者、逮于今、旣爲痼疾、末如之何也、噫嘻、其可歎矣。夫佛氏之言、比之楊墨、理爲近焉、故其爲害也大矣。心學之言。比之佛氏、猶有父子君臣夫婦昆弟朋友之情、理爲近焉。其害所以爲過於楊墨佛氏也。楊墨佛氏之害、尙如前所陳。何況過焉者。豈可不疾乎哉。豈可不懼乎哉。而今府廷有此舉者何也、夫先君牧民之典。悉在政府。聖賢爲政之轍。具存冊籍。可師可法者、昭昭乎、赫赫乎。啓雖下愚。必知府廷不捨先君之法。去聖賢之敎。而喜異端害甚之道以導斯民也。徒以五穀登熟人人和樂。乘農耕之暇。時爲封內衆庶。娛一時之聽耳。烏有明君在上。賢執政在下。諸俊乂贊之。而信彼心學等事哉。然啓竊謂。一時之事。雖宜如無益無損。而百姓冥頑。素無知覺。苟視府廷所爲如是、則將舉一心謂眞喜心學。曰松城儒生徒繁。尙不使之講導。今令此學者曉喻吾輩、何可不敬信之乎。遂相倣習。釀狙狂鄕愿之風。人人自以爲是。而不

（内の下一本於あり。）

可以內諸仁義之塗。則終三綱壞。而九法斁。然則其不爲禽獸者亡幾耳。是非細故也。啓甚恐焉。請禁遏之。斷邪曲之徑。絶衆庶之惑。盡以常典。使之由之。欲更誨之。宜以其所費於彼。賜諸儒生。令之講聖賢之道。以修其孝弟忠信。庶幾亦有益哉。今反覆爲茲言者。唯欲因執事之力。以除國家之大害。非敢務辯給云爾也。伏惟執事。哀其狂妄。矜其愚戇。諒察其辭。而採納焉。啓惶恐再拜。呈頼母恩田君執事。臘月十三日

駁仁齋東涯

或曰。仁齋東涯。豈不誠儒者哉。經術深湛。而德誼可尊。余曰。彼焉得爲誠儒者乎。語有之。通三才。謂之儒。且夫士鷄鳴而起。堅苦勤學者。爲經國而已矣。仁齋嘗過娼家。婢邀而上樓。仁齋不知其爲娼家也。以爲所云義施者。視其花孃爲其妻妾兒女。乃嚙菓喫茶。多謝而出。娼家亦覩其容貌。不強停之。仁齋歸謂人曰。不圖今人有好施者如是也。東涯購接柄三絃之匣於骨董鋪。置諸座右。盛

乎抄册門人有三角者見之曰此是妓女藏三絃匣也先生請卻焉東涯曰子勿妄言三絃共柄長矣豈得藏斯匣乎夫俗間易知之物猶不知之焉足以與於國事乎然則假如記五車之書直書廚之類耳彼焉得爲誠儒者哉

伯母哀辭

禀柔惠兮揚淑德守柏舟兮有儀則實孝友兮勤且勞刑宗姻兮行彌高外溫顏兮內嚴肅克敬慈兮長幼睦嗟蒼天兮胡所憯懿斯人兮禍遂仍弟君孔悲兮甥姪涕洟孫子哀慕兮號慟欲斃樹萋萋兮振長柯蟲唧唧兮鳴庭阿邑人思兮個匐至皆隱憂兮摧情志離陽昭兮赴幽冥魂殘殑兮竟難停嗚呼已虖跡何追心存德兮日想姿靈其知兮不知邪辭有闋兮哀無涯

呈鎌原先生乞齋記書

月日門生佐久間啓頓首再拜白古人有言曰智者之千慮有一失愚者之千慮有一得宜乎啓才質昏愚素無足言者而屬讀孟子至于其養性之論恍然

似若有得意謂。人之所以人而別於禽獸者。不外於是也。遂以名其齋而後廓然無所拘乎彼慊然無所苦乎此則凡所屬接於日月星辰。風雲雨雪。山石流水。鳥獸魚蟲。草花木實。天壤之所儲蓄。無一非養焉之具也。其所自葺自塈。自灑自掃。爲吾齋固亡論也。出而坐人之堂。亦猶吾齋也。不惟此而已。且遊于江都。則江都爲吾之齋。暮遊于浪華。則浪華爲吾之齋。若是尙小矣。夫天地一大舍也。所在皆是也。何啻江都浪華之間哉。然則爲吾之齋。不亦廣且大乎。是所以誇爲愚者之一得也。若得乞執事之辭以揭之。朝夕誦其文字。而娛樂其內。則其爲養。亦如何哉。伏願幸命一辭。其賜實重于九鼎矣。啓頓首再拜。

藏古書畫者說

有以藏古書畫聲於鄉者。延余而誇示焉。書則冷泉嵯峨之宸翰。及空海菅公橘速成佐理道風尊圓王。畫則殿司之仙佛。元信之聖賢。雪舟探常之山水鶴馬。在乎異方。則無論於元明。多是魏晉齊梁唐宋之名蹟也。其他所稱於世者。

半皆在焉若夫袈裟之美牙籤之飾粲然爛然實足以驚人目矣然竊考之贋物居十之九而眞者甚尠余歸家而嘆之家大人耳焉曰啓何嘆之妄也豈爲其有名而無實歟吁今世之任使人者得無有甚焉乎。凡書畫者玩好之物也已苟心有所適於吾足矣何強論其眞僞爲若夫任使人則不然矣。國家之治亂蒼生之安苦繫焉。豈可忽矣哉然而任使人者。多取彼鄉愿闇然媚於世而能合乎流俗者而於特立守道之士則置而不顧矣。啓彼之不嘆。而此之嘆。豈可不謂妄乎然彼之事非吾事其不嘆之。固宜矣。爾則書畫之眞贋亦何與汝事余憮然久之憤默而出。

與山寺源大夫

霜威日甚體氣佳否頃聞吉田之民萬平者。年二百三十。秋間抵都下。而謁于大朝。嗚呼。天壤之所育。誠有不測之奇異。乃知我之武內。彼之彭祖。未必妄傳也。想斯人必有言行異於衆而足稱者。足下定聞知的信。請爲言其略。忙中不

能縷縷不宣。

不孝

體有貴賤。有大小。賤小者何。皮膚毛髮是也。貴大者何。心志是也。子曰。身體髮膚。受之父母。不敢毀傷。孝之始也。賤少者毀傷之。人皆知其所以爲不孝。至於心志之毀傷。反不知其所以爲不孝。弗思之甚也。

精誠

論者動云。民之頑訟。難以親愛馭。苟欲以親愛。羅陷於彼之罟擭。余謂斯言殆誤矣。昔李廣出狩暮歸。適見寢石。以爲伏虎也。引弓射之。矢飲其羽。精誠之所加。石猶爲之開。況非石乎。吾之所親愛。果毋自欺也。孰不戴之。孰不率之。其所以難之者。固精誠之未至焉而已。孟子曰。行有不得者。皆反求諸己。其身正。而天下歸之。此之謂也。

呈鎌原先生書

臘月念八日、門下生佐久間啓頓首再拜。獻書桐山鎌原老先生執事。卽日極寒、伏惟尊體動止萬福。啓伏執事門下五年、辱愛辱奬。諄諄訓誨。啓發悱憤。謝何可旣、啓春來私思業、今年內讀經史、肄武技之餘。作文百首。乞班郢之正。以有少進越、昨日旣滿百首、然而蹇足趑趄。步趨不進。奈空勞夏楚之力。不能副執事之意、何歎息蹴踖、且慚且懼。直期來年、更奮勵揣摩。重煩執事耳。前日所呈拙文數首、暇隙斧正。幸甚幸甚。伏惟時當歲杪。三陽將轉。薄因飛鴻。敬致賀忱伏望亮存、道路非局、官守有限。奉拜末由。無任神馳。惟萬萬爲國以時自愛。啓頓首再拜。

四書經註傍釋

大學

天保十二年藩命によりて著述せられたるものなり。當時四書全般に亙りたるものなるべく察せられたれども、今は只この大學の部のみ京都帝國大學圖書館に保存せられたり。先生の自筆本にて頗る珍とすべきものなるが故に、其眞面目を傳へんが爲に特に乞うて寫眞版としたるものなり。

四書経註傍釋　大學

大學章句序

大學之書古之大學所以教人之法也蓋自天降生民則既莫不與之以仁義禮智之性矣然其氣質之稟或不能齊是以不能皆有以知其性之所有而全之也一有聰明睿智能盡其性者出於其閒則天必命之以爲億兆之君師使之治而教之以

復其性此伏羲神農黃帝堯舜所以繼天
立極而司徒之職典樂之官所由設也三
代之隆其法寖備然後王宮國都以及閭
巷莫不有學人生八歲則自王公以下至
於庶人之子弟皆入小學而教之以灑掃
應對進退之節禮樂射御書數之文及其
十有五年則自天子之元子衆子以至公

卿大夫元士之適子與凡民之俊秀皆入大學而教之以窮理正心脩己治人之道此又學校之教大小之節所以分也夫以學校之設其廣如此教之之術其次第節目之詳又如此而其所以爲教則又皆本之人君躬行心得之餘不待求之民生日用彝倫之外是以當世之人無不學其學

焉者無不有以知其性分之所固有職分
之所當爲而各俛焉以盡其力此古昔盛
時所以治隆於上俗美於下而非後世之
所能及也及周之衰賢聖之君不作學校
之政不脩教化陵夷風俗頽敗時則有若
孔子之聖而不得君師之位以行其政教
於是獨取先王之法誦而傳之以詔後世

若曲禮少儀內則弟子職諸篇固小學之支流餘裔而此篇者則因小學之成功以著大學之明法外有以極其規模之大而內有以盡其節目之詳者也三千之徒蓋莫不聞其說而曾氏之傳獨得其宗於是作為傳義以發其意及孟子沒而其傳泯焉則其書雖存而知者鮮矣自是以來俗

儒記誦詞章之習其功倍於小學而無用
異端虛無寂滅之教其高過於大學而無
實其他權謀術數一切以就功名之說與
夫百家衆技之流所以惑世誣民充塞仁
義者又紛然雜出乎其閒使其君子不幸
而不得聞大道之要其小人不幸而不得
蒙至治之澤晦盲否塞反覆沈痼以及五

季之衰而壞亂極矣天運循環無往不復
宋德隆盛治教休明於是河南程子兩夫
子出而有以接乎孟氏之傳實始尊信此
篇而表章之既又為之次其簡編發其歸
趣然後古者大學教人之法聖經賢傳之
指粲然復明於世雖以熹之不敏亦幸私
淑而與有聞焉顧其為書猶頗放失是以

亦陋也　采撰　車材相合曰輯　中間

忘其固陋采而輯之間亦竊附己意補其

傳君子　僭上　過分

闕略以俟後之君子極知僭踰無所逃罪

禮記學記君子如欲化民成俗其必由學乎　此四字已盡大學體用之旨

然於國家化民成俗之意學者脩己治人

語助　宋孝宗年號　即我文治五年也

之方則未必無小補云淳熙己酉二月甲

子新安朱熹序

大學

大舊音泰今讀如字

朱熹章句

子程子曰大學孔氏之遺書而初學入德之門也於今可見古人為學次第者獨賴此篇之存而論孟次之學者必由是而學焉則庶乎其不差矣

大學之道在明明德在親民在止於至善

程子曰親當作新○大學者大人之學也明明之也明德者人之所得乎天而虛靈不昧以具衆理而應萬事者也但爲氣稟所拘人欲所蔽則有時而昏然其本體之明則有未嘗息者故學者當因其所發而遂明之以復其初也新者

革其舊之謂也言既自明其明德又當推以及人使之亦有以去其舊染之汚也止者必至於是而不遷之意至善則事理當然之極也言明明德新民皆當至於至善之地而不遷蓋必其有以盡夫天理之極而無一毫人欲之私也此三者大學之綱領也

知止而后有定定而后能靜靜而后能安
安而后能慮慮而后能得

后與後同後放此○止者所當止之地
卽至善之所在也知之則志有定向靜
謂心不妄動安謂所處而安慮謂處事
精詳得謂得其所止

物有本末事有終始知所先後則近道矣

明德爲本新民爲末知止爲始能得爲終本始所先末終所後此結上文兩節之意

古之欲明明德於天下者先治其國欲治其國者先齊其家欲齊其家者先脩其身欲脩其身者先正其心欲正其心者先誠其意欲誠其意者先致其知致知在格物

治平聲後放此○明明德於天下者使天下之人皆有以明其明德也心者身之所主也誠實也意者心之所發也實其心之所發欲其必自慊而無自欺也致推極也知猶識也推極吾之知識欲其所知無不盡也格至也物猶事也窮至事物之理欲其極處無不到也此八

者大學之條目也

物格而后知至知至而后意誠意誠而后心正心正而后身脩身脩而后家齊家齊而后國治國治而后天下平

治去聲後放此○物格者物理之極處無不到也知至者吾心之所知無不盡也知既盡則意可得而實矣意既實則

心可得而正矣脩身以上明明德之事也齊家以下新民之事也物格知至則知所止矣意誠以下則皆得所止之序也

自天子以至於庶人壹是皆以脩身爲本

壹是一切也正心以上皆所以脩身也齊家以下則擧此而錯之耳

其本亂而末治者否矣其所厚者薄而其所薄者厚未之有也

本謂身也所厚謂家也此兩節結上文兩節之意

右經一章蓋孔子之言而曾子述之

凡二百五字

其傳十章則曾子之意而門人記之

也舊本頗有錯簡今因程子所定而更考經文別爲序次如左

凡千五百四十六字　凡傳文雜引經傳若無統紀然文理接續血脈貫通深淺始終至爲精密熟讀詳味久當見之今不盡釋也

康誥曰克明德

康誥周書克能也

大甲曰顧諟天之明命

大讀作泰諟古是字○大甲商書顧謂常目在之也諟猶此也或曰審也天之明命即天之所以與我而我之所以爲德者也常目在之則無時不明矣

帝典曰克明峻德

峻書作俊○帝典堯典虞書峻大也
皆自明也
結所引書皆言自明己德之意
右傳之首章釋明明德
此通下三章至止於信舊本誤在
沒世不忘之下
湯之盤銘曰苟日新日日新又日新

盤沐浴之盤也銘名其器以自警之辭也苟誠也湯以人之洗濯其心以去惡如沐浴其身以去垢故銘其盤言誠能一日有以滌其舊染之汚而自新則當因其已新者而日日新之又日新之不可略有間斷也

康誥曰作新民

鼓之卽所以舞之　井田學校是作之之方[illegible]是作之之術　民心之[illegible]

鼓之舞之之謂作言振起其自新之民也

此記新民之[illegible]　[illegible]　上天眷顧之命　[illegible]

詩曰周雖舊邦其命維新

詩大雅文王之篇言周國雖舊至於文王能新其德以及於民而始受天命也

民風丕變　[illegible]

是節言自[illegible]　卽所謂止於至善也

是故君子無所不用其極

新民之本　新民之化

自新新民皆欲止於至善也

右傳之二章釋新民

詩云邦畿千里惟民所止

詩商頌玄鳥之篇邦畿王者之都也止居也言物各有所當止之處也

詩云緡蠻黃鳥止于丘隅子曰於止知其所止可以人而不如鳥乎

緡詩作綿○詩小雅緜蠻之篇緡蠻鳥

山高爲岑蔚草木盛貌皆鳥所棲不易到之處

聲丘隅岑蔚之處子曰以下孔子說詩

之辭言人當知所當止之處也

此言傳之事　以德言

敬無間斷　心無遺欲　緝熙之實敬屬心止屬事

詩云穆穆文王於緝熙敬止爲人君止於

就敬止中指出其目之大者下文敬孝慈信同之　敬之事

仁爲人臣止於敬爲人子止於孝爲人父

西伯部中八百諸侯　朋友之交

止於慈與國人交止於信

於緝之於音烏○詩文王之篇穆穆深　無淺

露迫切之意　美也　對絕　對斷　用　體

遠之意於歎美之辭緝繼續也熙光明

也敬止言其無不敬而安所止也引此

而言聖人之止無非至善五者乃其目

之大者也學者於此究其精微之蘊而

又推類以盡其餘則於天下之事皆有

以知其所止而無疑矣

詩云瞻彼淇澳菉竹猗猗有斐君子如切

如磋如琢如磨瑟兮僩兮赫兮喧兮有斐

格物致知骨角磋琢可尋故況如

君子終不可諠兮如切如磋者道學也如

誠意正心脩身 玉石渾堅難治故況行

意誠心正

琢如磨者自脩也瑟兮僩兮者恂慄也赫

身脩

兮喧兮者威儀也有斐君子終不可諠兮

以人言本也 以理言用也

者道盛德至善民之不能忘也

澳於六反菉詩作綠猗叶韻音阿僩下

版反喧詩作咺諠詩作諼並況晚反恂

衛人美武公而作

鄭氏讀作峻○詩衛風淇澳之篇淇水

名澳隈也猗猗美盛貌興也斐文貌切
以刀鋸琢以椎鑿皆裁物使成形質也
磋以鑢鐋磨以沙石皆治物使其滑澤
也治骨角者既切而復磋之治玉石者
既琢而復磨之皆言其治之有緒而益
致其精也瑟嚴密之貌僩武毅之貌赫
喧宣著盛大之貌諠忘也道言也學謂

講習討論之事自脩者省察克治之功
恂慄戰懼也威可畏也儀可象也引詩
而釋之以明明明德者之止於至善道
學自脩言其所以得之之由恂慄威儀
言其德容表裏之盛卒乃指其實而歎
美之也

前節明明德之止至善此節釋新民之止于至善

詩云於戲前王不忘君子賢其賢而親其

親小人樂其樂而利其利此以沒世不忘也

於戲音嗚呼樂音洛○詩周頌烈文之篇於戲歎辭前王謂文武也君子謂後賢後王小人謂後民也此言前王所以新民者止於至善能使天下後世無一物不得其所所以既沒世而人思慕之

愈久而不忘也此兩節咏歎淫泆其味深長當熟玩之

右傳之三章釋止於至善

此章內自引淇澳詩以下舊本誤在誠意章下

子曰聽訟吾猶人也必也使無訟乎無情者不得盡其辭大畏民志此謂知本

猶人不異於人也情實也引夫子之言

而言聖人能使無實之人不敢盡其虛

誕之辭蓋我之明德既明自然有以畏

服民之心志故訟不待聽而自無也觀

於此言可以知本末之先後矣

右傳之四章釋本末

此章舊本誤在止於信下

此謂知本

程子曰衍文也

餘也亦作羨

此謂知之至也

此句之上別有闕文此特其結語耳

右傳之五章蓋釋格物致知之義而今亡矣

此章舊本通下章誤在經文之下

閒嘗竊取程子之意以補之曰所謂
致知在格物者言欲致吾之知在卽
物而窮其理也蓋人心之靈莫不有
知而天下之物莫不有理惟於理有
未窮故其知有不盡也是以大學始
敎必使學者卽凡天下之物莫不因
其已知之理而益窮之以求至乎其

極至於用力之久而一旦豁然貫通焉則衆物之表裏精粗無不到而吾心之全體大用無不明矣此謂物格

此謂知之至也

所謂誠其意者毋自欺也如惡惡臭如好好色此之謂自謙故君子必慎其獨也

惡好上字皆去聲謙讀爲慊苦劫反

誠其意者自脩之首也毋者禁止之辭
自欺云者知爲善以去惡而心之所發
有未實也謙快也足也獨者人所不知
而己所獨知之地也言欲自脩者知爲
善以去其惡則當實用其力而禁止其
自欺使其惡惡則如惡惡臭好善則如
好好色皆務決去而求必得之以自快

足於己不可徒苟且以徇外而爲人也然其實與不實蓋有他人所不及知而己獨知之者故必謹之於此以審其幾焉

小人閒居爲不善無所不至見君子而后厭然揜其不善而著其善人之視己如見其肺肝然則何益矣此謂誠於中形於外

故君子必愼其獨也
閒音閑厭厭鄭氏讀爲黶○閒居獨處也厭然消沮閉藏之貌此言小人陰爲不善而陽欲揜之則是非不知善之當爲與惡之當去也但不能實用其力以至此耳然欲揜其惡而卒不可揜欲詐爲善而卒不可詐則亦何益之有哉此君

子所以重以爲戒而必謹其獨也
曾子曰十目所視十手所指其嚴乎
引此以明上文之意言雖幽獨之中而
其善惡之不可揜如此可畏之甚也
富潤屋德潤身心廣體胖故君子必誠其
意
胖步丹反○胖安舒也言富則能潤屋

矣德則能潤身矣故心無愧怍則廣大寛平而體常舒泰德之潤身者然也蓋善之實於中而形於外者如此故又言此以結之

右傳之六章釋誠意

經曰欲誠其意先致其知又曰知至而后意誠蓋心體之明有所未

盡則其所發必有不能實用其力而苟焉以自欺者然或已明而不謹乎此則其所明又非已有而無以爲進德之基故此章之指必承上章而通考之然後有以見其用力之始終其序不可亂而功不可闕如此云

所謂脩身在正其心者身有所忿懥則不得其正有所恐懼則不得其正有所好樂則不得其正有所憂患則不得其正

程子曰身有之身當作心忿弗粉反懥敕值反好樂並去聲○忿懥怒也蓋是四者皆心之用而人所不能無者然一有之而不能察則欲動情勝而其用之

以用言與本文以體言者異凡經物而失其正者於此鑑衡之體不得其正

所行或不能不失其正矣

知覺　走作　即是心不正　以下皆是身不脩之事　色　聲

心不在焉視而不見聽而不聞食而不知

此釋本因之所有猶且不知覺而況義理之精乎　此謂身之不脩由心之不在

其味

以馳於念慮等之故　檢束　以下即小節註第八語脉難分斷故併在此

心有不存則無以檢其身是以君子必

存者　常存之法　使之歸於正　必察以下朱子補出本文未言之意正心要法以示萬世學者

察乎此而敬以直之然後此心常存而

身無不脩也

指前節　五官百體從事而皆得其正

此謂脩身在正其心

右傳之七章釋正心脩身

此亦承上章以起下章蓋意誠則眞無惡而實有善矣所以能存是心以檢其身然或但知誠意而不能密察此心之存否則又無以直內而脩身也○自此以下並以舊文爲正

所謂齊其家在脩其身者人之其所親愛而辟焉之其所賤惡而辟焉之其所畏敬而辟焉之其所哀矜而辟焉之其所敖惰而辟焉故好而知其惡惡而知其美者天下鮮矣

辟讀爲僻惡而之惡敖好並去聲鮮上聲○人謂衆人之猶於也辟猶偏也五

者在人本有當然之則然常人之情惟其所向而不加察焉則必陷於一偏而身不脩矣

故諺有之曰人莫知其子之惡莫知其苗之碩

諺音彥碩叶韻時若反○諺俗語也溺愛者不明貪得者無厭是則偏之爲害

而家之所以不齊也

此謂身不脩不可以齊其家

上文反說故此亦反結示從文勢無甚深意

右傳之八章釋脩身齊家

所謂治國必先齊其家者其家不可教而

不能脩身以教之

能教人者無之故君子不出家而成教於

國人

不外乎教家之道　兼身

國孝者所以事君也弟者所以事長也慈

此三句概言家國相通之理以發明上文

者所以使衆也

此明治國必先齊家之義

弟去聲長上聲○身脩則家可教矣孝

孝弟慈不待身脩故註必從身脩說

弟慈所以脩身而教於家者也然而國

之所以事君事長使衆之道不外乎此

孝弟慈

只從家國道理上說不在一人身上說

此所以家齊於上而教成於下也

至誠　赤子之欲　不中其欲

康誥曰如保赤子心誠求之雖不中不遠

矣未有學養子而后嫁者也○

對上節　孝弟慈

中去聲○此引書而釋之又明立教之

本不假強爲在識其端而推廣之耳

一家仁一國興仁一家讓一國興讓一人貪戾一國作亂其機如此此謂一言僨事一人定國

僨音奮○一人謂君也機發動所由也僨覆敗也此言教成於國之效

堯舜帥天下以仁而民從之桀紂帥天下

以暴而民從之其所令反其所好而民不
從是故君子有諸己而后求諸人無諸己
而后非諸人所藏乎身不恕而能喻諸人
者未之有也
好去聲○此又承上文一人定國而言
有善於己然後可以責人之善無惡於
己然後可以正人之惡皆推己以及人

教之要

所謂恕也不如是則所令反其所好而

民不從矣喻曉也

齊治之事已詳下三引詩特詠嘆之耳

故治國在齊其家

通結上文

只是桃身不指桃花　和順而無乖戾

詩云桃之夭夭其葉蓁蓁之子于歸宜其

一家之人　此句說治國者而言其令文之宜之也　教之正内

家人宜其家人而后可以教國人

夭平聲蓁音臻○詩周南桃夭之篇夭

夭少好皃蓁蓁美盛皃興也之子猶言是子此指女子之嫁者而言也婦人謂嫁曰歸宜猶善也

詩云宜兄宜弟宜兄宜弟而后可以教國人

詩小雅蓼蕭篇

詩云其儀不忒正是四國其爲父子兄弟

虛說
足法而后民法之也
實說
詩曹風鳲鳩篇忒差也
只結二詩不是通論上文
此謂治國在齊其家
此三引詩皆以咏嘆上文之事而又結
丁寧開示國之本在家之意
之如此其味深長最宜潛玩
潛心
右傳之九章釋齊家治國
自天子言之畿內千里之地其爲國也平天下者推其治於諸侯之國耳
所謂平天下在治其國者上老老而民興

孝上長長而民興弟上恤孤而民不倍是

以君子有絜矩之道也

長上聲弟去聲倍與背同絜胡結反

老老所謂老吾老也興謂有所感發而

興起也孤者幼而無父之稱絜度也矩

所以爲方也言此三者上行下效捷於

影響所謂家齊而國治也亦可以見人

心之所同而不可使有一夫之不獲矣
是以君子必當因其所同推以度物使
彼我之間各得分願則上下四旁均齊
方正而天下平矣
所惡於上毋以使下所惡於下毋以事上
所惡於前毋以先後所惡於後毋以從前
所惡於右毋以交於左所惡於左毋以交

於右此之謂絜矩之道

惡先並去聲○此覆解上文絜矩二字之義如不欲上之無禮於我則必以此度下之心而亦不敢以此無禮使之不欲下之不忠於我則必以此度上之心而亦不敢以此不忠事之至於前後左右無不皆然則身之所處上下四旁長

短廣狹彼此如一而無不方矣彼同有

欲爲孝弟不倍　對我身得方　皆得以自盡其心而無不均之歎

是心而興起焉者又豈有一夫之不獲

一人之心　天下千萬人　絜矩乃治國之要平天下亦因不外乎此

哉所操者約而所及者廣此平天下之

絜矩之道　推廣

要道也故章內之意皆自此而推之

其德可愛樂　暖飽安樂類　逼處使得其所好

詩云樂只君子民之父母民之所好好之

饑寒勞苦類　經畫以去其所惡

民之所惡惡之此之謂民之父母

樂音洛只音紙好惡並去聲下並同

詩小雅南山有臺之篇只語助辭上言能絜矩而以民心爲己心則是愛民如子而民愛之如父母矣

詩云節彼南山維石巖巖赫赫師尹民具爾瞻有國者不可以不愼辟則爲天下僇矣

節讀爲截辟讀爲僻僇與戮同○詩小

周大夫家父所作刺幽王用尹氏以致亂　其文如人截之
雅節南山之篇節節截然高大貌師尹周
大師尹氏也具俱也辟偏也言在上者
望既重則責亦深
人所瞻仰不可不謹若不能絜矩而好
惡徇於一己之偏則身弑國亡爲天下
辱
之大戮矣
先王　即得衆　即得國　但味首句其字則今日之己甚即可見
詩云殷之未喪師克配上帝儀監于殷峻
不易保之全在下二則字　此兩句首段前記因以起下三條　爲民父母　爲天下僇
命不易道得衆則得國失衆則失國

喪去聲儀詩作宜峻詩作駿易去聲

詩文王篇師衆也配對也配上帝言其爲天下君而對乎上帝也監視也峻大也不易言難保也道言也引詩而言此以結上文兩節之意有天下者能存此心而不失則所以絜矩而與民同欲者自不能已矣

是故君子先愼乎德有德此有人有人此
有土有土此有財有財此有用
先愼乎德承上文不可不謹而言德卽
所謂明德有人謂得衆有土謂得國有
國則不患無財用矣
德者本也財者末也
本上文而言

外本内末爭民施奪

人君以德爲外以財爲内則是爭鬭其民而施之以劫奪之敎也蓋財者人之所同欲不能絜矩而欲專之則民亦起而爭奪矣

是故財聚則民散財散則民聚

外本内末故財聚爭民施奪故民散反

是則有德而有人矣。

承民散來

是故言悖而出者亦悖而入貨悖而入者

民散也至此

亦悖而出。

悖布內反。悖逆也。此以言之出入明

貨之出入也。自先慎乎德以下至此又

慎德財散　內末悖入　有財民散　爭奪悖出

因財貨以明能絜矩與不能者之得失

也。

康誥曰惟命不于常道善則得之不善則失之矣

道言也因上文引文王詩之意而申言之其丁寧反覆之意益深切矣

楚書曰楚國無以爲寶惟善以爲寶

楚書楚語言不寶金玉而寶善人也

舅犯曰亡人無以爲寶仁親以爲寶

舅犯晉文公舅狐偃字子犯亡人文公

母之弟

禮記

時爲公子出亡在外也仁愛也事見檀

金玉與國不足言財然近於財一邊也故云爾

弓此兩節又明不外本而內末之意

就外貌言只是朴實之意

不事表暴

寡講住

秦誓曰若有一个臣斷斷兮無他技其心

易直好善之意以量之弘言

似物之至大無所不容

以辨事言

休休焉其如有容焉人之有技若己有之

以料事言

懇切真到

口不足以盡其心

是也不

人之彥聖其心好之不啻若自其口出寔

作誠實說

猶云以此故

君

總我子孫黎民

能容之以能保我子孫黎民尚亦有利哉

人之有技媢疾以惡之人之彥聖而違之俾不通寔不能容以不能保我子孫黎民亦曰殆哉

介古賀反書作介斷丁亂反媢音冒

秦誓周書斷斷誠一之貌彥美士也聖通明也尚庶幾也媢忌也違拂戾也殆危也

唯仁人放流之迸諸四夷不與同中國此謂唯仁人爲能愛人能惡人

迸讀爲屏古字通用○迸猶逐也言有此媢疾之人妨賢而病國則仁人必深惡而痛絕之以其至公無私故能得好惡之正如此也

見賢而不能舉舉而不能先命也見不善

而不能退退而不能遠過也

命鄭氏云當作慢程子云當作怠未詳孰是遠去聲○若此者知所愛惡矣而未能盡愛惡之道蓋君子而未仁者也

好人之所惡惡人之所好是謂拂人之性菑必逮夫身

菑古災字夫音扶○拂逆也好善而惡

秉彝

惡人之性也至於拂人之性則不仁之

對慎德以下五節

甚者也自秦誓至此又皆以申言好惡

斷斷之臣仁人俱是公之極媢疾之臣拂人之性俱是私之極故云申言

公私之極以明上文所引南山有臺節

南山之意

承南山有臺以下所言得失

猶云當有

即絜矩之異稱

只是申言盡心而不違於理

大道

忠之反

信之反

是故君子有大道必忠信以得之驕泰以

同上

失之

常說

君子以位言之道謂居其位而脩己治

人之術發己自盡爲忠循物無違謂信驕者矜高泰者侈肆此因上所引文王康誥之意而言章內三言得失而語益加切蓋至此而天理存亡之幾決矣

生財有大道生之者衆食之者寡爲之者疾用之者舒則財恒足矣

恆胡登反○呂氏曰國無遊民則生者

朝廷　無幸而祿　出田農除不役民

衆矣朝無幸位則食者寡矣不奪農時

則爲之疾矣量入爲出則用之舒矣愚

制節謹度

按此因有土有財而言以明足國之道

生聚爲疾開財之源　食寡用舒節財之流

在乎務本而節用非必外本內末而後

總是不外本內末之意

財可聚也自此以至終篇皆一意也

仁者固無意於此是但謂其效耳　德言修身

仁者以財發身不仁者以身發財

不外本而內末便是散財而可以得民

發猶起也仁者散財以得民不仁者亡

身以殖貨

未有上好仁而下不好義者也未有好義
其事不終者也未有府庫財非其財者也

上好仁以愛其下則下好義以忠其上
所以事必有終而府庫之財無悖出之
忠也

孟獻子曰畜馬乘不察於雞豚伐冰之家

不畜牛羊。百乘之家。不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣。寧有盜臣。此謂國不以利爲利。以義爲利也。

畜許六反。乘斂並去聲。○孟獻子魯之賢大夫仲孫蔑也。畜馬乘。士初試爲大夫者也。伐冰之家。卿大夫以上喪祭用冰者也。百乘之家。有采地者也。君子寧

亡已之財而不忍傷民之力故寧有盜
臣而不畜聚斂之臣此謂以下釋獻子
之言也
長國家而務財用者必自小人矣彼爲善
之小人之使爲國家菑害並至雖有善者
亦無如之何矣此謂國不以利爲利以義
爲利也

陸宣公奏議全引此文而中間無此二句 疑其衍文耳

長上聲彼爲善之此句上下疑有闕文

誤字○自由也言由小人導之也此一

節深明以利爲利之害而重言以結之

其丁寧之意切矣

義利之説

右傳之十章釋治國平天下

此章之義務在與民同好惡而不

專其利皆推廣絜矩之意也能如

是則親賢樂利各得其所而天下平矣

凡傳十章前四章統論綱領指趣後六章細論條目工夫其第五章乃明善之要第六章乃誠身之本在初學尤爲當務之急讀者不可以其近而忽之也

23

昭和九年七月十日印刷
昭和九年七月十五日發行

版權所有

象山全集 全五卷
定價 金拾八圓

編纂者 長野市旭町一〇九八番地 信濃教育會
代表者 清水曉昇

發行人 長野市妻科一七三番地 大日方利雄

印刷所 長野市南縣町六五七番地 信濃毎日新聞株式會社

發行所 長野市南縣町 信濃毎日新聞株式會社
電話長野二三〇・二四〇 二九三 三七七番
振替口座長野一二〇番

23

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03045 5802